

かりちゅまより吸血鬼
らしい爵銀龍の幻想入
り

クロマ・グロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本編完結しました。

これからは土日で後日談的なのを出していきます。

誘いに導かれし者は

疾風にさらわれ その風が闇の化身と知る

贄は避けられぬ闇に覆われしまま

精果てるまで吸い付くされ

給仕はひたすらに主への緑酒を注ぎ続ける

贅を尽くし満を持して 闇は月光の下 姿を現す

く朱に染むる夜宴くと言う歌が幻想郷の紅魔館、その地下にある大図書館より見つかった。そしてその本にある召喚の魔法陣をいつもの如くどろげふんげふん、狩りに来た白黒魔法使いことドスメラルー（魔理沙）によってうっかり起動される。

この物語は幻想郷に呼び出された爵銀龍とそれに引っ付いてきた啖生虫の物語

二次創作は初めて書く上に東方は未プレイの主が書く作品ですが読んでやってください、モンハンRISE：SBはクリア済みです

目次

幻想郷とモンスター

呼び出されたるは爵銀龍 | 1

吸血鬼と爵銀龍 | 8

その名は爵銀龍メル・ゼナ | 13

古龍に手加減など出来ない(強すぎて)

19

爵銀の龍が放つスペル | 24

興味を持つ者達 | 31

カリスマとかりちゅまの境界 | 38

博麗の巫女と爵銀龍

Wi
i

th あつきゆん | 46

古龍の力 | 52

爵銀龍のいつもの1日 | その1

59

爵銀龍のいつもの1日 | その2

65

生きた災害 | 71

生きた災害 | その2 | 76

爵銀龍と鬼は酒を飲み交わす | 82

爵銀龍と覚妖怪 | 89

龍属性の有効活用 | 95

古龍と二人目の覚妖怪 | 100

遊ばれるメル・ゼナ | 106

無意識に見つける召喚魔法 | 112

とても頭の痛い問題 | 118

氷狼竜と義理の母親	124	取材……………出来なかつたです。	
子育てコンビ	131		
八雲 紫は胃潰瘍	138	かりちゅまの真面目な話（しかしかりちゅま）	204
モンスター達の破壊力（萌）	145	百竜夜行と百鬼夜行	
大事な物は忘れた頃に出来る上がる		呼び出される百竜達	210
152		かかあ天下	216
ようやく本題	160	鬼嫁には勝てなかつたよ……………	
岩に擬態し、無意識な竜	166	223	
新しいペット達の1日	172	火車の鬼火と人形使いの糸	229
入り込んでいたもう一体	178	天狗と天狗、熊と熊	235
かわい竜には猛毒のトゲがある		メル・ゼナはお仕置き役	243
184		将軍と唐傘お化け	249
マスゴミの生命力はG以上	190		

八雲	紫はもう手遅れ。	314
騒がしい鬼達	――	308
鬼と金獅子の喧嘩	――	302
296	豪火の竜と灼熱の竜との繋がり	
290	鬼と獅子、不死鳥と豪火を纏う竜	
	轟く咆哮と響く山彦	283
	火車と怨虎竜	278
	黒き青熊と地底の星熊	272
	人形使いと妃蜘蛛	266
	もはや恐暴竜なユコジョー	260
	將軍と唐傘お化け その2	255

	豪火と灼熱を纏う不死鳥	そして避
	難する蟲達	320
	竜を育てる蟲の女王	326
	青き雷の主	332
	青き雷の主 その2	十命の雷
338	命雷の雷狼竜	344
	隻角のマ王とワーハクタク	349
	隻角のマ王とワーハクタク その2	
354	新しい守護sy……竜	361
	頭突きと突進の違い	367
	八雲紫は胃潰瘍を加速させる	374

傀異化妖怪とディアソルテ	380	決戦の準備	459
月光を纏う竜	387	集うモンスター達	465
料理将軍	392	幻想を喰らう深淵の悪魔	471
幻想の力	399	断裂群島のヌシと邪毒の角	477
幻想と化した断裂群島	404	V S 幻想を喰らうガイアデルム	第一
静か過ぎる幻想の大地	410	形態	483
静か過ぎる島の真実	416	V S 幻想を喰らうガイアデルム	第一
破滅の翼と絆を結ぶ石	422	形態	489
奈落の底に眠る龍のタマゴ	428	人里に迫る百鬼夜行	495
残留思念と託された龍	434	人里の戦い	501
動き出す冥淵龍	440	V S 幻想を喰らうガイアデルム	第二
龍を撃退する為の兵器	447	形態	508
動き出す者達	453	V S 幻想を喰らうガイアデルム	第二

形態	VS幻想を喰らうガイアデルム	最終	554
形態	その4		548
形態	VS幻想を喰らうガイアデルム	第三	543
形態	その3		537
形態	VS幻想を喰らうガイアデルム	第三	531
形態	その2		525
形態	幻想龍の目覚め		520
形態	VS幻想を喰らうガイアデルム	第三	514
形態	その2		
	人里の戦い	命蓮寺 side	

形態	VS幻想を喰らうガイアデルム	最終	612
形態	その2		606
形態	賢者の目覚め(吐血)		600
形態	幻想達による意地		595
形態	古竜の意地		589
決着			583
龍の宴			577
龍の宴	その2		571
龍の宴	その3		565
エピソード	新たなる幻想		559
後日談			
後日談その1	断裂群島の泥んこト		

	後日談その2	アオアシラの1日		後日談その6	ライゼクス の1日
617	後日談その3	きつねはやっぱり油		659	後日談その7
	揚げが大好き		623	その1	白き神のアソビ
	後日談その4	奇しき赫耀と地獄の		後日談その7	白き神のアソビ
	女神 その1		629	その2	
	後日談その4	奇しき赫耀と地獄の		後日談その7	白き神のアソビ
	女神 その2		635	その3	
	後日談その4	奇しき赫耀と地獄の		後日談その7	白き神のアソビ
	女神 その3		641	その4	
	後日談その4	奇しき赫耀と地獄の		後日談その8	人里に馴染む モンス
	女神 その4		647	ター達	
	後日談その5	閻魔の1日	653	後日談その9	バカルテット with

h モンスタ―	―	697	後日談その16	風雷神の夫婦生活
後日談その10	大轟竜の1日		―	743
703	後日談その11	ツケヒバキ達の脳	後日談その17	マスゴミの天狗コ
内スレ	―	709	ンビ	―
後日談その12	アリスから見たツ		後日談その18	棘の竜と人形の少
ケヒバキ達	―	719	女	―
後日談その13	リオ夫婦の1日		後日談その19	地底のモンスタ―
725	後日談その14	二頭のラージャン	建築組	―
―	―	731	連載休止のお知らせ&次の作品宣伝	761
766	後日談その15	ゴア・マガラは遊	―	―
びたい	―	737	―	―

幻想郷とモンスター

呼び出されたるは爵銀龍

誘いに導かれし者は

疾風にさらわれ その風が闇の化身と知る

贅は避けられぬ闇に覆われしまま

精果てるまで吸い付くされ

給仕はひたすらに主への緑酒を注ぎ続ける

贅を尽くし満を持って 闇は月光の下 姿を現す

く朱に染むる夜宴く

幻想郷

忘れられた者達の住む最後の地

この地に住まう吸血鬼の館、目が痛いくらいに紅い館

紅魔館と呼ばれるこの館の地下に住まう紫のパジャマのような服に身を包む一人の

魔法使い（紫モヤシ）

七曜の魔法使いことパチュリー・ノーレッジ

なにを思ったのか吸血鬼関連の書物が保管されている本棚を見ていた所

見覚えのない一つの召喚魔法の書物を見つけた

『く朱に染むる夜宴く』？一見吟遊詩人の歌の書物にも見えるけどこれは偽装……いえ、召喚する生物の特徴を捉えた歌と言った所かしら？でもなぜこんなものがこのエリアの本棚から？」

明らかに見覚えがない書物ね、私は常にここに居たのもあって基本的にこの図書館にある書物は全て把握してるはずだった。

しかし、新しい書物がこの図書館に呼び出された気配は無かったのだけど実際に新しい書物がこの本棚にあった。

恐らくつい最近幻想入りしたもののようね。

でもなぜ吸血鬼関連の本棚に仕分けされたのが謎ね、明らかこの表紙に描かれている物は吸血鬼ではなくドラゴン、それに使えて周囲には蝶のような生き物も居るように見える。

「明らか吸血鬼とは関係無さそうだけど召喚魔法の魔法書であることに代わりは無いわね、これは白黒が来る前に封印しておく必要があるそうね、さすがに何が呼び出されるか分かったものじゃないわ」

そう思った矢先に後ろから小さな羽としっぽを持ち、紅い髪を持つ女性が話しかけて来た

「パチュリー様、何を読んでいらつしやるのですか？」

「小悪魔、貴女これに見覚えはあるかしら？」

この女性の名は小悪魔、種族名と言うのが正しいかも知れないが私が使役する使い魔である

『く朱に染むる夜宴』ですか？私には見覚えのない書物ですね、昨日確認した時点では無かったと思うのですが」

小悪魔はこの図書館の本全ての整理等もしている、何せこの図書館はその性質上常に

何かしらの書物を呼び寄せるといふ特徴がある。

だからこそ常に整理する人員が必要であり

下僕としてこき使える使い魔である小悪魔にはその役割が適しており、小悪魔自身も何があるかはある程度把握している

「そう、貴女が見たこと無いとなるとやはりこれは今日この図書館に呼び出された物と考えるのが妥当でしょうけどまだ呼び出される気配はしてないから恐らく幻想入りした書物でしょうね」

「見たところ召喚魔法の魔法書のようにですがどのエリアから見つけられたのですか？」

「これは吸血鬼関連の本棚から見つかったわ、表紙見る限り多分違う気がするのだけれど中に書かれてる歌の内容を見る限り完全に無関係とは言い難いような気がするのよね」

そうして小悪魔はその表紙を見て何か思いあたる節があったのか少し疑問を感じた

「んー、この本とは関係あるか分からないのですが確か私が召喚される前にこのドラゴンが描かれていると思われる何かを見たような気がするのですよねえ。ですがすみません、それが何かまでは思い出せそうにありません」

「使えないわね、でもそうなるもしかしたら悪魔に関係あるものなのかも知れないわね」

「ひどいですよパチュリー様……?!?!」

そうしていつも通りの会話をしている所またいつも通りに本泥棒こと白黒の魔法使いが扉を破壊して堂々と侵入してきた

「邪魔するぜー！今日も本を借りに来たぜー」

「はあ……あのね、いつもいつもドアを壊すのはやめてくれないかしら？埃が舞って本に悪いし修理にも手間がかかるのよ。それに貴女は借りに来たと言いながら一度も返した事が無いじゃないの！」

そう、この白黒魔法使いは借りに来たと言いながらいつも無断で盗んで行き返しに来た試しがない

「ちゃんと返すつての、私が死ぬまで借りるだけだぜ？」

「それは世間一般で借りに来るとは言わないのよ」

そう言いつついつも通りに呆れていると魔理沙が私に手に持つてる魔法書に気が付いてしまった

「お？なんだこの魔法書、ずいぶんと古いタイプだなあ」

しまった、呆れている間にいつの間にか盗られてしまっていた、毎回毎回来る旅に盗みの技術を上げてるわね……

『く朱に染むる夜宴く』？なんだこの召喚書、何が呼び出されるか全く分からないじゃないか、試しに呼び出して見るか」

「なっ!?!待ちなさい、何が出るかも分からないままそんな物呼び出したら何が起こるか!?!」

「あ、もう召喚魔法陣なら起動したぜ」

「なにやってるのよ!?!」

何を考えてるのやら、もしこれで召喚される物が私達の手に余るものだったらどうするつもりなのかしら!?!

そう考えてる矢先に召喚魔法陣が光を放ち一匹の巨大なドラゴンがその姿を徐々に現す

その体は白銀の美しい鱗や甲殻に覆われており翼や首から生えている羽毛のような部分等には血を思わせる紅い色合いがあり、さらにそこからは一見蝶にも見えるが赤く、羽の生えた蛭（ヒル）のような不気味な生物が止まっていた。

さらにその頭部は硬い甲殻で覆われておりその姿は見ようによつては竜の頭蓋骨のようにも見える。

そしてその紅い翼がゆつくりと開かれ、その美しい姿がさらけ出される

呼び出されたのは一匹の巨大なドラゴン、ある世界にて古龍と呼ばれる超常を操る生

ける災害とさえ言われる生態系の絶対者

その名は

メル・ゼナ

爵銀龍の名を与えられた最強の一角である

吸血鬼と爵銀龍

キュリアがざわめく……………

まるで何か大きな力を、生命力を感じ歓喜してるようだ

しかしその生命力の主は滅ぼされた城の上から見渡す限りどこにもそれらしき気配

はない

無垢なる獣ガラングルムがせいぜい近場にいる程度か

しかし龍はその気配を気のせいだとは思えなかった

そして龍の足元が怪しく光を放つ

龍は何事かと思ひ防御姿勢を取った、恐らくハンターの閃光玉だと予測したのだろう

それゆえに避けるよりも守る事を優先した

しかし実態は違った、いざ光が収まってみれば景色がガラリと変わっていた

まるで今まで居た場所が眠りに着く間に見る夢のように

龍は防御姿勢を解き翼を広げる

そして二人の奇妙なニンゲンを見つける

しかしニンゲンにしては奇妙だ、なぜなら武器を持たず防具もつけてないように見える

るからだ

龍にとってニンゲンとはハンターのことだった。しかしその特徴を持たないニンゲンに対して、龍は軽い興味を持ち始めていた……………

ついにやらかしたわねあの白黒……………

しかしあの白銀のドラゴン、腕やくびに付いている蝶のようなもの、どうやらあの魔法陣は二種類の生物を同時に召喚可能かなり高度な物のようだ。

基本的に召喚魔法は誰かがくつついていても巻き込まないようにそれを弾く機能が付いている。

それが無かった可能性もあるがそれならガレキや土なども巻き込まれる。

しかし様子を見る限りかなり綺麗な状態で呼び出されている為フィルターは作用しているようだ。

そして蝶のようなものが周囲を飛び始める。

そしてよく見たらこれは翼の生えた蛭のような生き物のようだ。

恐らくだが共生しているのだと思われる。

でもどういう関係なのか一度調べて見たいわね………つて考察している場合では無いわね。

幸い敵対意思はまだ無さそうね。

それにこちらの言語が通じるかだけど召喚魔法ならば恐らく翻訳の魔法も一緒に起動しているはず。

「なっ!?なんだこのドラゴン!？」

「はあ………貴女が勝手に呼び出すから召喚された衝撃で軽く本棚がいくつも倒れてしまったじゃない。

ごめんなさいね? 貴方を勝手に呼び出してしまって。それと一応確認だけこちら側の言葉は理解出来ているかしら?」

そしてドラゴンは広げていた翼を畳み肯定するように頷いた。

どうやら言語は理解出来ているようだ、しかし声帯が違うのもあって言葉はしゃべれなさそうね。

「そうね、一度外で話した方が良いかも知れないわね、貴方にはここは狭いでしょう?」

「……コクリ」

周囲を一度見渡してから頷いていた。

どうやらかなり冷静な性格のようね。

普通召喚魔法で呼び出される生き物はほぼ必ず困惑して冷静になれない場合が多い。しかしあのドラゴンにはその様子が見られないからだ。

そして幸い今は夜、それも満月の夜の為何かあってもレミイが対処出来そうね。

とりあえず咲夜を呼んで空間を広げて貰った方が良さそうだしレミイを呼ぶついでに咲夜を呼ぼうかしら。

「少々待つて貰える？ここから出るには入り口が狭くてどこかしらを壊さないといけなくなってしまうから少し広げられるように人を呼んでくるわ。」

それと貴方を勝手に呼び出したのはその白黒だから生命活動に支障もなく体に欠損が出ない程度にはボコボコにしていいわよ。」

「ちよっ！パチュリーおまえなんて事言ってるんだ……もがっ!？」

そうすると龍は魔理沙を見つめて目に追えない速さで動き噛みついた、そして翼でその様子を隠している。

そして音から察するに吸血を軽く行っているようだ。魔理沙は抵抗しようとしていたので私の魔法で拘束しておいた。

状況に混乱して隙だらけだったもの。

とはいえ吸血する様子はまるで吸血鬼……いや、レミイよりも吸血鬼らしいわね。それはともかく咲夜を呼ばないと

そう思つて図書館から出ようとした時、突然目の前にメイド姿の女性が現れた。「パチュリー様、ご無事ですか？」

「あら咲夜、割と遅かつたわね。レミイの相手してて遅れたかしら？」

「申し訳ありません、気付いてはいたのですが手が離せる状況ではなかつたので」

「まあそれなら恐らくレミイもこつちに来ているのね。」

今は満月の夜でちょうどいいから空間を広げてちょうだい、さすがにあのドラゴンにこの図書館は狭いでしょうから外で話しましょう」

「かしこまりました、あと……あの吸血されている白黒はよろしいのですか？」

「あいつには良いお仕置きよ、ちゃんと生命活動に支障もなく体に欠損を起こさない程度つて釘も刺しているから」

そして咲夜が空間を広げ始めていた頃それに気づいた龍は吸血し終わってぐったりしてる魔理沙を捨ててパチュリー達に優雅に近づいていく

「こうして見るとやつぱりレミイより吸血鬼らしいわね、仕草もかなり優雅な物もあるわ」

「パチュリー様、さすがにお嬢様の前でそれは言わないで下さいね？」

否定しない辺りどうやら咲夜も同じ感想のようだ。

そしてレミイと妹様を呼び、皆んなで外に出て話し合いになる事になった

その名は爵銀龍メル・ゼナ

とりあえずなんとか図書館から外の庭に移動させることには成功した。

さすがに大きかったから空間を無理してかなり広げて貰ってようやく出れる大きさになった、咲夜はぐったりする羽目になったが紅魔館に被害が無くてよかった。

……扉はあの白黒が原因で手遅れだけど。

そしてレミイと妹様、額にナイフが3本突き刺さった美鈴が庭にやってきた。

どうやらまた寝ていたらしい、本当にあれが門番で良いのだろうか。

でもレミイはいつもそれを咎めはしても解雇する事は無い辺り信用はしているのでしようね。

そして龍の首に付いていた紅いヒルのような生き物は龍の近くを飛び回っており龍の姿と合わさって幻想的な美しさとなっていた。

表紙にあのような描かれ方をするのも納得ね。

ただそこに佇むだけで絵になるわね。

そしてレミイは……なぜか手足を地面に付けて軽く絶望していた。

どうやら認めたくないけどあのドラゴンが自分より吸血鬼らしい事をその佇まいだけで悟ったようね……。

まるでその様子は負けた……とも思っているようにも見える………というかそのようだ。

妹様は妹様で興奮してるわね、あのドラゴンの周囲を飛び回ってその姿を眺めている。

そしてあのドラゴンは反応から察するに吸血鬼を見たことが無いようね、レミイや妹様の翼を見て興味深そうに観察していた。どうやら好奇心もそれなりにあるらしい。

美鈴はあのドラゴンからどうやら自然の力の気配を感じるらしい、それも自然災害のような力を。

そうなるとやはり何か超常的な力をもった存在なのかしらね。美鈴から聞いている力や吸血行為による生気の吸収行為から考えて恐らく何か生命に関わる物を扱っているそうだけだ。

咲夜は疲れがとれたのかお茶の用意をしていた……でもあのドラゴンが何を食べ

るのかとかが分からなくて軽く困惑しているのみたいだわ。

まあ実際私もあのドラゴンの食生までは知らないしあの召喚書には書かれて無かったから分からないのだが。

そうして過ごしている内に慌てた様子のスキマ妖怪がいきなり出てきたのだった………

その龍は魔法によりあのニンゲン？ 達が何を言っているのかを理解していた。とりあえずあの白黒のニンゲン？ が自分呼び出した元凶であり、紫色のニンゲン？ は召喚を行わせてしまったことについて謝罪をしているようだった。

龍としては自分の巢に戻れなくなったと本能的に理解しており、軽く怒りを感じていたため紫色のニンゲン？ に白黒に対して体に影響が出ない程度に攻撃してかまわないと許可を貰ってから動けなくなるギリギリまで自分の牙で吸血して憂さ晴らしをした。

キュリアを使わなかった理由はキュリアを使ってしまえば毒が回ってしまう為、紫色のニンゲンが言っていた大きな傷を追わず生きることには支障がでないようにすると

言うものを破ってしまうからだ。

そして紫色のニンゲン？のとなりにはいつの間にか白い髪をした女性が佇んでおり、紫色のニンゲン？に話をしていた。

どうやらあの巢の主とその血族を呼んできたらしい。そして空間が広がり龍が通れる程の大きさになると全員で外に向かう事になった。

そして外に出てから館の方から薄い桜色の寝間着のような服を着ており、青い髪、背中から翼の生えた少女……いや、幼女（ロリ）がやってきた。

そしてその幼女は龍を見た瞬間なにか悟ったような様子になり手足を地面に付けてなぜかダメージを受けていた……。

そしてもう一人、赤と白の似たような格好をしており金髪、枝のような骨格で翼膜は存在せず宝石が生えているような翼を持つもう一人の幼女が現れた。

龍は興味をとて引かれた。

どう見ても飛行することなど不可能な形状の翼なのに飛行しているその幼女を見て。

龍はあの幼女が自分達古龍に近い存在なのではないかと思っていた。その為その幼女が自分の周囲を飛び回り、嬉しそうにしている彼女を見つめて反応を見て楽しんでいた。

そして頭に武器を3つ突き刺された紅い髪の女性も現れた。なぜ死なないのだろうか？龍はその生命力に軽く食欲をそそられる。

そうして過ごしている内に目の前の空間が引き裂かれ、胡散臭い気配を持った女性が現れた……妙な匂いを感じるが気にしないことにしたのだった。

「貴女達ね、なんて存在呼び出してきてるのよ!？」

いきなり現れたスキマ妖怪はかなり焦っていたのか興奮状態にあった
「いきなりどうしたのよ？それと文句ならあの白黒に言っっちゃおうだい。」

封印するつもりだった召喚魔法の魔法書を勝手に盗んで呼び出したのはあいつなのだから。」

「そう、魔理沙ね……今回はいつも以上に余計な事をしてくれたわね」

「それで？そのスキマ妖怪は何をそんなに焦っているのかしら？」

私がスキマ妖怪に軽く返していた所レミイが皆が聞きたい事を聞いてくれた
……………。

頬にお菓子の粉が付いているけど……。

「その龍……いえ、古龍と言った方が正しいわね。その存在は簡単に言えばこの世界の存在でも外の世界の存在でも無いわ。」

「やっぱり両方関係無かったわね、そうなることややはり魔界に関わるものかしら？小悪魔がああ古龍？の絵に見覚えがあると行っていたし」

「魔界？どうしてその話が出るか知らないけれどこれは全く違う物よ。これは外の世界のさらに外、完全に異なる世界、いえ星から現れた生き物よ。」

スキマ妖怪は何かを知っているようだ、だが魔界が関係無いのは意外だった。

そうなることややはり小悪魔の勘違いかしらね？

使えないわね。

「何か知ってるようならこのドラゴンの名前とか知らないかしら？いつまでも呼ぶ名前が分からないと話が進めにくいんだけど」

「はあ……そうね。この世界に呼び出されてしまった以上もうこの古龍は博麗大結界に保護されてしまったからもうこの世界の生き物になってしまふものね。」

この古龍の名はメル・ゼナ

爵銀龍と呼ばれ一國を滅ぼし、王域三公と呼ばれる危険生物に分類される古龍種よ」

古龍に手加減など出来ない（強すぎて）

パチユリー side

「爵銀龍メル・ゼナね……それも一国を滅ぼしたね。

スキマ妖怪、貴女何かそのメル・ゼナについて詳しく知っているんじゃないかしら？」
あのドラゴンの種族名、別名、さらに行った事。

それら全てを把握してる辺り明らか何か大きな情報を掴んでる事が确实だと分かる。
問題点としてはそれが何か分からないくらい。

ただ少なくともこのメル・ゼナの住んでいる世界やその地域等については何か知っていると見て間違いないでしょうね。

「いいえ、私はさすがに生態とかその辺については全く知らないわ。さっき言った情報もあの世界では割と誰でも知ることの出来る情報だもの。

それに古龍の討伐や接触は向こうのギルドって組織にきっちり管理されてて簡単には手が出せないのよ。」

古龍……………ね

「ねえ、古龍とはそもそも何なのかしら？名前だけ聞く限りだとただ長い年月を生きた古い龍といった感じだけど」

「そうね、これについては説明が少々難しいわ。

とりあえず向こうの世界には大型のモンスターが数多く生息していてそれぞれ大きく分けて『牙獣種』、『牙竜種』、『魚竜種』、『海竜種』、『両生種』、『甲殻種』、『鋏角種』、『獣竜種』、『鳥竜種』、『飛竜種』、『古龍種』に分けられるわ。

その中でも『古龍種』と言うのは例外はあるけどその他全てに該当せず超常の力を持ち、生態系から逸脱した存在よ。」

生態系から逸脱した存在……………どれにも該当しないか……………

「その例外と言うのは？」

「黒蝕竜ゴア・マガラという竜がその例外に相当するわ。

ただその黒蝕竜は天廻龍シャガルマガラという古龍の幼体になるのだけれどまだ古龍とは言えない存在でありながら他のどの種類にも分類出来ないから未だギルドでも分類出来ないモンスターなのよ」

「ねえスキマ妖怪、たしか貴女言葉の境界を弄れたわよね？」

メルゼナのを弄ってこちらと会話出来るようにして貰うことは出来るかしら？」

「それは少し難しい相談ね、たしかに出来るけど彼らはそもそも言語その物を持っていないわ。だからこそ無いものを出来るようにしろと言ってるようなものなのよそれは。」

「そう、悪かったわね。」

「貴女のその疑問は当然の物よ。ただ一応魔法の効果で言葉その物を理解させることは出来ているから割と時間の問題よ。」

「そう、分かったわ。ありがとうと言いたい所だけれど早速本題を聞いても良いかしら？」

あのスキマ妖怪がわざわざ慌てていた理由が分からないからね

「そうね、とりあえず博麗大結界にその存在を認知されてしまった以上この世界からこの龍が帰る術は存在しないわ。すでに幻想の存在となってしまうているのだから。」

それと本題としては簡単よ。メル・ゼナに最低限弾幕ごっこを教える必要があるからよ。

今のままで敵対した者は容赦なく皆殺しになってしまうもの。

ただ問題としてはそれだけの手加減が出来るのかに掛かっているわ」

そして私達はメル・ゼナを見ると一度首を傾げてから横に振った。恐らく一度見てみ

ないと分からないと言った所だろう。

「そうね、なら弾幕ごっこで使う弾幕を一度見せておこうかしら、それで一度その力を感
じて貰ってどれくらいのか分かるはずだから。」

そうしてスキマ妖怪は通常の弾幕を一つ出した

そしてそれを見たメル・ゼナの首からは紅い翼を持ったヒルのような生き物が飛び出
して目の前に集まり大きな弾幕を作り出した………つてずいぶんと力が強くないかし
ら？

「やはり手加減は難しそうね。ならそれを弾けさせたりは出来るかしら？」

「……コクリ（頷く）」

「そう、ならそれが貴方のメインの攻撃手段になるわね。」

そして弾幕ごっこのルールその物はそこまで難しくないわ弾幕ごっこは挑戦者として
れを受ける者に分かれるわ。

受ける側はスペルカードという決まった弾幕を出し続ける攻撃があるのだけれどそ
れを複数使って相手を一定回数攻撃を当てるだけでいいわ。

逆に挑戦者は決まった回数攻撃を絶対に受けないように動き弾幕にて相手を倒して
次のスペルカードを使わせるか時間切れまで逃げてスペルカードを全て攻略すれば勝
ちよ。

それと貴方の場合その体の大きさだと弾幕を避けきるのは無理があるから自動的に挑戦を受ける側になるわ。」

たしかにメル・ゼナはかなり大きい。避けきるのはあの素早い動きがあってもほぼ不可能でしょうね。

「とりあえず何も保存されてないスペルカードを渡しておくから貴方の使う攻撃を思い浮かべてそれに保存してみて頂戴？明日また来る予定だからその時に見せて貰うとするわ。」

そうしてスキマ妖怪は去っていった

そして妹様やレミイ達は話に付いていけなかったようでお茶会をしており、美鈴に至っては立ったまま寝ており全身にナイフが刺さっていた。

そしてメル・ゼナは受け取った無印のスペルカードをあのヒルのような生き物に持たせてそれを眺め、その翼の鍵爪でそれに触れて弾幕を保存しようとしていた。

爵銀の龍が放つスペル

パチキュリー side

メル・ゼナは紅い翼を持ったヒルのような生き物、キュリアに無印のスペルカードを持たせ、自分の翼に付いている鍵爪でスペルカードに触れた。

その瞬間スペルカードが光を放ち

メル・ゼナの攻撃をスペルカードとして保存する。

そしてメル・ゼナはその光から目を守る為に翼を顔の前に移動させ、優雅に顔を隠していた。

「あら、どうやら作れたようね。

見せて貰っても良いかしら？」

「・・・コクリ（頷く）」

メル・ゼナはキュリアに出来たスペルカードを持たせパチキュリーにそのスペルカードを見せる。

そしてそのカードに書かれていたのは壊れた城に佇むメル・ゼナ

そしてそこから放たれる赤黒い弾とその周囲を飛び回る無数のキュリアの姿だった。

「劫血『主に贄を捧げる嗜生虫』ね……嗜生虫とはこのヒルもどきのことかしらね？」
そしてなんとなくやり方が分かったのかキュリアに残りのスペルカードを持ってこさせる。

そして次々と新たなスペルカードを生み出すメル・ゼナ。

その姿はどことなく楽しそうにも見える。

そして10枚のスペルカードが出来上がる。

がしかし恐らくこの中で実際に使うのは数枚程度で済むだろう。

これは純粹に持続力の問題だった。要は相手側の持続力が持ちそうに無いのだ。

しかし出来上がったスペルカードを見て思ってしまう……………

「やっぱリレミイよりも吸血鬼らしいわねこれ……………レミイが見たらまた悔しがりそうね。

自覚はあるみたいだし。」

そしてそろそろレミア達も眠りにつく時間となりメル・ゼナは紅魔館の屋根の上
上り優雅に佇みそのまま眠りにつく……………。

そこに余計なマスコミ（カラス天狗）が居ることに気が付かずに……………

メル・ゼナ side

翌日の昼過ぎ、空から聞こえる女の声で目が覚める。

「号外ー！！！！号外ですよー！！！！これは読まなきゃ損をしますよー！！！！」

声の正体は白い服と黒いスカート、に身を包み片手に大きな葉で作られたうちわのような物、もう片方の手で文字の書かれた紙をばらまいており、背中からはカラスのような翼を生やした少女だった。

しかし自分の眠りを邪魔されたことに変わりはないためメル・ゼナは口に龍属性エネルギーを溜めて高速で音もなく打ち出した。

「あやつ!? あやややややつ?!?!」

直撃する直前に気付いたようでもグレイズする程度で済んではいたが普通に撃ち落とされてゆくマスゴミ。

完全に日頃の行いであった。

しかし彼女が落としていく文字がびっしりと書かれた紙を見て少し興味を持った。

自分の世界にいた頃は親が王国を滅ぼした後に滅びた城下に入りその中であつた書物がなんだろうと気になり、自分を討伐しに来たハンターを振り返りにしてそのハンターノート盗み文字を学習しようとしていた。

もちろんちゃんとした学習環境があるわけではないからそれが何なのか殆ど理解は出来なかつたが絵などを見ることで何がいるかを知ることが出来ていた為にこれらの様なものには興味をそそられていた。

今は言葉を理解出来るしあとでパチュリーに読んで貰うとしようと思つた。

霊夢 side

博麗神社

博麗大結界を発動させている力を持った神社でありそこには異変解決や妖怪退治を
生業とする白と赤の巫女服に身を包み謎に脇を解放してる『楽園の素敵な巫女』こと脇
巫女げふんげふん……………博麗霊夢がいたのだった。

今日も平和ね……………

お賽銭もいつも通りないけど……………

そしてその妖怪共、ここを溜まり場にすくくらいならお賽銭くらい入れていきなさ
いよ退治されたいのかしら？

まあ概ねいつも通りの何も無い1日を過ごして居たのだが昼頃にズタボロになって
赤黒い雷のような物にまとわり付かれていますカラス天狗（マスゴミ）が来た。

いろいろ突っ込み所はあるが私としてはあの赤黒い雷が少し気になった、やけに強力
な自然の力を感じるからだ。まるで生命そのもののような力を。

「い……………うが……………い……………うがあああい……………グフツ」

そしてそんな様子のマスゴミはボロボロになりながらもゆっくりとこちらにゾンビのように歩いてきて新聞を渡して倒れていった。

これはこのバカまた何かやらかしたわね。

私の知ったことではないけど日頃の行いね。

巫女は普通に辛辣だった。

そして手渡された新聞を読み少しだけ興味を持った。

「へえ……一度紅魔館に向く必要があるかも知れないわね」

そこにはマスゴミが書いた新聞があり、読んでみると見出しからいきなり興味をそそられる内容をしていた。

『号外！吸血鬼の館に現れる本人よりも吸血鬼らしく優雅に佇むドラゴン!!』

一応私達にはあの吸血鬼が吸血鬼らしくないことは分かりきっていたのもありあえて言わないでいたのだがここまでハッキリと書かれてしまったのはレミアが泣いてしまわないかという不安が出ってしまった。

しかしそのドラゴンは写真で見ただけでも圧倒的なまでの生命力とその力強さ、そしてその強大さを感じさせ、とても優雅に佇んでいた。

そしてこの新聞をきっかけに様々な実力者が紅魔館に集うこととなることを今は知

るはずもなかったのである

興味を持つ者達

その日、天狗記者であるマスゴミげふんげふん、射命丸 文の新聞は今までにない人
気となっていた。

理由としては

- ・新たな幻想入りを果たした生物が居ることを知らせた為。
- ・その生物がまるで吸血鬼のような特徴を持つ美しくも恐ろしいドラゴンであるこ
と。

- ・そして写真からも圧倒的なまでの存在感が感じられた為。

この3つが上げられた。

これが号外として幻想郷中に知られてしまった。

つまりあのマスゴミは余計な事をして幻想郷中の実力者を動かしてしまうというこ
んでもない事をやらかしたのであった。

『文々。新聞 号外』

本日うー☆月にやー☆日、新聞のネタ集めに幻想郷を回っていた際に紅魔館にて新たに幻想入りしたと思われる生物を発見した。

これが外来人であればいつもの事ではあったがなんと今回目撃されたのはドラゴンであった。

そのドラゴンは紅魔館の一番上に佇みその紅い翼を前に体を覆うように眠っていた。それはまるで幻想郷ではなく本などな描写される吸血鬼のような佇まいであったのだ。

そう、本日の号外にタイトルをつけるならば

『号外！吸血鬼の館に現れる本人よりも吸血鬼らしく優雅に佇むドラゴン!!』

とでも名付けられるだろう。

この新聞を書いた記者である射命丸こと私はこのドラゴンについて後日詳しく取材をするつもりのため次の号外をお待ちください。

しかし私としてはあのドラゴンの周囲を守るように飛行する紅い蝶のような生き物に非常に興味をそそられています。

まるでそのドラゴンを主としてその主を世話する眷属のようにも見えたからです。

私としてはもつと近付いて撮影したかったですがこちらに気付かれて起きられたら大変な事になりそうなので戦術的撤退をいたしました。(実際に紅黒い雷に軽く打たれかけました。)

それでは次の号外でお会いしましょう！

稗田阿求

通称あつきゆん、もしくはAQN

幻想郷の人里にて長い歴史を持つ名家

稗田家にて幼いながらも当主に着いている少女であり、幻想郷の妖怪、人間についてまとめた書物である

『幻想郷縁起』

この書物を編纂する少女である

彼女は『幻想郷縁起』を編纂する為に千年以上前から転生を繰り返しており、その初代である稗田阿礼の九代目の転生体である。

その容姿としては紫色の髪と瞳に山茶花と思われる髪飾りに着物を着た少女である。

そんな稗田阿求だが稗田家に仕える従者の一人が新しい幻想入りした生物を知らせるべくマスゴミの新聞を慌てて渡しに来ていた……………

稗田阿求 side

今日はいつもの日常とは少し違っていた、なぜならあのカラス天狗の新聞が来た際に屋敷の皆が慌てていたからだ。

そんな中慌てて来たであろう女中が障子を開け新聞を慌てて知らせて来た。

「あ、ああ阿求様!?!新しく幻想入りしたドラゴンが現れました!?!」

「なんですって!?!」

私は幻想郷の妖怪、力ある人間等を編纂する『幻想郷縁起』を作る使命をもっている。

外人が来る程度であればそれほど珍しい訳でもない為軽く話を聞くために屋敷に招待する程度なのだがドラゴンならば話は完全に別だ。

- ・その危険性
- ・どのような力を持っているのか
- ・名前はあるのか
- ・どれだけの年月を生きているのか
- ・そもそも会話が成立するのか
- ・友好的なのか

『幻想郷縁起』に新たに編纂しなければいけないようになる内容は多々ある。

しかしドラゴンとなると人里の屋敷に招待するのは完全に論外、ならば私の方から出向くまでなのだがそうすると今度は私に仕える者達が心配してなかなか話を聞きに行くことが出来ないのだ。

とりあえず今回は博麗の巫女に護衛を頼み、その存在を『幻想郷縁起』に書き記さなければ……

そうして私は博麗の巫女に護衛を頼む為に従者を何人か連れて博麗神社に赴くのだった。

願うならば会話が成立する生き物でありますように……

そしてこの新聞は結果として多くの者を動かした。

太陽の畑に住む

『アルティメットサデステッククリーチャー』こと

『風見 幽香』

地底の鬼であり『怪力乱心』で知られる

『星熊 勇儀』

いつもなにかやかす問題児達でありそれらが住む守矢神社の『現人神』兼『風祝』兼
守矢神社の常識に囚われない『巫女』

『東風谷 早苗』

亡霊達が住む館である白玉楼の主にして

爆食によりエンゲル係数をぶんまわす『ピンクの悪魔』こと

『西行寺 幽々子』

その他数多の化物達が紅魔館に向けて足を運ぼうとしていたのだった。

結局マスゴミはホントに余計な事をしでかしたのである。

カリスマとかりちゅまの境界

レミリア・スカーレット side

ごきげんよう？私の名はレミリア・スカーレット。

幻想郷にある屋敷、紅魔館に住まう『運命を操る程度の能力』を持つ吸血鬼よ。
そしてその紅魔館の者達を従える『カ・リ・ス・マ』ある主人よ！

ちよつとそこ!?誰よ『かりちゅま』って言つてたやつは!?

ごほん、まあ私はカリスマがあるから許してあげなくもないわ。……………次言つたらコロス

さて、本題に入ろうかしら？

あれはそうね、とある満月の日だったかしら？

ある運命が見えたのよ。

紅い満月を背に滅びた城の天辺に上り紅き翼をゆつくりと広げる姿が……

そう！このシチュエーション。

まさに私にこそ相応しいと思わないかしら？

ただいつも見ている運命と少し変わっていたのは翼以外の部分が見えない事なのよ
ね、お陰で私の威厳ある姿が分からないわ。

でもなぜか翼が私のと違うやつに見えた気がしたのよね……………

……気のせいよね？

そしてその運命は案外あっさりとやってきたことを私はすぐに気付かされる羽目にな
ったわ。

私はこの満月の夜をバツクに”優雅に”ティータイムを楽しんでいたわ。

ただどうやらいつもの白黒泥棒がまた侵入してきたみたいで騒がしいったらありやしないわ。

まったく美鈴ったらなにをしているのやら、まあ寝ているのでしようけどね。

ただ今回のはずいぶんと揺れが大きいわね。それに気配が一つ増えた？それにずいぶんと大型な気配を感じるわね。

「はあ………パンパン（手を叩く音）咲夜。」

「お呼びでしょうか？お嬢様。」

私は手を二回叩き私のメイドである咲夜を呼ぶ。

「なにやらずいぶんと騒がしいわね。」

「申し訳ありません、また白黒が本を盗みに来たようで。美鈴にはキツくOHANAS
HIしておきますので何卒ご容赦くださいませ。」

「許すわ。」

どうせいつもの事だもの。そのくらいで怒るほど私の沸点は低くないつもりよ。

ただ一つ気になることがあるのよ。」

「何でございましょうか?」

「図書館がいつもより自棄に騒がしいと思っただけで急に静かになったのもそうなのだけ
どね。」

急に気配が一つ増えたのよ。

そんなに大きくない気配ならパチエが使い魔でも呼び出したのでしようと納得は出
来るのだけれど大きすぎるのよ。」

そうね、図書館から出られないくらい大きいと言えば分かりやすいかしら?」

「確かに妙な話ですね。様子を見てくればよろしいのですね?」

「ええ、お願い出来るかしら?あ、あと紅茶とお菓子のお代わりお願いね。」

「・・・かしこまりました」

そう言うのと咲夜はいつものように時間を止めて一瞬でお代わりを用意して図書館へ
と向かったのを確認した私は……………

「ふふ……今日の私も完璧なカリスマね。」

自分の才能が怖いくらいだわ。」

そう……最後の余計な一言とほつぺについたお菓子の粉が無ければ普通に完璧なカリスマを演じることが出来ていた………

所詮かりちゅまはかりちゅまだったのだ

自棄に遅いわね咲夜ったら

あら？あの大きな気配が庭に出たわね、大きさに出られないと思っていたのだけ
ど。

ああ、咲夜が空間を広げていたのね。

通りで戻るのが遅いわねだわ。

そしてしばらくした後の咲夜は突然現れる。時間を止められるのってずいぶんと便利ね。

「お待たせしてしまい申し訳ありませんお嬢様。」

「良いのよ咲夜、理由は分かっているもの」

「ありがとうございます。」

それとパチュリー様から伝言がごきます。

『あの泥棒がアホやらかして呼び出しちゃった存在が現れて当分戻れそうにないからこちらで住まわせてあげれないかしら？』

間接的とはいえこちらが迷惑をかけたのは事実なのだし貴女の”カリスマ”性に期待させて貰うわ。

それと妹様も呼ぶから一度庭で顔合わせしておきましょう』

とのことですよ」

カリスマ性ね……ふふ、良いじゃない私の器量のよさを見せる良いチャンスじゃない。い。

「ええ、そうね。どうやら図書館の召喚書を勝手にあの白黒が使ったと言った所でしよう？なら確かに私達にも間接的とはいえ原因はあるわ。」

咲夜？経済面ではどうかしら？」

「まだあの存在がなにを主食とするのか分かりませんのでなんとも言えませんがある程度資金の見直しをすればなんとかなるか」と。

「ふふ、そう。」

ならば迎えに行きましようか、新しい家族の元へ」

そうして咲夜にはフランを呼んできて貰って庭に出ようとしたその時

「お・ね・え・さ・まああああああああ!!!」

「うわらばっ!!」

いきなり私の可愛い妹のフランドール・スカーレット、フランが突撃してきた。軽く骨に罅が入った気がしないでもない。

「いたたたた」

「大丈夫ですかお嬢様!」

「あれれ? 変な声出してどうしたの?」

「もう、はしたないわよフラン? それにあれは私達以外にあんまやっではいけないわよ? 人間にやっつてしまえば死んでしまうかもしれないもの」

「はい、お姉さま。」

ねえねえ、新しい家族ってどんな子なの?」

「ふふつ、さあ? 私もまだ見ていないもの。」

博麗の巫女と爵銀龍

With あつきゆん

メル・ゼナ side

メル・ゼナはまどろみの中目覚める。

しかしそれは決して自然に目覚めた訳ではない。

己の命を脅かしかねない存在が来るからでもない。

ただ空腹にて目覚めた訳でもない。

己で起きようとしたわけでもない。

紅魔館の誰かに起こされた訳でもなかった。

メル・ゼナが目覚めた理由はただ一つ

パシヤツ！パシヤツ！パシヤパシヤリ
カキカキカキ……………パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！
パシヤツ！パシヤツ！

パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！
パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！
パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！
パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！パシヤツ！

・ ・ ・そこに居たのはカラス天狗のマスゴミだったのである。
あまりにも耳障りだ。

己の睡眠を邪魔し続けるそれを体を広げ、目を開いて睨み付けながら威嚇する。

「グルルルルルル……………」

をレミリアから貰っていた。

メル・ゼナとしてはこの幻想郷がどのような場所なのか分かりきっていないのもあり、安全な巣が手に入るといふメリットを理解し快諾していた。

中国をしばき倒して起こした後は少しの間幻想郷を探索する。

そして少しずつ幻想郷のエリアや環境を調べ、食事を済ませた後に紅魔館に帰巢する。

そんな日々を過ごすようになっていた。

なお、自給自足する理由としては八雲 紫がもう一度訪れた際に帰る時にいつの間にかパチュリーに渡していたどこぞの誰かが持つていたと思われるハンターノートなる書物からメル・ゼナの生態をある程度知り、食事が血液やそれに含まれる生命力というのもありレミリア達の食事と被り、量が足りなくなってしまうため自給自足となった。

なおメル・ゼナは生命維持に必要な事は理解しているがたまに咲夜から菓子を貰っている。

血以外でも食事をするのか興味を持ったパチュリーが食べさせた結果、案の定メル・ゼナが初めて食べる菓子の味を気に入ったからである。

ただメル・ゼナ事態は施しを受けすぎる訳にもいかないと考え、吸血により血抜きをして毒をいれないでいただいたイノシシやウサギ等の動物を咲夜にその翌日にお礼として

提供していた。

そして例のかりちゅまは見ただけで負けたと確信してしまったのがよほど悔しかったらしくメル・ゼナを観察して自分に真似が出来ないか考えていたようだ。

そしてそんなある日、メル・ゼナは軽く脅威となりかねない気配に気が付きその方向を振り返り身構える。

その方向には紅と白の脇が丸見えの巫女服に身を包む霊夢とその脚に捕まって飛ぶ阿求がいるのだった。

楽園の素敵な守銭奴こと博麗 霊夢 side

紅魔館に近付くにつれてどんどん災害のような圧倒的な存在感が近付いていくのに気が付く。

これが例のドラゴンね、確かにこのドラゴンからは圧倒的なまでの存在感を感じずにはいられないわ。私の勘がもしあの存在と本気で戦うような事があれば即逃げるべき

と伝えていた。そのため油断はなかったが杞憂だったようだ。

そしてメル・ゼナとしてはその気配に気付きながらも優雅に佇み、まるで待ち受けるかのように身構えていた。

はあ………なんて強さしてるのかしら？

おそらく大妖怪クラスね。

そう考えると今日護衛として雇われついでで様子を身に來たのは失敗かもしれない。というか普通に邪魔なのよね………。

そして私は門の前に降り、あのドラゴンに話を通して中に入れて貰った。

いつもの中国はどうしたかと思っただけで早速そばでマスゴミと共に挽き肉になりかけてるのを見かけてほしい理解した。

相変わらずのようね。

そして私は吸血鬼の所に行きあのドラゴンの話を聞くためにお茶会を受けながら話を聞くことになったのだ。

阿求？あいつならドラゴンの所にいるわよ、どうなっても私の知ったことではないわ、私が請け負ったのは道中の護衛のみだもの。

古龍の力

博麗 靈夢 side

「……以上が私達が現状あの龍について知り得ている事よ。これで満足かしら？」

私は現在、紅魔館のレミリアの部屋にてあのドラゴン、いえ爵銀龍メル・ゼナについて色々と説明を受けていた。

あの龍が幻想郷にとつて害になるかどうかというのもあるのだが、話を聞いていて信じたのだけれど大妖怪クラスの力を持つ存在が召喚されたとあればさすがに放置は出来なかったからだ。

「ええ、ありがと。しかし魔理沙は今回とんでもないこととしてかしてくれたわね。」

「全くよ、お陰でこっちは軽く騒ぎになったわ。」

「そうね、魔理沙には後で罰を与えておくからそれで許して頂戴。」

それと気になっていたのだけれど門の近くにずいぶん衰弱して倒れていたあの迷

惑天狗はどうしたの?」

「あああれ? 私もどこに捨てるべきか迷っててね。」

どうもメル・ゼナが寝ている時にパシャパシャパシャ写真取って安眠を妨害したみたいなのよ。

それで怒ったメル・ゼナが捕まえてあの蛭擬き、いえ、八雲 紫が言うキュリアという生物を群がらせて一齐に吸血すると同時に毒を注入。

それによつてあの粗大ごみが出来たのよ。」

「はあ……………後で永遠亭に捨ててくるわ。」

「ありがとう、こちらとしても助かるわ。」

そして私はメル・ゼナの近くで『幻想郷縁起』を編纂する為にあの龍に質問したりメモを続ける阿求とその辺に転がっているマスゴミを回収する。

阿求には道中私が聞いた情報がある程度教えておいた。

また行きたいなんて事言われても面倒だしね。

もしたら阿求つたらかなり興奮した様子で今すぐにも『幻想郷縁起』を編纂したそうにしていたわ。

それと拾ったマスゴミは永遠亭の上空から捨ててきた。多分屋根を破るでしょうけど直すのとかはあの天狗に押し付けるだろうし問題はない。

射命丸には良い葉ね。

そして私は神社への帰り道、レミリアから聞いたあの龍の力とその仮説を思い出していた。

「霊夢」

レミリアは頬にお菓子の粉が付いてはいたけれど真面目な顔をして話を切り出した

「なにかしら?」

「一つ忠告しておきたいことがあるのよ」

「忠告?」

「あの龍が持つ力についてよ。」

メル・ゼナが操るのは龍属性と呼ばれる深紅の雷。

効果としては封印の能力があり、龍属性を持たないものがこれによる攻撃を受けすぎるとしばらくの間能力を封印されるらしいわ。

そしてその龍属性とは命を凝縮した力、食物連鎖によって生まれる命そのもののエネ

ルギーだそうよ。

まあこれもあのスキマ妖怪から聞いた話だからどこまでが本当なのかはわからないけど、メル・ゼナとやりあうつもりなら気をつけておきなさい。」

深紅の雷……………

— そういえばあの時迷惑天狗は飛んで神社に来ることはせずにわざわざあの階段を上がつて来ていたわね……………

— それにあの深紅の雷とやりに纏わりつかれていたから飛行能力が使えなかったと見るべきなのでしょうね

飛べなくなるということはおそらく一度でも直撃すれば私に勝ち目は無いでしょうね。

— そうなるともしメル・ゼナと戦うなら夢想天生ですぐに勝負を決めないと不味いでしょうね。

「それに加えてこれを見て頂戴」

— そう言うとレミリアは一つの絵巻を出した

その絵巻には白かった部分が黒く染まり、紅い部位が深紅になったメル・ゼナと思わ

れるものが描かれており、その周囲には深紅の雷と深紅の輝きを持ったキュリアが描かれていた。

「メル・ゼナはおそらく攻撃以外にも自身の強化へと使えるのでしょね、ただこれは龍属性だけじゃなく他の生き物から奪った精気を一気に消費してると私達は見ているわ。出来れば戦って欲しくは無いのだけれど試す必要があるのでしょうか？」

「・・・そうね、力が大妖怪クラスと分かった以上は一度試す必要があるわ。

放置することは出来ないもの。」

「そう……………なら油断しないことね。」

かりちゅま s i d e

幻想郷は全てを受け入れる……………

しかし受け入れるまでに一度異変を起こし、それを解決させる必要がある。

これは私達も通った道だ、だが私達はあの時は勝てるという驕りがあつたから起こしたと言つても言い……………

だが実際の所あの博麗の巫女には誰も勝つことが出来ない、異変を解決する最強の存在、妖怪の賢者とされる者達ですらあの巫女が本気を出せば勝つことは出来ないのだから……………

だが私が危惧してるのはそれではない……………

私が見た運命は……………

キュリアに纏わりつかれ、その肉体を紅く発光させ凶暴化する妖怪達による百鬼夜行……………

もしこれが本当にあのキュリアによって引き起こされるなら……………

そのすぐ近くにいる私達も例外では無いかも知れないわね……………

しかしそのもう一つ見えた運命ではキュリア達が一ヶ所に集う様子があつたがその

元にはメル・ゼナではなくさらに巨大な4本の腕を持った悪魔のような龍がいた。
あれは一体……………

爵銀龍のいつもの1日 その1

爵銀龍メル・ゼナの1日は朝早くから始まる……いや、始めさせられると言うのが正解だろう。

なぜなら……

パシヤパシヤ……パシヤ……パシヤパシヤパシヤ……

カメラのシャッターの音が聞こえる、しかしそれは時間が経つにつれてどんどん増えていき……

パシヤパシヤパシヤパシヤ……

パシヤパシヤ……パシヤパシヤパシヤパシヤ……パシヤパシヤパシヤ

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ

シャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ……

さすがにここまでされると比較的温厚な性格となったメル・ゼナでも怒る……いや、誰でも怒るだろう。

気持ち良く寝てるところを毎日の如く雑音で起こされればさすがに……

「グギャアアアアアアアア!!!」

いい加減堪忍袋の緒が切れたメル・ゼナは体をひねり、ドリルの如く螺旋に回転しながら突撃する。

「あやや!?危ないじゃないですか!?もう少しくらい取材させてくださいよー!」

そう、雑音の正体はマスゴミのシャッター音だったのだ。

そしてそれは取材ではなく盗撮だ。

そしてギリギリでかわされた事にも軽くイラついたメル・ゼナはかかと落としの要領でその場で回転し尻尾を叩きつける。

「うおっ!?!あつぶねえ!?!」

ふう、瞬間的な速さが私とほぼ同じだからかわすのが一苦らぶふうっ!?!」

尻尾の叩きつけはたしかにかわされたがそもそもメル・ゼナの本命は叩きつけではなく、地面ごと抉るような三ツ又に別れた槍のごとき尻尾による刺突だったのだ。

メル・ゼナは半目で睨みながら口に唾えたマスゴミを振り回し、仕事をサボる美鈴をしばく。

その際射命丸が軽く死にかけた為に行き先を永遠亭に変更して飛んでいく………
今日は朝食代わりにマスゴミの無駄に有り余る精気を吸いとった為あまり空腹になりそうにない。

メル・ゼナは幻想郷を軽く飛び回ることにした。

く迷いの竹林く

軽く飛び続けて巨大な竹林であり、毎日のように作りが変わる迷いの竹林に到着する。

そしてその中にある永遠亭に向かって飛んでいると隣に声をかける人物が現れる。

「おーい！メル・ゼナー！！またあのバカを死にかけまでしばいたのか？」

「コクリツ」

白銀とも言える白い超ロングヘアに白地に赤が入った大きなリボン着头に着け、その髪には小さなリボンが複数結ばれている。

そして白のカッターシャツに指貫袴と思われる赤い袴、サスペンダーとボーイツシユな格好をする彼女、『藤原 妹紅』が隣を飛びながら永遠亭に案内をする。

キュリアを使えば自分で探せなくもないのだがどうしても時間がかかる為いつも妹紅に手伝って貰っていたのだ。

永遠亭が見えた頃、妹紅は軽い悪戯を思い付く

「おい、メル・ゼナ。お前今日はいろんな所回るんならそんなにここに時間かけるのも悪いしあの辺りに落としといてくれ、あとはこつちで勝手に直しとくから。」

妹紅はメル・ゼナがこつちに来る場合はその後幻想郷の探索に出ることを知っていた為言いくるめるだけならいくらでも思い付いてたのである。

「コクリツ……………ペッ！」

そしてその言葉を鵜呑みにしたメル・ゼナはその口に啜えるマスゴミを吐き捨てる。そしてその場から離れるのだが……………

「ぎゃあああああ?!?!?! 私のゲームキューブがああああああああああああ?!?!?!」

!??!?!
そう妹紅が指定した場所は妹紅と因縁のある永遠亭の主兼二ト姫である『蓬莱山 輝夜』の自室だったのだ。

しかしメル・ゼナはそもそもこの悲鳴を聞いていない為に利用されたと気付いていな

い。

「ぎやはははははは、ざまあ!!」

「またあんたね?! 今度は何回殺されたいかしら?!」

妹紅はその場で爆笑し輝夜は殺意を込めて睨みつける、そしていつもの殺しあいが始まる。

しかし彼女らは不老不死の蓬莱人という種族の為、いくら体がちぎれようと消し飛ばされようと再生する。

その騒がしい喧嘩はいつも通り長い間続けられるのだった

爵銀龍のいつもの1日 その2

メル・ゼナは永遠亭にてマスゴミを捨ててきた後、妖怪の山にある地底への入口へと向かっていた。

メル・ゼナにとって地の底に繋がる道というのは因縁があり、古龍としてキュリアによる生態系破壊の防止や、とある古龍が地上に出ないように牽制するという役割があったからだ。

ただし幻想郷に来た今となってはこの役割も前者はともかくとして後者に関してはそもそもその古龍がこの世界に存在しないために果たせないのだ。

しかしメル・ゼナとしてはどうしても警戒をしてしまう為、定期的に見に来ていたのだった。

地底の入口はそこまで広くない為、メル・ゼナが飛んで入るのは難しい。

その為メル・ゼナは徒歩で地底の旧地獄に向かっていた。

『旧地獄』

死後の世界を管理し、生前の行いを裁く事によって天国に行くか地獄に行くか転生するかを判断し、実行する閻魔大王こと『四季映姫・ヤマザナドゥ』

そして旧地獄とは地獄や天国を管理する閻魔庁で深刻な資金不足や人手不足に陥った為に放棄された元地獄として知られており、今は地上で忌み嫌われた存在達が放棄されていた旧都と呼ばれる地獄の町を住みかにして一つの町として再建していた。

そしてそんな旧都の住人の一人である妖怪釣瓶落としのキスメは、無謀にもメル・ゼナのところに落ち危害を加えようとしていた……………

のそり……………のそり……………

メル・ゼナは優雅に歩いていく、その上になにがいるのかにも気が付く様子はなかった……………

「くつくつく、誰だか知らないけどこの地底に来た自分を恨む事ね。ただなんか気配がずいぶん大きい気がするけど。」

そして徹に補強された気の桶に入った少女はその桶をメル・ゼナの頭部に向けて落下する!!

ヒューーーーー……………ポカッ

・…………として軽い音が響く

そう、釣瓶おとしの攻撃はメル・ゼナには擦り傷一つすらつかなかった。

「へっ!? 何で効かないのよ!? ひっ」

「スウウウウウウウウウ」

「えつと…………あの? その……………良い天気ですね!」

「ギヤアアアアアアアアア」

「ぎぎぎ、ぎめんなさいー!!!」

そしてメル・ゼナは攻撃を仕掛けてきたキスメに対して咆哮による威嚇をした。

キスメはあまりの恐怖から逃げ出したのだった……………

キスメを軽く脅した後、しばらく進み続けるととてつもなく大きな空洞、地底の旧都があるエリアにたどり着く、そしてそこには一本角の生え、腕に枷と千切れた鎖をぶら下げ片手に酒を持った女性『星熊 勇儀』が近付いてくる。

「おや? メル・ゼナじゃないか? 道理でさつきキスメが逃げてきた訳だ。今日も幻想郷を見て回ってるのかい?」

「コクリッ」

「そうかいそうかい、まあ立ち話もなんだし家においでよ、お前さんが軽く居座る程度のスペースなら空いてるからさ。」

実を言うと勇儀は数日前にマスゴミの新聞に釣られて紅魔館まで出向いて来ており、その際に会っていた。

この時勇儀とは一度戦闘をされており、力では拮抗していたがキュリアによりどんどん生命力を吸い取る事の出来るメル・ゼナが最終的に持久勝ちしていた。

メル・ゼナはその時のことを思い出す……………

メルゼナが探索を終え紅魔館に戻り、おやつを咲夜から貰いながら寝ている中国をし
ばき終えていた頃、勇儀はやって来た。

「??」

「お？あんたが新聞に載っていた『爵銀龍メル・ゼナ』かい？アタシは勇儀、地底に住む鬼さね。」

メル・ゼナは鬼と聞いて種族名だと理解はしたが特徴らしい特徴が人間とほぼ変わらない為軽く疑問を持っていたが勇儀の角を見て角が生えた人間Ⅱ鬼と認識したのだった。

「にしても本当にデカイ上にすごい存在感を放ってるねえ、見たところ純粋な力もかなり強いと見える。」

それにこの紅い蝶みたいなのが………ってこいつ良く見たら蛭かい？

まあこいつがキュリアってやつか。たしかに見た目だけ見ればあの吸血鬼姉妹よりも吸血鬼っぽいね。」

「はあ………ついには鬼までメル・ゼナに会いに来るなんてね。」

用件は分かりきってるけど一応聞いておきましようか？」

「そいつは聞く意味あるのかい咲夜？」

まあいいや、用件はあんたの予想通りこいつとヤリあいに来ただけだよ。」

「やつぱりね………ごめんなさいねメル・ゼナ、どうもあの天狗の新聞に釣られて貴方と戦いに来たらしいわ。」

でも殺しあいに来たって訳じゃなくて鬼は戦いを娯楽としてるのよ、だから紅魔館に

被害が出ないように霧の湖の辺りで戦ってくれないかしら？」

「……………」

メル・ゼナは咲夜を見て断れないと分かったのか諦めてその戦闘を受けることにした。そして次あのマスゴミと会ったら死にかけになるまで生気を吸い尽くすと誓ったのだった。

「お？話がわかるねえ。さっそくやろうじゃないか。」

そしてメル・ゼナは霧の湖の畔へと向かい、勇儀との戦闘を始めるのだった

生きた災害

メル・ゼナは霧の湖の畔にて勇儀と向き合う。

メル・ゼナはこの幻想郷に来てからまともな狩りや戦闘は一度もやっていなかった事を思い出し、この戦いでいろいろと試すつもりのようなうだ。

そしてメル・ゼナが思考を巡らせていた時、勇儀は話しかけてくる。

「そういえばちゃんとした自己紹介をしてはいなかったね、アタシの名前は『星熊 勇儀』かつて妖怪の山にて天狗達を従えていた鬼達の四天王、山の四天王の一人『力の勇儀』とはアタシの事だ。」

「……………グルルルウ」

メル・ゼナはなぜか咲夜から礼儀作法と言ったものを叩き込まれており、人の体ではない自身の翼等を巧みに使い、礼をする……………

そして次の瞬間、勇儀の拳とメル・ゼナの翼の鉤爪がぶつかる……………しかし力は拮抗しておりお互い驚いた様子でその場から一度離れる。

「こいつは驚いた、まさかアタシに力で対抗出来るやつがいるなんて。

こりやおもしろくなってきたじゃないか！」

メル・ゼナも驚く、メル・ゼナ自身は能力は殆ど持つておらず、己の肉体を用いた近接格闘戦に特化した古龍というのもあり、自身の身体能力には自身があつたがまさかこの状態”の姿とはいえ力で全くの互角なのだから。

そして今度はメル・ゼナが仕掛ける

自身の翼の鉤爪を地面に沿わせ、地面ごとえぐり取るような衝撃波を繰り出す。

そう、風圧”だけ”で地面を抉りながら攻撃しているのである。

「つ?!こりや能力無かつたらアタシが確実に力負けする威力じゃないか!」

勇儀はギリギリで横に避ける、しかしメル・ゼナにとっては今のはフェイントにすぎない。

そして本命の攻撃を入れるため体を捻り、螺旋状に突撃する。

「ぐつ?!アタシも人のこと言えないけどどれだけの力してんだ………かつ!!!」

そしてメル・ゼナはキュリアを放出し始めた

そしてキュリアは龍の力を帯び始める。

どうやらいつも力を受けとるばかりだったメル・ゼナは逆に力を与えると、いう事を試したようだ。

これにより龍属性と劫血の両方の属性を持つキュリアが産み出される。

そしてキュリア達は空中で群がり深紅の雷を撒き散らしながら一つのエネルギー弾を産み出す。

そしてそれをメル・ゼナは発射し、途中で分裂を何度も繰り返しながらついには弾幕と呼べる程の密度の攻撃になる。

これにスペルカードとしての名前をつけるならば

傀異『劫血の龍弾』

といった所だろう。

そして勇儀は初見の弾幕というのもあり、避けきれずに右腕に被弾する。

しかしこれが致命的な被弾となる。

「っ!？」

その被弾した右腕には深紅の雷が纏われており、その部位だけがとつもない脱力感に襲われる。

しかし他の部分は何も変わらず、『怪力乱神を持つ程度の能力』による身体強化は継続されている。

『ずいぶんと厄介な、あの赤黒い雷に打たれば能力が消される……いや、封印されるって訳かい』

試しに右腕に能力での強化をしようとしても深紅の雷がより強く纏われるだけで発動が出来ない。

これが生態系の頂点に立つ生物がその食物連鎖により生命力を凝縮した『龍属性』、そしてその攻撃を受けることによって発生する『龍属性やられ』だ。

そして龍属性は他の属性や能力等といった物と相性が凄まじく悪く、例えば古龍と云えどそれを受けすぎればその権能の一部を一時的に封じられる。

人間が産み出す武器に至っては一時的にすべての属性を消滅させられるのである。

「面白いじゃないかア！鬼符『怪力乱心』!!!」

勇儀の肉体に圧倒的な身体強化が施され、弾幕を纏った拳や、足によるラッシュが繰り出される。

そしてその威力は凄まじく、受けきれないメル・ゼナが一度怯まされる。

あのような威力の攻撃を何度も繰り返されてはメル・ゼナと言えど部位破壊は避けられないと判断する。

そしてメル・ゼナは力に余力を残した今のままでは危険と判断し、本気を出すことにした。

自らの龍の力を活性化させ、今までに吸血によつて得た生命力を自らの強化へと使い続ける……………

そしてメル・ゼナの全身から黒い霧が放出され、その姿を変えていく。

腕、首に生えていた毛羽は朱色に発光し始め、全身の白い鱗や甲殻は黒く染まる。

目は紅い光を灯し三ツ又の槍のような形状をした尻尾の先端に深紅の光が灯る。

そして翼は黒が混じることにより深い深紅の色を出し、まるで本性を現したかのような黒と紅の龍が現れる。

「へえ……………そいつがお前さんの本気の姿つて訳かい」

「ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

メル・ゼナは咆哮する。

自身と拮抗する力を持つ存在に対して。

キュリアは力強く輝く。

自らの主が惜しげもなく与えるエネルギーに歓喜して。

鬼は狂喜する。

力だけでなんとか互角であり、能力を含めて戦えば勝ち目がとても低いその強敵に。力を象徴するかのような存在が今、ぶつかり合う……………

生きた災害 その2

純粹な力と力がぶつかり、その衝撃波により周囲の木々がなぎ倒され、湖の水が吹き飛ぶ。

メル・ゼナが翼を薙ぎ払えば地面を抉りながら進む衝撃波と共に、抉られた地面から龍属性の弾幕が吹き出す。

これも幻想郷用に生み出し、より龍属性やられや劫血やられを引き起こしやすくする為に威力を少し下げた代わりには制圧力を高めた技だ。

「フンッ!!オラッ!!どうした!こんな!ものかあ!」

勇儀は衝撃波を拳で吹き飛ばし、弾幕を自身の拳や足に発生させて相殺する、攻防一体の弾幕ではあるが勇儀はあまり遠距離や中距離での戦闘は得意ではない。

メル・ゼナが勇儀に突撃し、その場で回転して尻尾を叩きつける。

「っ?!瞬間的な加速なら天狗並か!」

勇儀はその叩きつけをバックステップでなんとか避ける。

が、それがいけなかった。

「なっ?! 本命はそっちかい!」

三ツ又の尻尾が地面を抉りながら槍による鋭い突きのように迫り来る、そしてその尻尾には深紅の雷、龍属性が纏われていた。そして勇儀はギリギリで避けるが左腕にかすり傷を受けてしまう。

龍属性やられにはならないがキュリアの毒による劫血やられになっってしまう。

「今度は瞬間移動かい!」

メル・ゼナから黒い霧が発生したと思いきやその次の瞬間にはメル・ゼナは尻尾を叩きつけた姿勢で勇儀の後ろに立つ。

これは霧による目眩ましと一時的に爆発的な身体強化を施し、一瞬で高速移動することであるで消えたかのように移動するメル・ゼナという種族特有の技術だ。

そして射出体制にある尻尾による強力な刺突が繰り出される。

「うおおおおお!! 鬼符『怪力乱心』!!!」

回避は間に合わない、他のスペルカードでは迎撃が間に合わない。

そして今発動してるスペルカードを防御に力を割り当てて受け流すように尻尾による刺突を受け止める。

「ッ!」

メル・ゼナは驚いた、初見でここまで見切られた事に。

そして勇儀は焦る、そのあまりの威力とその身体能力に加え龍属性という封印能力に。

「つ!? 傷の治りが遅い……それどころか生命力を吸われてる?」

さらに直撃仕掛けた後傷が一切治らない事に気が付き劫血やられになつて言うことに初めて気付く、だがそれ以上に尻尾による一撃を受けた際に右腕を軽く負傷し、龍属性が大きくまとわりついていた。

幸い左腕の龍属性やられはもう完治していたのだが今度は右腕をやられる。

『こいつは足を一度でもやらればおしまいだねえ………確実に避けきれなくなる。』

そして距離を離れた際にメル・ゼナが動きを見せる。

その口に膨大な龍属性エネルギーを溜め込み始めたのだ。

「成る程、これで決着をつけたのかい?」

『利き腕が使えないから威力は多少下がるがやるしかないか』

「ならアタシも答えてやるよ! 怪力乱心を持つ力の称号を持ったアタシの最大の一撃で

!

勇儀が一步力強く踏み込む、そしてその地面にはクレーターが出来る程の罅が出来る。

「いやー、敗けだ敗け。全身にこのビリビリ食らったら『怪力乱心を持つ程度能力』がどこにも発動しやしない、お前さんすごいなあ。」

「グルルルウ……………」

そしてメル・ゼナはいつもの姿に戻るがさすがに疲れた様子だった。

「あつははははは、そうかいそうかい。」

まああれだけやりあつたんだ、そりや疲れもするさね。

そういうアタシだって完全に満身創痍なんだからね。」

勇儀はとても満足そうにメル・ゼナの腕を叩き、何処からともなく取り出した皿に酒を注ぐ。

「んぐっんぐっんぐっプハア！やっぱり戦った後の酒は最高だねえ！ほれ、お前さんも飲んでみなよ。」

「……………んぐっ…………っ!？」

メル・ゼナは勇儀から酒を受け取り、口に流し込み飲むとする。

しかしメル・ゼナにとって人生、いや龍生で初めて飲む酒でなにもないはずが無く、喉を通る焼けるような感覚に軽くむせそうになった。

「あつははははは、お前さんにはちよいときつかったか。」

悪い悪い、でも悪くないもんだろ?」

「・・・グルルラア」

「そうかい、それが勝利の美酒ってやつだ。

覚えといて損はないよ?」

勝利の美酒、初めての感覚だがメル・ゼナはなかなか悪くないと思えた

爵銀龍と鬼は酒を飲み交わす

地底『古都』：勇儀邸

「いやあ、あの時の戦いは楽しかったねえ……………」

まさか『怪力乱心を持つ程度の能力』でも追い付くのが限界とは。」

メル・ゼナが後で教えてもらった事ではあるのだが、この世界には『〴〵程度の能力』というものが存在することをメル・ゼナは知った。

この勇儀の『怪力乱心を持つ程度の能力』は最大の強化率としては本気を出したメル・ゼナと同等の身体能力となる。

しかし純粋な力というわけでもなく異能の類いであり、自身の肉体から発生することに代わりは無いため『〴〵程度の能力』や飛行能力は基本的に龍属性によつて無効化される。

しかし妖力や霊力といった力で作られた弾幕だけはなぜか無効には出来なかった。

恐らくこれは力を生み出し、放出するという形ではなく、最初からあるものを出すか

らであろう。

メル・ゼナの世界にいたモンスター達も火炎袋などの体内器官を使ったプレス等を封じる事は不可能だった。

そしてあの戦い以降ちよくちよく勇儀は酒を差し入れに来るようになっていた。

メル・ゼナも酒を何度も飲まされていくうちに自然と飲めるようになり、今や鬼達と酒の飲み比べすら出来るまでになった。

恐らくメル・ゼナがキュリアの毒が全身に行き渡っても問題ないくらいに毒等の耐性が強く、純粋に胃袋などの内臓が鬼達よりも物理的に大きいからというのもあるだろうが。

「そっぴいやお前さんとは酒を何度も飲み交わしてはいるが基本的に私が話しかけるだけでお前さんがどんな性格をしているかは曖昧な部分しか分からなかったねえ。

ちようど良い、メル・ゼナは覚妖怪という物を知っているかい？」

悟り妖怪という生き物はメル・ゼナはまだ聞いたことが無い為に首を傾げる。

「そっぴい、まああいつの事は基本皆考えたくも無いのかねえ。

その覚妖怪ってのはこの地底にある地霊殿の主人なんだがね、あいつは他のやつのかを覗くことが出来るのさ。

しかもそれは言葉を持つ人や妖怪だけに限らず、話せない妖怪や動物とも会話が可能

になるような代物らしくてね。

とはいえそれゆえに心を読まれたくないと何かしら邪な物を考えたりするような奴らからは特に忌み嫌われてしまっていてね。

人は誰しも何かしら秘密を持つもんだから皆嫌っちゃまってこの地底に住み着いたつてわけさ。

まあ地底にいるやつらは基本はみ出し物か物好きくらいなもんなんだがね？」

心を覗き、言葉を扱わない生き物とすら会話を可能にする『覚妖怪』。

その者がいれば自分も他の者達や勇儀、紅魔館の人達とちゃんとした会話が出るの
だろうか？

メル・ゼナは悟り妖怪に会ってみたいと思った

「クルルルウ……………」

メル・ゼナは悟り妖怪がいるであろう地霊殿に体を向け唸る。

「あつははははは、そうかい。

まああいつらも喜ぶだろうさ、あいつに会いたいなんて物好きがいるなんて知れば尚
更さね。

さて、アタシも久しぶりに酒を飲み交わしたいし『さとり』に合いに行くとするか

ねえ。」

そしてメル・ゼナの背中に乗った勇儀は地霊殿を指差し、飛んでほしいとお願いする。勝手に背中に乗られた上にそもそも自分で飛べるだろうとメル・ゼナは軽く呆れていたがそのまま翼を力強く羽ばたかせ、地底の中でも最も大きな屋敷に向かう。

覚妖怪『古明地 さとり』こと小五ロリside

なぜか今一瞬イラっとさせられた気がしたが周囲に誰もいない事は分かるため気のせいと思うことにしましょう。

私は古明地 さとり、地底を管理する地霊殿の主であり人や妖怪に忌み嫌われる覚妖怪の一人よ。

私には妹が居るのだけど彼女は人や妖怪の黒い心を見すぎてしまってそれをもう見たくない心……『第三の目』を閉ざしてしまったわ。

私達覚妖怪にとって相手の心を覗くこの第三の目は覗いた物や言葉をイメージとして脳に直接伝達する器官の為、これが閉じられてしまうとあまり良い影響は出ない。

實際妹の『古明地　こいし』は心を閉ざしてしまったことにより心を読む事は出来なくなつた変わりに『無意識を操る程度の能力』を手にしてしまつた。

その為私はもうこいしの心を覗くことも出来ず、こいし本人も能力により自身の意識その物が無くなり自分でも何をしているのかわからない事が多いという。

それに加えてこの能力は誰からも認識されなくなつてしまうため、こいしがこれにより人と話したりもそんなに出来なくなつて悲しんでいるのを私は知っている。

なにか解決出来そうな物があれば良いのだけれど……。

そしていつものように読書や調べ物をしているうちに地霊殿の皆がざわめくのを私は感じる、これは恐怖？いえ、圧倒的な存在に対する畏怖といった所かしら？

一体何があつたのかしら。

そう思い、外に出ようとすると慌てた様子の私のペットがこちらに向かっているのを讀んだ為、一旦扉から離れた。

ガチャッ！ドンッ！！

扉は案の定勢い良く開けられてそこから私のペット、火車である『お燐』こと『火焰

猫 燐』が入って来た。

あのまま扉を開けようとしてたらそのまま扉に吹き飛ばされるか殴られてたわね
.....

「たまたた大変です!?!さとり様!?!り、りりり龍が!」

「落ち着きなさいお燐、今読むから.....」

成る程、そういう事ね。」

通りでペット達がざわついていると思つたわ、龍は生命の中でも生態系のトップに立ち、信仰の対象にすらなる存在。

そしてそれはただで圧倒的な存在感を感じさせるといふ共通点がある。

そして何より.....

「この前の新聞に載っていた龍、『爵銀龍メル・ゼナ』が背中に勇儀乗せてこちらに向かっているねえ.....」

「どどどどど、どうしましょうさとり様!?!」

「落ち着きなさいって、とりあえずいつものようにお客様を出迎える準備をきなさい、あの龍は物理的に地霊殿に入るのは難しいから庭にテーブルとかを用意きなさい。」

あと勇儀がいるってことは多分いつものだからお酒とおつまみを一応用意しておきなさい.....はあ.....」

よりによって勇儀はとんでもないのつれてきたわね……まあ私も興味はあつたからちようどいいかも知れないわね。

私はまだ見ぬ龍に心を踊らせ、到着を待つ。

爵銀龍と覚妖怪

覚妖怪『古明地さとり』side

私はこれから来るであろう龍に乗った友人を迎えるため地霊殿の中庭まで行く。

あの龍の大きさでは地霊殿の中に入ることは出来ない為お燐に外から案内してもらおう予定となっている。

もう一人のペットの『お空』は………来たらず来たで確実に何かしらの騒ぎになりそうだから仕事を続けて貰っていた。

そして中庭に用意されたテーブルと椅子を見つける、今回もどうせ一緒に飲み来たとかそういう感じでしょうし、まあそれはいつものことなのだけれどなぜあの龍と一緒にのかしら？

疑問はいくつか浮かぶがこればかりは本人が来ないことにはわからないものも多いため椅子に座って用意された紅茶を飲みながら勇儀達を待つ。

それから数分後、お燐に案内された龍とその背中に乗った友人の勇儀が中庭に降り

立った。

『へえ、あれが新聞に載っていた爵銀龍メル・ゼナね。』

確かに貴族のような立ち振舞いにその白銀の鱗や甲殻、これはその2つ名に恥じぬ美しい龍ね。

それに複数の思考を首や腕の羽毛のような部分、それに尻尾の先端から感じる。

これはなにか共生してるのかしら?』

「よつこらしよつと、おーいさとりー!!!」

「はいはい、聞こえてるわ。」

久しぶりね勇儀、今日もいつものかしら?」

「お? 話が早いねえ、と言いたい所なんだがちよつと違うんだなこれが。」

『成る程ね、あの龍と話をしながら飲みたいし私と久しぶりに飲みたいから翻訳ついで一緒に飲みに来たって訳ね。』

「そう、まあ事情は分かったわ。」

それにそちらが爵銀龍メル・ゼナでよろしいようですね、初めまして、私の名はさとり、古明地さとりと申しますわ。

貴方は……そう、名を持たないようですね。

種族名でかまわないですか?

ええ、人間や竜人が付けた種族名ではあるがそれが『ワタシ』を差すことには変わり無いから、ですか？

……成る程貴方自身もワタシの力による翻訳を望んで来たようですね、それに私の心を覗く力は忌み嫌われやすいのですが貴方には興味しか無いようですね。

そうですね、私の事を初対面でこのように思ってくれる方はなかなか居ないので少々嬉しく感じてしまいます。」

「おーい、そろそろいいか？

お前さんらだけで話進められちまうとアタシが置いてかれちまうよ。」

「ふふふ、そうね。

そろそろ一緒に飲むとしましょうか。

メル・ゼナ、貴方は一緒に飲むのかしら？

あら、勇儀と何度か飲み比べ出来るくらいですか？

これは私が潰されるまで飲み会は続いてしまいそうですね。」

「メル・ゼナはいつも通りアタシの酒でいいかい？」

「コクリツ」

「私はさすがに貴女のお酒は強すぎるからうちにあるワインを持ってくるわ、お燐！」

「ははは、はい、さとり様！」

「ふふふ、そんな怖がらなくても大丈夫よ。」

倉から適当なワインとあとおつまみも持ってきて貰えるかしら？」

「か、かしこまりました。」

そして私はお隣に頼み、彼女はあわてながら地霊殿へと戻り、倉からワインや既に用意したおつまみを持ってこさせた。

「ごめんなさいね、うちのペットが。」

え？ええ、彼女は火車という元々猫の妖怪だったのだけれど力を持つ妖怪となることで人の姿を獲たのよ。

貴方にも出来るか？ああ、確かに貴方では大きすぎて入れない建物が殆どですものね。

そうですね、不可能ではないと思いますが力が強すぎるゆえにその力が貴方の龍としての姿に固定されてしまっているのでもし使えたとしてもその姿ではかなり大幅に弱体化してしまうかと。」

「お？メル・ゼナ人の姿になれるのか!？」

「正直少し難しいと思うわ、不可能ではないのだけれどあの子特有の力が龍としての姿以外を拒むようだから。」

「あー、あの龍属性ってやつかい」

「龍属性？まあ貴女の知るその深紅の雷とやらがそれでしようね、だからなるとしたら龍の要素をかなり大幅に残した人の形になるから少なくとも声とかは出せないと思うわ。」

「そっかー、そいつは残念だ。」

そして勇儀は酒を皿に移し、メル・ゼナに差し出す。

そしてメル・ゼナは器用に前足で受け取り、翼を前に持つて行き優雅に飲む。

確かにこれは吸血鬼より吸血鬼っぽいと天狗が言うわけね、あの子は取り繕ってもバレルくらいには優雅に出来ないもの。

「あー、そういうやつとの出会いなんだがね。まあお前さんならだいたい予想付いてると思うがあの新聞に釣られて私も地上に出て会いに行つたわけよ。」

「やっぱりね、それと地底の者が地上に干渉するのはあまり良いことではないのだけれど……………つて今更よね。」

まあ、良いわ。話の続きを……………つて負けた!?勇儀が!」

第三の目で心を読んだ時、勇儀はちょうどメル・ゼナとの戦いを思い出しており、その決着の瞬間をさとりは覗いてしまった。

勇儀は鬼の中でも山の四天王と呼ばれており、実力は確かなのだが……………。

その勇儀が負けるとは私も想定外だった。

「お？相変わらず話が早いねえ。ただまあメル・ゼナと話をしたいのもあったんだけど一番の目的としては

さとり、あんたの妹の件だけどこいつの力でなんとかなるかもよ？」

「なっ!?それはどういう………龍属性は力を封じる特性を持つ？飛行等も出来なくなってしまうが『く程度の能力』が使えなくなる!?でも一時的………」

もしそれが本当なのだとしたら継続的にこいしが龍属性を纏うことによりこいしが無意識に振り回される事はほぼ無くなる。そうなると龍属性を常に纏わせられるような道具が必要となるがそれを作れるような人物は限られる。

「……はあ、お酒の席で話すような軽い内容じゃないわよこれ、詳しくは明日話しましょう。今はとりあえず私もお酒が入っちゃってるからいろいろ聞かせてもらおうかしら？」

そうして私はこいしともう一度姉妹としてちゃんと過ごせることを夢見ながら勇儀達と飲み続けたのだった。

龍属性の有効活用

魔法の森『香霖堂』

覚妖怪であるさととり、鬼の勇儀と酒を飲み交わした翌日。

地底にて待ち合わせをした2人＋一体は龍属性を溜め込み、それを装着者に任意で纏わせ続けられるような魔道具を作れる人物を探すことにした。

紅魔館の紫モヤシや、いつも通り本を盗みに来たドスメラルーをしばいてから聞いてみたりもしたが魔道具専門というわけでもないのが難しいと言われた。しかしドスメラルーこと魔理沙から八卦炉を作った人物の事を（無理やり）聞き出し、魔法の森の香霖堂に訪れていた。

「……どうでしょうか？」

今回の一行は昨日と同じメンバーに加え、ドスメラルーと紫モヤシが同行していた。

「うーん、正直な所時間がかかりそうだ。何せ妖怪の妖力とも人間の霊力とも神の神通力とも違う力だ、解析する必要も出てくるからね。」

「やはり一度解析する必要はあるわよね、エネルギーの性質としては神の信仰による力

や地脈による力にも似ているけど。」

「やはり君もそう思うかい？ さとり君、君に頼みたいのだがメル・ゼナ君の翻訳をお願いしたい。」

メル・ゼナ君、君のこの力は何に由来するものなのか分かるだろうか」

メル・ゼナは自分の力の起源を聞かれ、少し悩む。生まれた頃には龍属性のエネルギーは備わっておらず、使えるようになったのは生まれて一年くらいした頃だった。

本能的に感じたものは強い力を持つモンスターを狩り、そして喰らう事で体の中に蓄積されるような感覚だった。

それによって今となつては自ら龍属性を生成するようになっていた。

「強いモンスターを喰らう事で体に蓄積される………と行った所でしようか？メル・ゼナも生まれた時から持っていたわけでは無いらしいです。」

「強いモンスターね………そのモンスターというのは何でも良いのかしら？」

「基本的にどれを狩って喰らっても蓄積されていたそうよ、ただ火や雷、水や氷を扱うモンスターを喰らう方が効率よく蓄積されたみたいね。それと喰らい続ける事により自分で生成出来るようになったそうよ。」

「恐らくなのだがこれは生命のエネルギーと属性エネルギーが凝縮された物なのじゃな

いだろうか？どれを喰らっても良く、何かしら属性器官を体内に持つモンスターのが効率が良いと言うことはさまざまな生命の全エネルギーを食物連鎖にて凝縮したと言ったところなのだろう。しかしなぜ1年程度でこの力を生成するのかが謎だ。」

そしてメル・ゼナ自身ですらも謎に思っていた事だったのだが急に現れた意外な人物によりその疑問は解消される。

「それはメル・ゼナが古龍種だからよ。」

古龍種という生き物は骨の内部構造すら共通しているのだけれど、体内にそれぞれに対応した宝玉を生成してその角で制御する特性があるの、ただ全員が龍属性に目覚めるわけでもないのよ？

生成された力を全て自身の強化や属性の強化につき込む古龍もいたりするもの。

まあ一部例外で生まれた頃から持つている場合もあるけどだいたいは生まれてから力を溜め込み、宝玉から生成を可能とするわ。

だからすぐに使えるようになるのよ。

まあ古龍以外で龍属性を生成する生き物も居ないわけでは無いのだけれどね。」

「貴女は！」

「スキマ妖怪!?!」

「紫じゃないか！」

「おや？来ていたのかい？」

「やあ、紫君。君も興味があつたのかい？」

そう、いきなり現れて話しかけた人物の正体はスキマBBなんでも無いです、スキマ妖怪だった。

「ええ、訳あつてメル・ゼナの事は監視していたのだけれど今回作れる物は幻想郷に大きく影響を与える事が出来るものですからね。協力させて貰いますわ。」

「大きく影響する？どういう事だい？」

「貴女達作ろうとしてその特性を知らながら気付かないの？」

能力を封じれると言うことは力のある存在を封じることすら出来ると言うこと。

つまりはそれを任意では無く常に発生させると言う条件にした場合はもうその妖怪や神、人間は大きく戦力が減少するのよ。」

「確かに………考えてみればその通りだ、これは対妖怪や神に対してとてつもない力を発揮するエネルギーな訳か」

「まあかろうじて弾幕とかは使えるみたいだからその辺は注意がいるけどね。」

とはいえ何かしら幻想郷に害を成す存在があつた場合その鎮圧用として用意しておいて損は無いものですからね、ただこれが一般に流通されてしまうと困るので作る事その物に制限をかけさせて頂戴。」

「ああ、さすがにこれを一般に流通させるのは不味すぎる。

確実に悪用する事態が多発するからね。

あの天狗には特に知られないようにしよう。」

「ああ、たしかに文なら確実に新聞に載せるだろうし天狗に持たせたらろくな事にならなそうだしな。」

「地底側としても同意見ね、これは作ったとしたらかなりしつかりした管理が必要になるわ。」

「とりあえず作るにしても数週間は必要になるだろうからメル・ゼナには定期的にここに訪れて貰つても良いだろうか？」

「それなら私も出る時に声をかけて貰いたいのだけど良いかしら？今回作る物は魔法使いとしては興味深いものだしね。」

こうして能力封印用の龍属性魔道具作りが始まる。

メル・ゼナがまだ見ぬさとの妹、こいしの為に……………

古龍と二人目の覚妖怪

メル・ゼナの龍属性を封じる魔道具を作るようになってから2週間程たった頃だった。

メル・ゼナはこれから毎日のように一緒になる、ある妖怪と出会ったのだった。

「やはり駄目ね、この素材でもメル・ゼナの龍属性に耐えられずに自壊してしまっているわ。」

「こつちの封印の護符を貼ったタイプのはどうだい？」

「そうね、試してみましょ。」

メル・ゼナ、悪いのだけれどこれに龍属性を注いで貰っても良いかしら？」

「グルルウ」

メル・ゼナはパチュリー達に指示され、護符を貼りまくった金属に龍属性を注ぎ込む。

しかし封印の護符が耐えきれないのか護符が焼かれて黒焦げになってしまっていた。

メル・ゼナの龍属性はどうやら金属等の素材と相性が悪いらしく、なかなか苦戦を強

いられていたのだった。

「メル・ゼナから自然に剥がれ落ちた鱗とかだと簡単には行くのだけれど硬すぎて加工が難しいのよね、特に細かい陣を刻む必要があるから正確に加工する技術も必要になるし。」

「そうだね、僕にそれを可能とするくらい物理的な力があれば良いのだけれど……」

いや、どのみち道具側が持たないか。」

そう、メル・ゼナの素材は余りにも硬すぎたのだ、ハンターの世界ではメル・ゼナはマスターランクしか存在しないのもあり、生半可な古龍の武器ではまともな傷を負わせることすら難しい程に。

そして目の前の空間に亀裂が入り、スキマが開く。

八雲紫が来たようだ。

「貴女達くメル・ゼナのいた世界から良さそうなのを持ってきたわよ。」

「それは？」

八雲紫が手にしていたのは銀色の中に紅い色がある美しい甲殻だった。

「向こうの世界から余って放置されていた素材をちよこつと貰ってきたのだけれどね。」

『奇しき赫耀のバルファルク』と言う特殊個体となった天彗龍と呼ばれる古龍の翼の一部よ。

この翼には面白い特徴があつてね、天彗龍は生まれた頃から龍属性を持ち、翼からそれを放出する事で攻撃に使つたり、高速飛行したりするのだけれど『奇しき赫耀』という特殊個体はその生成量に異常をきたして翼にも異常な量の龍属性エネルギーが溜め込まれているの、それが過剰に入ることによって翼は紅く発光して弱点になる程柔らかくなるの。どう？ピツタリじゃない？」

「そんな完璧な素材あるなら早く出さないよ！」

「そんな簡単に見つかる訳無いじゃない！そもそも特殊個体で全くと言って良い程見つからない個体な上に天彗龍は個体数その物が極端に少ないのだからそんな見つからないわよ！」

この素材探すのだから大変で辺境まで行つてそれと戦つていたハンターを見つけてようやくだったのだから。

そもそもそれを見つけた事その物が奇跡よ……」

しかし素材としての条件はピツタリであり、これを素材にして作ることになる………が

「メル・ゼナにはこれに過剰なくらいの龍属性エネルギーを注いで貰う必要があるが大丈夫かい？」

メル・ゼナはそこまで龍属性エネルギーが多い訳ではない。

何故なら龍属性を使った戦闘ではなく身体能力を活かした戦闘がメインになるからだ。

だからこそ生成量も日頃から使うわけでも無いためせいぜいが威力がそこそこのブレスを吐ける程度しかないのだ。

しかしバルファルクは生まれた頃から持つており、攻撃にも移動にも常日頃から龍属性エネルギーを使うため、生成量が尋常じゃなく多い、それを受けきつて自壊しないこの素材のキャパシティは正直かなりのものであった。

「参ったね、まさかメル・ゼナの龍属性エネルギー量では軽く発光する程度になつてしまふとは。これはエネルギーが霧散しないようにしてまたメル・ゼナにエネルギーが溜まり次第注いで貰う必要があるかな？」

「そうね、とりあえずは一度帰つて私も調べ直してくるわ。」

メル・ゼナも疲れたでしょう？ごめんなさいね。

さあ、帰つて咲夜におやつでも作つて貰いましょう。」

「グルラウ？」

メル・ゼナはそれよりもパチュリーを心配するように唸る、パチュリーは調べ物等でここしばらく徹夜続きなのだ。

「ええ、大丈夫よ。こんな面白いものがあるのだもの、この程度で倒れてられないわ。」

しかしパチュリーにとっては割といつも通りだったのだ。

「それではまた明日」

「ええ、また明日ね」

そして紅魔館に戻った後、頭部に違和感を感じる。

やけに重いような？ 頭の上になにかが乗っているような気がするのだ。

そう重い頭を下におろし、翼で確認すると何かと当たったような感覚を感じる。

すぐに両方の翼を使って掴み、それを地面におろして見てみるが何も無い、翼で掴んでいる感覚はあるのに見えないのだ。

そして気配すらも感じない。メル・ゼナはますます疑問に思い、首を傾げる。

「貴方私の事が分かるの？」

「グル？」

急に声が出したと思ったたならにも見えなかったそこにいきなり人が現れたように見えたが気配が妖怪のそれだった為にそういう妖怪なのだと理解した。

しかしその妖怪の持つある部分からこの妖怪の正体を悟る

閉じられた第三の目……………

「あ、自己紹介がまだだったね。

「私の名前は『古明地こいし』、さとりおねーちゃんの妹だよ！」
「……グルア!?!」

さすがのメル・ゼナも冷静さを失って驚いた。

遊ばれるメル・ゼナ

今、メル・ゼナはだいぶ困った状況になっていた。

目の前にいるのは救おうとして色々と龍属性の研究の理由になっているさとりの妹である『古明地こいし』。

そして最近知った事でレミリアに妹がいたらしく、その妹フランこと『フランドール・スカレット』。

そして今このふたりが一緒になってメル・ゼナで遊んでいた………

「ねえねえ、なんで首になにか蛭みたいなの付いてるの？」

「面白〜い！きゅつとしてもぜんぜん握りつぶせない！なにこれ〜♪」

そう、実はこれ本来ならかなりヤバい状況なのだがメル・ゼナ

は古龍種なのもあるのかフランの能力でも握りつぶせない程肉体の結合が強いらしい。

とはいえ完全という訳ではなく、全力で握られてしまうと鱗に軽く罅が入る。

一応自然に治り、生え変わるのだが痛いものは痛い。

だが巢を提供してくれている恩人の妹に酷いことは出来ないため、メル・ゼナとしてはなにも出来ない状態だった。

メル・ゼナは助けを求めように周囲に顔を向けるが全員微笑ましい光景をみているかのように笑っており、とても助けてくれなさそうだった。

メル・ゼナはどうにもならぬような状況に軽く溜め息を吐きそうになっていた。

「おはようメル・ゼナ、今日もご苦労様ね。」

そして今日も香霖堂に向かう時間となりパチュリーが庭に出てきた。

「さあ妹さま、それにこいしもメル・ゼナから離れなさい。」

これから私達は香霖堂に向かう時間だから遊ぶのは帰ってきてからね。」

「えー！もう行っちゃうのー？」

「そうだよパチュリー！もっとアソびたいのにー！」

「はあ、妹さま。また狂気が軽く漏れてますよ？」

「あ、ごめんなさい。」

「こいしも、貴女の為に今メル・ゼナと貴女のお姉さんが動いているのだから邪魔しちゃ駄目よ。」

「はーい……………」

「さて、向かいましょうか。」

正直この時のメル・ゼナとしては助かったと思っていた。

しかしこの時誰も気付いていなかった……………

こいしがメル・ゼナの首に引っ付いてたキュリアを一匹手に持っていた事に

『宿主———!!!』

放置されたキュリアはしばらくすると元気が無くなっていたのだった。

……………なにか首に違和感を感じるがなんだろう？

「あら？どうしたのメル・ゼナ？」

「これは……………なにか首に違和感を感じているようですね。なにかが足りてないようなそんな違和感が」

「首……………足りない……………まさか……………」

「あー、そのようです。」

今キュリア達の心を覗いて私も気付きました。キュリアが一匹足りません……………そ

れもこいしに捕まってるようです。あの子がほんとすみません……………」

「……………グルラー」

「諦めないでください、一応共生関係にあるのでしょう?」

「……………グル」

「その微妙な反応は……………そういう事ですか、まあ貴方が良いなら私もよかったです。」

「とりあえず話が済んだなら龍属性を注いで貰っても良いかしら?」

「貴女も一応話に混ぜていたはずですが……………どうやら聞きながら準備していたようですね。ありがとうございます。」

そしてメル・ゼナはパチュリーがいつの間にか用意していた奇しき赫耀のバルファルクの翼の一部に龍属性を注ぐ。

そして翼の一部を深紅の光を強く放ち、柔らかくなっていた。

「ようやくか、まさか10日もかかるとは、バルファルクという龍の異常さがよく分かるよ。」

とりあえずここまで柔らかくなればあとは僕にも加工が楽に出来る。

しばらく工房に籠って作業をするからまた明日様子を見て貰っても良いだろうか?」

「ええ、こればかりはかなり繊細な作業ですから貴方に任せます。霖之助さん」

あの日から毎日香霖堂に通い続けて10日、ようやく加工出来るようになったと聞き、メル・ゼナは軽く疲れた様子でぐったりしていた。

元々生成量が少なかったのもあり、毎日注ぎ続けて軽く疲れていたようだ。

「お疲れ様、メル・ゼナ」

「お疲れ様です、しばらくゆっくり休んでいてください。

どうやら少し無茶して注いでくれていましたから。」

メル・ゼナはさとの言うとおりに、実際注ぐ時に生成しながら注いでいたため、軽く体に負荷がかかっていた。

しかしメル・ゼナとしては古龍としての知識に他の古龍の存在もあつた為に時間がかかるのを分かりきっており、さつさと終わらせる為に無理をしていた節があつた。

しかし実際のところ短縮されたのは4日であり、苦勞に見合うかと言われると割となんとも言えない為あまり考えないようにしたのだった。

そして紅魔館に帰還した頃、かなり衰弱した様子のキュリアが首に戻っていたのでい

つもの倍以上のエネルギーを注いでやった。

そして今夜もあのE X娘二人組みに遊ばれ続ける為眠れないメル・ゼナであったが、咲夜の説得によりしばらくは眠りにつけそうになった為、あとでなにか恩を返さなければと思うのだった。

無意識に見つける召喚魔法

動かない大図書館。パチユリー（紫モヤシ） side

・・・困ったわね。

実はメル・ゼナに関する資料を探していたのだが、メル・ゼナを召喚したあの召喚書と同じ作者の物と思われる召喚書を複数発見した。

とはいえまたメル・ゼナのようなバランスブレイカーを何匹も召喚されてはこちらとしても困るために別室に一冊ずつ封印処理を施していたのだが、最後の1冊を封印した所である事に気が付いてしまった。

『足りない………一つずつタイトルは確認したから、無くなってるのは氷狼竜の書と剛纏獣の書の2冊。』

小悪魔には今日はメル・ゼナの世話を任せているからあるとするならあの白黒が今日侵入した時に持ち去って言ったかあのさよりの妹かの二択でしょうね。』

実は封印処理を行っている最中に一度あの白黒がこの図書館に侵入しており、私は封印作業で動けなかった為、小悪魔にメル・ゼナが起きるまでの時間稼ぎをお願いしていた。

魔理沙の弾幕はいちいち威力も高く派手なので小悪魔が相手でも弾幕ごっこで時間を稼いでくれればあとはメル・ゼナが（不機嫌そうに）起きてしばき倒してくれる。

ただ起こされてからしばらくは寝付きが悪いらしく割とイラついている為小悪魔にはそのケアをいつもお願いしていたのだった。

私としても割と申し訳ないとは思っていたのだけれどキュリアを使って小悪魔と遊んでいた、逆に毛繕いのような事もしていた為、小悪魔に対して悪印象は持っていないようだと安心していた。

ただおそらく小悪魔が時間稼ぎをしてメル・ゼナしばらく前に盗んでいたのだろう。毎回回手口が巧妙になるのはなんの嫌がらせだろうか。

とはいえ二冊もメル・ゼナが見逃すとも思えないし考えられるのは二人共なのでしようね……

はあ……八雲紫にまた小言を言われるわね。

そしてパチュリーの予想は当たっており、こいしは無意識で本を持ち去っていた。

これは本人の意思とは関係ないので、あまり怒るに怒れない。まだ情状酌量の余地は十分にあるといえる、素直に謝り、返してくれるようなら咎めずに済ますべきだろう。

しかしあのドスメラルーは常習犯な上に二回目なのでギルテイ、今度メル・ゼナに死にかけてなるギリギリまで血を吸って貰おうと決意したのだった。

地霊殿

「・・・あと少しね、ようやくあの子ともちちゃんと話しをしたり、姉妹として接する事が出来る時間が増えるわ。」

もちろんあの子の事は大事に思っているし仲も十分に良好ではある。

しかし心を見ることが出来ず、時々不安に思う時があるし、日によつては一日も帰らない事だつてあつた。

しかし彼女の為を思つていうのもあるのだが。

彼女は自分の意思とは関係なくなにかを持ってきてしまう場合があり、それを繰り返してしまっているのだ。

とはいえだ、ちゃんと取ってしまつたら謝りに行つて返している。

その為周りの人たちからは受け入れて貰えていると思う。しかし今回はまた謝りに行こうとした直前、試しに開いていた召喚書だつたと思われる本をたまたま来ていた友人の勇儀の連れであるもう一人の鬼、『伊吹 萃香』が勝手に起動してしまう。

そして召喚書という事でこれが紅魔館の書物である事がほぼ分かつたのだがその魔法陣から全身にすさまじく硬い甲殻を纏つたゴリラのような妖怪、一見西洋の魔術で作られるごおれむでしたか？あれに見える存在が現れていた。

はあ、パチュリーさんになんて謝ろうか。

そして勝手に起動したのもあり、萃香は勇儀にしばかれていた。

その後喧嘩となつたのだがあのゴリラの妖怪が二人を止めて地面に叩き付けていた、どうやら心を覗いて見たら困惑こそしているがこれが事故であるとかちゃんと理解しており、原因であるふたりが喧嘩に発展していた為に止めてくれたようだ。

それにどうやら翻訳の術がかけられているようでこちらの言葉を理解出来ていたのが唯一の救いだつた。

とりあえず私達は萃香をあのゴリラの妖怪に引きずってもらい、紅魔館に謝罪に向かうのだつた。

一方もう一冊の召喚書はと言うと妖怪の山付近にて魔理沙が戦利品を試そうと魔力を流していた所で追いかけてきた真つ黒な本気状態のメル・ゼナに追い付かれて撃墜され、中途半端に起動した状態であるとある白狼天狗な元に吹き飛ばされたいた。

「いたたたた．．．一体なんなのですかもう。」

「ってこの本は．．．」

そう、吹き飛ばされた召喚書の『犬走 椀』の元にぶつかっていた．．．それも補強された本の角が勢いよく。

「って本が光って!?!ワオンっ!?!」

そして召喚魔法が中途半端に起動され、その光に椀は目をつぶる。

そして目の前に現れていたのは．．．

「わんっ!」

期限良さそうに尻尾を振り、毛は一切無いが全身が蒼色の甲殻に覆われた小さな子供の狼だった。

「
へっ
!？」

とても頭の痛い問題

〈紅魔館〉

今日もいつも通りに寝ながらフランに遊ばれていたメル・ゼナだが、今日はメル・ゼナが元いた世界の知り合いのような気配を感じた為に割と早めに起きていた。

辺りを飛んで見渡して見ると同じ生息域にいたガランゴルト、それと同じ個体と思われる存在がこちらに向かっていた。

そしてそれは地霊殿のメンバー達と縄でぐるぐる巻きにされた子供のような鬼を引きずりながら来たのだった。

そして今回はパチュリーに用があつたようでパチュリーを呼ぶのだがどうやら頭を抱え始めたのだった……。

「はあ……やつぱりこうなつたかあ……そうなると八雲 紫が今頃慌ててそうね……」
「申し訳ありません。こちらとしてはすぐにでもこいしと一緒に来て返すつもりだったのですが、鬼の一人である萃香が勝手に起動してしまい止められませんでした。」

途中で止めてしまうとどんな誤作動を起こすか分かったものではないので。」

「ええ、対応としてはそれで正解よ。」

むしろその対応で助かったわ、これで誤作動を起こして呼び出される対象になにかあったら大変なもの。」

そうするとガランゴルトに引きずられていた簧巻きにされた萃香から声がある、

「おーい、私はいつまで簧巻きにされてりやいいんだい？」

そうすると勇儀含め全員が呆れていた。

「ギルティ（パチュリー）」

「お前ももつと反省しろ。」

　　「まったく酒が飲みたいのにこんな空気じゃ不味くなっちゃう。（勇儀）」

「ブンブンブンツ（簧巻きの縄を振り回すガランゴルト）」

「ぎやあああああああああああああああ……（萃香）」

「ゴルトさん、そのまましばらく振り回しておいてください。（小五口rげふんげふん、さとり）」

「……（無言でキュリアを待機させるメル・ゼナ）」

「たのしそー！（フラン）」

「ねー！私にもー！（いーし）」

そして最終的に数分振り回された後、能力で逃げようとしていたのでガランゴルムにメル・ゼナの正面に投げて貰い、メル・ゼナの龍属性ブレスによつてしばかれながら逃げ道を封じられていた萃香であつた。

「それでにしてもまさかメル・ゼナと同じ王域三公、無垢なる獣『剛纏獣ガランゴルム』召喚書に載っている歌によれば

『無垢なるもの 無垢なる欲望に従い佇む無垢

一見において 無垢としかとらえず

その欲望を見落とすことあれば

無垢なる力 無垢なる怒りに見えることとなろう

より強き力 力の赴くままに増す怒り

触れてしまえば 命を賭すほどの

思い知るには 手遅れの

その欲望に障ることがあつてはならない

く無垢なる巨影く』とあるわ。」

「うーん、要はこれはこいつの怒りに触れるなつて事を伝えたいのかい？」

「それもあるのでしょうが、穏やかそうな見た目に騙されず、不用意に触れることなかれという教訓といった所でしようか？」

「それと厄介な事に盗まれたもう一冊の書の行方がまだ分からないのよ、どうやら魔理沙は落としたみたいだし。

その書は氷狼竜の書と呼ばれるのだけれど、その書によれば

『漏れ出でる光はかすかに

闇の中 往復は続く

地を踏みしめ 歩みを止むことなく

その身の全てを研ぎ澄まし

いよいよだ 雲を分け月は姿を表し

地を山を 銀光が降り注ぐ

踊り 駆け出し 湧き出でる力に震え

歓喜の咆哮に 真なる姿をさらけ出す

く月光賛歌く』

とあるわね。」

「絵を見る限りおそらくこれは習性を歌にしたものでしょうか？月の光を浴びるため山の頂上に上り、狼から氷を生やした人狼へと変貌する。

そのように見えます。」

「氷狼竜ねえ、おや？メル・ゼナはたしか爵銀龍だったよね、竜の字が違いやしないか？」

「それなのだけどもメル・ゼナの世界だと古龍種と他の竜種で呼び方を分けているそうよ。その為この『氷狼竜ルナガロン』は古龍種ではなく牙竜種という分類らしいわ、だからメル・ゼナ程の脅威は無いのだけれどガランゴルドとあわせて王域三公として恐れられていたみたいなのよね。」

「なる程ねえ、とはいえ呼び出されたのがまたメル・ゼナみたいな古龍じゃなくて良かったな。」

そつちがまた出たら洒落にならない、龍属性貰えば私達じゃ何も出来んからな。」

「そつちに関してはそんなに心配することはないわ。龍属性をうちに秘める古龍は多いけどそれを扱う事の出来る古龍は数少ないみたいだし、ただ懸念としては魔理沙なのだけれどどうやら落とす時に中途半端に起動した状態で落としたりしないのよ、だから呼び出されたルナガロンに何が起きてるか予想がつかないわ。」

今はメル・ゼナのキュリアを頼って探させている所だけど・・・

一旦キュリアが見ている光景を写してみましようか」

探索に出ていたキュリア視点

「わんっ！わんわん！わん！わん！へっへっへっへっへっへっ！」

「あー、そんなの口にしようとしちゃダメですよ！待ってください！」

「！？！？」

仲間のキュリアが目の前で子供のルナガロンに追いかけてまわされている。

宿主よ、助けて・・・ぐふっ

映像が途切れました。

氷狼竜と義理の母親

く妖怪の山く

天狗や河童をメインにその他組織を持つ妖怪や数多の山の神が生息域としており、排他的な縄張りとしている。

その為許可なく侵入した者は殺すか追い出すなりして排除するのだがそこに一匹の狼と竜の特徴を持つ赤子が現れてしまった。

本来なら排除するべきなのだがさすがに見捨てるのも可哀想なので第一発見者である『犬走 権』は自宅についで連れてきてしまっていた。

なお、ルナガロンの幼体に遊ばれていたキュリアは山の外に無事放された。

「わんっ！」

「うーん、犬や狼として見ると結構な大型に分類出来そうなのだけれど、毛が一切無い上に鱗や甲殻に全身覆われているし……そもそも狼なのかしらこの子は？」

そしてルナガロンの扱いに困っていた権の元へ友人の河童である『河城 にとり』がやってきていた。

そこ、お値段異常言わない。

「おや？ 椀、さつきから家からいぬの声のような鳴き声がしていた様子だったしペットを飼いだめたのかい？」

「あ、にとり。それが違うのよ、空から妙な本みたいなのが降ってきて頭に角が直撃したんだけど」

それがいきなり光ったと思ったらこの子が居たのよ。」

「それってつまり本から呼び出されたって訳かい？」

「多分そうだと思う、でも本を呼んでみても何かの歌と多分この子の親かなにかの絵に光った魔法陣しかなくて、残りのページも多分この子の事が書かれてるみたいなんだからどこの文字がよく分からないのよ。」

「はえー、そいつは妙な話だね。」

呼び出しておいて帰すつもりがないって訳かい。

それも話聞く限り上から降ってきたってことは誰かが使おうとして落としたりして訳かい？ これまた迷惑な話だねえ。」

「今日山に白黒が侵入して撃ち落されてたから多分あいつのだと思うけど、この子私を親だと思っているのか物凄く懐いてて私としても追い出したりしたくないのよ。」

「うーん、まあ最近の天狗は排他的な空気があの巫女が原因で薄れてきてるし説得すれ

ばなんとかなるんじゃないかい？」

そう、以前は基本的に問答無用で殺していたのもあったのでさすがに見過ごせないと一度霊夢に組織ごとボコされていた為、今の天狗は割と温厚になってきている。

過激派が居ないわけではないがごく少数となっており、ちゃんと話せば上も聞いてくれる為職場としてもよくなっていた。

とはいえ侵入者に厳しいのも事実な為どうするか悩んでいたのだが、結局権は上に相談することにしたのだった。

権の上司の大天狗の屋敷

天狗には階級があり

下から哨戒をメインの仕事とする『哨戒天狗』

それを率いる『白狼天狗』

そしてその上に高い飛行能力を持ち、情報収集を目的に活動する『カラス天狗』

さらにそれらを統括する『大天狗』

最後に全ての天狗の長である『天魔』
となっている。

椀は白狼天狗ではあるのだがその能力を買われ、扱いとしてはカラス天狗と同じ権限を持ち合わせていた為、今回の相談は大天狗となったのだ。

そして・・・

「だめだ」

「う、やっぱり」

「きゅん」

「うえー？ケチ臭いなー！」

何故かにとりも付いてきたが大天狗様にご相談に伺った所速攻でダメ出しされてしまいました。

まあ分かってはいたのですけどね。

所が大天狗様が意外な話をし始めた。

「まあ本来ならそういう所なんだがな？」

「はい？」

「わふっ？」

「へ？」

「実を言うときさつき天魔様にこちらに来て頂いていたのだが帰る直前にお前達が来てどうやらその狼？みたいなやつに少し興味を持ったそうだな、悪いんだが今回の件は一度天魔様に話してみてくれ、私としては許可しても良いのだがその権限を持ち合わせてはいないからな。さすがにこれを許可するとなると例外になってしまうから大天狗同士で本来なら話し合う必要がある内容なんだ。」

「な、なるほど。しかし天魔様に直接ですか!？」

「わふふっ?！」

「ああ、まあ緊張するだろうがあの方が許可を出すなら基本的に誰も文句は言えんからな。」

まあ権には私も良く仕事で世話になっっている。

ちよつとしたお礼みたいな物さ。

さて、私としてもちよつとしたお願いなのだが」

「はい、なんででしょうか?」

「ちよつとその子に触らせて貰えないかい?」

実は私はこういうかわいい動物が大好きだな。

私としても触ってみたかったのだよ。

ああ、もちろん断ってくれても構わないよ。」

「どうやら大天狗様もこの子の魅力にやられたらしい。

人生なにかあるかわからないものだ。

そして大天狗様にだっこされて頭を撫でられたかなりの上機子な様子がかがえた。

「ナゲナゲナゲナゲナゲナゲナゲ」

「わふっわふふふわんっ!」

わ・・・わ・・・わ・・・わおおおおおおん?!?!?」

「おや? やりすぎたかい、すつかりぐだつてしまつたか。」

ルナガロンが撫でられ過ぎて遠吠えをし、ぐったりした頃、部屋に誰かが入ってきていた。

「全くあんたは相変わらずだね」

それはとても立派な翼に法螺貝による笛を携え、豪華な装束に身を包む黒髪の大天狗の女性だった。

「これは天魔様、お待たせして申し訳ない。」

「よせ。これ私が勝手にしたことだ、お主らを咎めるつもりは毛頭ない。

さて、そこ白狼天狗よ。」

「は、はい!」

「その珍妙な妖怪の親として育ててみる気はないかい?」

「わ・・・わふっ？」
「はい・・・つて、はい!？」

子育てコンピ

妖怪の山々大天狗邸々

私は天魔様からあの子の義理の母親として育ててみないかという提案を受けかなり驚いていた。

なおルナガロンはぐったりはしていたが首を傾げている。

「まあ落ち着け、理由も説明する。」

「は、はい……」

「まあ本来なら許可出来ない類いなんだが今回はテストケースだ。」

「テストケースですか？」

「そうだ、私達の排他的な性質は案外不便な点が多々存在していてな。」

その中でも排他的故に他の妖怪との連携の取りにくさもあるんだ。

だが身内として育てる分にはそこまで排他する必要はないから訓練としても良いし天狗以外の妖怪と自身の違いを比べる良いチャンスにもなるんだ。」

「な、なるほど?」

「まあそれにこれは私の勤なんだがこの子はかなり強くなるんじゃないかと思つていな。」

「この子がですか?」

「ああ、この子からは妖力も霊力を神通力も感じないつまりは正確には妖怪ではない。

だがいてつくような冷たい力を感じるんだ。

それにお前さんが拾った書物、あれをちらつと見せて貰ったがあれに描かれている事が本当ならおそらくそいつはかなりの脅威として君臨していたんじゃないか?」

「あれを読むことが出来たのかい?」

「いや、断片的にしか読めん。あれは八雲のマヨヒガくらいでしか見たことない文字でな、単語をいくつか教えて貰った程度の知識でしかない。

だがその単語が本当ならばこいつは狼ではなくおそらく竜の一種だろう」

「竜ですか!」

そして私がこの子の正体に驚きを隠せずにしたその頃、どこからともなく声が響く

「あら?良く分かったわね。

さすがは天魔、ちよつと教えた程度なのに良くそこまで分かるものね。」

「八雲か、やはりこれはお前関係の物か?」

「よいしょつと、正確にはこれは紅魔館に関係する代物ね、魔理沙つたらこの前のやらかしでとんでもないことしでかしたのにまだ懲りてなかったみたいね、しかも中途半端に召喚したせいで子供を呼び出しちゃって。」

「成る程、例のメル・ゼナとやらに関わる存在な訳か。」

「察しが良いわね、まあとりあえずとしては赤子同然の幼体が呼び出されたみたいだしそこまで問題は無さそうね。」

「ああ、待った。この子が紅魔館の書物から呼び出された子なら一度紅魔館に出向いた方が良いだろうか？」

確かに紅魔館の子なのだとしたら返さなければならぬ、だが私はこの子とあまり離れたくない。

そう思い、私はこの子を優しくぎゅつと抱き締める。

「っ？きゅーん、ペロペロ」

この子に私の心配が伝わってしまったのか心配するような鳴き声を出して私の顔を舐めてくる。

「ああ、それなら心配要らないわよ。」

紅魔館はもう把握してるし私は念のため様子を見てきて排除されるようなら連れ帰って欲しいとしか言われてないのだから。」

「なに？」

「ふえ？」

「わふ？」

「へ？」

「つまりはその子と一緒にいても良いわよってこと。これが成体だったならかなり別問題だったのだけれど。その白狼天狗を親だと認識してるみたいだしね。とりあえずは問題無いわ。」

「はあ、良かったあ」

「わん！」

「まあそれでもこの子の種族の名前が分からないんじゃないや名前も付けにくいでしょうしそれだけは教えてあげるわ。」

この竜の名前はルナガロン、『氷狼竜ルナガロン』よ。

メル・ゼナの世界で牙竜種に分類される生き物よ。

成体については後であの本を翻訳したの持っていくからそれを読んでおいて頂戴。」

「良かったね、権」

「うん、にとり。」

「ふう、まあそれで良いならこちらとしても責任もって育てるだけだしそこまで問題は

「無さそうだね。」

「ただまあ種族としては危険度が高いからしつかり教育しておきなさい。私からはそれだけよ。」

「はい！」

「わふ！」

「ルナガロンまで返事してるよ、もしかして私達の言葉が分かっているのかねえ」

確かにこの子はまるで会話を理解してようなタイミングで鳴き声を出したりする事が多いけどそうなのかな。

「あら？良く分かったわね、あの召喚書には翻訳の魔法も刻まれているからこの子はちゃんと言葉を理解しているわよ？」

「へ？」

「ぬ、そうなると私達の会話も」

「ええ、理解していたでしょうね。」

まあ丸く収まったのだから良いじゃない。」

「まあそうなのだがな、そうなると少し天狗の中で話し合って本格的に仲間育ててみたいな。」

「そうね、私としても成体はともかく幼体が妖怪達に育てられた場合が気になるし・・・」

その河童、ちょうどいいわ。」

そして八雲紫はにとりを呼び出して一枚の紙を取り出す。

「へ？私かい？」

「はいこれ、妖力を入れて呼び出して」

「えっちよっ!？」

はあ、これで良いのかい？」

にとりは困惑しながらも渡された紙に妖力を注ぎ、その紙が怪しく輝き、目の前に小さい影が現れる。

「ケロツ」

・・・つて河童？でも四つ足？

「おや？同胞かい？でもなんか違うね。」

「お？年齢指定で呼び出したの成功ね。」

「この子は一体?」

「この子の種族はヨツミワドウ、『河童蛙ヨツミワドウ』よ、向こうでは大型の生物だから育てたら大きくなるわよ」

「へえ、って私が育てるのかい!」

「河童同士仲良くね。それじゃあね。」

「あつちよっ!」

そして八雲紫は消えてしまう。

にとり、一緒に子育て頑張ろっか

八雲 紫は胃潰瘍

メル・ゼナ召喚時のゆかりん

くマヨヒガく

私はこの間たまたま見つけたモンスターと人が共存する世界の視察に（誰にも言わず）行っており、一月程藍に結界の管理を任せて幻想郷に取り入れられる要素がないか見に行っていた。

今日はその視察の終わりで疲れがあるけれどスキマを使って自宅に帰宅したのだった。

「ただいまく、藍く？居ないのく？」

「紫様!? また何処に行つてらしたのですか!？」

「ごめんね、ちよつと気になる所があったから調べに行つてたのよ。」

「はあ、せめて一言声をかけてください。」

いきなり朝起きたら『一月程留守にするからその間結界のことよろしくね♪』と置き手紙されてもこちらが困ります!」

あはははは、ごめんって藍。お土産もあるからそれで許して頂戴。」

「それで誤魔化されると思つたら大間違いですよ紫様! だいたい貴女はいつもいつも!」

「あー、ごめんなさい藍。」

明日聞くから今は休ませて頂戴、割と本気で疲れてるのよ。」

「何があつたのですか?」

そして藍に向こうでやっていた事を軽く話す。

「それで向こうの原生生物に凄い追い回されていてね。スキマを使って逃げ続けていたのだけれど凄い感知能力しててなかなか振りきれなかったのよ。」

本当ならもう数日くらい長く視察するつもりだったのだけれどさすがにマヨヒガに逃げ込んだのよ。」

「そこまで逃げる程その原生生物の感知能力は凄まじいのですか?」

「それもあるのだけれど感知に使われている鱗粉に生き物の免疫を大幅に下げたりとかかなりの悪影響があつて私もなんとか耐えられたのだけれど能力を使いにくくされてしまったのよ。」

まあ今日中に治るから問題無いのだけれどね。」

とはいえ今日はホントに疲れたわ……………」

あの古龍しつこすぎるわよ……………」

もつと下調べしておくべきだったのかしらね。

「そういう事情なら私としても何も言いません、とはいえ紫様には言いたいこともあるので明日はちゃんと説教させて頂きますからね？」

「わかったわ。とりあえず今日はもう寝かせて頂戴。」

そういうえば橙はどうしているのかしら？」

「今日は人里の子供達と遊んで疲れたようで今は昼寝をしています。」

「そう、良かったわ。」

それじゃおやすみなさい藍。」

「はい、おやすみなさいませ。」

「紫様！起きてください紫様！緊急事態です！」

そして深夜の時間帯、慌てている藍に紫はぐっすり眠っていた中起こされる。

「ふああ、もう何よ藍、もう朝なの？」

「寝ぼけている場合ではありません、結界をすり抜けられて強大な力を持つ存在が幻想郷に入り込んだのを感じしました。」

「ほえ？結界をすり抜けた？どういう………つ！？」

「なんでアレがここにいるのよ!？」

そう、確かに幻想郷に今まで感知した事がない強大な存在が増えているのは寝ぼけていてもわかったのだがいくらなんでも古龍がこつちに現れているのよ!?!さすがに洒落にならない事態にこちらも焦る。

「はあ、ここでうだうだしていても仕方ないわね。

紅魔館にいくわよ。」

そして紅魔館から帰った時、私は冷蔵庫から酒をだす。

「んぐっんぐっんぐっ！こんなの飲まなきゃやってられないわよお！」

毎日毎日結界の微調整に妖怪の問題の解決！

新しく幻想郷に取り入れられないか違う世界行ったら私でも勝てるか怪しい化物に追いかけて回されて！

しかも今度はあの白黒、いえドスメラルーがやらかしてたった一匹でバランスを崩壊させかねない龍属性を使う古龍呼び出すし！

とりあえず今日は飲むわよ！」

「紫様、あのメル・ゼナなる龍はそこまでの強さなのですか？」

「種族としての力だけでみれば鬼以上大妖怪ギリギリ未満よ、ただ龍属性込みで考えれば大妖怪でも勝てるかだいぶ怪しいわ。」

「そこまでですか!?!龍属性とは一体なんなのですか？」

「速い話し世界が持つ生命のエネルギーそのものよ、ちよつとした封印効果もあるから一度やられれば多分戦いにもならないわ。」

しかも地味に土地に強い影響もある場合があるから何かあればいちいち確認しにいく必要があるわ。」

とはいえメル・ゼナはそこまで影響を与えるほどの龍属性を使えないからせいぜいが数分間の能力封印でしょうね。」

はあ……………今日は召喚の影響で乱れた結界の修復に3時間もかかったわ……………しかも深夜帯とか勘弁して頂戴よ……………

ルナガロン+ガランゴルド同時召喚された日

昨日の私は深夜明けですがに疲れて夜まで眠ってしまい、なかなか眠れないまま朝を迎えていたのだが……………

「紫様、大変申し訳にくいのですが……………また召喚が起きました、今度は二件です。」
「もういやあああああああああああああああああああああ」

そして結界の修復作業に1日を費やす徹めになった。

結局私としてはもういつそ少しずつ受け入れてみたら良いのではという結論となり、妖怪の山を実験場として妖怪との共存から試すことにしたのだが……………

ある日あまりにも胃の痛みが酷いので永遠邸で見てもらったら……………

「胃潰瘍ね、疲れてたりストレス溜まってるのは昔からの付き合いだから分かるけども
う少し休みなさいな。」

「グフツ（吐血）」

結果として仕事はしばらくの間ドクターストップを貰ったのだった。

モンスター達の破壊力（萌）

く 椀の家にてく

結局あのスキマ妖怪によって呼び出されたヨツミワドウという河童みたいな蛙をにとりが育てることになった。

とりあえずはモンスター？を育てる者同士一緒に家で良く遊ばせることになった。

「クエ？ゴケエエエ？」

「わふ？わふわふ？」

ヨツミワドウはさつき水を飲んだとき大きく膨れ上がり、ボールのようにゴロゴロと転がっている。

そしてその上にはルナガロンが乗っかっており、ヨツミワドウが転がるとルナガロンも滑り落ちてるがすぐに乗っかって転がるを繰り返している。

かわいい。

「やばい鼻血が……………」

「にとり……可愛いのは分かるけど私の家に鼻血落とさないでください。

可愛いのは凄く分かりますけど。」

「わふわふ。ゴロゴロ」

「ぐええええ。ゴロゴロ」

「ゴシヤガズバアツ!?!」

ついには二匹一緒に転がり始めた、仲がとても良いけど可愛すぎて吐血しちゃう

……

「わふ?きゅーんきゅーん。」

「ぐげ?ぐけえええ……。」

「あ、心配させてごめんねルナガロン、大丈夫よ。」

「ヨツミワドウも大丈夫だよ。」

いきなり血を吐いた私達を心配したのかルナガロンが私の所に近付いて鳴きながら顔を舐める。

ヨツミワドウはにとりに近付いてほつぺたをぺちぺちやってる。

かわいい。

「とりあえずご飯にしようか。」

「そうだね。」

「わふ！」

「ぐけっ！」

そしてとりあえずご飯にすることになった。

ルナガロンにはお皿にお肉を載せて出し、ヨツミワドウには魚を5匹程皿に載せている。

ルナガロンは尻尾を振りながらガツガツとそれは美味しそうに食べている。かわいい。

ヨツミワドウはまだ膨れ上がった状態だが、転がりながら移動してきて前足を器用に使って魚を口に運んでいた。

「ガツガツガツガツガツガツガツ」

「もきゅもきゅ」

「なあ、椀………」

「なに？にとり？」

「世の中のペット飼ってるやつってのは皆こんな感じなのかねえ。」

「んー、私達のペットが特殊な気もしますが？」

「でも見てて癒されない？」

「まあ確かに、私は仕事で目を使う都合上結構疲れ目になりやすいですがこの子達を見ているとそれも癒される気がします。」

パシヤパシヤ

「はむはむ（骨を噛ってる）」

「はい、あーん」

「ぐげえええ、はむ。」

もきゆもきゆ。」

ルナガロンは骨をしゃぶっており、肉はあつという間に完食していた。ちよつと少なかっただろうか？

そしてヨツミワドウは魚をにとりにあーんしてもらって食べている。もともと丸呑みするタイプの為か上手く噛めてはいないがもきゆもきゆしながら少しずつ胃に納めているのが分かる。

かわいい。

パシヤパシヤパシヤ

「わふっ？」

「ぐげっ？」

「どうしたの二人とも？」

何故か二匹共急に窓を向いてルナガロンは二足歩行になり、ヨツミワドウは四股踏みをしている。

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ

そこにはうざい顔をした私達の上司、射命丸 文がシャツターをひたすら激写していた。

どうやら二匹はご飯タイムを邪魔されたせいかちよつと起こっている様子だった。

ルナガロンは全身の甲殻が開いてそこから氷が出来ており、爪には氷の爪が装着されていた。

恐らく本能から自分の狩りをどうすればいいかを知っているのだろう、その姿は人狼のような感じになっていた。

でもかわいい。

「はい、良いよ」

「ワオオオオオオオオオオん!!!」

「ぐげええええええええ!!!」

私達は窓を開けてあげると凄い勢いで飛び出し、ルナガロンは飛びかかって引っ付き

その爪でひたすらマスゴミの顔を引っ搔く。

ヨツミワドウはその跳躍力で空を飛ぶマスゴミの背中にヒップドロップを決めて叩き落とす。

事前に色々食べていたのもあり、今のヨツミワドウの重さは二トリのバックくらい
の重さはある。

「あや!? いたたたたっ!? あ、ちよつやめ!? ぐげえええええええ」

哀れマスゴミはヨツミワドウのような断末魔を上げて潰れていた。

「にとり、はいこれ」

「あいよ……………削除削除と」

私はマスゴミの持っていたカメラを手に取りにとりに手渡す、そしてにとりがカメラ
の中にあるデータを削除する。

「うーわ、こいつ風呂の盗撮までやってるよ。」

「はあ、いつになったらこの方は反省するのだろう。」

「こんなのだからマスゴミとかゴキ文とか言われるんですよ。」

お仕置きをした二匹は満足したのか、足を拭いてから家の上がり、ヨツミワドウの上
に二足歩行でルナガロンが乗り、玉乗りの容量で転がしていた。

「わふわわ〜♪」

「ぐげええええええ♪」

二匹共凄く楽しそうにしている。

かわいい。

「あの一、お二人さん」

「あ、紫様ですか。」

本日はこの子達の様子を見に来たのですか？」

「え、ええまあそうなのだけれど………」

「なにか？」

「貴女達、鼻血が凄い事になってるわよ？」

どうやら私もとりと同じ状態だったらしい。

「しかしルナガロンも育て方次第でここまで可愛く育つものねえ、もともと肉食の竜だから凶暴なはずなのだけれどねえ。」

とりあえず洗面台に私達は向かったのだった。

後ろにヨツミワドウを転がしながら付いてくるルナガロンと供に

大事な物は忘れた頃に出来上がる

「魔法の森」香霖堂」

ふふふ、ようやくだ。

ようやく出来たよ皆……あとはこれを届けるだk……………

ぐふっ

ガランゴルトム、ルナガロン、ヨツミワドウと次々幻想要りする大型モンスター（一部子供）の事で割と忘れられかけては居たが香霖堂の店主である『森近 霖之助』は一人黙々と素材の加工による龍属性付与の魔道具製作に取りかかっていた。

いくら柔らかくなったとは言え己の武器としても使われるバルファルクの翼は凄まじい強度を誇り、霖之助の全力の一撃でようやく傷が付くレベルの堅さだったのだ。

その為細かい魔法陣の製作には想定以上の時間がかかり、今となっては霖之助は10徹をしており、テンションがおかしくなっていた。

しかしそんな中でも黙々と作業を続けた結果、腕輪の形状をしており、任意発動型の

龍属性付与の魔道具が完成したのだ。

そしてその完成するまでをちゃんとスキマから見ている八雲紫はスキマによる不法侵入をし、倒れた霖之助に毛布を掛け、手にある魔道具の変わりに『これは私が届けておくわ、お疲れ様』と労いの言葉の書かれた手紙を持たせ、即座にスキマで紅魔館に向かう。

しかしさつきまでの光景を思い出したくないのか顔には軽く不快さがあり、早歩きで向かっていた。

そう、霖之助は『テンションがおかしくなっていたのだ』。

毛布をかけられる前の彼は……………

ふんどし一丁で腰を振りながらそれは楽しそうに作業していたのだ。

紫としてもちゃんと労ってあげたかったのだがさすがにあの姿で作業し続ける姿を何日も見る羽目になってはさすがに不愉快さが強かった。

く紅魔館く『中庭』

メル・ゼナは今日は珍しく自然に目が覚める。

いつもならあの天狗が睡眠の邪魔をして美鈴ごとしばかれるのがいつものパターンなのだが今日は珍しく来なかったのだ。

その為この日は気持ちよく起きれており、かなり機嫌が良さそうに見えた。

そして朝食としてキュリアが暴れ妖怪から吸ってきたエネルギーを体に通し、その体を伸ばす。

「ぐげええええええ」

どっかで聞いたような鳴き声を聞き、メル・ゼナも入口へと向かう……………

開いた口が閉じそうにない。

なにながあつたし。

そう言葉にしたくなるほど入口はカオスな光景となっていた。

なぜか口にマスゴミを含んでもきゅもきゅしている幼体のヨツミワドウとそのマスゴミの後ろ姿を自分の氷の爪で突つつく幼体のルナガロン、そして鼻から血を流す椀にとりの姿だった。

ああ、だからあのカラス天狗に起こされなかったのか。

メル・ゼナは考える事を放棄した。

く地霊殿

いつも通り書類に目を通し、仕事をしていた地霊殿の主『古明地 さとり』は目の前にいきなり開いたスキマから思わず仕事を中断する内容の書かれた手紙が目の前に現れる。

『さとり？貴女がご所望のアレがついに出来たわよ。』

思ったより苦戦してみたいだから時間はかかっていたけどこれで貴女の念願が叶うと良いわね。

とりあえず紅魔館で今思考停止しているメル・ゼナの尻尾に引つ掻けておいたからガランゴルムと一緒に取りに来なさい？こいしは多分そのうち紅魔館に来るでしょうし。

八雲紫より。』

ガタツ

「お憐！お憐ー！」

「はい? どうしましたかさとり様ー!」

「一旦仕事を任せても良いでしょうか! 私は急ぎの用事があるのでガラングルムを連れて紅魔館に向かいます!」

「ふえ? わ、わかりましたー! お気を付けてー!」

そして私は急ぎで支度をして地霊殿で勇儀と腕力勝負をしていたガラングルムを呼び出し、急ぎで紅魔館に向かう。

私の慌てように何があつたのかある程度理解した勇儀も付いてきており、その昼頃には紅魔館に到着する。

しかし私はこの時手紙にあつたメル・ゼナが思考停止した理由を理解したのだった。

そこには足の半分が外に出るくらいまで丸呑みにされたカラス天狗と、それをもきゅもきゅと啜えている可愛らしい河童のような蛙。

口が開いたまま思考停止し、動かないメル・ゼナとそれを面白そうにペチペチと叩く蒼い鱗と甲殻に覆われた狼。

そして近くで鼻血を出し、痙攣しながら満足そうに倒れる白狼天狗と河童。

さらに門の前でボコボコにしばかれた門番になにをどう対応すれば良いか迷うメイドの姿があつた……………

ようやく本題

く紅魔館くさとりside

とりあえずしばらく思考停止した後、メル・ゼナの尻尾に引っ掛かっていた完成した魔道具を受け取った。

そして紅魔館の図書館にいた魔法使いが中庭にやってきた。

「あら？ さとりその手にあるものはもしかして？」

「ええ、ようやく完成したそうでスキマ妖怪から連絡が来ました。

ただ思考停止しているメル・ゼナの尻尾に引っ掛けてあるとの事だったのでガラングルムを連れて来たのですけれど……」

そしてパチュリーは未だ思考停止しているメル・ゼナ、そしてその正面にいるバカラスを反芻しているヨツミワドウとガラングルムに遊んで貰っているルナガロンを見た。

さらに入口でしばかれた門番とかなりの量の鼻血を出していた椀とにとりを見つめる。

「ああ、たしかにこれは思考停止してもおかしくはないわね。

ほら、メル・ゼナ？おきなさい！」

「……………ガッ!?グルッ？」

パチュリーは雷の魔法をつかってメル・ゼナの思考を再開させる。

威力がそれなりに高いように見えたけど気のせいだろう……………たぶん

「咲夜、とりあえずあのバカラスを取り出して頂戴。」

「え、ええ。かしこまりました。」

ほら、さすがに汚いから吐きましよう。ね？」

「ぐけ?ペッ」

「はい、お利口さん。ナデナデ」

「ぐけええええ♪」

ヨツミワドウは咲夜に言われてバカラスを勢いよく吐き捨てた。

軽く地面に刺さっていたがまあ放置で良いでしょう。

とりあえず吐きすてたヨツミワドウを咲夜は撫で、ヨツミワドウはとても喜んでい

様子だった。

なんだろう、河童のような蛙なのに結構癒されるんですよねえ。

「わふわわー♪」

「うほっ」

ルナガロンはガランゴルムを滑り台にして転がっている。

「たしかにこれは思考停止してもおかしくはないけど私としてはあの河童のような蛙が気になるわね、たしか勝手に使われた書物は二冊だったはずなのだけれど？」

そして目の前にまたいきなりスキマが開き、八雲紫が姿を現す。

「ああ、それなのだけれどね。そこの蒼い狼。」

ルナガロンが幼体で召喚されたのだけれどそこで実験ケースとして妖怪にモンスターを育てさせた場合どう生息が変化するか気になっていてね。」

「なるほど、たしかに一匹じゃ実験としてはデータが足りないものね。それでもう一匹そちらで用意した訳ね。」

「ええ、大変だったのよ？イレギュラーの対応に加えて結界の修復に丸一日、さらにあの子、ヨツミワドウと言うのだけれどタマゴから生まれたての個体を見つかるだけでも苦労したし。」

私はスキマ妖怪の心を覗いた、いや、覗いてしまった。

「いや、その……………お疲れ様です。」

「さとり……………見ちゃったのね。」

「はい、その……………覗いちゃいました。」

なんかすみません。」

「さとり達の側はまだ良いわよ、あれはあの鬼が悪いのだから。

とりあえず魔理沙にはちよつと怒ってるわよ。

霖之助はまあ10日も徹夜してればテンションもおかしくなるとは思うからまあ良いわよ。

とにかく胃潰瘍になるまでこんなトラブルばつか起きてたらそりや私だつてキツイわよ!!!」

ぜー、ぜーと息を荒くするスキマ妖怪を見たのはこれが初めてだがこの方はこの方なりにとてつもない苦勞をしているようだ。

私もちゃんと地底管理しなきゃね。

「話が見えないのだけれど八雲紫が相当苦勞してたみたいなのはわかったわ。

あととりあえず胃潰瘍なら休んでなさいな。」

「喘息なのに最近動き回ってる貴女に言われたくは無いけど今回は私が動いたからちゃんと説明して起きたかったのよ。」

「喘息はよけいゴフツ!!」

「ああ、言った側から………まあいいわ。とりあえず王域三公が完全に揃ったのが原因か向こうの世界との境界が薄れたわ。私も調整はしているけど少しずつ向こうの世界

から幻想入りしてくる者達も出るはずだから注意して頂戴。」

「はあ、たしかにこれは少し対策を考えねばなりませんね。」

「とりあえずは結界に修復と同時にフィルターを施して人間との共存を考えられる異端なモンスターのみを幻想入りの条件に加えたいわ。」

「どうでもしないと幻想郷が滅びかねないもの。」

「そこまで強いのか？あの世界のモンスターって。」

正直私もそう思わなくは無かったが心を覗いて実際にその凄まじさを見て私も考えを変えた。

「ええ、少なくともメル・ゼナは古龍としての強さで見れば実は割と低い部類なのよ。」

中には火山その物が動いてるような化物もいるし砂漠を泳ぐ巨大な鯨型のモンスターとかもいたわよ。

とにかく監視は続けていくけど何かあったら貴女達に話を通してガランゴルムとメル・ゼナに動いて貰うから把握しておいて頂戴。」

「コクリッ」

「ウホッ」

「とはいえ共存を考えるモンスターならそこまで危険は無いのでは？」

「そうとも言えないわ、モンスターは力がとてつもなく強いから扱いが難しいのよ。」

そして私達が話をしてこいしが来るまで時間を潰していた時、ちようどこいしはやつてきた。

「ねえねえ、何話してるのー?」

「ジタバタジタバタ」

何故か抜け出そうと必死にもがいている岩塊のような背中の中の甲殻を持ったちよつと大きな竜も背負って

「ゴフツ!?(吐血)」

ああ、八雲紫の胃が………

岩に擬態し、無意識な竜

く紅魔館く『中庭』パチユリーside

「ゴフツ!? (吐血)」

ああ………早速懸念してた事態が起こっちゃったわね。

それにしてもホントに血を吐く程ストレスが貯まってるとはね。今度愚痴でも聞いてあげようかしら………。

「ジタバタジタバタ」

「もー、暴れちゃダメだよー」

「特徴を見る限り翼もあるし飛竜種に分類されそうだけどあの形のまま大きくなるなら飛行能力は無さそうかしら?」

「ゴフツゴフ (吐血) せ、正解よ………あの子の種族は岩竜バサルモス、鎧竜グラビモスの幼体なのだけれど本来よく見られるバサルモスはあそこにいるガランゴラムより少し小さい程度だからたぶんあの子生まれたばかりなのだと思うわ。」

「ジタバタジタバタ………グスツ」

あ………動けないと分かったのか軽く泣いてきてる。

「あー、こいし？その子ほんとに嫌がつてるみたいだから離してあげて。今にも泣きそうになつてるわよ？」

「はーいー！」

「……………(地面に潜る)」

「潜つてるけど背中だけ出てるから分かりやすいわね。とはいえ背中だけ見ると石にか見えないしたしかに擬態としてはちようどいいのかしらね？」

「ボコツ」

今度は顔だけ出してキョロキョロと周囲を見ている。

そして自分が見られると分かるとすぐに顔を地面に埋めた。

「どうやら本能的なものみたいね、この子は特に何か強い思考はしてないからほんとに生まれたてなのでしょうね。」

「うーん、たしかにバサルモスの食べるものは鉱物だったはずだからここは貴女達地底組に任せるのが良いのかしら？」

「え！育てていいの！」

「はあ、私はペットを何匹も飼つてて今更なので別に構いませんよ。とはいえその前に

……いっしょー」

「ふえ？」

あら？どうやらさっそくあれをつけるようね。効果の程は一体どれ程かしら？

「はい、これ腕に付けて？」

「なにこれ？」

そして腕輪型の魔道具を付けさせると赤いボタンを押した。

するとこいしの体に赤黒い稲妻が一瞬走り、定期的に帯電しているように見える。

「一応その中に入っている龍属性は年単位で持つはずよ、足りなくなったらメル・ゼナに補充してもらいなさい。」

「お姉ちゃん、これなに？なんか変な感じするけど。」

「能力を使おうとしてみて？」

「うん？わかった………どうどう？」

「ええ、ちゃんと起動してるみたいね。」

どうやら成功した見たいね。こいしは発動したつもりみたいだけれど頭を撫でられて困惑している様子だった。

「ふえ？何で………何で私に分かるの？いままで皆分からなかったのに………」

「貴女がこれ以上気付いて貰えずに寂しい思いをしないために作ったのよ。」

これをつけていれば起動してる間だけ飛ばない代わりに能力を封印するから勝手に無意識が発動することも無くなるわ。」

「これ以上……気付かれなくなることはないの？」

「ええ、貴女が意図しない限り貴女に気付かないことはないわ。」

「ふえ……うええええええん!!!」

お姉ちゃあああああああん!!!」

「よしよし、いままで寂しかったわね。」

「まあ一件落着なのかしらね、メル・ゼナもお疲れ様ね。」

「グルル」

「うほ？」

「ああ、ガランゴルムは知らないのだったかしら？」

「コクリッ」

「あの子、自分の能力が完全に掌握出来てないのよ。」

それが原因で勝手に発動して皆から気付いて貰えずにいたから結構寂しい思いをしてたみたいなのよ？

だから制御出来るようになるまで勝手に発動しないようにメル・ゼナの龍属性を常に纏わせられるような道具を作ったのよ。」

「ボコツ……………?」

「ふふ、自分を無理矢理連れてきた少女が泣いていて困惑してるって感じかしら?」

「ズボツ……………タタタタ……………」

するとバサルモスは地面から出てきてこいしの所へ向かい、足に体を擦り付ける。

「いたたたたつ!?痛いよ!」

「あら、この子なりに心配してくれてたみたいね。」

「むう、よいしょ」

「ツ!?ジタバタジタバタ……………ボスツ」

「えへへー、これなら大丈夫!」

こいしはまたバサルモスを掴んで持ち上げたと思ったら頭に乗つけた。

バサルモスは生まれたてでもかなりの重さがあり、大きさに今は蹴鞠の鞠くらいの

サイズだが、それでも15kgくらいはある。

しかしこいしは妖怪の為、そのくらいなら問題無いくらいには力はあるのだ。

「貴女の新しい家族はどう?」

「んー!重い!でもかわいい!」

「ふふ、ガランゴラムにもかわいい弟分が出来たのかしらね?」

「ウホツ」

「ペチペチ」

「んー？どうしたの？」

突然バサルモスはこいしの頭を翼でペチペチして八雲紫が用意している鉱石に目を輝かせる。

「どうやらお腹が空いたみたいね。」

「とりあえず向こうの世界からマカライト鉱石というのを取り寄せたわ。たぶんこつちの世界の鉱石だけじゃ体の強度が脆くなっちゃうから定期的にそつちに持っていくわね。」

「ありがとう、八雲紫。はい、食べて良いわよ」

「コクリツバリバリモキュモキュ」

「幼体でも鉱石を噛み砕ける強さはあるのね。」

「その代わり口は小さいから攻撃とかには使えないのだけだね。」

「まあとにかくこれからよろしくね？バサルモス？」

「っ？モキュモキュ」

「これからまたにぎやかになりそうね、地底組は。」

新しいペット達の1日

く地霊殿く『中庭』さとりside

とりあえず岩竜バサルモスをうちで飼うようになってから3日程が経過して、どのような生態を持つのか但至少だけ見えてきた。

まず地面に潜る行為なのだが、割と地上にいるよりも潜っていた方が落ち着くようだ。

これはおそらく安心感から来ているものなのではないだろうか？

バサルモスは基本的に全身が岩のような頑丈な甲殻に覆われていて基本的に外敵は殆どいないようなのだが腹部は甲殻が薄く、そこを壊されると柔らかい腹部の肉が無防備に成る。

その為、岩のような見た目をしており、頑丈で分厚くある程度なら壊されても問題ない背中を地上に出しているのだろう。

とはいえちよくちよく頭を出してキョロキョロしてるから割とバレるのだけれど

まあ見てる分には可愛いわね。

他にも腹部等を触ると分かるのだが体温が非常に高い、恐らくなのだが体の中に熱を溜め込みやすい体質なのではないだろうか？ちよくちよく放熱するために炎のガスを出す姿を見かけるわ。

さらにガスに関しても放熱の為のガス以外に睡眠ガスや毒ガスも使えるようで、これは食べた鉱石体の中に溶かすことによつて毒ガス等が貯まっていくのではないだろうか？

鉱物は基本的に体内に入ると有害なものも多いため、自営の意味もあり、このような生態になったと思われるわね。

とはいえ鉱物は甲殻をより頑丈にするのに必要なものであるため、毒ガスや睡眠ガスは副産物としての可能性も強いわ。

さらに食欲もかなり高く、地底の壁の辺りまで連れていくとバリバリと壁を崩して食べていき、その翌日には体長が10cm程大きくなっていたわね。

ただ食事については鉱石だけ食べるわけではなく、果物等も食べるみたいだわ。

まあ鉱石だけ食べてたら体の外側しか栄養が行かないから当然なのかしら？

とはいえ食欲は鉱石の方が圧倒的に強く、鉱石7に対して果物3の割合という所でしょうか？

そして地霊殿ではいつもこいしと一緒にいます。基本的に頭の上に乗せてるみたいですがあのペースで成長してるとなると近いうちに頭に乗せられなくなりそうですね。何かあると頭をその翼でペチペチと叩いてこいしに知らせる様子はとても愛らしいものがあります。

それと実は地霊殿に帰って初めてわかった事なのですが地底にはこの子が擬態するのにちょうど良い岩が多く、地霊殿以外で潜られると私のように心を覗いたりして探せない皆はバサルモスと他の岩との違いが全く分からなくなるようです。

まるでこいしの無意識のようでもびったりな二人組になりました。

先に地霊殿に住み着いたガランゴルムは基本的にいつも眠っていてご飯の時だけ正確に起きてきます。

食事はこの子の場合、果物が中心で草食のようです。

それと怒った時には地面に腕を突き刺し、右腕に溶岩、左腕に苔を付けて殴りかかって来ます。

すでにあのバカラスが犠牲になりました。

その溶岩ですがどうやらガランゴルムの体液と混ぜる事でなかなか固まらず、衝撃で爆発する性質を持つようです。

苔に関しては特殊な物を使っているのか衝撃を加えらるととても少ない量の水が放出

されます。

溜め込んでいるというより作り出ししている感じですね。

剛纏獣という別名は結構分かりやすいと思えました。

さて、そんな二匹なのですが

「うほっ?」

「コロコロコロコロ」

何故か今はガランゴルの背中に乗せて貰った後、背中を横向きで転がってを繰り返して遊んでいます。

たまに地面から出てきて横にコロコロと転がる姿は見かけますがどうやら楽しいみたいですね。

しかしあの様子を見たスキマ妖怪はとても苦い顔をしており、何かと思いい心を覗いたのですが……………

どうやら向こうの世界で休憩しようと岩に座ったら正体がとても大きく成長したバサルモスだったみたいですね。

突進を避けて安心しているようですが……………あら? 避けられた直後に転がって

……………あ

どうやらあの転がるのは攻撃としても用いられるみたいですね、確かにあの巨体で転がられれば割と洒落になりません、並みの人間なら死ぬのでは無いでしょうか？

他にもこれは……………

腹部と背中、頭部が赤熱化している？

八雲紫は空を飛んで逃げているようですが……………バサルモスは口を開けて……………え!?

そう、そこから放たれたのは通称グラビームと呼ばれる成体であるグラビモスが多用する高出力の熱線でした。

そして八雲紫は弾幕で相殺……………出来てませんね。

……………簡単に打ち落とされましたね。

どうやらこの頃はあの世界に来たばかりでモンスターを侮っていたみたいですね。

おや、八雲紫がジト目でこちらを見えています。

どうやら気付かれたようですね。

「あの子にも熱線を吐けるようにいろいろとやってみようかしら？」

「このさどりめ……………ゴッフッ!？」

どうやらあの時の光景をまた思い出して胃を痛めたようだ。

「まあ今度愚痴でも聞いてあげますから。」

「はあ……………勇儀と萃香誘うわよ……………」

「うぐ、まあいいですよ。」

はあ、また地霊殿が騒がしくなりそうですね。

入り込んでいたもう一体

く無名の丘く『鈴蘭畑』

無名の丘、妖怪の山とは反対方向にあるある低い山に存在する草原。

そこには名前の由来となる広大な鈴蘭畑があり、かつてそこは赤子を間引き、鈴蘭の毒により安楽死させる場所として用いられていた。

そんな鈴蘭畑にはそこを管理する一人の幼い妖怪がいるのだが、今回はこの畑に新たに住み着こうとしておる一匹の竜に手を焼いていた。

「もー!!起きてー!!起きてっつてばー!!」

そこに居座られたらスーさんが育ちにくいじゃない!!」

妖怪の少女は叫ぶ、花の成長の妨げになるその存在を退けるために。

「……………zzzzzzzz」

しかし竜は眠る、耳元で叫んでいる声には気が付かず。

「おーきーなーきーなーきーいーいー!!!」

少女はさらに叫ぶ、自分に竜の巨体を動かす程の力が無いからだ。

少女は竜が持つ毒を暴れさせようかと考える、しかし毒を持つ竜が毒にやられるとは到底思えなかった。

「……………zzzzzzzzzzzz」

竜は気持ちよさそうにすやすやと眠る、どうやら寝ることが趣味のようだ。

「どーいーいーてーいー!!!」

少女は竜の体をポカポカと叩く、しかし竜の鱗や甲殻は硬く、竜は煩わしそうに首を振るだけ。

「うううーいー!!! 幽香あああああ!!!」

少女は自分ではどうにもならないと悟り、力を持つ自分の友を呼ぶ。

「はーい、メディスンだったらどうしたのかしら?」

花畑から一人の女性が現れる、その容姿は癖のある緑の髪に赤い瞳、白のカッターシャツとチェック入りの赤のロングスカート、そして同じ柄のベストを着用し、ピンク色の日傘を手に持った女性だ。

彼女の名前は『風見 幽香』、幻想郷最強の一角である。

通称USSC（アルティメットサデイスティッククリーチャー）と呼ばれ、その凶暴性

から幻想郷縁起には『人間友好度：最悪』『危険度：極高』となる程である。

しかし本人からすれば自分のテリトリーである太陽の畑に勝手に侵入したり、花を粗末にする人間に恐怖（再起不能のトラウマレベル）を刻み込んでるだけであり、わざわざ自分から敵対する程凶暴という訳でもない。

しかし彼女はその力故に理解者は割と少ないため、その優しさが見られる事がそうそう無いのだ。

そんな彼女は鈴蘭畑に捨てられた人形が妖怪となった少女、『メデイスン・メラニコリー』に呼ばれて現れたのだ。

「それで私を呼んだ理由は……聞くまでもなさそうね。あのドラゴンが邪魔なのでしよう？」

「うん、スーさんが太陽の光を浴びにくくなっちゃってて」

「それにしても気持ち良さそうに寝ているわね。」

「この子物凄く強い毒を持つてるみたいなんだけど幽香は大丈夫？」

メデイスンは心配するように幽香に忠告する。

「私は大丈夫よ、でもこの子は体はかなり濃く色んな花の匂いと気配が染み付いてるわね。」

多分元々違う花畑に住んでて幻想入りした時に環境の似ているここを気に入っちゃったのかも。」

「そうなの？ 悪い子じゃ無さそうね！」

幽香は四季のフラワーマスターとも呼ばれ、植物を操る事が出来る。

その能力もあつて花の気配には敏感だった。

「そうね、この子もお花に囲まれて寝るのが好きなのかもね。花の声を聞いてみたら落ち着く気配らしいわよ？」

「そうなの？」

「ええ、元々の生態なのかもね？」

「じゃあ動かさない方がいい？」

「そうね、すぐに必要という訳でも無いからこの子が起きるまで待っていきましょうか。」

「……………zzzzZZZZZZ」

竜は眠る、安心しきったように、そして心地良さそうに。

竜が起きるまで待つことに決めた二人は気持ちよさそうにすやすやと眠る竜を見ながらお茶会をしており、すでに夕方になろうとしていた。

しかし竜はそのお茶会の甘い菓子による嗅ぎ慣れない甘い匂いに思わず目を覚ました。

「……………zzzzzzzz……………zzzzzz……………グア？ぐわあああああああ
……………むにやむにや」

竜は大きなあくびと共に眠そうに目を覚ます。そして甘い匂いに釣られて二人を見る。

「あら、大きなあくびね。おはよう、お昼寝好きのドラゴンさん？」

「ぐあう？」

「よく見ると可愛いわね、幽香！」

「ふふ、そうね。あら？お菓子を見ているわね、でもこれが何なのかよく分かってないって感じかしら？」

「コクリッ……………？」

竜は言葉を理解しているように頷き、少しして首を傾げる。

なぜこの者達の言葉が理解出来るのか竜にも分からないようだ。

「食べてみる？あーん。」

「ぐあああむ、むぐむぐ……………ぐあおう！」

竜は幽香に菓子を口に入れてもらい咀嚼し、喜んでいいのか小さく吠える。

「ふふ、口にあつたみたいね、よかつたわ。」

これはスコーンっていうお菓子なの、どう？もう一個いるかしら？」

「ぐあああ。」

幽香はその様子に癒されたのかももう一個食べさせようとする。

所が竜が口を開けた瞬間目の前の空間が裂ける。

そしてそこから一人のスキマ妖怪が慌てて現れる。

「もう一体の反応追ってみれば何て存在が幻想入りしてるのよ!?しかも貴女達となにやってるのよ!？」

「あら？スキマ妖怪じゃない。」

「ぐあう？」

そして彼女は何故か胃の辺りを押さえているのだった……………

かわいい竜には猛毒のトゲがある

く無名の丘く 『鈴蘭畑』

「ダバダバダバダバ」

紫は口から大量の血を吐きながら胃にとてつもないダメージが入ってはいたがそれよりもバサルモスと同時に幻想入りしたとてつもない力を持った存在の対象に頭に悩ませていた。

全身は緑色でトゲを至るところに持ち、そのトゲの先端は毒で紫がかっている。

そして特徴的な頭部には紫色の発達した巨大な角が四本生えており、横から一本ずつ、前方に2本突き出した形状の角にはいばらのような物が絡んでいた。

「もう一体の反応追ってみれば何て存在が幻想入りしてるのよ!? しかも貴女達となにやってるのよ!？」

「あら? スキマ妖怪じゃない。」

「ぐあう?！」

「貴女達、その子がどんな存在かは知らないみたいね……ああ、胃が……」
知っているならあんなお茶会のような事はしないでだろうと思ひ、八雲 紫はどうしたものかと思考を巡らす。

「貴女はこの子の種族を知っているのかしら？」

「ええ、知っているわ。その竜の種族は『棘竜エスピナス』、未開の密林で初めて発見された種でありその密林では王者として君臨していた古龍級モンスターよ。

ただ通常種にはそんな角は無いわ。その子は多分『邪毒の角』と呼ばれる下手な古龍よりも強力な存在よ。」

「話がついていけないのだけれど？まず古龍ってなんなのかしら？」

「古龍は超常の力を司る龍で、最近幻想入りして話題になっているメル・ゼナもその古龍の一体よ。」

力としては私が全力を出して勝てるかわからないって所ね。」

「へえ、貴女が勝てるか分からないね……」

今度やりあつてこようかしら？」

幽香は自分から敵対する事はそこまでないが、バトルジャンキーな一面もあり、強いと聞けば戦いにやってくる場合もある。

そんな幽香に紫はさらに胃を痛めるが問題はそこじゃない。

「メル・ゼナに戦いを挑むのは……………まあ良いわ。」

勇儀も戦っているしね。

ただこの子と戦うのは絶対にやめて頂戴。被害が大きくなりすぎるわ。

それにこの子はメル・ゼナよりも圧倒的に強いだよ。」

「それは『邪毒の角』というのが関係してるのかしら？」

「ええ、その子は『邪毒の角』と呼ばれるエスピナスの特殊個体、『エスピナス迪異種』よ。」

「迪異種？」

「迪異種の特徴として異常発達した部位があることがあげられるわ。」

この子の場合はその角が異常発達部位に当たるわね。

そして強さに関しては私達がタイマンで力比べをして負けかねないハンターが一撃

でやられる強さといった所ね。」

大妖怪クラスの古龍をポンポン狩るあのハンターはイカれていると常々思うけれどあれが一撃でやられる迪異種達がいる環境も魔境なのよね……………

「へえ……………弾幕込みならどうかしら？」

「この子の場合多分怒らせないとあなたの弾幕はそれ程効かないでしょうね。純粹に堅いのよ。」

それに加えてこの子の炎プレスを受けたらもう負けが確定するといってもいいわ。」

「……………zzzzzzzzzzzz」

どこからともなく寝息が聞こえてくる。

「へえ、それはどういう意味かしら？」

「言葉通りの意味よ、威力もそうだけれど厄介なのはそこではないわ。」

この竜の炎には私達大妖怪ですら体力を大きく奪われるかなり強力な神経毒に加えてしばらく動けなくなる程の強力な麻痺毒があるわ。当然炎だからさらにやけどで動けなくなるわね。そしてそこにあの子の全力の突進なんて受ければ私でも死にかねないわ。」

「へえ、ずいぶんと物理的な力も強いのね」

「ええ、むしろこの子の場合毒はただのサポートに過ぎないわね。」

「成る程ね。まあいいわ、私としても敗ける戦いはしない主義だもn」……………zzzzzzzzzzzz」
「はあ、それにこんな様子でメデイスンと気持ち良さそうに寝ているこの子を見てたら毒気も抜けてくるわよ。」

どうやら二人の話についていけなかったようでメデイスンはエスピナスが丸く寝ている所に入り込み、すやすやと寝息を立てていた。

メデイスンは毒を操る妖怪であり、人形の妖怪でもあることが幸いし、トゲに触れて

も問題ないようだ。

「はあ、まあ一応この幻想郷にやってきたという事は私の作った新しい結界のフィルターで弾かれてないということでしょうしそこは幸いだったのかしらね。」

「へえ、幻想入りの条件を狭めたのね。」

「こればかりはこうするしか無かったのよ。」

あの世界には私達と同格以上の存在がゴロゴロいる上に幻想郷に入らない程巨大なモンスターもいるもの。」

「そうなると向こうの世界で忘れ去られた土地もこっちに引き込んだ方がいいんじゃないの?。」

「まあそれはそうなのだけれどね。どこもモンスターという問題が存在するから土地選びが難航しているのよ。」

「ふーん。」

八雲紫ははあと溜め息をつく。

「私はとりあえず永遠亭に寄るから今日はここまでね。」

「なにしに行くのよ?。」

「……………胃潰瘍の定期検査よ……………」

「……………そう、お大事にね」

「……………ええ」

しばらくスキマ妖怪を虐めるのはやめとしようと思う幽香であった。

そしてその後永遠亭では……………

「はあ……………紫、貴女が妖怪でなければ軽く死んでるわよ？」

「……………」

「胃が大穴が空いてるわ。最低限一月は休みなさい。」

またしてもドクターストップを貰っていたのだった。

マスゴミの生命力はG以上

く迷いの竹林く『永遠亭』

この日、あるカラス天狗がまた永遠亭に搬送されてきた。

ただ今回は二種類の毒に火傷を負っており、今までで一番こっぴどくやられているのがよく分かる。

そんな焼き鳥を診断する二人の女性がメデイスンと焼き鳥を引きずってきたエスピナスの前に現れる。

「師匠、確か前回は全身が火傷を負ってずぶ濡れ何でしたっけ？」

うさみにミニスカートの学生服と、どこか狙ったような服装の少女は自らが師匠と呼ぶ女性に話しかける。

「あややや……あややややや……あやや……」

「ええ、溶岩の欠片が付着していたからそれでやけどしたのでしょうけど水が分からないわね。」

それに何かの分泌物もあったから今はそれを調べてる最中だったのだけれど……

今度は見たこともない猛毒……いえ、激毒ね。」

そして長い銀髪を三つ編みにし、赤と青のツートンカラーというなかなか珍しい服装をした美しい女性が言う

「激毒ですか？」

「あややや………」

搬送されてきた射命丸は全身がこんがりと香ばしい香りを放つまで焼かれ、全身の体力を奪う強力な神経毒と体の自由を奪い、痙攣させる麻痺毒にやられていた。

「ずいぶんと酷い痙攣ね、麻痺毒だけで見てもこれは少なくとも人や動物が耐えられるような毒では無いわ。」

私でも月単位で動けなくなるとてつもない物よ。」

実際射命丸はカラス天狗の中でも最も力を持つ存在の一人であり、かなり長生きしている妖怪でもあった。

しかしそんな彼女が麻痺毒や神経毒でここまで動けなくなるのも普通はあり得ない。

長い年月を生きた彼女の体には毒への強い耐性が出来ているからである。

しかし実際その耐性を持ってこの症状を引き起こすあたり、この毒の凄まじさがよく分かる。

「ええ!?!何ですかそれえ!?!」

「まあ状況見る限りこの子の毒って所かしら？」

「どうなの？メデイスン。」

「そーよ、せんいしゆ？ていう種類のエスピナスって子なの！どうどう？すごいでしょ？」

「そうね、すごいんだけどその子の毒は強すぎるからあまり使わせてはダメよ？」

「むー、今回はこいつが悪いんだもん！」

「まあ見た限りではそうみたいね、引きずられてやってきていたし何をやったのかしら？」

「えつとね。私とエスピナスがスーさんの畑で眠ってたんだけど、何かうるさい音がするなあつと思つたらエスピナスが怒つてて、その天狗が写真撮つててうるさくしたから起きちやつて機嫌悪くしちゃったんだって。」

「ぐるぐる」

「はあ………毎度毎度痛い目にあっているのに懲りないのだろうか？」

「貴女にはとりあえず入院して貰うけどさすがにうちにこの毒を解毒出来るような薬は無いわ。」

「エスピナスだったかしら？この子から薬用の毒を採取したいのだけれど協力して貰っても良いかしら？」

そしてエスピナスは私と患者（焼き鳥）を交互に見て呆れたように溜め息を吐いた。そしてその場に伏せて角を私の方に向けてきた。

「この角に毒が集中しているのね、分かったわ。」

メデイスン、貴女の力を使ってこの子の角から毒液を出させることはできる？」

「うん、この子の毒はすごい量あるから出来ると思うわ！」

「そう、ならこの容器に毒をいれて貰えないかしら？」

「わかったわ！」

メデイスンは嬉しそうに快諾した。

人に頼られる機会なんてなかなか無いからよほど嬉しいのね。

そしてメデイスンが角に容器を近づけて毒を角から分泌させる。

驚いたわ。あそこまで分泌量が多いなんて。

「これでいい？」

「ええ、ありがとう。」

さて、そののこんがりと美味しそうに焼けてるカラス天狗は私がかんとかしておくから後は帰って貰っても大丈夫よ。

その子も少し眠そうだしお昼寝邪魔されてたんでしょ？」

「あ、そうだったわ！ごめんさいエスピナス、眠いの無理させちゃった？」

「ぐうるる」

そうするとエスピナスは首を横に振り、メディスンは安堵する。

やっぱりこの子は言葉を理解出来るのね。

「ねえ、出来ればで良いのだけれどこれからうちに鈴蘭の毒を届けに来る時にこの子も連れてきてくれないかしら？」

「え？私はいいいけど、どうする？エスピナス？」

「ぐああ」

エスピナスは頷き、了承する。

「わかったわ。」

「じゃあ今度から一緒にいこっか？」

「ぐあるる♪」

「そうね、来たらこの子の毒も出来れば一緒に欲しいのだけれど健康状態とかも色々見てあげるわ。この子が体調崩したりしたら悲しいでしょう？」

「ほんとー！」

「ええ、この子について他にわかりそうな事を見つけたら貴女にもちゃんと教えてあげるわ。この子の事をもっと知りたくない？」

「知りたい！幽香以外に出来た私の友達だもん！」

「ふふ、ずいぶんと強そうなお友達ね。」

「うん！幽香よりも強いんだって！一緒に鈴蘭畑に住んでるからえーりんも今度おいでよー！」

「ふふ、良いわよ。約束ね。」

そして私がこの子達のような存在が次々と幻想入りしており、それが今入院させている紫が胃を痛めていた原因だと知るのとはそこまで遠い未来では無かったのだった

.....

ああ、確かにこれは胃が痛くなる問題ね.....

取材……………出来なかつたです。

く迷いの竹林く『永遠亭』

いやあ、ひどい目に会いました。

今も毒によつて布団の中から動けないでいますけど。

はあ、新しく二体のドラゴンが幻想入りしたと聞いたので取材しに行つたのですが

……………

まずは片方である子竜の一匹であるバサルモス？さんの取材をしに地底まで行つたのですが……………

取材開始一時間目

取材開始3時間目

うー、やっぱりもうバサルモスさんは起きてますよねえ……そうなると町の人に取材をするしか無いかなあ。

「すみませーん、最近こいしさんと一緒にいるバサルモスさんってこの時間何してるか知りませんか〜?」

「こいし様と頭に乗ってるあの子かい?今の時間帯はいつもならこの地獄町をぶらついていると思うよ?」

「ほんとですか!?取材への協力ありがとうございます!!」

「でも今日は…….…….つてもう行っちゃったねえ、今日はまだどこも見かけてないって言うおうとしたんだけどねえ。」

「すみませーん!こいしさん達を見かけませんでしたか?」

「こいし様とバサルモスちゃん?まだ見かけてないわヨオ?それにしてもアナタ、カワイイ顔をしてるじゃナイアイ。」

「オネエさん、失礼しましたー！」

「すみませーん！この辺でこいしさん達を見かけませんでしたかー？」

「あ？？」

「ひっ!?し、失礼しましたあ!？」

「つたくなんだってんだい。」

「おや？勇儀つたらどうしたんだい？機嫌悪そうだね？」

「ヤマメかい？それがさあ、ガランゴラムにまた戦いを挑みに行ったんだが一撃でやられちまって悔しいのさ。」

「どうやらこいし達と一緒に遊んでたみたいでねえ、何時もみたいに長引かなくて消化不良なんだよ。」

「成る程ねえ、だからあんな機嫌悪かったのかい。」

「すみませーん、こいしさ」

「女は帰れ！」

「へ？あ、はいすみません、失礼しました。」

「さて、邪魔者は居なくなつた……………」

やらないか

何か野獣のような声が後ろから聞こえてきましたがなかなかバサルモスさん見つかりませんねえ……………結局町に居ませんでしたしここは一度地霊殿に向かうべきでしょうか？

その頃のバサルモス達は……………

「ゴロゴロゴロゴロ」

「ゴロゴロゴロゴロ」

「うほっ?」

地霊殿の中庭でガランゴルムの背中を滑り台にして転がって遊んでいたのだった。

取材開始6時間目

結局見つからなかつたので地霊殿まで来ました。そしてお隣さんに話を聞いたのですが……………

「こいし様とバサルモスカい?今日はガランゴルムと一緒に遊んでるみたいだよ?今は地霊殿の外にいるはずだね。」

「うう、またすれ違いになってしまいましたかねえ。」

「そうだなあ、確か今日はお空がギリギリまで一緒に居たからお空に場所を聞いてみたらどうだい?」

「わかりました!取材にご協力ありがとうございます!」

「お空さーん、ガランゴルムさんとこいしさん達がどこにいるか知りませんか?」

「ほえ？うーんと確か何かを浴びに行くってどこか行っちゃったよ？」

「その何かとは？」

「え、うーんとね、えーとね、うーんんんんん……………」

「うーむ、これはわかりそうに無いですねえ。」

浴びに行く……………水浴びですか！ご協力ありがとうございます！！

「うーんとね、えーとね、うーんと、あ、思い出した！溶岩を浴びに行くって言うってあれ？どこいつちやつたんだろ？」

その頃のバサルモス達

「どう？気持ちいい？」

「ゴオオ♪」

「うほっ！」

こいしは温泉に浸かりながら溶岩浴をして泳ぐバサルモスと腕を溶岩と温泉に浸けるガラソゴルムと共にいた。

く地上『妖怪の山』く『玄武の沢』

かりちゆまの真面目な話（しかしかりちゆま）

く紅魔館く『かりちゆまの部屋』

ふふふ

ふはははは

あーっはっはっはっはは！

ついに！ついに出来たわ！

カリスマな私のカリスマ性をさらに高めるための新しい動きに衣服が！

衣服は咲夜にやっつて貰ったけどメル・ゼナが提供してくれた素材（自然に生え変わった鱗や勇儀との喧嘩等で軽く千切れた翼膜のかげら）を惜しげもなく使ったこの服を！

そしてここ毎日毎日ずーっーっーっーとメル・ゼナを見続けた甲斐があつたと言うものね！

いやー大変だったわ。割と毎日メル・ゼナは出掛けているからなかなか見ることが出来なかったし仕草に関して時間帯の問題で寝ている時くらいしかわからなかったの

だもの。

それに私とメル・ゼナは根本的に骨格が違うのもあって私に相応しい仕草にアレンジするのは凄く大変だったわ……………鏡見ながらやったのだけれど無理に同じようにしようとする違和感が出てしまうのだもの。

でもこれで大丈夫、もうかりちゆまなんて言わせないわ！

フランにも憧れのお姉様と言わせてあげるんだから！

そう心に決意しながら鏡の前でどや顔しながらカツコつけるレミアは外から見れば痛い人しか見えなかった。

そしておやつの時間なので呼ぼうとしていた咲夜に見られてしまうが……………

『どや顔しながらカツコつけるお嬢様も……………イイ！』

と鼻から忠誠心が溢れていた。

確かにメル・ゼナの仕草を参考にしたからか仕草は貴族のように優雅になり、服もメ

ル・ゼナの素材によりパジャマらしさが少しだけ薄れて鎧らしさも出来ていた。

しかし完全にパジャマらしさが抜けたわけでは無いため、結局かりちゅまはかりちゅまなのだと思える瞬間であった。

そしてしばらくして復帰した咲夜からおやつ時間の為呼び出され、帰ってきていたメル・ゼナと共にティータイムを楽しむ。

メル・ゼナも紅魔館での暮らしに慣れてきたのか器用に前足の爪を使い、紅茶を優雅に飲む。

そして今日は地底まで行った為かこいしとバサルモスが背中に引っ付いており、最終的にお菓子を貰って喜び、ほほえましい光景を見せていた。

そして件のかりちゅまはと言うと………確かに優雅にお茶を出来ていたのだがやっぱり頬にお菓子の粉がついてる。

咲夜に至っては河童に作らせたカメラで軽く隠しとりしており、結局背伸びしてるのが丸わかりなのであった。

そして以前の運命がどうなるのか気になったのか、メル・ゼナの世界にある書物をつくつか八雲紫から譲り受けていたパチュリーにその話をする。

「そういえば例の運命の件、何か分かったことはあるかしら？ 私では運命を見てもこれがモンスターによるもの以外が見えなくて分かることにも限界があるのよ。」

するとパチュリーは難しそうな顔をして言う。

「そうね……正直まだ分からないことは多いわ、翻訳しながら読むから結構時間がかかっているのもあるのだけれど生態がかなり細かく書かれてるのもあつてなかなか全部読むのは難しいわね。」

専門用語も多いからとりあえず分かりやすく現状分かつていることを伝えるわ。」

「パチュリーの事は信頼してるわ、時間がかかっても良いからお願いなね。」

「ええ、任せて頂戴。」

それで本題だけれど、私としてはモンスター側、というよりは私達側といった方がよいのかしら？ それでモンスターが多種多様な群れを組んで大移動する、これについてはとある歴史書に書かれていた『百竜夜行』が当てはまると思うわ。」

『百竜夜行』？ まるで百鬼夜行のような名前ね、相手側が百鬼夜行のような状態だったから無関係では無さそうだけれどどう言うものかしら？」

「そうね、百竜、数多の獣が種に関係なく群れを作り大移動をする現象、いえこれは大移動というよりは逃げるというのが正しいわね。」

そうパチュリーは説明する。

しかしレミリアは疑問に思つて問いかける

「逃げる？何からかしら？」

「とある古龍から見たいね、一時期はマガイマガドと呼ばれる牙竜種が起こしたと思われていたのだけれどどうやら原因は二体の古龍が番を作つて繁殖しようとしたのが原因で起きた傍迷惑なものようだわ。」

パチュリーは簡単な説明をするがレミリアはそこまで疑問に思うことはなかった。

「確かに傍迷惑ね、とはいえ古龍は生きる災害とも言われているのでしよう？」

それを考えれば割とおかしくは無いのではないかしら？」

「まあそうですね。ただ引き金となつた古龍の名前はイブシマキヒコとナルハタタヒメと呼ばれる二体であり、対となる存在を探していたイブシマキヒコに巻き込まれて逃げ出したモンスターが百竜夜行を引き起こしたというのが真相みたいよ。」

ただ下手に相手をした影響なのか一部のモンスターがかなり凶暴化していたらしいわ。」

「どういう事？」

するとパチュリーは書物の挿絵の部分を見せる。

それにはどれも赤黒く染まり、血管のような物が浮き出ているようにも見えるモンスター達がいいた。

「これらはヌシと呼ばれているわ。

風神龍イブシマキヒコに挑み、大きな被害を貰ってなんとか生き残り、自分の体が回復する際に異常回復したのが原因のようなのだけれど全身が異常発達したモンスター達ね、何か怯えているようだとこの記述もあったからあまり期待しないで頂戴。」

「ええ、分かったわ。」

そしてかりちゆまはこの時……………

『ふふ、今日も私は完璧！』とどや顔をしていたのだった。

しかしメル・ゼナとパチュリーと咲夜は見かけており、

二人はジト目に、一人は鼻から忠誠心を出すことになるのだった。

百竜夜行と百鬼夜行 呼び出される百竜達

〈紅魔館〉『図書館』

紅魔館の図書館にある禁書庫、そこには図書館の管理者である魔法使い、パチュリーと館の主であるレミリアが訪れていた。

そしてパチュリーは召喚魔法書の封印を解きながらレミリアに問う。

「本当に良いのね？どんな影響があるか分かったものではないわよ？」

「ええ、そうね。」

でも私は今回は運命に素直に従おうと思うわ。

今回見た運命を大きく変えてしまった場合かなり不利になりそうなもの。」

レミリアは今回は珍しく真面目な雰囲気です。

「それほどの物を見たのね。」

そしてパチュリーは長い付き合いからこれが何か確信を持てる程の運命を見たのだと理解する。

「ええ、おそらく負ければこの幻想郷は終わりを向かえる。

私はなんとしてでも『百竜夜行』を起こす必要があるわ。

だけどそれは逃げるためであつてはならない、戦いに勝つために起こすのよ。」

レミリアは決意を抱きつつそう答える。

パチュリーは溜め息を付きながらも答える。

「八雲紫には悪いとは思うけど今回はレミィの言葉に従わせて貰うわ。」

そしてすべての魔法書の封印を解き、幻想郷にばらまく。

「なんとしてでも勝つわよ………深淵の悪魔に………」

この日、幻想郷にいる数多の実力者達の元へある書物が渡った。

そしてそれが召喚魔法の書であることが知られるのもそこまで時間がかからなかった。

管理者である八雲紫は胃潰瘍でダウンして動けない今、この召喚を止められる者は誰一人として居なかった。

この日を境に『百竜異変』と呼ばれる異変が始まりを向かえるのだった……………

く妖怪の山く

そこにはたまたま外の空気を吸いに来た野良の鬼がおり、その鬼は周囲の様子が可笑しいことに気付く。

「んあ？空が……………いや、周囲が……………紅い？」

そう、自信の周辺に紅い光が舞っており、その中には紅い蝶のような生物が何匹も居るのが確認出来る。

「酒の飲み過ぎ……………なわけねえな……………どうなってやがる？」

そして周囲の気配の異様さに鬼は気付く。

「命の気配が……感じられねえ。」

あの紅いやつ以外が居ねえ……

天狗の所は無事みたいだが、動物が……死滅してやがる。」

周辺には動物の死骸が散乱しており、それには無数の噛み傷と血が完全に抜かれた様子が見られた。

そして自分の周囲には紅い蝶……いや、紅い翼の生えたヒルが群がっている。

「なっ!?う、うぐわあああああ?!?やめる!?やめる!?やめる!?やめる!?やめる!?やめる!?やめる!?!?」

紅いヒルが群がり己の全身に噛みつき血と生気を吸うと同時に毒を流し込む

……

本来動物であればこの時点で死に至るのだが彼は鬼、強力な妖怪であることが状況をさらに最悪な物へと近付けた。

自身の毒でも死なない鬼に張り付き、血と生気を吸い続ける翼の生えたヒル達はそれを無理矢理自分の宿主にしようとさらに毒を注ぎ込み、寄生をし始める。

しかしその注ぎ込まれる毒の量はとても耐えられるような量ではなく鬼は自分の意

識を保つことが出来なかった。

注ぎ込まれた毒と力により鬼の体は変異する。

全身の皮膚は赤黒くなり、血管が浮かび上がる。

さらに頭、胴、腕、足、角に大量の翼を持つヒルが群がり、核を形成する。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

鬼は吠える。

自分を殺してくれと。

そして鬼は完全に自我を失い、凶暴化する。

『傀異化』

メル・ゼナ達の世界でキュリア達の真の宿主である深淵の悪魔の死後、自分達が生き残る為に様々なモンスターに無理矢理寄生し、大きく寿命を減らせながら凶暴化させる現象。

しかしこの現象を幻想郷で知る者は八雲紫しかおらず、その八雲紫は胃潰瘍によって動くことが出来ないでいた。

百竜夜行と百鬼夜行……それぞれがぶつかる時は近い。

かかあ天下

く人里く『東門入口』

ある日の満月の夜、人里に襲撃を行う妖怪が珍しく現れた。

今の妖怪は幻想郷のルールを守っている物が殆どであり、温厚な妖怪が殆どだからか人里に住む人もたまたま訪れていた妖怪も疑問に思っていた。

そして更なる疑問が現れる。

それをたまたま退治した人里の守護者である『上白沢 慧音』が見つける。

「これは……………鬼か!？」

「なっ?! 鬼が地底から出てきて襲撃を仕掛けてきたというのですか!？」

「いや、それにしても様子が変だ。」

それに今回は撃退する程度に力を抑え、気を失わせたのにも関わらず衰弱死を起こしている。

それに明らか耐久力が高すぎる。

これは鬼に、もしくは地底その物に何かあったのか？」

そして周囲は原因を考え始め、人も妖怪も関係なく話し合いを始めた。

「お前さん地底から出たって言ってたよな、知ってるか？」

「いや？流石にここしばらく戻ってないから俺はわかんねえ……でも俺が把握してた限り鬼に地底での生活を不満に思ってたやつは居なかったと思う。」

「怖いわあ……何が起きてるのかしら……」

「鬼って今は自分から襲うことはしないんじゃないやなかったっけ？」

「ああ、そんなことやっちゃまったら勇儀の姐さんに殺されちゃう。」

そして周囲の話し合いが収まり、意見が出なくなつた辺りで慧音は襲撃した鬼の遺体からある違和感を見つける。

「これは………噛み傷か!?しかもこんな無数に……」

明らか通常の妖怪の仕業ではないな……何か群れをなす……それも小型の生物が原因か？」

「慧音先生、確かあの鬼が襲ってくる時に何か紅い羽を持った蝶のような生き物がと周囲を飛び回っていましたか……」

「メル・ゼナ殿のキュリアか?! いや、だがあれは多すぎる。確か聞いた話では30匹しかメル・ゼナ殿は操れないとあつた上にその数が寄生出来る限界だとも新聞にあつた。

だがさっきの襲撃者は体の至るところに群がられて核の様なものを形成するくらいだつたのだ。

数が違いすぎる……」

そう、一つの核に20匹近い数が寄生しており、それが両手両足、胴体、頭部、角に寄生していた為120匹は確実にいたのだ。

「つまり……新しく幻想郷に入ってきたということなのでしょうか？」

「おそらく……だがこれは一度紅魔館に話を聞きに行く必要があるらうだ……」
そして慧音は自分の手元にある書物を見ながらそう呟くのであつた。

なお撃退方法は全て頭突きによる突進であった。

く紅魔館く『入口』

そこにはさまざまな人物達が集結していた。

人里から、神社から、妖怪の山から、地底から、冥界から。

そしていつも寝ている門番していない中国に至っては起きてしつかりと対応をし始めていた。

もはやこの時点で異変が確定したようなものであった。

「それでは皆様、ホールにてお嬢様がお待ちです。」

今回の異変についての情報を公開するつもりだそうですね。出来れば最後までお付

き合い願います。」

そう、明らかに様子の可笑しい鬼、幻想郷中にばらまかれた召喚魔法書……

全員の疑問は一致しており、紅魔館が関わっているのは明らかだったのだ。

そして一同はこの館の主であるレミリアに対して驚愕を隠せないでいた。

いつもと服装が違う、これはまあ良い。

だがいつもと一番違うのはその仕草と雰囲気だ。

いつもはカリスマの皮を被ろうとして失敗するかりちゅまが本当のカリスマを見せてつけている（気がしなくもなかった）からだ。

「ごきげんよう、やはり貴方達は異変と私がばらまいた召喚魔法書について聞きに来たのではありませんか？」

「ええ、流石になあれだけ露骨に配られればこの館に何かあるのは分かるもの」

「この魔法書はなんなのぜ？」

「そうねえ、魔法と縁のある魔法使い達ならともかく冥界や地底のこの子達もみたいだしねえ。」

レミリアはマントを翻し、出口へと向かう

「そうね、知りたいのならついてきなさい。」

今中庭である存在を……いえ、この異変の切り札になる存在を呼び出そうとしているから。」

「切り札………?」

一同は一方的に何かを知っている様子のレミアアに対していくつもの疑問が浮かぶが今はレミアアの話の聞くことを優先したのだった。

く紅魔館く『中庭』

皆が中庭に着いた頃、中庭では魔法使いのパチュリーが大規模な儀式魔法を展開しており、それを見るだけでとてつもない存在を呼び出そうとしているのが感じ取れた。

「一体何を呼び出そうとしているのよ。」

「そうね、メル・ゼナ達の世界である異変を起こした存在であり、一番契約しやすそうな巨大な二頭の古龍よ。」

そして博麗の巫女たる霊夢は正気を疑う。

「なっ?! 古龍を一度に二体もこの世界に引き入れなんてしたらどうなるか!」

「それだけ状況は不味いのよ。」

それに契約召喚だから契約以上のことは出来ないわ。

もつとも契約出来るだけの条件を出せばの話だけけど。

とりあえず見てなさい。パチュリー!」

「行くわよ……………『風神龍イブシマキヒコ』『雷神龍ナルハタタヒメ』を今ここに!!!」

そして巨大な魔法陣から想像を絶する巨大な龍が二頭現れる……………のだ
が

現れたのは蒼い龍を噛みつきながら頭を手で押さえつけて叩きのめしている黄金の
浮遊した龍だった。

鬼嫁には勝てなかったよ……………

く紅魔館く『中庭』

レミリア達が呼び出した二体の切り札……………

『風神龍イブシマキヒコ』

『雷神龍ナルハタタヒメ』

これらはメル・ゼナの世界にて百竜夜行を引き起こした原因となる古龍であり、世界でもトップクラスの力を持つ古龍……………なのだが……………

「ギユオオオオオオオ!! キュオ?」

「シクシクシクシク……………キュル?」

そこに現れたのは蒼い龍（夫）を叩きのめす黄金の龍（鬼嫁）の姿であった。

そして霊夢達は唾然としていたがすぐに再起動する。

「えーと、一応聞くのだけれどそれが切り札……………?」

「え、ええ、そのはずなのだけれど……………ええ、書物通り雄の風神龍イブシマキヒコと雌の雷神龍ナルハタタヒメの番ね……………」

「……………あ……………」

そう、番や、雄がどうなっているか等の情報から全員が察したのだった。

鬼嫁に叩きのめされているダメな夫という状況に……………

「あの一、まず取り込み中呼び出してしまつてごめんなさい。

私の名はパチュリー、・ノーレツジ、貴方達をこの場所に呼び寄せた存在よ?」

「……………キユオオオオオ」

「ギユアアアアアア?!?!……………シクシクシクシク」

すると番である夫を叩きのめしていたナルハタタヒメ（鬼嫁）はイブシマキヒコの頭部を地面にめり込ませてからパチュリーの周囲を飛び、体を反転させて逆向きにパチュリーを見つめる。

「それで要件なのだけれど私達と契約を結んでくれないかしら?」

「キユオオオ?」

「ええ、私達が望むのはこの世界にやってくる脅威の無力化を手伝って欲しいの。」

逆に貴方達に提供する物なのだけれど……」

「キュオオ」

「ギュア!? キュアアアアア!!」

「キュツ」

「ギュアアア?! シクシクシクシク」

「どうやらイブシマキヒコはかなり警戒しているようだが嫁に叩きのめされてメソメソしている。」

逆にナルハタタヒメは冷静なようだ。

「貴方達に提供したいのは安全な住みかよ、ハンターなんていう人間の皮を被った化物達から狙われる事がない安全な住みか」

「キュオオオオオ!!? キュオオオオオ!!」

「ギュアアア?!? ギュア!? ギュア………シクシクシクシク」

「フンツ」

「とりあえず貴方達が疑問に思いそうなのを答えて行くわね。」

まず呼び足したこの世界なのだけれど貴方達がいた世界ではないわ。

もしかしたら気付いているかもしれないけれどハンターといった存在も居ないから

安心して頂戴。」

「キユオオオオオ」

どうやらナルハタタヒメには好印象のようだ。

「貴方達のもう片方の番が討伐されたのは私達も把握しているわ。

貴方達は会って子孫を残したかっただけのようね。

でもその影響で騒ぎが起こって貴方達ではない方の番は討伐された。

でも安心して、この世界だと騒ぎなんてしよつちゆうだし終わつた後は皆仲直りして誰も死ぬこともないわ。

貴方達を害せる存在も殆ど居ないから安全に子供を産めると思うわ。」

「キユオオオ!?キユオオオオオ!!!」

「ギユア!?ギユa……………シクシクシクシク」

「・・・グツ」

「キユツ」

どうやらナルハタタヒメは納得したようでイブシマキヒコはまだ疑っている様子だが結局叩きのめされていた。

どうやらイブシマキヒコは立場がかなり弱いようだ。

そして私がサムズアップするとナルハタタヒメも返してくれた。

割とノリがいいわねこの子。

「じゃあ契約の魔法陣作るからそれに触れて頂戴、これは私が破った場合私にのみペナルティが課される物だから貴方達は大丈夫よ。」

「キュオオ」

「グギャツ!?!」

ナルハタタヒメは片方の魔法陣に手で触れて、もう片方にはイブシマキヒコの頭部を掴んで押し付けていた。

「契約成立ね。これからよろしくね?」

「ギユオオオオオオオ!!!!」

「……………ギユオ」

「ギユアアア!!!」

「ギユオ!?!」

ナルハタタヒメが機嫌良さそうに咆哮をあげるとイブシマキヒコは渋々といった様子で返事をする。

しかしそのすぐ後にナルハタタヒメの尻尾で体を叩き落とされていた。

どうやらこの2匹はどこまでいってもかかあ天下らしい。

すると苦い顔をしているさとりに魔理沙が気付いて話しかける。

「さとり？ どうしたんだぜ？ 苦い顔して」

「いえ……………心を読んでしまうとイブシマキヒコさん？ がかなり不憫で……………」

「どういうことだぜ？」

「いえ、イブシマキヒコさん割とちゃんと考えてナルハタタヒメさんに反論していたみたいなのですが実力で叩き潰されているのでちよつと……………」

「となるとナルハタタヒメはそんなに考えてないのぜ？」

「いえ、ナルハタタヒメさんも終始冷静でした。」

イブシマキヒコさんの意志が貧弱だったのです。」

そして難しい顔をしている霊夢にアリスが気付く。

「どうしたのかしら？ 霊夢」

「いえ……………まだ嫌な予感がどうしても無くならないのよ。」

「……………霊夢、後で私の部屋にいらつしやい？ この異変についておしえてあげるわ。」

そういうとその場をレミリアは去っていったのだった。

そしてイブシマキヒコはナルハタタヒメに電流を貰っていたのだった……………

火車の鬼火と人形使いの糸

く紅魔館く『中庭』

とりあえず呼び出した風神龍イブシマキヒコは“文字通り尻に敷かれている”がスルーしてもう一つの要件を済ませる事にした。

「とりあえず貴女達はあの召喚魔法書は皆持つてる感じなのかしら？」

「ええ、でもこれで召喚されるモンスターを私達は知らないのだけれど？」

「それについてなのだけれどね、一部は貴女達の能力と相性の良い、もしくは貴女達が抑止力になれるモンスターにしているわ。」

ヤマメとかは特にそうね。

そして殆どの物なのだけれどこれはランダムで自分に合うモンスターを呼び出すようにしてあるわ。

指定をしてあるのはメル・ゼナ達の世界のモンスターであることと召喚主の魔力や霊

力、妖力等に合わせたモンスターを自動で選ぶわ。

とはいえ百聞は一見に如かずと言うわね。

ここにくじ引きがあるからランダムの方、まあ黒の何もかかれてない表紙の本を持っている人は引いて頂戴、それで決まった二人に呼び出して貰うわ。」

「さて、何が出るのかしらね。」

「引くのだ〜」

「いやあ、自分で呼び出せるとは……………写真撮れますかねえ？」

「アタシはどうなのが出るのかねえ。」

どうやらそれぞれ自分が呼び出すモンスターがどんなものか気になるようだ。

とはいえ今回は二人に呼び出して貰う為この中の大体の者がこの日は呼び出せない。なぜなら一度に呼び出し過ぎると場所が無くなる上に管理しにくいからだ。

その為数日置きに2体ずつ召喚する手筈になっている。

そして当たりのくじを引いたのは……………

「へっ?!私?!」

「おー、アタイも当たりだねえ。

なーにが呼べるかなあ」

魔法の森に住む魔法使いであり、人形使いの『アリス・マーガトロイド』

そして地底の地霊殿にて主である古明地さとりに飼われるペットの一匹であり、火車という死体を持ち去る猫の妖怪、お燐こと『火焰猫 燐』

この二人が今回は召喚する事が決まったのだ。

そして周囲は軽くガツクリしているが二人は何が出るのか楽しみの様子だ。

「じゃあその人形使いから行くわよー、まあ割と予想がしやすそうだけれど。」

「私と相性良さそうなのがいるの?」

「ええ、それもとびきり良さそうなのがいるわよ。」

そしてアリスは割とワクワクしながら召喚魔法書を開き始める

「ふーん、じゃあ起動するわよ。」

「ええ、よろしく」

そしてまた大きな召喚魔法陣が現れ、その中からモンスターの何か飛び出す

.....

「これは.....脚? 虫の脚の用にも見えるけれど.....それに糸が被さっているわね

.....」

「ああ、やっぱりね。」

そして全身が少しずつ魔法陣から現れ始めた。

黒い甲殻の体に畳まれて小さく見える赤い爪を持つ大型の腕、そしてその頭部と脚部、腹部には服を着るように糸が大量に纏われており、腹部の後ろの方にはいくつかさの塊のような物が見える。

そしてそれはかなり大型のクモのモンスターだった。

「キシヤアアアアア!!」

「「キシヤアアアアアアアアア!!」」

「キシヤ!!」

数人の虫嫌いが叫ぶ、まあ気分は分からなくもない。

そして呼び出された蜘蛛は悲鳴に驚く。

「なんて大きさ……まるで女郎蜘蛛じゃない。」

「あああ、貴女!?あれがただ大丈夫なの!」

「え?まあ私も能力や仕事柄クモの糸とか蚕の糸とかお世話になるもの」

「はあ、とりあえず女郎蜘蛛といった例えは強ち間違えでは無いかもしいわね。」

それでこのモンスターの種族は『ヤツカダキ』、妃蜘蛛の別名を持つ鋏角種、鋏角目ヤツカダキ科のモンスターね。

『火吹き御前』とも言われる異名を持つモンスターよ。

まあ異名からわかる通り口から火を吹き、糸で獲物を捕まえたりするモンスターね、

さらに腹部にある糸の塊はこのヤツカダキの子供のツケヒバキと言うモンスターでこのツケヒバキとの連携を得意としているわね。」

「成る程、貴女が予想しやすいと言うわけね。」

同じ糸使いであり、しかも私は人形、このモンスターは自分の子供という違いはあるけれど同じような戦闘スタイル。

確かに相性は良いわね。」

「とまあこんな感じよ。」

さて、次は貴女ね。」

「スゴいもん呼べるといいんだがねえ……そうしたらさとり様に褒めて貰えるかもだしー。」

「おー、お隣がんばれー！」

「ありがとう、お空。」

それ、いくよおおおお!!!」

そしてお隣の目の前にまた大きな召喚魔法陣が現れる、しかし大きさはヤツカダキが出してきたものよりも少し小さいようだ。

「おや？ちよい小さいかね？」

「いいえ、割と標準的よ、ヤツカダキは比較的大きいもの」

そして魔法陣から黄色の三股の槍のような先端の尻尾に武者鎧のような紫色の甲殻の背中、さらに紫色の鬼火を纏った様子がみてわかる。

「はあ、貴女割と飛んでもないの呼び出したわね……………」

「へっ!? なんなんだい!? 何呼び出しちまったんだい!?」

「あ、集中切らしたらっ!? 遅かったわ……………」

「へっ!? うわっ!? なんなんだい!? どんどん小さく!?」

どんどん小さくなっていく魔法陣。

さらにそれに合わせて小さくなるモンスターの一部。

そしてそこから現れたのは……………

「にゃー」

腕に刀のようなブレード状の甲殻を生やし、武者鎧の兜のような頭部を持った虎の子供だった。

天狗と天狗、熊と熊

く紅魔館く『中庭』

「にゃーん」

「か……………可愛いじゃないか」

召喚魔法の事故により、また子供のモンスターが呼び出された。

そしてそのモンスターは紺藍色と梔子色の甲殻を持ち、武者鎧のような姿に刀のような甲殻を腕に生やし、尻尾は三股に展開したり閉じたりする事が出来る鬼火を纏った虎の子供だった。

とか鳴き声が猫であった。

「これは……………怨虎竜マガイマガドね、それにしても集中切らしたのが原因でまた召喚事故ね、これで子供のモンスターは4匹目ね……………とはいえ一匹は自然にこちらに来てるのだけだ。」

「マガイマガドかあ、カツコいい名前じゃないか。」

でもこれが成長すればカッコいいのは分かるんだが今の姿が可愛すぎてなあ。」
「後で名前でも決めればいいんじゃないの？」

さて、マガイマガドだけど

この子は『牙竜種』『竜盤目』『四脚垂目』『怨虎竜上科』『マガイマガド科』に分類されるモンスターね。

獲物を狩る際に容赦の無い苛烈な猛攻で獲物を追い詰めるその姿から『悪逆無道』の異名で知られているわ。

そしてその最大の特徴はこの子が発する『鬼火』よ、今のところ『鬼火』を扱うモンスターはこの子しか確認されて無いわ。

この『鬼火』はマガイマガドが狩った獲物の骨を消化する過程で生まれるもので自信の攻撃で爆発を起こしたり相手に付着させた状態で追撃することで爆発させ、相手に致命傷を負わせたりも出来るわ。

ただ逆に鬼火を纏っている所は強度が下がって柔らかくなる上に誘爆しやすくてそれによって自分自身が痛手を負うこともあるみたいね。」

「ゴロゴロゴロゴロ……………」

「にゃんにゃん……………ゴロゴロゴロゴロ」

「ゴロゴロゴロゴロ……………」

一方その頃マガイマガドはバサルモスと先ほど召喚されたヤツカダキの子供のツケヒバキと一緒にナルハタタヒメの尻に敷かれているイブシマキヒコの体を転がって遊んでいた。

割と温厚で好奇心もあるようだ。

「ただ個体数が割と少ないみたいで目撃情報はそこまで多くないみたいね、ただ環境適応能力がかなり高くて火山地帯や寒冷地帯でも目撃されるわ。」

それとその角は雌へのアピールに使われるものであり、一生に一度しか生えないみたいね。

基本的には獅子と似たような生態ね、雄が複数の雌を囲うタイプ。

ただ角が折れてしまうと雌へのアピールは一生出来なくなる影響か縄張りをかなり広げようと狂暴になるケースがあるみたいね。」

「この子が狂暴になる姿はなかなか想像がつかないねえ。」

しかし鬼火と来たかあ、アタシも能力的に炎や怨霊とかを操るから確かに相性良さそうじゃないか。」

「ついでにその子についての歌とかもあるみたいね

『修羅の妄執 鬼火となりて

哀れな竜に 纏い付く

「せめて一太刀」 悲壮の覚悟 鎧兜の禍威に挑むも

合唱 もはや敵無し 鬼気の餓竜』

と歌われているわ。」

「その歌からしてこの子はかなり強くなるのかい？」

「ええ、古竜を覗けばかなり上位に食い込むと思うわよ？」

「そいつは楽しみじゃないか！」

これから新しい家族としてよろしくね、マガイマガド。」

そしてマガイマガドはお燐のいる所まで転がって来て体を擦り寄せて

「にゃーんー！」

満面の笑みで鳴き声を出す。

そしてお燐はあまりの可愛さにやられマガイマガドを撫で続けている。

「ゴロゴロゴロゴロ………」

「はあ、とりあえず解散にするわよ。他の人の分は1週間後にやるからとりあえず次の分のくじ引いといて。」

「おおー！」

「次こそはー！」

「当てるぞー！」

「アタイもアタイもー！」

「「「セーラーの!!!」」」

そして盛り上がりを見せたくじ引きでは……………

「よっしやー！アタシの勝ちだ！」

「あやややや、私も当たりましたか。」

ネタになるような子が仕事手伝ってくれそうな子が出ることを願いたいですね。」

地底の鬼である勇儀と妖怪の山のカラス天狗であるマスゴミもとい射命丸だった。

「「「orz」」」

そして当たらなかった者達はまたガツクリしていたがそれでも一週間後が楽しみになっていた。

そして一週間の間……………

ナルハタタヒメとイブシマキヒコの番は場所も広く、被害が出てもすぐに元に戻る迷いの竹林を住みかとし、最近頻度が高く幻想入りするアプトノスやポポを狩って主食と

していた。

どうやら人の家畜として飼われている種のモンスターは幻想入りしやすい状況なよう
うで割と毎日幻想入りしていた。

そしてヤツカダキはアリスと共に魔法の森に住み着き、ツケヒバキの出す糸とヤツカ
ダキの出す糸の性質が違うのに気付き、両方から貰って試行錯誤をしていた。

モンスターの出す糸はかなり強度があり、加工は難しいがアリスにとっては最高の研
究材料になるようだ。

最近ではアリスから貰った自分達のぬいぐるみがお気に入りらしく、自分の巣に大事に
飾っている。

そしてマガイマガドはお隣達と共に地底の地霊殿に住み着き、バサルモスやガラング
ルムと共によく遊ぶ姿が見受けられた。

そしてバサルモスの上に寝そべって二匹揃って歌ったりする姿もたまに見られて地
底はかなりほっこりしていた。

そして一週間後、また召喚の日がやってきた。

また紅魔館に数多の妖怪や人、モンスターが集まっている。

「にゃーんー！」

「グルル……」

マガイマガドはメル・ゼナにかなり懐いており、一緒にいさせるとよく背中にしがみついていた。

メル・ゼナも満更ではないようだ。

そして空気を変えるためパチュリーが仕切り、声をかける。

「さて、とりあえず今回は説明とかはもう済んでるからちやちやとやるわよー。

とりあえず勇儀とこの天狗は一緒にやっちゃつて。

わざわざ一人ずつつてのも時間かかるもの。」

「あいよ。」

「わかりましたー。」

そして2つの召喚魔法陣が現れ、モンスターが片方だけ姿を表す……………

その姿は全身が傷だらけで黒ずんでおり、赤黒い血管のような光が様々な所から見えている。

腕は著しく発達しておりかなり刺々した硬い腕甲があった。

そして甲殻は少なく、毛皮に覆われており、その姿は熊に酷似していた。

「グルアアアアアアアアアアアア………グルアア!?
!!!

((; 口)) ガクガクブルブル」

その熊は周囲を威圧するような咆哮をあげるがイブシマキヒコを見た瞬間めちやくちや怯えた様子を見せていた。

そしてもう片方の魔法陣は詰まっているような様子であり、いきなりスポンと抜け出すようにその姿を表した……………

「ウキー！ウキヤキヤ！！ウツキヤアアアア！！……………ウキ？」

「ウキヤアア！ウキキ！ウキヤア……………ウキ？」

それは喧嘩をしてお互いを掴み合う、翼と尻尾の先端が手のような形状をしており、その頭には嘴のような形状をした緑色の天狗のような猿と緋色の天狗のような猿だった。

メル・ゼナはお仕置き役

〔紅魔館〕『中庭』

この日紅魔館では二人の召喚により3匹のモンスターが召喚された。

ただメル・ゼナにとって見覚えがあつたのは一匹だけで、城塞高地で唯一生息していたのは緋色の翼の生えた猿のようなモンスター、ビシユテング亜種のみだった。

逆にいえばメル・ゼナは原種は見たことなく、ビシユテングⅡ亜種のイメージで定着してもいたのだ。

そしてもう一体いる大きな赤黒い熊のようなモンスター。

これについては姿だけは少し見覚えがあつた。

ただメル・ゼナが見覚えがある個体はあんな赤黒い色はしておらず青色の毛に黄色の甲殻を持つており、全体的にもあの個体よりかなり小さかった。

特に腕の違いが顕著であり、あの個体はあそこまで腕が発達してなかった覚えがある。

そしてその赤黒いクマのモンスターはイブシマキヒコを見て怯えていることから全

身に無数にあるあの傷跡はあれとは別個体のイブシマキヒコにつけられたものでは？と疑問に思った。

とはいえずつと考えていては自分の体で遊んでいる子供たちをほったらかしにしてしまう為、考えるのは程々にして子供達の相手をする。

あ、キュリアがマガイマガドに噛まれてる。

その子食べちゃダメだぞー。

メル・ゼナは何故か子供モンスター達にやけに人気があり、もはや立ち位置的にはお父さんのようになっていた。

パチキュリーside

「ウキー！ウキヤキヤ！ウキヤア！ウキキ！」

「ウキキ！ウキヤアアア！！ウツキヤアアア！！」

「これは猿……………なのでしょうか？でも嘴があつて天狗みたいにも見えるのでなんか複雑です。」

そこには「二匹」の天狗獣と天狗が一同に集まっている珍しい光景があった。

しかし本来天狗が呼び出そうとしたモンスターは一体なのだが現実として二体呼び出されていた。

『これは新しいパターンの事故ね、恐らく本来呼び出そうとしていたモンスターにもう一体が掴み合いをしていた所を呼び出されて掴んでいたモンスターが離さなかったといった所かしら？』

もしくはこの二体同時での召喚が狙われた可能性も無くはないけどどちらかという
と前者のが可能性が高そうね。

魔法陣詰まっただし……………」

そしてパチュリーの予想は実は当たっており、本来呼び出されるのは原種の方だけ出会ったのだが、その時ビシユテンゴ亜種と呼び出される原種が喧嘩しており、掴み合いになった所で召喚が発動した為詰まったのだ。

しかしモンスターの力は魔法で引き剥がせる程弱くなく、最終的に不具合を起こす前に魔法陣側がもう片方も召喚したのだった。

「おいおい？大丈夫かい？」

あのイブシマキヒコのなににそんな怯えてるんだい？」

「() ; ㇀ () ガクガクブルブル」

あれは………：そういうえばヌシ個体はイブシマキヒコの移動に巻き込まれて大ケガを追って進化した個体だったわね。

「その子の全身の傷がすべてあのイブシマキヒコ、といっても別個体でしょうけどそれによって付けられたものだからよ。」

「パチュリリー？ なにか知っているのかい？」

「ええ、そのこの子の名前はアオアシラ。」

別名『青熊獣』の名を持つ『尖爪目』『堅爪亜目』『熊獣下目』『アシラ科』に属する牙獣種よ

『大食いの暴れ熊』の異名でも知られているわ。」

すると勇儀は首をかしげながら聞く。

「アオアシラ？ 青熊獣？ 全然青くないじゃないか。」

「ああ、その個体はヌシと呼ばれる個体なのだけれど現在確認されているヌシ個体ってというのはイブシマキヒコの引き起こす災害に巻き込まれて全身に大ケガを追って回復する時に異常な発達を見せる個体なのよ。」

だから名前としては『ヌシ・アオアシラ』が正解なのだけれどヌシ全員が共通する特徴として全身が赤黒く染まると恐怖と怒りの感情に支配されるのよ。

色については恐らくこれは血の浴びすぎだったり全身の血管が活性化しているからだと思うわ。」

「はあ、それでそれでこんな色な上に怯えてるわけかい」

「それで天狗の方だけけれどその子達は『尖爪目』『飛膜獣亜目』『天狗獣下目』『ビシユテング科』に属する牙獣種のビシユテングとその亜種個体であるビシユテング亜種ね。」

原種は『天狗獣』、亜種は『緋天狗獣』の異名で知られるわ。

どちらも悪戯好きの性格をしていて危険度としては亜種の方が高いのだけれど厄介さなら原種が上だったりするわ。まあこれで傍迷惑は天狗にまた傍迷惑なコンビが組合わさったわけね。」

「ちよっ!? 誰が傍迷惑ですか!?!」

「ウキー!?!」

「あら? ずいぶん息がびったりじゃない。」

案外悪くないコンビになるんじゃないの?」

そして今度はアオアシラと勇儀の方から怒号が飛んで来る。

「アンタはそのまま恐怖で怯えてなにも出来なくてもいいのかい!?! 折角そんな力を持つんだ! もっと強くなって怯えないで済むようになりたくないのかい!?!」

「グオオオ………グオオオオオオオオ!!!!」

「いい拳じゃないか！もつと殴りあつて強くなるうじゃないか！！」
そして天狗獣達は……………

「ウキー！ウキヤキヤ！！ウツキヤアアア！！」

とても大きな柿と松ぼっくりを投げ合っている。

迷惑ね……………

「メル・ゼナ、お願い出来る？」

するとメル・ゼナは溜め息を付きながらキュリアをこっさり近付かせて暴れてるやつらに取りつかせて倒れるまで生気を吸いとった。

「はあ、暴れるなら外でやりなさい……………」

「グオオオ……………ガクツ」

「ウキヤア……………ガクツ」

「ひでえじゃないかい……………」

「……………はあ」

先が思いやられるわね。

將軍と唐傘お化け

（白玉楼）

「はっ！はっ！はっ！………」

冥界にある白玉楼……

そこでは庭師である半霊、『魂魄 妖夢』。

彼女はいつも庭の手入れを行った後に剣術の鍛練を行っていた。

彼女は庭師であると同時に剣術指南役でもあり、白玉楼の主である『西行寺 幽々子』を守る役目も持っていた。

その為、自分の剣術の鍛練は欠かさず行っており、この日もいつものように鍛練を行っていたのだが………

ガキンツ！！キンキンキンツ！

「はっ！はっ！は………今の音は？」

鍛練をしていると外から剣と剣を勢いよく擦り合わせたような金属音が響く。

しかしそれは人が戦っているような速さの音ではなく、かなりの速さで鳴らし続けていた。

ギユイイイイイイ

何かの鳴き声のような音が響く、しかしそれは一や他の動物、妖怪でも聞いたことのないような独特なものだった。

「何かいる………侵入者？」

生命の反応を検知する………本来冥界には生きるものは存在せず、亡霊や半分が霊としての性質を持つ半霊といった死の性質をもった者達が住みかとする場所であり、命ある物は基本的に居ないのだ。

その為、ここに生命の反応が出たという事はそれはこの冥界に何者かが外から訪れたという事になる。

そして音のする方角に飛び続けて十数分後、その正体が明らかになった。

「ヤドカリ？にしては大きすぎますし背負っているものがおかしい………まさか!」

そう、その姿は巨大な蒼色のヤドカリだった。

しかしその背負っているヤドは貝殻ではなく竜の頭骨であり、その手は折り畳まれているが鎌のような形状をしていた。

このような生き物は動物にも妖怪にも居なかったと記憶している。

そして鎌の刃の部分をよく見ると鈍色の光を反射しており、まるで名工の鍛え上げた刀の刀身のようにも見える。

そして背中に背負う竜の頭骨。

竜……つまりメル・ゼナ達の世界に多く生息する竜である。

そこから妖夢はこのヤドカリ？がモンスター的一种であることを気付く。

そして向こうも自分の存在に気付いた様子だ。

そして……

ジャキンツ！ブオンツ！

自らの鎌を展開し、妖夢へとその切っ先を向けた。

まるで妖夢に対して勝負を挑むと宣言するかのよう。

「私との勝負がしたいわけですか、良いでしょう！あなた達の鎌と私の刀、どちらの技量が

上か勝負と参りましょう！」

「ギューイイイイイイ！！！！」

そして妖夢も抜刀し、その鎌に自らの刀を合わせる。

次の瞬間互いにバックステップを行い、獲物を構える。

ヤドカリのモンスターはその鎌を大きく広げ、妖夢は二刀流にて迎え討つため。

そして勝負は動き出す。

「いざ尋常に！」

「ギューイイイ!!」

「勝負!!」

「ギューイギューイイイイイイ!!」

妖夢の言葉を合図にお互いが同時に仕掛ける。

そして幾重にもおよぶ刀と鎌による罅迫り合い、しかし妖夢は気付いていた。

『このヤドカリ……………あまりにも戦いが上手い……………刀を合わせても瞬時に受け流される!!』

そう、罅迫り合いを起こしてはいたがその殆どがその鎌の曲線を利用して受け流されており、もう片方の鎌による追撃によって妖夢は大きく消耗させられていた。

『それに加えて一撃一撃がとてつもなく重い上に私の攻撃で傷ひとつですら付けられない……………なんて硬さをしているの……………あの鎌は』

簡単に受け流されるその理由はその鎌の硬さにもあった。

妖夢は刀の刀身を鎌の刀身に対して当てている為、少しでも傷が付いたのなら鎌に引つ掛かり、受け流される事はそこまでなかっただろう。

しかし実際はなにも手応えなく受け流されている。

『このままでは私のスタミナが先に切れる……………』

妖夢は鎌による反撃を受け止める際にかかなりの消耗を強いられており、限界も近付いていた。

そしてあのヤドカリのモンスターには疲労の様子が見られない。

『力も技量も何もかも私を上回っている………一体どれだけの研鑽を積みばここまで………』

そしてヤドカリのモンスターもそれが分かったのかその猛攻を一度やめ、後ろに下がる。

「なにを………っ!？」

その瞬間、とてつもない殺気がこちらに向けられる。

あのヤドカリは鎌を後ろに回し、その頭骨の歯の部分に噛ませる。

ギチギチギチギチ………

『まさか………抜刀の構え!？』

そう、ヤドカリのモンスターはその頭骨に鎌を噛ませる事でそれを引き抜く反動により神速の一撃を繰り出そうとしていた。

「ならば………」

そして妖夢も最強の一撃をもって勝負を決めにかかる。

しかしそこについさつき現れた一人と一体の気配にお互いに気付かずに………

「人鬼！未来永劫z……!!」

「ギユイイイイイイ!!」

「驚けええええ!!」

「キョアアアアア!!」

「みよん!」

「ツ!?スポン!!!」

いきなり現れた影に妖夢は不意を突かれて変な声を出す。

ヤドカリのモンスターに至っては上に飛び、ヤドもスポンと抜けて將軍様の”將軍様”が見えてしまっていた。

そしてそこには飛び出してきた傘のような形状の鶏冠を持った巨大な鳥とその背中に乗った変な傘を持つ少女がいた。

将軍と唐傘お化け その2

（白玉楼）

白玉楼の中庭の外、花見や宴会に使われる開けた場所。

そこでは今、庭師兼剣術指南役である魂魄 妖夢と、どこからか迷い混んだ鋭い鎌を持ち、背中にはヤドとして大型の竜の頭骨を背負ったヤドカリのようなカニ、『十脚目』『短尾下目』『鎌蟹上科』『ギザミ科』に属する甲殻種、『シヨウグンギザミ』

その特殊個体である『鎧裂シヨウグンギザミ』がその鎌と刀による真剣勝負をしていた……………のだが

「驚けえええええ!!!」

「キョアアアアアア!!!」

「みよん!」

「ツ!?(スポーン!!!)」

お互いが必殺の一撃で勝負を決めようとしていた時、あまりにも集中しすぎてお互い気付かなかつたようで、いきなり現れた乱入者に変な驚き方をしていた。

妖夢はまるであるお粗末な兄弟の話に出てくるシエーのようなポーズを取ってみよんな声を出していた。

そしてシウウグングザミは飛び上がり、ヤドの頭骨でその鎌を挟ませていたのが原因か、鎌も一緒に上に上げた拍子に、ヤドもスポンと抜けてしまっていた。

お陰でシウウグングザミの將軍様がモロ見えてしまっている。

そして驚かしていた当の本人はというと………

「あははははっ！ねーねー鳥さん！みよん!?だつて変な驚き方々。

それにおつきなヤドカリみたいなのもヤドがスポンって抜けちゃった！あはははははー！」

「キヨキヨキヨキヨ♪」

「はあくく、お腹いっぱい！こんないっぱい驚きの感情食べられたの初めてだよお。

鳥さん！ありがとー！」

「クエエエエエ」

そこには目の模様と口が書かれており、その口から長い舌が立体的に飛び出している変な傘を持った水色のショートボブの髪に赤と水色のオッドアイの少女、『多々良 小

傘』の姿があった。

そしてもう一体の大きな鳥、白い羽毛のような鱗と末端に近付くにつれて赤みを帯びる翼、口紅を引いたかのように赤く縁取られた細長い嘴、先端部が鉤状に曲がった尻尾、そして後頭部に備わる傘のように展開する巨大な鶏冠が特徴の鳥竜種、『竜盤目』『鳥脚亜目』『鳥竜下目』『アケノシルム科』に属する傘鳥の別名を持つアケノシルムの姿があった。

そして小傘は彼らが居るところとは全く違う方向を向き、大きく声を出す。

「こいしちゃん!!大成功だよー!!」

「やったああああ!!!やっぱおっきな鳥さんだし驚くと思っただよ♪ねー?バサルモス?」

「グオウト」

そしてその方向の茂みから地底の地霊殿に住む心を閉ざした覚妖怪であり、地霊殿の主の妹である古明地こいしと、そのペットである岩竜バサルモスの姿があった。

そしてバサルモスは初めて確認された頃より明らかに大きくなっており、今ではこいしが

ギリギリ抱えられる大きさになるまで成長していた。

「あ、あああ貴女達!?!下手したら今ので私たちの攻撃に巻き込まれていたんですからね

!?!なにをやっているのですか!?!」

「ギユイイイイ!!」

そして妖夢は慌てて取り繕い、危ない事をした小傘達を怒る。

そしてシヨウグンギザミも鎌を使って何度も×印を向けていた。

「えー、だってこいしちゃんも面白く驚き方して驚かすのがすごくちよろい庭師が居るって聞いて」

「ちよろい!?!ちよろいって言いましたか今!?!」

妖夢は怒るが、何も言い返せない辺り自覚が無いわけではないようだ

「あとそのヤドカリ?さんはヤドが脱げてるけどいいの?」

そう、そこにはヤドが取れて將軍様がモロ出ているシヨウグンギザミの姿がまだあった、シヨウグンギザミは後ろに鎌を回してヤドがあるかを探すか………

「ギユイイイイイイ!!」

まあ外れている為当然無い。そしてシヨウグンギザミは地面に潜り始め、完全に潜り切ったあと、落ちたヤドの辺りにある地面から鎌だけをだして引きずり込み、それを地面の中で背負ってから地上に出てきた。

「やはりヤドの所にあつた色の違う大きなコブが弱点なのでしょうか?」

等と妖夢がみよんな事を考えていると白玉楼の方向から声がする。

「妖夢く、どこにいるのかしらく? ご飯はまだかしらく?」

そこには腹を空かせた白玉楼の主、西行寺幽々子の姿があった。

「あつ!? もうこんな時間!? 今準備しますのでお待ちください! あ、貴方も手伝って貰ってもいいでしょうか? これからかなり大きなものを捌くので貴方の鎌を貸してください。」

「?」

シヨウグンギザミの背負う頭骨が首を傾げた。

しかし妖夢の真剣な表情を見たシヨウグンギザミは妖夢の後を付いていく。

そして白玉楼の調理場を外に用意し、そこに巨大なメイン食材を運び込む。

それはとてつもなく長い首を持つ大型の草食竜、リモセトスが3匹も並んでいた。

「貴方はこの水でその鎌をキレイに洗ってからこの食材を骨と身に分けてもらえますか? 私は……………貴方の大きさに出来ない細かい部分をやりますので……………」

その……………すぐく大変だと思えますけど頑張りましょう……………」

何故か覚悟を決めている妖夢の姿に再び頭骨を傾げたシヨウグンギザミ。

そしてこれがあれほどまでの地獄になるとは思いもよらなかつた……………」

もはや恐暴竜なユコジョー

く白玉楼く『調理場』

そこでは、一人の半霊と一匹のカニが悲鳴をあげながら料理をしていた……………

「ぬおおおとおおとおおとおおとおおとおお!?」

「ギユイイイイイイイイイイイイイイイイ!??!?!?!」

いや、悲鳴というかもはや雄叫びだった。

そしてリモセトスを解体していたショウグンギザミの横には骨だけになったリモセトスが10匹分横たわっていた。

そう……………10匹である。そしてまだ続いているのである。

そして調理を続けている妖夢の横にはもはや山のように積み重なった食材が並べられており、妖夢は分身してるようにも見える速度で料理を続けていた。

「あわ!?あわあわあわわわ!?」

「クエツ!? クエクエエエエエエエエエエエ!?」

そしてたまたま様子を身にきていた小傘も手伝わされており、30秒で出来上がる大盛りの料理を運び、10秒程で完食された皿を持って戻ってくるのを繰り返していた。

そして妖夢はそれを秒で洗って皿に盛り付ける。

もはやシヨウグンギザミとの戦いよりも速く動いていたがこれに気付ける余裕のあるものは一人も居なかった……

いつもならリモセトス3匹分も肉があれば幽々子は満足するのだが、今日はまったく満足する気配がない。

理由は単純であり、リモセトスの肉が美味すぎて幽々子の食欲が異常に刺激されたのである。

そもそもモンスター達の世界で料理はあるが比較的シンプルな物が多くなる。

なぜなら主食としているモンスターの肉や、育てられた野菜がどれも規格外の美味さをしているからだ。

モンスターは豊富な自然から程よく肥える程大量のエサを食べており、肉食モンスターから逃げたりする際にその肉は引き締まり、旨味を増すのだ。

そして野菜はそんなモンスター達のフンや亡骸等を肥料として用いるため、とてつもなく肥沃な大地で育てられている。

その為どれも規格外な大きさに育ち、その身にとつともない栄養価と旨味を蓄えるのだ。

狩人に至つては主食をただ焼いただけの肉にする程であり、それで簡単に満足出来てしまうほどののだ。

そんな現実離れた幻想的な旨味の料理を食べた結果が今の地獄である。

そしてそんな幽々子の目は赤く光っており、運ばれてくる料理にがつくその姿はかの恐暴竜を彷彿とさせる。

もはや意識が飛びながら食べているのである。

そして2時間後、リモセトスが使いきられ、食材も底を尽きた為か幽々子は幸せそうな顔で気絶していた。

そして料理が続いていた妖夢達かというと……………

「…………… (ピクピク)」

「…………… (ブクブクブクブク)」

「…………… (ガクガク)」

「…………… (ゴポゴポゴポ)」

全員グロッキーになっていた。

妖夢は地面に倒れて痙攣しており、シヨウグンギザミは泡を吹いて動かなくなり、ヤ

ドがズレて將軍様がチラ見えていた。

小傘はもうひとつの本体である唐傘を杖にしてようやく立てているが足が痙攣しており、アケノシルムに至っては池に倒れて嘴が池の底に突き刺さっていた。

そしてそんな様子を無意識状態になり隠れて覗いていたこいしとバサルモスはお互いに抱きつき合いながら恐怖に震えていた。

『逃げて正解だった……………けど見なきやよかった……………』

こいしは無意識の能力に対して初めて感謝しており、同時に興味本意で覗いたことを珍しく後悔した。

そしてシヨウグンギザミの横なのだが……………合計30体におよぶりモセトスの骨がそこにあつたはずなのだが食べ終わつた後、幽々子によつて喰らい尽くされていった。

そしてそんな様子をマスゴミ+猿コンビがこっそり覗いていたのだった……………

そして翌日……………

「ウツキイイイイ!!!」

「ぶべっ!?!」

顔面に新聞を投げつけられて妖夢はその衝撃により起床する。

そしてその前には『ごうがーい、号外ですよー♪』と楽しそうに飛ぶマスゴミの姿と大量の新聞を持ち、冥界の亡霊達の顔面に新聞を投げつける翼を持った猿、ビシユテンゴ達のコンビがあった。

そしてそこには……………

『く号外く白玉楼の暴食亡霊

先日私は冥界の取材にて恐ろしいものを見てしまった。

それは良く幻想入りする種として最近知られているリモセトスが30匹が一人の亡霊によって喰らい尽くされる姿であった。

リモセトスはかなり温厚な種であり、食肉加工も出来るとは知っていたがここまで亡霊が食べるとは誰が予想したであろうか。

それに加えて亡霊の料理を作り、運んでいたこの写真の者達は限界を超えて料理を作っていたらしい。

もし亡霊が人里に来るような事があれば料理店や食材を売る店はすぐにでも店を閉じた方が良いでしょう……………

本新聞では以下略』

ビリツザクツ

そしてシヨウグンギザミを起こして新聞を見ていた妖夢とシヨウグンギザミは怒りに新聞を破り、串刺しにしていた。

「今夜は焼き鳥でいいでしょうか？」

「ギユイイイイイイイイ!!!」

哀れマスゴミはまたもやボコされる道を自分から切り開くのだった。

つよくいきろよ……………

人形使いと妃蜘蛛

「魔法の森」『アリスの自宅』

人間は呼吸をして吸い込むだけで体調を崩すような有毒な胞子を撒き散らす化物キノコが多く生息し、人妖問わずあまり近付こうとしない魔法の森。

しかしこの魔法の森の毒や瘴気に対して耐性を持ち、余裕で耐えられる妖怪や人等にとっては都合の良い隠れ蓑にもなり、そこには二人の魔法使いと一匹のモンスターが住み着いていた。

一人は人間の魔法使いのドスメラルーこと霧雨魔理沙。

そしてもう一人は「種族」としての魔法使い、「アリス・マーガトロイド」と彼女が召喚したモンスターである『妃蜘蛛ヤツカダキ』であった。

他にも何人か住み着く人妖はいるが、ここでは割愛させて貰う。

そして魔法の森にある幻覚作用を持ったキノコ等は魔法使いとしての力を高める効果もあるため、魔法使いはこの森に必ずと言ってても良い程訪れやすい。

そして最近召喚されて住み着いたヤツカダキは……………

「あらう？今日はずいぶん掛かっているわね、あ、それは妖精で食べても意味ないから放しといて良いわよ。」

その妖怪は無断で侵入したみたいだし食べちゃっても良いわよ。

あ、その鹿っぽいやつは頂戴、角が秘薬や魔法の材料になるし肉がおいしいのよ。」
「シヤアア」

アリスの家の周辺、縄張りとする部分に住み着き、様々な場所に子供のツケヒバキを放つて罫を張らせていた。

そしてそれで捕まった獲物は基本的に好きにして良いが間違えて知り合いが捕まる可能性もあるため一度アリスに確認をして貰っていた。

そして食事を終えた後は縄張りの中にある岩などをかじり、外骨格を形成する為のミネラルを補充したり、アリスに糸を提供して人形を作る姿を見学したりしていた。

本来ヤツカダキは火山地帯等の限られた地域でのみ生息しており、性格も凶暴でとても制御出来るようなモンスタ―では無いのだが魔法により召喚された個体の為かアリスに対して強い繋がりのような物を感じており、アリスの指示には従っていた。

そして最近プレゼントに貰った自分達の糸を使って作ったミニチュアのヤツカダキ&ツケヒバキ人形を大切にしており、糸で作った自分の巣に丁寧に飾っていた。

アリスとしても自分が余計な侵入者に気を取られずに済む上にモンスター系の糸という特別頑丈でキレイな糸を使わせて貰っている為かこの共存に対しては大満足していた。

そして同じ糸を使う者同士ということもあり、ヤツカダキ達はお互いの糸の使い方に興味を示して教えあっていた。

アリスの糸の使い方は傀儡のような形で人形の各部位を操り、戦わせるといふもの。

それに対してヤツカダキの使い方は子供であるツケヒバキに糸を巻き付け、飛ばす事で自分を引っ張らせて素早く移動する事に使ったり、相手を拘束する事にも用いたり、四本ある足それぞれから生える曲がった形状の棘である『鉤棘』に自分の糸を引っかけて衣のように全身に糸を纏い、鎧のような役割を持たせたりしていた。

さらに自身の糸が度重なる戦闘によりほどけてしまい、本来の姿を晒した後は腹部である灯腹と呼ばれる部位に大量の糸を巻き付ける事で、ハンマーのように叩きつけて武器としても扱ったり、灯腹にいるツケヒバキ達や、卵を守ったりする役目も持っていた。基本的にヤツカダキは身を守る事や子供との連携による糸の使い方をしており、お互いに違うスタイルでの使い方をしていたのだった。

試しにアリスが防御として糸を扱ってみたり、ヤツカダキが罠に掛かった妖怪を傀儡のように操ったりしようとしてみるがこれがなかなか難しく、お互いに悩みつつ教えあ

う、そんな関係になっていた。

そしてヤツカダキが試しに人形を作っていた時だったのだが……………

「うわあああああ!?なんだこれ!?糸か!?

つてことはアリスか!?

おーい!!!アリスー!!居るんなら返事してくれー!つか助けてくれー!!」

自分の張った罫に誰かが掛かる音がする。

アリスに教えて貰った鳴子という仕掛けのお陰で遠距離で掛かっても簡単に気付ける為、ヤツカダキは重宝していた。

そしてアリスを呼び、声がした方に折り畳んでいた爪を伸ばして教えるとアリスと共にその方向に向かう。

そしてそこに居たのは……………

「なにやってるのよ魔理沙……………」

「おーい、アリス……………」

これ恥ずかしいからほどいてほしいんだぜ……………／／／

何故か亀甲縛りにされて拘束された知り合いの人間であり、魔法使いの魔理沙の姿だった。

確かにヤツカダキにいろんな縛り方等を教えた記憶はあるが、亀甲縛りまでは教えた覚えは無かった。

そして一匹のツケヒバキが罨の上から降りてきて爪を片方上げてサムズアップするようなポーズをとる。

それにヤツカダキは首を傾げていたのでどうやらこの子が自分で仕掛けていたのだろうか？

「ヤツカダキ、貴女この罨は自分で作った覚えある？」

「……………（ふるふる）」

ヤツカダキは首を横に振る、そうなるよこのツケヒバキがやったのだらうと確信が取れた。

「この子案内系の扱い上手くなるんじゃない？」

あれつて一応かなり難しい縛り方な上に罨として作るのはかなり難しいもの。」
「シヤアアア……………」

そしてヤツカダキは子供の成長が楽しみなのか腹部の上に子供を乗せて生活するようになった。

そして魔理沙はいつも本を盗んでいく為にお仕置きとして1日放置を食らったの

だった……………

「おーい……………そろそろ漏れそうなんだが……………
助けてなのぜー……!!!」

黒き青熊と地底の星熊

く地底く『旧都の外側』

地底、旧地獄とも呼ばれるこの地には地上を厭い移住してきた地上の妖怪と、忌み嫌われて封印された妖怪、そして地底にて生まれ育った妖怪と動物等、さらには地霊やこの地に蔓延る亡者や怨霊が住み着いている。

そんな地底を住み処とする鬼のリーダー格の一人、『星熊 勇儀』。

そんな彼女は数日前、かなり大型のモンスターを新しく地底に連れてきて自宅に住み着かせている。

そのモンスターは全身を黒い甲殻に黒い毛皮、全身に負った嵐に飲まれたような無数の傷跡からは赤い光を放っている。

さらに腕は異常に発達しており、その怪力で腕を振るうだけで小規模な風圧を引き起こし、鬼ですらその風圧には怯む程だ。

名を『ヌシ・アオアシラ』。

百竜夜行を引き起された際に出現し、モンスターの群れを統率する個体としてとある里に逃げ込むように襲撃してきた。

その危険度は元々アオアシラという危険度が比較的低いモンスターでありながら古龍に匹敵する程の力を秘めている。

そしてそんなヌシ・アオアシラと勇儀なのだが……

今は地底の旧都にある岩場にて喧嘩を行っていた。

「オラオラア！ どうしたあ!? そんなもんじゃないだろう!？」

「グオオオオオオオオオオオオ!!！」

アオアシラが一步踏み出す度に地響きを引き起こし、腕を振るう度に風圧による風が吹き荒れる。

そしてそんなアオアシラが凄まじい速度でラツシュを繰り返しており、勇儀が距離を取ろうと後ろに飛ぶとジャンプをしてすぐに距離を詰めると同時に地震を引き起こす。

そんな猛攻を受け続けている勇儀だが、すべての攻撃を受け止めており、カウンターを行っている。

しかしヌシ・アオアシラの分厚い毛皮や硬い甲殻に阻まれ、まともなダメージを与え

られずにいたがヌシ・アオアシラの攻撃も防がれてしまい、ダメージを与えられずにいた。

この圧倒的な身体能力と硬い肉体によりヌシ・アオアシラは地底の最強格になっていたが、勇儀相手には互角の戦いを繰り広げていた。

勇儀の全力による一撃であればヌシ・アオアシラにも致命傷を与える事が可能なのだがヌシ・アオアシラはこの図体で素早く動く事が出来、攻撃時以外にまともな隙はなく、その攻撃も勇儀は防がなければかなりの痛手になるため、有効打が出せずにいるのだ。

そしてヌシ・アオアシラも同様に大技を出せずにいた。

『ヌシの大技』と呼ばれるそれは、とてつもない威力を誇ると共に大きな隙を生んでしまうのだ。

しかしこれまでの喧嘩の経験からそんな隙を見せたらこちらがやられるのを本能的に理解しているのか隙の少ない小技を実戦により訓練していたのだ。

そして本来ヌシ・アオアシラは無数の傷跡の痛みにより怒りと恐怖に支配されて冷静な判断など出来ないのだが、この個体は百童夜行が終わった後も生き残り、傷跡が古傷となる程癒えた個体の為かアオアシラ本来の性質を取り戻していたのだ。

さらに大暴れしていた反動からかなり大人しい性格になっていたのだが、イブシマキ

ヒコの恐怖を思いだし、屈しかけていた所を勇儀によって発破をかけられ、もう負けなために訓練をしているのだ。

そして勇儀は良い喧嘩友達が出来た事に喜んでいたが、同時にかなり強力な強敵であることに軽く焦っていた。

『いつてええ……動きは比較的遅いからなんとか防げてはいるが衝撃が骨まで来やがる。』

なんつうバカ力してるんだいこいつは……

力だけで見ればアタシと同等だが力の入れ方が違うねこれは……一撃一撃がアタシより重いじゃねえか……

これが道楽で喧嘩をしてきた鬼と過酷な生存競争を生き残るモンスターの違いって訳かい……』

そう、鬼は喧嘩＝趣味や道楽の一つという考えもあり、本気で殺しにかかることはまずないのだ。

しかしモンスターは違う。

生き残る為には相手を殺すかにげるしか無く、判断を間違えればそれが死に繋がってしまうのだ。

そんなモンスターの力は己と同じ大型のモンスターを殺すためにとてつもない力を

得るのだ。

さらに自分より大きなモンスターを怯ませる為にはより強力な一撃を入れる必要があり、どんな攻撃ですら人間相手なら必殺の一撃になるほどだ……

それを狩るハンターはやはりモンスター（な）ハンターと呼ばれるのも理解できる。そしてそんな二人が喧嘩をしていたのだがお昼頃になると……

「おーい、勇儀く、アオアシラく、ご飯の時間だよー!!」

「グオツ♪」

「おやなんだい？もう終わりかい？」

「終わりかい？じゃないよ勇儀く、毎回毎回どれだけの規模の喧嘩をしてるんだい。

いつもいつも地形が変わってるじゃないかまったく！」

そう軽く起こりながらご飯の時間の為呼びに来たのは、地底に住む土蜘蛛の一人である黒谷ヤマメであった。

「はい、アオアシラ。いつもいつもお疲れ様。

地上から仕入れてきたハチミツと鮭だよ。」

「グオオオオオオオオオオオオ♪」

「相変わらずそれが好きだねえ。」

はい、勇儀はおにぎりね。酒に合う味にしといたから感謝しなよ？あんたはいつもご飯変わりに酒のみかおつまみくらいしか食べないんだから。」

「あつははははは！いつもすまないねえ。」

「まったく！」

アオアシラは勇儀との喧嘩を負えた後はいつも地底ので建築等を手伝っており、給料の代わりに地上から仕入れるハチミツと鮭を貰っていた。

この2つはアオアシラの大好物であり主食な為、アオアシラも真面目に働いており、地底の皆からは愛されていた。

ただ以前勇儀が酒を飲ませた時には大惨事になった為、酒を飲ますのだけは絶対にダメという暗黙の了解も出来た。

そう………又シ・アオアシラは地底での暮らしにすっかり馴染んでいたのであった。

火車と怨虎竜

地底へ『地霊殿』

地底を管理する覚妖怪達が住む地霊殿。

その中庭では主人の妹とそのペット、そして主人のペットとそのペットのペットが遊んでいた。

「にゃん！にゃ?!にゃにゃにゃ?!にゃん！」

「ぐおお………（ゴロゴロゴロゴロ）」

「ほれほれー、後ちよつとだよー！がんばれー！」

「ふっふっふー（スッ）」

そこでは、手に焼き魚を持った火車の妖怪、地霊殿の主である古明地さとのペット、

『火焰猫 燐』。

通称お燐と、無意識状態で手に猫じゃらしを持って待機する地霊殿の主の妹、『古明地 いしし』。

さらにお燐のいる所に転がりながら向かうこいしのペットである岩竜『バサルモス』の赤子レベルのサイズをした子供。

そしてその転がるバサルモスの上に玉乗りの要領で乗りながらお燐のお魚目掛けて移動するお燐のペット、怨虎竜『マガイマガド』の幼体。

そしてそんな2人と2匹をのんびりとあくびをしながら見守る地霊殿の門番的な存在になった剛纏獣『ガランゴルム』の姿があった。

最近お燐によつて召喚されたマガイマガドは、肉食の大型モンスターではあるのだが、まだ自分で狩りを出来るような段階の大きさではなく、まだ親の狩りを見て自分も学びながら成長していくような時期の幼体の為、地霊殿で焼き魚や生魚等、骨ごと食べやすいような魚をメインで与えられて育てられていた。

何故骨ごと食べることが前提かと言うと、それはマガイマガドの生態に由来する。

マガイマガドは鬼火という特殊な炎を使つて戦いを行うモンスターなのだが、その鬼火はマガイマガドが食べて消化した骨が原料となつており、今この時期ならば、親から肉を貰つてそれに必死に噛みついて喰らい、骨を噛み砕けるようになるまで顎の力を鍛えて鬼火を使う事が出来るようになる。

しかしこの生態をたまたま幻想入りしていた生態書から知っていたパチュリーは地霊殿組に伝え、このような発想が生まれる。

人でも噛み砕けるような魚の骨から食わせればすぐに鬼火使えるようになるんじゃない？

そしてそれは成功しており、マガイマガドはたった2日で鬼火をちよつとだけ出せるようになっていた。

しかしその量はとても少なく、すぐにガス欠を起こしてしまう程だったのだ。

それに加えて顎に負担が掛かりにくいので、顎が鍛えにくいという点もあり、骨付きの焼き魚はおやつとして、普段のご飯には比較的硬い、まだ処理されていない牛バラ肉を小さく切り分けたものを使っていた。

そして狩りが出来るようにするためにどうするべきか考え、何かしらを鍛えるトレーニングをさせて、そのご褒美におやつを上げれば良いのではという結論になったのだ。

そして今の玉乗りのような状況になっていたのである。

お隣の所まで後ちよつとという場所まで二匹が移動した所で無意識状態で待機していたこいしが動き出す。

腕に付けている自信の能力を制限する腕輪を使い、姿を現す、そしてその手に持っている猫じやらしをマガイマガドの目の前で振る。

すると……………

「こやっ!……………こやあっ……………こやうううううううううう!?!」

「ぐおっ!?!ぐおおおおおおおおおお!?!」

お隣のお魚と目の前で振られる猫じやらしの誘惑によりマガイマガドは葛藤する。

もし猫じやらしに負けてしまえばおやつは無しになってしまうと考えたからだ。

そして一番大変なのはそんな葛藤するマガイマガドを落とさないようにちやんと転がりを調整するバサルモスであった。

そしてそんな様子を見ていたお燐は……………

「……………(ダバダバダバダバ)」

焼き魚を持つてない方の手で顔を抑え、大量の鼻血を出していた。

モンスターの赤子の大半にいえるのだが、モンスターの赤子はどれもこれもこれもとてつもなく可愛いようで、幼体をペットとした手に入れることが出来た物達は、それはもう溺愛するほどだった。

こいしは毎日肌身離さず抱き抱える程であり、地底の上に存在する妖怪の山に住む白狼天狗の椀と河童のにとり、お互いのペットが戯れる姿を見て鼻血を大量に出していた。

そしてお燐はそんな妖怪の山にいる二人と同じようなタイプであり、そのあまりの可愛さに撃沈していたのだった。

そしてそんな鼻血を出しているお燐の側でマガイマガドはと言うと。

「にやうううう……………にやん！にやんにやん！(ペチペチ)」

「ぐお?ぐおおお(ゴロゴロゴロゴロ)」

マガイマガドは葛藤の末、おやつ焼き魚を優勢することにして、こいしによる猫じやらしの誘惑に勝ったようだ。

そしてそんなマガイマガドはバサルモスの背中を叩いて合図をして、バサルモスは転がりを再開する。

「にやんにやんにやん!にやんにやんにやん!」

バサルモスが転がる際にその翼によりマガイマガドが落ちてしまう可能性があったが、マガイマガドはバサルモスの転がりをちゃんと把握し、それにあわせてジャンプして進んでいたのだ。

そしてお隣の所にたどり着き、お隣の頭をペチペチする。

「あ、ああ、よく頑張ったね。ほら、おやつだよ?」

「にやん! (モキユモキユモキユ)」

まだ口が大きくない為かモキユモキユと食べるその姿はとても愛くるしい。

『ああああああ可愛い!!!』

お隣は今までの人生で最高の幸福感に満たされていたのだった。

轟く咆哮と響く山彦

〔命蓮寺〕

人里の外側に存在する寺である命蓮寺、この寺では毘沙門天を祀られており、住職には元人間の魔法使い、毘沙門天の代理である虎の妖怪等、寺となつてはいるがそこに人間の姿は無く、妖怪寺とも呼ばれている。

この寺は封印されていた魔法使いであり、仏教の住職としても知られている聖『聖白蓮』の復活を境に新しく現れた物であり、今では修行僧など何人か来ていたり弟子の受け入れをしてはいるが全員が妖怪であり、妙に古典的な妖怪が多く存在した。

そんな命蓮寺にまた人外の化物が増えようとしていた。

〔〜♪〕

鼻歌を歌いながら箒を持って命蓮寺の入口付近を掃除する犬耳の少女は、これから来る友人をそれは楽しそうに待ちながら掃除をしていた。

「小傘ちゃんまだかな？新しいお友達が出来たって言ってたしどんな子なんだろう？」

彼女の名前は『幽谷 響子』

最近命蓮寺に入門した妖怪であり、種族は山彦。

聞こえてきた声に対して、同じ言葉を大声で返事する妖怪であり、音を反射させる程度の能力を持った少女だ。

彼女は命蓮寺で掃き掃除や、炊事等を担当しており、命蓮寺によく遊びにくる『多々良 小傘』とはとても仲が良かったりする。

小傘は命蓮寺では準信者としての扱いを受けており（なお本人は否定している。）遊びにくる時はいつも歓迎されていた。

そんな彼女が新しく出来た友達を連れてくると言ってこの前命蓮寺に訪れており、今日はその友達を連れてくる日らしい。

そして小傘を待ちながら掃除をしていたのだが……………

「ほえ？」

「ZZZZZZZZZZ……………」

掃き掃除で集めた落ち葉を捨てるため、近くの森の中に進んだのだが、大きな寝息が聞こえてきたのだ。

山彦としての本能により返事をしようと考えてしまうが、これが寝息であることに気が付いたのか首を横に振る。

そしてその寝息を立てている声のヌシに近付こうと森を進んでいく。

しばらく移動していくと森の木々が根こそぎ倒れた後が見つかる。

倒れた木々は円形になるように折られており、その中央には大きな影が見えた。

全身が血のように赤い甲殻や鱗に包まれており、さらにとてつもなく大きな体を持っていた。

そしてその翼は地面をしつかりと掴めるような爪と強靱で太い腕のような形状があり、飛ぶことは出来ても滑空が限界と思われた。

そしてその尻尾の先端には鋭く大きなトゲがありどことなく全身から力強さを感じさせる。

その赤い甲殻や鱗からは、時々赤い粉塵が出ており、時々粉塵が爆発して寝ている顔が軽く歪む。

だがそんな姿を見て山彦の本能が何故か刺激されていく。

何か繋がりのような物を感じ取っているのだ。

自分の山彦をさらに大きな声で返してくるこの竜に対して。

そして赤い竜はそんな様子の響子を見て首を傾げる。

自分の咆哮は威嚇としてだけでなく、狩りでの攻撃手段としても使うほど威力が高いのだ。

そんな咆哮をまともに近くで喰らって吹き飛ばされているのに楽しそうにするその少女に興味をもった。

「うわあ!?!何々!?!何が起きたの!?!」

「星、落ち着きなさい。毘沙門天の化身である貴女がその調子では皆に示しがつきませんよ。」

命蓮寺方面から二人の声が聞こえる。

こちらに急接近しており、その気配に気が付いた竜……………

『大轟竜ティガレックス希少種』は警戒して響子の服に噛みつき、自分の背中に放り投げる。

「あれ? 聖と星だ、声が大き過ぎたかnってうわあ!?!」

「響子! 怒らないから出ていらっしや……………ッ!?!」

「聖?どうしたの……………ツ!」

そして二人は響子を背中に乗せたその竜を見つける。

起き上がった竜のその姿からは、以前紅魔館で見た『メル・ゼナ』という龍よりもとてつもない力を感じさせた。

ただそこにいるというだけで凄まじい威圧感があるのだ。

だが聖は警戒するティガレックスにも星にも予想外な行動に出る。

「おや?もしかして後から聞こえたもうひとつの大声は貴方ですか?」

響子、珍しいお友達が出来たみたいね。

貴方も命蓮寺にいらつしやい、響子のお友達なら歓迎しますよ。」

そして笑顔でティガレックスを迎え入れようとする。

その様子にティガレックスは困惑しているが一瞬で響子の首根っこを掴んで戻ってきた。

それに気が付いたティガレックスは……………

「グギャツ!」

背中に首を回して響子が居なくなっているのを見て驚いていた。

「それはそうと響子……………貴女には少しOHANASHIがあります。」

聖に筋骨隆々な人の幻影が重なっているように見えたが、気のせいだと皆は無理やり

鬼と獅子、不死鳥と豪火を纏う竜

く紅魔館く『門の前』

今日は恒例のモンスターを呼び出す日であり、門の前に魔法書を持った数多の能力者達と、呼び出したり、迷い混んだモンスターと共に生活する者達とそのモンスターが集合していたのだが……………

「あー、何度も集まって貰ってるから突然こんなこと言うのも悪いとは思っているのだけれどこれから集まった後は召喚する人だけ中に入って召喚して欲しいのよ。」

理由として普通に狭いのもあるのだけれどちよつとした気の緩みでも地底の火車みたいな変なイレギュラーを引き起こしかねないのよ。」

そうパチュリーは集まった者達に対して伝えた。

一同は不満そうな顔をしていたが、イレギュラーが起きた時の事を思い出して不服ながらも納得した。

「とりあえず召喚したい人はいつももみみたいな感じで二人決めてから私に伝えた頂戴、決まり次第召喚するわ。」

召喚が終わったら好きにしても構わないわ。」

そしていつも通りの召喚する者を決めるためにくじを引く、そして今回当たったのは………

「お？アタシかい？いやあ、勇儀が呼び出していたのが少し羨ましかつたし良い喧嘩友達を作っていたみたいだったからねえ。」

アタシも勇儀みたいな力強いやつがいいねえ。」

「ふーん、つつてもアタシと相性が良さそうなのなんているのかねえ………蓬莱人は不死なんだから少し難しいんじゃないのかい？」

今回当たったのは小さな百鬼夜行と呼ばれ、勇儀と同じ元山の四天王の一人、酒天童子としての名が有名な『伊吹 萃香』だった。

しかし見た目は酔っぱらいのロリの為なかなか絵面g（殴

そしてもう一人は迷いの竹林の案内人をしており、不老不死の特徴を持っている蓬莱人、『藤原妹紅』であった。

そして二人は門の中に入り、一人ずつ召喚することになる。

妹紅は召喚その物にはそこまで興味があるわけではない為、最初の召喚は萃香に譲ることにした。

後からやつても先にやつても同じなら楽しみそうにしている萃香に譲った方が良さだろうという判断もある。

そして萃香は自分の妖力を何故か全力で注いでいく……………

「ちよっ!? やりすぎやりすぎ!?! また暴走するわよ!?!」

魔法陣からは謎の雷が走っており、明らかヤバイのが見てわかる。

「おっと、やりすぎてもダメだったか。こんなもんで安定したかい?」

そして萃香は注いでいく妖力を細かく操作して魔法陣をギリギリ安定させる。

そしてかなりの大きさに広がった魔法陣から一匹のモンスターが現れる。

そのモンスターは漆黒の体毛に包まれ、一對の大きな角を持っており、その腕はとてつもなく発達しており、怪力を持っていることがみただけでわかる。

そしてその顔は猿のような顔をしているが、獅子のような眼光を放っていた。

「金獅子ラージャン!?! これまたヤバイのが出てきたわね……………それにこの大きさ

……………最大サイズ!?!」

「金獅子? どこに金色の要素があるんだ?」

パチュリーはこのモンスターの事は最も危険度の高いモンスター達の載せてある本

「はあ、あいつらはほつといて私らは私らでやろうぜ。」

「ええ、あれはもう好きなだけやらせておくしか無いでしょうね」

そして呆れた様子の二人は、少し召喚場所を喧嘩して二人から離して召喚を行う

.....

「いてっ」

するとたまたま飛んできた流れ弾が妹紅にかすり傷与え、血が流れる.....

そしてその血が魔法陣の中に入った瞬間、魔法陣は2つに増え、膨大な光を放つ。

「結局事故は起きるのね.....さて、不老不死の血が魔法陣に入って妙な光を出しているけど何が出るのかしら。」

そして魔法陣から2つの火柱が上がり、その中から二体の飛竜の姿が出てきた。

片方は全身を炎に包んでおり、鮮やかな赤い色と、黄金の甲殻と鱗をもっており、その炎に身を包んだ全身で翼を広げると、太陽のような姿に見える。

そしてもう一体は、深い赤銅色の甲殻と鱗に身を包み、頭、胴、尻尾の三つの部位のみが豪火に包まれている。

そしてその姿を見たパチュリーは驚きを隠せずにいた。

「今度は絶滅したモンスターを蘇らせて呼び出すなんてね.....」

その二匹の竜は同時に咆哮をあげた。

果たしてそれは甦った喜びによるものか……それともこの地に呼び出された事で
何かに共鳴したのか……

豪火の竜と赫火の竜は不死の少女と巡り合う。

豪火の竜と灼熱の竜との繋がり

〈紅魔館〉『中庭』

そこではいつも恒例のモンスター召喚が行われていたのだが………いつものようにまた事故ってしまった。

どうやら魔法陣に不老不死の蓬莱人の血が混ざることによって本来呼べるはずの無い絶滅種を蘇らせて呼び出す事が出来てしまったのだ。

そしてそんな絶滅した豪火を身に纏うモンスターの番は召喚した妹紅に対して試すような視線を向けていた。

「そんで？パチュリー、絶滅したつてのを知っているのならこいつらの種族は分かるのか？」

「ええ、まず全身に炎を纏った黄金の竜なんだけどこれは断裂群島にのみ生息していたモンスターで火竜リオレウスの特殊種。

豪火竜『リオレウス豪火種』と呼ばれるモンスターよ。

存在するだけで火災が起きるようなモンスターでハンターに狩られ過ぎて絶滅したと聞いているわ。

ただ実力はとても高くて空を飛び狩りをする姿から原種含めて『空の王者』とも呼ばれているわ。」

「豪火種ね……特殊種ってことは通常の個体とは違うんだろうけどその違うところは………見ての通りか。」

「ええ、特徴としてはあの黄金の甲殻と全身が炎を纏っていることよ。

本来原種は炎を纏うなんて出来ないしあの黄金の部分は全部黒色なのよ。

全身に炎を纏っているのもあってただの突進ですら強力ね。」

リオレウス豪火種は妹紅を見つめ、何かを感じ取っているようにも見える。

そして妹紅もリオレウス豪火種に対して何か共鳴しているのを感じていた。

「それでもう片方は？」

「そつちも断裂群島にのみ生息していたモンスターで火竜リオレウスの雌個体である雌火竜リオレイアの特特殊種。

赫火竜『リオレイア灼熱種』と呼ばれるモンスターね。

こつちは空を飛ぶ事に特化した雄個体のリオレウスに対して陸上での狩りに特化しているわ。」

その姿から『陸の女王』とも呼ばれているわ。

このモンスターの特徴としてはこの深い赤銅色の甲殻と鱗、それに加えて頭部、胴体、尻尾の部分が発火して炎を纏う特徴があるけれどリオレウス豪火種のように全身が炎を纏ったり、ずっと纏う事は無いわ。

狩りをする際に攻撃に使う部位のみに炎を収束してリオレウス豪火種よりも強力な炎とその強靱な肉体による一撃はかなりの危険度よ。」

そしてリオレイア灼熱種も妹紅を試すような視線を向けている。

そして妹紅もリオレイア灼熱種に対して強い繋がりを感ずる。

「……………なあ、これってやつぱり……………」

「まあ貴女の力にかなり強く引かれたのでしようね。貴女自身も全身を炎に包むのだし。」

いつそ目の前で炎に包まれてみたらどうかしら？」

「やつぱりこの視線は試したいという感じか。」

まあいいか、お前ら、やるんなら空でやるぞ？地上だと迷惑がかかっちゃう。」

そういうと私はさつきからラージャンと殴り合いを続けてちよくちよくこつちに被害が飛んできてる萃香を睨む。

そして二匹も向こうを見つめて呆れたようにジト目になっていた。

「まあそういう事だな。じゃあ飛ぶぞ?」

そして二匹は私を見つめて首をかしげていたが私が空を飛んだ瞬間、二匹は驚いていた。

「あ?何驚いて……………ああそうか、お前らの世界だと基本的に魔力、妖力、霊力とかは無いんだつたな。」

そうなると翼がないやつが空を飛んでいるのはとてもおかしく見えるわけか。」

二匹は翼を羽ばたかせて私の背中を見つめるが翼は無いから二匹はますます首を傾げていたのだつた。

「これで驚いてたらキリがねえぞお前らー、この世界だと翼が無くても飛べるやつは結構多いからな、それに翼を持っていても飛ぶのに適してないやつばっかだからなあ。」

「……………グオウ」

二匹は納得出来てない様子だったがとりあえず返事をしていた。

「じゃあ始めるkつてあつぶねえ!」

下から雷のビームが飛んできた、流れ弾にしても威力が高すぎると思う。

「はあ、かつこつかねえけどやるぞ。」

不死『火の鳥―鳳翼天翔』!!!」

そして妹紅から炎の翼が生まれ、その炎から火の鳥が出現し、リオレウス達に飛んで

いく。

「グオオオオ!!」

しかし伊達に空の王者と呼ばれてはならず、火の鳥は簡単に避けられていく……だが火の鳥が通った所には大量の炎の弾幕が残る。

そして二匹目がリオレイアに飛び避けられてはいるのだが半減に強力な炎プレスが飛んでくる。

しかし弾幕を幾度も避けてきた妹紅は余裕で避けていく。

そして二匹の火の鳥が消えた後、チャンスと見たのか二匹はこちらに飛んでくるが………

「まだこっちの攻撃は終わってないぞ!」

「ツツ!」

そして妹紅の翼から全方向に大量の弾幕がばらまかれると同時に、火の鳥が通った後に残った弾幕が二匹に向かって飛んでいく。

リオレイウス達は全身に豪火を纏って迎撃するが、弾幕の量の多さに反撃しきれず、直撃を繰り返す。

しかし傷一つ無い。

それだけ甲殻が硬いらしい、しかし二匹の瞳のこちらを見る雰囲気に変化していた。

「とりあえずこれでいいのか？」

「……………（コクリ）」

二匹は頷く、元々最初から殺し合いまでやる気はなく、どのような力を持つのか、この繋がりがの正体が知りたかつたようだ。

そして私達は中庭におりてあの脳筋共が戦闘を終えるのを待つことにしたのだった。

鬼と金獅子の喧嘩

く紅魔館く『中庭』

「グオオオオオ!!!」

「やってやろうじゃないか!!!」

召喚された黒い毛皮の獅子のような雰囲気を持った萃香と同じような角を持った猿顔のゴリラ、『ラージヤン』

小さな百鬼夜行、酒吞童子こと元山の四天王の一角である『伊吹 萃香』

どちらも力に優れた種族であり、そんな二人による喧嘩が紅魔館の中庭で始まろうと
していた。

そして中庭が壊滅するのも時間の問題であった。

「グオオオオオオオオ!!!」

全身を覆う黒い毛皮が金色の輝きを放ち、腕が肥大化して赤みを帯び、蒸気を出し始める。

そしてドラミングをして胸部を叩きながら咆哮をする。

金獅子が金獅子と呼ばれる所以、ラージヤンは通常の状態だと基本的に黒い毛皮しか持つておらず、金色の要素は一つもない。

しかしラージヤンは戦闘により興奮状態に陥った際、自身の持つ気を昂らせることによつて毛皮の大部分が金色の毛皮に変色し、その内に秘めた力を完全に解放する。

これは『闘気化』と呼ばれる状態であり、この状態ではまともに使わなかった体内を巡る電気エネルギーが活性化し、雷の力も使えるようになる。

さらに興奮状態が進むことにより、その腕部には血が集中し、その電気エネルギーにより筋肉を刺激し、赤黒く腕を肥大化させる、これを『闘気硬化』と呼ぶ。

しかしこれはラージヤンの生体エネルギーを大きく消耗する状態であり、戦闘力は確かに上がるのだがラージヤンが短期決戦を望む時くらいにしか使わないのだ。

逆に短期決戦で倒しきれないと本能で理解した場合は自分から解く程である。

だがラージヤンは萃香を見た瞬間からその内に秘めた力を本能的に察知しており、最初から全力でやらないと負けるのがこちらだと理解していた。

だからこそ短期決戦にしかあまり使いたくないこの状態で挑むのだ。

「こいつは私も全力じゃないとヤバイねえ……いいじゃないか！短期決戦といこう！」

そして相対する萃香は己の能力である『密と疎を操る程度の能力』により、全身に幻想郷中にばらまいた自らの分身を己の体に吸収し、巨大化する。

「鬼神『ミッシンググパープルパワー』!!!!」

しかしその成長はいつもの様子とはちよつと違い、ラージヤンと同じくらいの大きさになっていた。

そう、小さいのである。

普通の人からすれば十分大きいのだが本来のミッシンググパープルパワーはもつと巨大化するのである。

しかしサイズが小さいからと言って舐めてかかることは出来ない。

「うげ!? 萃符 『戸隠山投げ』!!!!」

萃香の力により巻き上げられた土砂が手に集まり、圧縮され、硬い岩盤を作り出した。そしてそれを全力で投げつけてラージャンの攻撃を相殺する。

この時の破片が妹紅の所に吹き飛び、事故を起こしていたのだが二人は気付かないようだ。

「っ!? まずっ!?」

そして土煙で視界が塞がれており、ラージャンの攻撃にギリギリまで気付かなかった萃香は土煙を貫く金色の輝きを目視で確認してギリギリで避ける、しかし左腕が避けきれなかったようで、力を使って左腕を霧散させる。

しかしその金色の輝きを放つビーム、気光プレスによって霧散した左腕は周囲を巻き込む電気エネルギーの巻き添えを受けて大幅に弱体化する。

「こなくそお!!!」

「ッ?!?!」

萃香はその威力から中途半端に全身を強化しては力負けすると気づいたのか、圧縮した力を片腕と脚に集中し、地面を蹴る。

その速度はとて生物が追い付ける速度ではなく、ラージャンも回避することは出来なかった、そして全力の限界以上力を圧縮した一撃を腹部に貰い、そのダメージに膝を

付いた。

「もらった!! ってやば!? さっきのはこれか!？」

「グオオオオオオオ!!」

そして追撃とばかりに萃香は飛びかかるが、すぐに反応してきたラージヤンは顔を上げて気光ブレスを放つ、しかし先程よりも大幅に威力は下がっているが、防御を捨てて攻撃する箇所に力を集中していた萃香には十分すぎる威力を持っていた。

そしてこの気光ブレスの巻き添えを妹紅がくらいかけるが、それに二人はやつぱり気が付かない。

「オラアアアアア!!!」

「グオオオオオオオ!!?!?」

そして片足を犠牲にして避けた萃香はその強力な一撃を頭部に叩き込み、勝負は決まったのだった。

しかし中庭の惨状はなかなか酷いことになっていたのだった。

騒がしい鬼達

く紅魔館く『中庭』

恒例の召喚が終わった後、中庭は大惨事となり、門の壁は大穴が開き、紅魔館本体には萃香がめり込んだ跡と全体へのひび割れがはいつていた。

そしてその中庭では、満身創痍のラージャンとラージャン（ロリ）が館に住むパチュリーや咲夜から説教を受けていた。

しかし鬼は基本喧嘩で周囲を建物ごと巻き込むのは日常茶飯事であり、壊れたなら建て直せばいいじゃないかという考え方をするため、基本的に反省をしないのだ。

そしてその姿から反省の様子が見えないと悟った二人はメル・ゼナを呼ぶ。

メル・ゼナは周囲の惨状と正座してはいるが反省の色が見えない二人を見てなぜ自分が呼ばれたのかを理解した。

メル・ゼナは黒く染まり、周囲にキュリアが飛び回る……………

何度も建物の建て直しや修繕をやらされてる鬼達は建築や修繕にも詳しく、全体的にヒビが入っていた紅魔館は5日で完全に修復されたのだった。

が……………

「勇儀！私とラージャン、お前とアオアシラとで喧嘩しないかい？」

「お？いいじゃないか！お前さんもどうだ？」

「グオオオオ!!!」

ヌシ・アオアシラは気合いをいれるように咆哮をする。

「なんだいなんだい、ずいぶんとやる気じゃないか！」

そしてラージャンはというと……………

「……………zzzzzzzzzzzz」

建築で疲れており寝ていたのだが……………

「ほら！起きろラージャン！勇儀達と喧嘩するぞ！」

「グオオオオ?!?!」

萃香に叩き起こされていた。

ラージャンは本来気性がとてつもなく荒いたため共存はほぼ不可能なのだが、萃香が一

度本気で倒し、屈服させた為にラージヤンは萃香に対して従順になっていた。

そしてちよくちよく萃香に対してリベンジをするのだが一度見せた技が多く、大振りなのもあり、避けられ過ぎてまともに攻撃を当てるのが難しくなってしまうた。

その為最近は連敗続きで少し機嫌が悪いらしい。

とはいえラージヤンも萃香の攻撃を簡単に受け止めるようになっており、闘気硬化した腕が相手では萃香の全力の一撃でも弾かれてしまうのだ。

その為一撃それで防がれて反撃されると萃香といえどかなりキツイのだが自分の体を霧散させて避けるのもあるのでなかなか当たらないのだ。

「……………(ボリボリ)」

ラージヤンは起こされる際に殴られた頭を掻いている。

「さて、ラージヤンも起きた所だしやろうk……………(； 〇)ガクブルブル」

「(； 〇)ガクブルブル」

「おや？メル・ゼナじゃないか。もしかしてまたここで暴れるんじゃないかと心配して来たのかい？」

「グルルル」

メル・ゼナは肯定するように唸る、また暴れられて昼寝スポットがズタズタになり、巣としても使わせて貰っている紅魔館がボロボロになっても困るのだ。

「大丈夫大丈夫、さすがにアタシでもそこまで非常識じゃないさ。せつかく建て直したのにここでやりあってたらさっきまでの苦労がパーになっちまう。」

「……………(ギロツ)」

そしてメル・ゼナは萃香を睨む。

そしてメル・ゼナはこのラージャン二頭にとつては割と天敵のような存在となっており、萃香は龍属性やられによりその強大な力を全く出せなくなり、攻撃からの緊急回避手段も無くなってしまふのだ。

龍属性攻撃を体を霧散させて避けようにも霧散した体その物に龍属性の雷光が入るだけでアウトなのである。

そしてラージャンは龍属性によって自身が古龍であるキリンの角を折って喰らったことにより生まれた雷属性を生成する力を封じられてしまい、闘気硬化も封じられてしまふのだ。

キリンが古龍であったのも原因の一つで、龍属性を扱ふ龍であっても、一部例外を除いて古龍は全員龍属性を共通の弱点としていた。

メル・ゼナは完全なパワータイプなもあり、闘気硬化出来ない状態のラージャンで

は勝ち目が無かったのだ。

しかも体に張り付くキュリアに精気を吸われ続ける為にまともに戦うことも出来なくなる。

その為二頭のラーズジャンからは軽く恐怖されていたのだった。

「ちやんと外でやるって……アハハハハ」

紅魔館はメル・ゼナによって無事に済んだのだった。

八雲 紫はもう手遅れ。

く永遠亭く『病室』

迷いの竹林、常に地形が変化しており、この迷いの竹林を抜けて永遠亭に向かう、もしくは竹林から脱出するには、大きく分けて2つある。

一つは竹林のすぐそこに住居を構え、案内をしている蓬莱人『藤原妹紅』に道を案内して貰う事。

もう一つは永遠亭の住人に案内をして貰うことだ。

そして後者に関しては竹林で迷った際に永遠亭に住む住人である『因幡 てる』を見た際は運良く竹林から脱出出来ると言う。

これはてるが持つ『人間を幸運にする程度の能力』が関係していた。

てるを見つけた際、この能力が発動することによりその人間は幸運を得て竹林を脱出出来ると言う仕組みなのだが、竹林から脱出した際に得た幸運を使いきってしまうので脱出後まで幸運が続くという訳でもない。

運が悪ければ脱出した瞬間に妖怪に襲われるなんてパターンもあり得てしまうのだ。

さて、そんな迷いの竹林の中にある永遠亭では、一人の妖怪の賢者が入院をしていた。そして今日はその退院予定日だったのだが……………

「どうなの？永琳……………そろそろ退院出来ないと管理が怖いんだけど……………」

「……………ふう、とりあえず胃に空いていた大穴はようやく塞がったわ。」

それにしても貴女の妖怪としての回復能力と私の薬を使って一月近い間入院させる必要があったのだから普通の人なら即死するわよう？」

「ええ……………自覚が無いわけでは無いのだけれどそれだけ今は力関係が凄く難しくなっているのよ……………あの世界のモンスター達の持つ力は弱くても上級の妖獣くらいはあるのよ……………」

最大の原因はあの肉体の大きさと強靱な甲殻や鱗、毛皮とかの防御能力よ。

私たちの弾幕程度では傷一つ付かないモンスターが多いのだけれど多分私の力でも古龍相手に勝てるかはかなりギリギリよ。」

紫はとても深刻そうに言う。

すると永琳は考え事をしながら言う。

「それだけ強いのか……私としても毎回あの天狗を姫様の部屋に落としていたメル・ゼナの力は気になっていたのだけれど……」

「試したり何か薬に使えないか実験しようとするのはやめておきなさい。メル・ゼナの持つ龍属性は貴女の蓬莱人としての特性と相性が悪すぎるわ。」

「確か能力を封印すると聞いていたのだけれどそれだけではないのね。」

「ええ、メル・ゼナが封印するのは程度の能力だけじゃなくその他の能力も含むわ。」

恐らくだけれど不老不死の死なないという特性は封印しきるのは難しいと思うわ、ただ不老不死特有の圧倒的な再生能力は大幅に制限されてしまうでしょうね。」

そしてそれを聞いた永琳は警戒をしている様子だった。

「警戒するだけ無駄よ、あの龍には私達を警戒すらしてないわ。」

それだけ古龍という存在が圧倒的なまでの強さを持つており、生態系の頂点に立つていたという事よ。」

そして古龍についての生態や考察等の話で盛り上がっていた二人、永琳が古龍の血や浄血と呼ばれる特殊な血液の性質に深い興味を示していた為かなり不安になったがそんな悩みもすぐに消え去った……何故なら……

「しかもこれは二匹のモンスターの力を無理矢理操っているのね……無理をしてるせいか本来再生の炎を扱う妹紅が火傷を負いながらその体を燃やしているわ。」

「蓬莱人の再生が間に合わないと言うの……」

「いえ、むしろ蓬莱人だからようやく出来る力業よ。」

ただ炎を操れるだけならすぐに燃え尽きるでしょうね。」

『レウス、レイア、お前らは私に炎を分けるだけでいいよ。こいつとの殺し合いはいつも私達がやっている暇潰しに近いんだ。』

戦いたいなら後でやっていいけど今はこの力を試させてくれ。』

『ああもう!!なんだかよく分からないけどまたいくらでも殺してやるわよ!』

『ぬかせ!輝夜ああああああああ!!!』

ぐあああああああ!!!』

そして二匹の竜はその全身から放つ豪火と灼熱を妹紅に捧げる。

あまりの威力に妹紅は苦しみに叫び声をあげるが意識をしつかり保っているのが凄いと云えた。

「ああ………永琳………後でまた胃を見て貰っても良いかしら?」

「……………ええ、これは仕方ないわ……………」

「永琳は同情しながら承諾したのだった。」

豪火と灼熱を纏う不死鳥

そして避難する蟲達

く迷いの竹林く『輝夜の部屋』

迷いの竹林の中にある永遠亭、いつも週に何度か妹紅と輝夜が殺し合いをしていた。喧嘩ではなく殺し合いではある……しかしどちらかが死ぬことは何度もあつても最終的には引き分けとなっている。

理由としては二人とも不老不死の蓬莱人であり、死という概念が存在せず、致命傷を受けたとしてもすぐに再生するからである。

そして今日も今日とてその殺し合いを起こしていたのだが、今日はいつもと妹紅と様子が違ったのだ。

二匹の体に炎を纏う竜を連れ、その二匹の竜の炎を吸収して全身の再生速度を上回る炎による火傷を負いながら殺し合いを仕掛けに来たのだ。

「あああああーもうーなんなのよその炎!?!いつもの3倍くらい威力高いじゃない!?!相

殺するのも難しいってなによそれ!？」

「これはあいつらの炎だからな……この程度の力しか引き出せないのが悔しいがそう簡単に相殺しれてたまるかよ!! 不滅『豪熱の竜——竜翼天翔——!!!』」

そして妹紅がスペルカードを宣言すると妹紅が纏った豪火と灼熱が竜の翼の形を取る、そしてその翼から豪火の飛竜が飛び出し、そのブレスを吐きながら輝夜に向かう、そしてその通った後には無数の弾幕が残る。

「ちよっ!?! 今度はブレス吐くようになったわけ!？」

避けにkあつぢいいいい!?!」

そしてブレスに当たった輝夜はその豪火を浴びてあまりの暑さに地面を転がって消火している。

しかしその隙を逃す妹紅ではない。

次は二匹目として灼熱の飛竜が姿を表して地面を走りながら連続で灼熱の噛みつきを行う、噛みつき旅に灼熱が弾け、周囲に炎の弾幕が飛び散ってその場に残る。

そしてその通った後にも無数の弾幕が残る。

「あつぶねっ!?! ってあつっ!?! 能力全開にしても避けきれないんだけど!？」

そして妹紅の攻撃は最終段階に入る。

妹紅から無数の弾幕が発射さて、飛竜が通った後などに残った弾幕が集まり、新しい

迷いの竹林

妹紅と輝夜の殺し合いが起きていた時、竹林は混乱に包まれていた………
主に妹紅の流れ弾によつて引火した竹が原因で。

これにより竹林を住みかとする妖怪や動物、蟲に加えて竹林に遊びに来ていた者達が
一斉に避難を開始していた。

竹林による森林火災が引き起こされ、種族問わずに一斉に悲鳴を上げながら逃げている。

「うわあああ!?!にげろおおおお!?!?」

「焼き鳥はいやあああああ!?!焼きならヤツメウナギにしてよお!」

「もつと!暑くなれよお!」

「心頭滅却すれば火もまた………あつちいいいいいいいい!?!?」

「アーチャー・チャー・アーチャー♪燃えてるだーろーうかー♪アーツ！」

「焼き魚は勘弁だあああああ?!?!?」

「やらないか」

「(火災から)逃げないと……………アーツツツ?!?!?」

まさに阿鼻叫喚の様子だった……………一部おかしいが。

そしてそんな中、蟲達を統率して避難する一人の妖怪、Gではなくホタルの妖怪であり、蟲達の女王であるリグルが逃げている途中で逃げ遅れた一匹の子供を見つけた。

その子供は妖怪でも動物でもなく、深緑の甲殻に全身を覆われており、その翼膜は蝶の翼のごとき美しさがある。

そして翼、頭部の特徴的な鶏冠、尻尾に緑色の光を放つ竜の子供だった。

「この子は!?!逃げ遅れた子供ね、親は……………周囲に居なさそうね。」

大丈夫、私が一緒に逃がしてあげる。」

そしてリグルは蟲のような特徴を持つてはいるが蟲の気配が一切しないこの子竜を抱き抱えて空を飛び、蟲達と外を指指して逃げ進む。

幸い火事によって竹林の竹がだいぶ倒れており、まっすぐ進むことが可能となってい

たのだった。

そして竹林を進み続けて外に脱出する事に成功したのだった。

「もう大丈夫だからね……」

「きゆううう……」

「お父さんとお母さんを探そうか。」

「きゆううう？」

子竜がたった一匹でいるとは考えにくかったのかりグルは子竜の親を探そうと子竜に言うが、その子は首を傾げていた。

そしてリグルはまずこの子の種族を特定する為に人里にある稗田家を目指すのであった。

竜を育てる蟲の女王

く霧の湖く『上空』

私は『リグル・ナイトバグ』螢の妖怪であり、『蟲を従える程度の能力』を持っている蟲の女王なんだ。

ちよつと！誰だい？私を油虫の妖怪とか言ったやつ！

ごほん、話を戻そうか。

それで私は友達のみすちーこと夜雀の妖怪の『ミステイア・ローレイ』に誘われる迷いの竹林でみすちーがやっているヤツメウナギの屋台に招待されたんだ。

それでヤツメウナギの蒲焼きを食べたりみすちーと話したりして過ごしていたんだけど竹林の中央の方から誰かの炎による弾幕が飛んできちゃったんだ。

多分永遠亭に住む姫様？といつも喧嘩している藤原妹紅さんの弾幕だと思っただけどあの人あんなに強い弾幕だせたっけ？

それでその炎が竹林の竹に引火しちやって、火災が起きちやったんだ。

竹は水を多く含むから自然に生えてるのはあまり燃えにくいはずなだけど……

それで凄い勢いで火災が広がっちゃったのもあつて皆で逃げようと思っただけど炎が広がる勢いが凄すぎて逃げる前に炎に囲まれちゃったんだ。

それで私は能力を使つて蟲がちゃんと逃げられるように指示しながら竹林の中を進んでいたんだけどその時に衰弱して弱っている深緑色のドラゴンの子供？を見つけたんだ。

それでその子を保護してこの子の親を探すために周囲を飛び回ったけどこの子の親のようなドラゴンは近くに居なかつたんだ。

それにこの子は私が親を探そうと言つたら首を傾げていたから多分親が物心つく前から居なかつたんだと思う。

それで可愛そうになつて私が育てることになつただけど私はこの子がどんな種族なのか知らないんだよね。

妖力は無いみたいだから妖怪じゃないのは確かなんだけど普通の動物にもこの子みたいなのは居ないはずなんだよね。

それで私はあのバカラスから貰つた新聞で思い出したんだ。

竜や、龍が多く住む世界の住人である『爵銀龍メル・ゼナ』っていうドラゴンがやってきた紅魔館つて所に行くことになつたんだ。

それで紅魔館に向かう途中の霧の湖を寝ている『この子』を抱えて飛んでいたんだ
ど……………

「おーい！リグルー！」

「まってよチルノちゃん!!」

そこには、なんか又ケた顔をした赤い体色に黄色の羽毛を持ったの鳥？の背中に乗った氷妖精のチルノと、それを追いかける影、大妖精こと『大ちゃん』だ。

大ちゃん個人的には結構なかがよくったりするんだ。

それで大ちゃんが姉のようにしたっていたり妹みたいに面倒をみているのがチルノ、基本的にはバカなんだけどたまに凄いことをやらかすから私としても目が離せないんだよねえ……………。

「どうしたの二人とも？それとその鳥？みたいなのはなんなの？」

「こいつはプケプケだぞー！」

「プケプケ？」

「はい、最近幻想入りしたみたいで紅魔館の魔女さんに聞いたら『鳥竜種』っていう鳥の特徴を持ったドラゴンの一種なんだそうです。

「アタリ？なんだそれ？アイスの棒でも当たったのか？」

「多分違うよチルノちゃん。リグルちゃんが抱えてるその子の事じゃないかな？」

「それもアタリだよ、大ちゃん。」

私はこの子をついさつき保護したんだけど親が居ないみたいだから私が育てることにしたんだ。

それでこの子がどんな種族の子なのか知りたいから竜とかが沢山住む世界から来たメル・ゼナってドラゴンのいる紅魔館なら分かるんじゃないかと思つて来たんだ。」

そして大妖精は何か引つ掛かるような表情を言う。

「うーん、多分ライゼクスっていうドラゴンだと思います。紅魔館で見せて貰った本にその子だと思うドラゴンが載ってました。でもたしかライゼクスはとてつもなく狂暴とか戦う時にだけ攻撃に使う部位を雷のエネルギーを通して光らせるって話だったので常に光つてておとなしいその子とはなにかが違うみたいなの。」

「ライゼクス……………カッコいい名前の子種族なんだね……………君は」

「……………きゆう……………zzzzzzzzzz」

しかし寝惚けて鳴き声を出すライゼクスの幼体を見てとても癒されてカッコいいというよりは可愛く感じる。

「とりあえず詳しい話しは紅魔館の魔女さんに聞いた方が良いと思うよ？私じゃこの子

がどんな風に違うのか上手く説明出来ないから沢山本を読んで調べてるあの人ならなにか分かると思うんだ。」

「そっか、ありがとう大ちゃん！またね！」

「はーい！」

そしてプケプケ（亜種）とチルノは……………

「??」

二人してマヌケな顔をして首を傾げていたのだった。

青き雷の主

く紅魔館く『門の前』

チルノ達と別れて飛び続けてようやく紅魔館が見えてきた。ライゼクスも途中で起きたみたいで今は抱えながら飛んでいる為かはしゃいでいる。

とりあえず門の前に降りて門番に話をしに来たのだが……………

「……………zzzzzzzz……………寝てません……………寝てませんよ……………zzzzzzzzzzzz……………」

門番はいつものように鼻提灯を作って寝ていた。

やはり門番の意味がない。

「あの一？おーい、起きてくださいーい！」

「きゅーー!!」

そして私とライゼクスは起こすために頬を何度も叩いてひっぱたいてを繰り返した

が起きる様子がない。

仕方ない……………

「ライゼクス、尻尾に電気溜めれる？」

「きゅー？きゅー！（ビリビリビリ）」

そしてライゼクスは先端が二又に別れた尻尾の先端に電気を貯めて軽く放電を始める。

何故か電気の貯まっている尻尾が青白く光っているようにも見えるがとりあえず今はスルーして私は帯電していない尻尾の根元の方を持つて門番の顔面に近付ける。

「きゅー……………」

ライゼクスは今から何が起ころのだらうとはしやぎながら尻尾を私に委ねる……………そして……………

「ぎにやあああああああああああああああああああああああああああああああ
目が!?目があああああああああああああああああああああ!?!?」

その眠っている両目に突き刺して電撃を集中砲火すね。?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

そして門番はどこぞの大佐のような断末魔を上げて顔を手で覆って転げ回る。
心なしか目から煙が出ているようにも見える。

「きゅー……………きゅー……………きゅー……………」

それにしても綺麗な翼だなあ。

「紅魔館」『図書館』

紅魔館地下にある大規模な図書館。

そこでは一人の魔法使いがモンスターの生態等を調べて、知識を蓄えていた。そんな中、後ろに一人のメイドがいきなり現れる。

「パチュリー様、貴女様にお客様が来ております。」

「客人？モンスター関係かしら？」

「はい、子竜を連れていて貴女様にその竜について聞きたいとのことです。」

何でも聞いていた通常の種とはなにか違うとのことです。」

「成る程、特殊個体ね………確かに私案件ね。」

それと例の傀異化したつていう妖怪、あれからどうなっているか分かるかしら？」

そして咲夜は難しい顔をして言う。

「………増加傾向にあるようです。」

最近是人里に傀異化した妖怪が襲う件数が増えているらしく、このままではそろそろ

「まずいかと。」

「……………そう、上白澤 慧音に一体モンスターを召喚させて従わせた方が良さそうですね。」

「このままでは人里が崩壊しかねないわ。」

「ではこの書物を彼女に？」

「ええ、お願い。最悪あの夫婦使えば制御出来ると思うから手形ですぐにでも召喚するように伝えて渡して頂戴。」

「かしこまりました。それではお客様をこちらに連れて参ります。」

さて、特殊個体ね……………

自然に入ってくる個体含めて最近召喚されるのは通常種より遥かに強いモンスターばかりね……………

百鬼夜行までもうそんなに時間が無いかも知れないわね……………

そしてパチュリーは天井を見る……………そこには一匹のキュリアが飛び回っていたのだった。

しかし尻尾に集中させるだけでは電気が足りてなかったようで、全身に電気をさらに強く帯電させて青白くなっていた。

そしてライゼクスがしばらく門番で遊んでいるとメイドの咲夜が戻ってくる。

「お待ちせしました。パチュリー様が貴女方をお呼びですのでついてきてください。

それと門番はこの地面にでも突き刺しておいてください。」

「わかった。ライゼクスー?」

「きゅー! (てくてくてく)」

ライゼクスは美鈴で遊んでいたが、リグルに呼ばれて嬉しそうに駆け足で向かった。

なおその際に美鈴は頭にライゼクスの急降下キックを食らって地面に痙攣したまま頭が刺さっており、抜けるまでかなりかかりそうだった。

そして二人十一匹の後ろをついてくる影がある。

「あんのもこたんめ……………絶対仕返ししてやんだから……………」

「ようやく君の事が詳しく分かりそうだよ、ライゼクス。」

「きゅー？」

パチュリーがいる図書館に向かう途中、リグルとライゼクスは楽しそうにじやれたり話したりしながら進んでいた。しかし背後にはこつそりと近づく影があり、それに二人は気付いていないようだが、紅魔館のメイドである咲夜は気付いており、その対処をパチュリーに、聞いているのだった。

『パチュリー様、侵入者です。』

どうやらどうやら図書館狙いのようですがいかがなさいますでしょうか？」

『本当なら追い出したいのだけれど今回はスルーでいいわ。こいつでためしておきたいしいくわよ。』

そしてライゼクスとリグル達は紅魔館のどのいる、図書館の前に付く、そしてパチュリーら歓迎するように口を開く。

「こんにちわ。」

蛍の妖怪さん、そのうでに抱えられている他の個体とは違う特殊を持ったライゼクスね……………」

そしてライゼクスをよく観察するようにじっくりと見つめる。

「きゅ…………きゅううう……………」

ライゼクスはじつと見つめられて落ち着かない様子だった。

「あの……………わかりそう?」

「え? ああ、ごめんなさい。じっくりと見すぎてしまったわね……………もう大丈夫よ。

結論から言うけどこの子は特殊個体で確定ね。

それも生まれつきの子だわ。」

「生まれつき?」

「ええ、この子は種族としては『電竜ライゼクス』の二つ名個体である『青電主ライゼクス』だと思っわ。」

「まずライゼクスの生態について軽く話すけれど種族的な特徴としてとても攻撃性が高く、兇暴性も兼ね備えているわ。」

「でもこれはライゼクスの育った環境が原因でもあるの。」

「環境? どういうこと?」

「可愛らしい様子を見せるこの子を見てれば想像しにくいでしょうけどライゼクスというモンスターは基本的に子育てをしないのよ。」

「なっ!? どういうことだい!」

「ライゼクスは産まれたらすぐに親に放置されて厳しい環境の中一匹で生き残らなければならぬの。」

「それが原因で攻撃性が高くなって自分以外は基本的に縄張りを荒らす敵だと認識するようになってしまいわ。」

「そうでもない」と生き残れないもの。

そして『青電主』の二つ名を持つライゼクスはこの環境で育っていき、あまりの過酷さに全身の発電器官が過剰発達をした個体のことよ。

敵を見つければその発電器官を全開にして発電し続けて最終的に全身が青白く光ることからこの二つ名が付けられたわ。

そしてその過剰発達した発電器官はあまりにも発達し過ぎていて通常時でも常に帯電をする程の発電量なの。

ただその分青白くなっているときは体への負担も大きくて全身の部位が脆くなってしまうわ。」

「うええ!!?でもこの子は全身青白くさせても凄く元気そうでもとも負担がかかっているようには見えないよ!?!」

「ぎゅ?」

そう、このライゼクスは全身を青電化させて遊びまくっていても元気そうにしていた

そして警戒するようにミイラモドキの周囲をゆっくりと円を描くように動く。

そして呼び出した張本人は……………

「ふふふふ、ふはははは、あーっはっはっはっは!! 私にも呼べるじゃない! 妹紅みたいな2体じゃないのは残念だけどこれで私もあいつと対等にやりあえるってもんよ!

これで勝つらぶげら!!」

「わふっ!!」

調子に乗っていた為か、竜の咆哮で

吊り下げられていたシャンデリアが壊れかけていたのに気付かなかったようで、壊れてバランスを崩したシャンデリアが落ちてくるのに気が付かず、それに潰されて挽き肉になる。

そして蘇った竜もそれに気が付かなかったようで、いきなり挽き肉になったニートを見て驚いていた。

しかし竜はこの挽き肉になったニートからまだ繋がりを感じているためか幽明虫を集めて命の雷を抽出する。

それを腕に貯めて……………

「あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………あ……………」

お手と共にその雷で直接輝夜に命の力を注ぎ込む。

すると蓬萊人が持つ不老不死の圧倒的な再生能力と合わさり、もはや気色悪い速度で肉体が再生していく。

これにはやった竜本人も軽く引いていた。

そして本棚がめちやくちやになつていたショックから立ち直つたパチュリーはその狼のような容姿をした竜を見てその正体を口にする。

「はあ……その姿はジンオウガね、甲殻とかの色や輝夜を直したその再生の力、この特徴に合致するのは一種類しか居ないわね。」

これまた絶滅種の一体、別名：命狼竜と呼ばれる『ジンオウガ不死種』よ。

ジンオウガとはある蟲と共生関係を持つていて、原種は雷光虫、亜種は蝕龍蟲、そしてこの不死種は1000年もの寿命を持つとされる不死虫の一種、幽明虫と共生関係にあるわ。」

「うーん、みたいだね。この子達はこの竜、ジンオウガ不死種だっけ？」

このジンオウガに守ってもらう見返りにその寿命の一部を捧げて滅らした寿命は他の生き物にとりついて取り戻したりしてみたい。

他の生き物から寿命となる生命力を奪う時にジンオウガの雷を貰って突撃する感じだね。」

「あら？ 貴女そういえば虫の女王だったわね。」

だから幽明虫の仕組みがそこまでわかるわけね。」

「うん、この子達から直接聞いたんだ。」

「それで？そのジンオウガってのは他にはどういう生態してるのかしら？」

頭部の上半分がまだ再生しきっていない輝夜が立ち上がり、その疑問を口にする。

しかしそなた見た目はもはやバイオハザードに出てくるゾンビと大差なかった。

「うえ、その状態で立たないでよ………怖いんだけど」

「きゅ？（はむはむ）」

「さすがにそれは引くわね………」

「なっ!?なんなのよ!?仕方ないじゃない!まだ再生しきってないんだから!」

さすがにリグルはこの気色悪い光景をライゼクスに見せてしまったら教育に悪いと感じた為かライゼクスの顔を覆って見せないようにする。

そしてそんな事情を知らないライゼクスは構って貰えているかと思っっているのか、自分の視界を塞ぐ指の一本を口に加えて甘噛みして甘えている。

そして問題のミイラモドキからゾンビモドキになった輝夜はグチュグチュと音を立てながら高速でその頭部を再生させていた。

さすがにこれは気色悪い。

そしてパチュリーが口を開く。

「はあ、そのジンオウガの生息域は断裂群島の一角、ヴォルヒール群島とタブラディン群島にのみ生息が確認されていた特徴なモンスターよ、一体ずつしかいなかったのもあつて調査の為に討伐されてすぐに絶滅していたのだけれど貴女の蓬莱人の血が蘇らせたのでしょね。

ある調査員の探検手帳には『討伐されて絶命したはずなのに咆哮と共に復活した』とか『いくら倒しても結果は同じ、何度も立ち上がる』という風に書かれているわ。

この圧倒的な生命力にはリグルがさつき言つてた通り、例え倒れてもそれを蘇らせた、群れを守らせようとする性質をもっているわ。

だからこそ倒れてもすぐに復活して反撃するとされるわ。

しかも不死虫のエネルギーを使って得た生命力で寿命も基本的にないとされているわ。

貴女達不老不死の蓬莱人と似たところがあるわね。

「不老不死……………」

輝夜は深刻な顔をしながら言う、しかし完全な不老不死でないという事実に羨ましそうにジンオウガを見つめるのだった。

隻角のマ王とワーハクタク

「人里」『入口付近』

「くっ!?」最近襲撃を仕掛けて来ていた妖怪とは明らかに強さが違う!」

そこでは慧音が一定の周期で襲撃を仕掛けてくる赤黒く変異した理性の無い妖怪、『傀異化妖怪』との戦闘を行っていた。

今回襲撃を仕掛けてきたのは傀異化した垢嘗（あかなめ）の妖怪で、本来垢嘗が常に所持している桶は持っておらず、その下が変異発達を起こし、もはやからだの3倍以上の長さに伸びる強靱な鞭と化していた。

そして今回変異している部位は正確には舌ではなく、血液であり、今までは皮や骨を中心に変異していたためいつもと様子が違うように見える。

キュリアが集まって形成される傀異核は舌、腹部、腕、足に形成しており、特に舌の核は口の中にある場合まず狙えないので厄介なことになっている。

そしてその鞭のように変異した舌は地面に叩きつけられると同時に大地に大きなヒ

ビを入れた。

これは普通の人間ならば一撃で死ぬような威力であり、慧音であっても直撃は不味い威力となっていた。

「ちっ！国符『三種の神器』!!」

そしていつまでも遠距離で戦っているのは相手の思う壺であることを悟った慧音はスperlカードを発動する。

そして周囲に弾幕で形成された剣、勾玉、鏡が現れ、慧音は剣を選び、傀異化垢嘗へと距離を詰める。

そして傀異化垢嘗はその舌で慧音を捕まえようと遠心力で巻き付けるように叩きつけようとする。

しかし慧音はその舌が一番威力を発揮する射程からはすでに抜けており、服が大きく引き裂かれる程度で済む。

そして慧音はその舌にある傀異核に剣を突き立てて破壊し、その部位を爆破させて垢嘗に致命傷を与えた。

垢嘗はこの衝撃によって一度倒れ、慧音はやつと戦闘が終わった安心感からかスperlを解除する。

「ふう………さすがにこれ以上強いのが出てくるとなると不味いかもしれん………私も

あの書の召喚をすぐに行うべきか……………」

そして考え事をして完全に死亡確認を取らなかったのが不味かった。

垢嘗の傀異核はまだ消えずに残っており、キュリアが散っていないからだ。

そして……………」

「ぎゅあああああああああああ!!!」

「っ!?不味い!?!」

垢嘗は咆哮と共にその核を全て爆破させ、周囲に大爆発を引き起こす。

その反動で垢嘗は完全に力尽き、キュリアも散っていくが……………大爆発、傀異バーストをまともに直撃した慧音は里の門まで吹き飛ばされ、門を破壊して里の内部まで飛ばされて気絶した。

この戦闘の影響で衣服があられもない状態になってはいたが、たまたま今回の警備担当が女性だった為、何も起きずに慧音は永遠亭まで運ばれ、治療を受けることになった。

〈永遠亭〉『治療室』

慧音はキュリアの毒を貰っていたが、これは幸い紅魔館が提供していたエスピナスの毒を用いた治療薬のレシピから簡単に作成出来ていた為、大事にならずに済んでいた。

なお、エスピナスの、それも辿異種の毒は洒落にならないのでかなり薄めた物を使用してようやく使用出来る段階になっていた。

そしてお見舞いには特殊個体のあの火竜夫婦もついてきており、たまに青と白の毛並みを持った小さな子鹿のような生き物、ケルビを狩ってはお見舞いにその白いレバーを盛ってきていた。

ケルビのレバーはホワイトレバーと呼ばれ、大変栄養価が高く、強い薬効を持つことが知られており、それを見た永琳が妹紅とリオ夫妻に角も一緒に取ってきてほしいと言われて持ってきていた。

そしてケルビの角を入手したことによりかなり強力な回復薬を作ることに成功しており、慧音は順調に回復して戦闘を行える程度にまで回復をしていた。

そして慧音は妹紅に頼み、自宅から紅魔館から受け取った召喚書を持って貰い、永遠亭の者達にもしもの時の事を頼んでおき、召喚を行うことにした。

そして永琳からの提案で満月の夜に召喚を行うことにしたのだった。

そして満足の夜、慧音は姿を変え、緑色の髪となり、頭部から日本の立派な角が生える。

昔は制御が難しかったこのハクタク化だが、今ではなんとか理性を保つことが成功しており、これによって増幅された力を使い、召喚書に己の霊力と妖力を両方注ぎ込む。

そして目の前にとてつもなく大きな魔法陣が生成され、そこからは悪魔のような頭部にリオレウス達のような骨格の体。

尻尾の先端は斧のような形状をしており、何よりその悪魔のような頭部にはとてつもなく大きな隻角が生えていた。

片側は完全に折れており、全身に無数の古傷が見えるがそれは歴戦の覇者のような貫禄を出していた。

そしてその悪魔の瞳は目の前のワーハクタクへと向けられ、その角を見る。

「キユオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その瞬間悪魔は咆哮し、走るために特化したその足で地面を蹴り、慧音にその角による貫突、つまりは頭突きを仕掛けるのだった。

隻角のマ王とワーハクタク その2

く永遠亭く『中庭』

「キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

悪魔は咆哮する。

目の前にいる双角の半獣に突進を仕掛ける。

その発達した両足と隻角となったことでより強靱になり、硬質化した角を使った突進は並のハンターなら一撃で挽き肉にされる威力だ。

「っ!?慧音!!避けなさい!!」

永琳は悪魔の持つ肉体の構造からその突進の威力を察して慧音に避けるように指示する。

しかし慧音の本能は避けるな、受けろと囁いており、慧音は受けて立つつもりでいた。しかし下手に受ければ自分が一撃で殺されることも分かっていた。

だが生半可な強化では受けきることは出来ない……………

しかし投げ飛ばした瞬間に己の身体強化は解除され、限界を超えすぎた力を使った影響が全身から出血を起こし、その場に膝をつく。

そして投げ飛ばされた悪魔は背中から地面に打ち付けられ、立ち上がるまでに時間がかかっていた。

そして立ち上がった後、ゆっくりとした慧音に近付き、その足を下ろして頭を垂れた。

「どうやら慧音を認めたらしい。」

全体的な力はたしかに悪魔、ディアソルテが圧倒している。

だが慧音はその圧倒的な能力差を一秒に自信の全てを注ぐことで縄張り争いである頭突き勝負に打ち勝ったのだ。

「はあ……………無茶しすぎよ。」

限界を超えた強化なんてしたんだから反動でまともに動けなくなっているじゃないか。」

「はあ……………はあ……………こうでも……………しないと……………受けきれない……………からな……………」

「だからといって受けて立たなくても貴女なら避けることも出来たでしょうに」

「それじゃあ……………意味が……………無いんだ……………あいつは……………私の力を……………見たがつていた……………からな……………受けなければ……………認めて……………貰えなかった……………そう

だろ？」

「……………ギュルルル」

赤い甲殻に身を包まれた隻角の悪魔、ディアソルテはその言葉に頷く、縄張り争いに負けた以上は上位者となるのは慧音となる。

その為慧音の言葉にしたがっているようだ。

本来ディアブ羅斯は縄張り争いに負けた個体はその縄張りの外に逃げて自分の新しい縄張りを作るのだが、召喚の影響か自身との繋がりを感ずる慧音に対して自分から離れるつもりにはなれなかったようだ。

「はあ……………治療するからそこに座ってて頂戴。

貴女もそこで慧音が無理しないか見ていて頂戴、人間ならその傷は大怪我よ。

うどんげー！」

「は、はいー！」

「すぐに包帯とお湯とタオル、それに消毒用のアルコールと傷薬を用意してきて、私はとりあえず消費され過ぎた妖力と霊力補充用の薬を作ってくるわ。

貴女は持ってきたらすぐに治療をしなさい。」

「分かりました！」

「それと治療は慧音だけじゃなくてその竜もやりなさい。」

「ふえ!?で、でも特に傷があるようには……………」

「はあ……………あんな馬鹿力で頭突きを受けて無傷なわけないでしょうに……………よく額を見てみなさい。」

そしてディアソルテはその目をそらしてはいたが額に強烈な一撃を貰って負傷により出血しているのがよく見ると分かる。

甲殻が血のように赤い為気付きにくかったのだ。

「へ?……………あ!?本当です!?よく見たら額の甲殻に軽くヒビが入ってそこから血が出ますー!」

「分かったらやりなさい。」

「は、はい!」

「グルルル……………」

「全く……………お前にも……………プライドかなにか……………あるんだろうが……………治療は受けとけ……………それが原因で……………病気かなにかになっても……………知らないぞ……………」

「……………ギュル」

傷をつけてしまった自分が言うのはなんだがなとは思う慧音であったが、ジト目を逆に向けてしまった。

大怪我している慧音に言われたくないといった所なのだろう。

「持ってきましたあー！とりあえず重症の慧音さんから治療しますね。」

「ああ……頼む……くっ」

全身の傷を治療する前にお湯で濡らしたタオルで出血箇所を拭い、傷にアルコールで消毒をする必要があるため、傷に大きく染みるようだ。

「はあ……これでは人里に戻るのが遅くなるな……」

「人里には今代わりに妹紅さんが守ってくれていますし空ではあの二頭の竜が見張ってくれますから大丈夫ですよ。」

「ああ……だといいがな……あとはこいつが里に受け入れられるかな……」

「うーん、歯の形状は鋭い牙が前に突き出していますが他の歯の形状からして多分草食が雑食だと思いますよ？」

するとディアソルテはその角で地面を掻き始めた。

「これは……サボテンか？」

「草食……見たいですね。」

「ぷっあはははは、意外と可愛いじゃないか！」

「あはははは！たしかに見た目怖いものになんか可愛いですね！」

「……………ギョルルル……………」

デイアソルテは不服そうだったが二人は笑っており、場が和む……そしてまた幻想郷に新たな住人（胃痛）が住み着くのであった。

新しい守護 s y ……竜

「人里」 『入口付近』

慧音が永遠亭での再入院を受けて2週間程たった頃だった。

今日は傷の具合が大分よくなったので退院していいという許可を貰えたのだが戦闘はまだしては行けないというドクターストップを貰っていた。

永琳曰く

『貴女の体は反動が大きすぎたからそれに適応するためにさらに肉体が強靱になろうとしてるのよ。』

それで回復が遅いのだから最低限あと一週間は戦闘含めた激しい運動は避けなさい。帰り道もその竜に乗せて貰いなさい。

少なくとも野良の妖怪の襲撃は防げるでしょうから。』

そして竜の背中に跨がって人里まで帰ってきたんだが……

「お？ 慧音も呼び出したのか？」

「妹紅か、前の戦いから戦力的に厳しいのは分かっていたからな……それで呼び出したは良いんだが認めてもらうのが大変だな。」

お陰で入院期間が伸びてしまったよ。」

「……………グルル」

「ああ、すまない。責めているわけではないんだ。」

むしろ私としては心強くてな、とりあえず妹紅は里の人を呼んでくれるか？

帰ってきたことを伝えておきたい。」

「ああ、そりゃいいんだが……………色々大丈夫か？」

「なにが……………あー、そうだな。」

ディアソルテ、地面に潜ってて貰えるか？

角だけ出す感じで。」

「キュオオオオオオ（ズモモモモモ）」

ディアソルテはその角と牙、翼等をととも器用に使って地面を掘り進む。

そして地面から角だけが生えているような形で埋まっている。

『ディアソルテ』

ディアブロスの突然変異種であり、隻角のディアブロスが度重なる戦闘によりその甲

殻を血のように赤く染めた姿。

そしてその性格は極めて狂暴であり、縄張りに入ったものを許すことはない。以前にハンターによって討伐されており、もうこの個体は存在しない。

召喚魔法の次のページに書かれていたこのモンスターの説明だ。

とても簡潔であり、生態なども殆ど載ってはいなかったが恐らくすでに討伐してしまつたから他の原種との違いがあまり記録出来なかつたと見て良いだろう。

とりあえず潜つては貰つてるがどのみち最初に驚かせ過ぎない為という程度であり、最終的に皆怯えそうだからどうしたものか……

「うーん、まあその状態なら話しは出来るか……、ちよつと待つてろ。」

そして妹紅は里の中に入って、私の帰還を皆に知らせ始めた。

そして人里の門が開き、そこから里の皆が出迎えにやつてくる。

「慧音先生！お戻りになられましたか！」

「お帰りなさい！慧音先生！」

「先生ー！お帰りー！」

「ああ、ただいま。」

すまないな、長い間人里を留守にしてしまうことになってしまつて。」

「いえいえ、慧音先生が守ってくださいならなかつたら我々も既に死んでいたでしょうから。留守の間も妹紅さんが守ってくださいましたから里に損害は何も出てませんよ。

それで……………さつきから気になつて居るのですがその地面から生えた突起は……………?」

「ああ、今日から私と共に生活して人里を守っていく仲間だ。

ちよつと強面で体もかなり大きいから最初皆を驚かせてしまふと思つたから地面に潜つて貰つてたんだ。」

「そうでしたか、ですが慧音先生が一緒なら大丈夫ですよ。

私達は貴女を信用していますから。」

「そうか、ありがとう。」

とりあえず先に伝えておきたいんだが彼はあくまでも草食の生き物だから必要以上に怖がらないであげてくれ。

出てきていいぞ? 少しずつ体を出してくれ。」

そして角のある地面が後方に大きなヒビを作り、隆起していく。

さらに横方向からも隆起し、その大きな翼を周囲は驚く。

想定以上の大きさだったのだろう。

次に斧のような形状をした大きな尻尾が地面から飛び出して、その地面を叩きつけ

る。

そして地面から唯一飛び出していた角も動き出し、その姿を里の者達へさらけ出す。

「キュオオオオオオ!!」

「ディアソルテという。」

好物はサボテンでらしいから食糧としては果物とかを中心に上げてくれ、サボテンはまだそんなに数が多くなかったはずだから本格的に増やしておいてくれ。」

「なっ!?この見た目で完全な草食なんですか!」

「ああ、やっぱりそう見えないか?」

「ええ、まだ雑食と言われた方がしつくり来ます……………」

まあ初めて見る者達からすればたしかに怖い見た目だよなあ。

そして人里の一人が自宅で育てていたというサボテンを持つてくる。

最近幻想入りしてきたサボテンであんまり数はないけど少しなら構わないそうだ。

「ツ!!キュオオオオオ!!」

彼がヨダレを垂らしながらサボテンを見ている。

余程の好物らしい。

「あー、た、食べますか?」

「キュツ（コクリツ）」

「ではどうぞ」

そしてサボテンは地面に置かれて、彼は嬉々としてそのサボテンにかじりつく、トゲはどうやら刺さらないようだ。

「キュオオオオオオ♪」

「ホントに美味しそうに食べてますね。」

「だろっ?」

「何はともあれ頼もしいです。」

「歓迎させて頂きますよ。」

「そうか……受け入れてくれてありがとう。」

そして彼は人里にすんなり受け入れられて、地面に角を出して埋まった状態で寝ており、その角を遊び場にする子供も増えているらしい。

きっと彼らは度胸ある人間に育ちそうだな……………

頭突きと突進の違い

く人里く『寺子屋』

慧音の里への帰還から一週間が経過した。

慧音に着いていき、最終的に寺子屋の庭に住み着いたディアソルテは普段は地面に埋まって休んでいるのをよく見かける。

本来ディアブ羅斯は自身の縄張りを守るために縄張りの見回りをしたりするのだが、人里はディアソルテからすれば自分の上位者である慧音の縄張りの為、慧音が許す者達への危害を加えず、自分自身は縄張りを荒らさないために大人しくしているようだ。

だが大人しすぎた為か今では地上に露出させている角は子供達の遊び場となっており、たまにブランコが取り付けられている所も見える。

そして最初は怖がっていた人里の大人達も、その食事の様子や普段の様子を見て次第に警戒を解いていたのだった。

なんならたまにおやつやサボテンを与えている者もおり、食用のサボテンをおやつとして与える為に自分で育てている者もいる始末だ。

ただ運動もしないとディアソルテ自身も弱ってしまうので、寺子屋が授業をしている間は商人などの護衛を兼任した竜車をやったり、慧音のお使いを請け負ったりしている。

ただ竜車についてはあまり人気がなく、実際にやって貰った本人曰く、走るのが速すぎて怖かったそう。

しかしディアソルテはこれでも手加減して走っており、危なそうならちやんと止まったりもするので、慣れた一定の層からたまに依頼が来るような形に落ち着いたようだ。

そして今ディアソルテは放課後の寺子屋で地面から出ていた所を子供達に捕まり、尻尾に乗せて上下させたりして遊ばせていた。

彼はどうやらブランコはそこまで好きではないようで、角に負担がかかって変な感じのようだ。

終わつた後に地面に突き刺してグリグリやっているのを見かける。

子供達の事は慧音の群れの子供というような認識をしているようで、基本的に傷付かないように配慮してるのも見てとれる。

そしてそんな中、休憩をとっている慧音がディアソルテの所に訪れる。

「やあディアソルテ、相変わらず人気者だな。」

「……………キユオオ」

「あははは、そんな不機嫌そうにしてやるな。」

お前がそれだけ人気ってことなんだからな。

それに子供達の相手をしてくれて私もとても助かっているんだぞ？

おーい、尻尾の乗り心地はどうだ？」

「けいねせんせー！とつても楽しいよー！けいねせんせーもやるー？」

「先っぽはちよつと怖いけど面白いよー！」

「座り心地がいいよー！」

「ほらな？」

「……………キユオオオオ」

顔を背けてはいるが心から嫌がっている様子ではない、割と仕方なくやっているようにも見えるがとても皆の笑顔が増えた。

「あー、でもディアソルテが来てからせんせーの頭突きがさらに痛くなつた気がする！」
「確かにー！いつもゴツンって感じだったのになんか吹き飛ばされそうな感じになつたよなー！」

そういうのは居眠り常連組の男子二人だった。

彼らは悪戯坊主な所もあり、割と寺子屋をサボったり出ても居眠りしたり別の事で遊んでたりするので頭突き常連になっているのだ。

「そんなのあんた達が寝てたり変なことしてるからじゃん！」

「そうよー！確かに先生の授業は眠くなるけど………（ボソツ）」

そして女子二人がそれを注意するが、一人は彼らの気持ちが分からなくはないようだ。

慧音は人里で歴史を中心に授業を行うのだが、外の世界の歴史ならまだしも、まれに人里の割とどうでも良い歴史まで授業で話すので一部の子供達はもはや催眠術と化した授業によって眠りに誘われて頭突きで眠らされるのが恒例となっていた。

そしてそれを聞いたディアソルテは慧音にジト目を向ける。

地面の中を突き進み、侵入者を排除したりするディアブ羅斯は地面の中から地上の様子が正確に把握出来るように耳がとても良く、その突然変異であるディアソルテもその特徴を持っていた。

その為さっきの小声が聞こえていたようだ。

「そんなに痛いかな？私はちゃんと怪我もしないように加減してるんだぞ？」

ジト目を向けられた慧音はその目に答えるように話す、しかし実際に一度全力を越えた頭突きにより額が割れているディアソルテは顔を反らした。

「え？もしかしてディアソルテも先生の頭突き受けたの？」

「あー、そのなんだ。」

こいつと最初出会った時に力を見せる必要が出来てな、それでこいつの突進と私の頭突きでやりあったんだが……私が最終的に勝ってディアソルテはここにいるんだ。」

「へー、ディアソルテの突進に頭突きで勝ったんだー。」

（（； 口。））ガクガクブルブル」

一部の頭突き常連は皆震えてしまった。

「か、勘違いするんじゃないぞ？突進と頭突きだと一ヶ所に力を集中する頭突きのが分があつたっただけで………」

「あら？その割には頭突きした後そのご自慢の角を使ってこの子を投げ飛ばしていたじゃないの（ゲフツ）」

そして後ろから血を吐きながら現れたスキマ妖怪が現れる。

「ギョオオ!?!」

いきなり現れたスキマ妖怪にディアソルテは驚き、警戒を露にする

「さて、ディアソルテ。」

こいつ敵じゃない。

それで八雲殿、もしかしてあの時見ておられたのですか？」

「見ていたも何もちやうど胃薬貰つてた所にその子を召喚されて血を吐いたわよ……」

「……………」

慧音は紫の胃痛の原因を知っており、だからこそ最初は召喚を遠慮していたのだが、最終的に召喚してしまったので顔を反らす。

「はあ……………まあ別にいいわよ。」

今は戦力が多いに越した事は無いのだから。

とりあえず貴女はその竜と一緒に戦うことを前提とした動きを身に付けときなさい。

あの吸血鬼姉妹によればいずれ大襲撃があるらしいからそれに備えて貴女の頭突きとディアソルテの突進を互いに教え合いなさい。」

そしてスキマ妖怪は何処かへ去っていく。

そして私達はお互いの攻撃を思い出して苦笑いするのであった。

「しかし大襲撃か……………」

いずれ起こる百鬼夜行に幻想少女達は備え初めているのだった。

「((; ㄩ。)) ガタガタガタガタ」

なお一部の子供はさらに震えるのだった

八雲紫は胃潰瘍を加速させる

くマヨヒガく

八雲紫達が住みかとする場所であり、この場所を知るものは限られている。

そこには住人である八雲一家がいたのだがどうも真剣な様子で何か作業をしていた。

「藍？結界の状況はどうなっているかしら？」

「……………少しずつですが無理矢理こじ開けられています。」

「このままでは長くは持たないでしょう。」

「修復は？」

「妨害されています。」

それにこのモンスターの能力が高過ぎて修復速度が追い付きません。」

二人が覗き込むスキマの向こうには巨大な爪をスキマに突き刺してこじ開けようとするとても大きく大きな腕と、その空いたスキマから流れ込むキュリアの群れであった。

「不味いわね……………ただでさえこじ開けられたスキマからキュリアが流れ込んで幻想郷

の妖怪から力を吸い続けているわ。」

「向こうの世界のモンスターは突然変異等が一世代で起こしやすいたも聞きます。」

このままでは妖怪の力を取り込んでさらに不味い事態になってしまふのでは？」

「……………その為のモンスター召喚よ、妖力が馴染むかどうかかなり賭けだけでもメル・ゼナは覚醒するでしょうね……………『亜種』でも『希少種』でも『特殊種』でも『逸異種』でも『二つ名』でもない……………

そうね、名付けるとすれば……………

『幻想種』と呼ぶべきモンスターへと」

今は定期的にメル・ゼナの支配するキュリアにレミアアやフランドールといった吸血鬼の精気を吸ってもらってメル・ゼナに吸収してもらっている。

これによりメル・ゼナは二人の吸血鬼の精気を媒介として妖力を取り込み続けている……………。

だが吸収する力は何でも良いというわけではなくその力に合わせたものにしなれば効率良く取り込むことが出来ない。

もちろん相性が良くななくても時間さえかければその力を取り込み、扱うことが出来る。

そして既にこれを逆ではあるが実践しているのが藤原妹紅である。

本来モンスターの炎、それもともと炎を扱うモンスターがさらに炎に特化した特殊種の炎の力を取り込んで扱うのはとても長い時間ゆつくりと取り込み続けて体に馴染ませる必要がある。

そうでないと体が耐えきれないのだ。

しかし妹紅はその不老不死という自身の肉体の特性を生かし、自分の体を再生しながら受け続け、その力を吸収していったのだ。

結果として完全に扱いきる事は出来て居ないが、力を取り込んで扱うことが出来るようになった。

これを逆で行う事により、リオレウス豪火種とリオレイア灼熱種は妹紅の再生の炎という特性を取り込むことが出来ると予測している。

「とりあえず希望はメル・ゼナになるのでしょうか……あ、マヨヒガに向こうの世界に繋がっているかなり小さいスキマが開きました、恐らく結界全体への負担が大きくて綻びが生じた物と思われれます。

如何しますか？」

「放置で構わないわ……この大きさなら小型モンスターでも入れるモンスターは限られる上に時間が経てば勝手に塞がれるわ。

今は結界の強化による時間稼ぎが優先よ。」

「畏まりました。」

紫達は影響は無いだろうと判断したのか放置していたスキマだが、運が悪いことにこのスキマの向こうには生まれたてのモンスターが居た、そしてスキマの向こうが周辺の景色とスキマに入った先の周辺の状態が全く違う事に興味を持ったモンスターはその翼腕で空いたスキマを掴んでよじ登る。

この竜はそもそも親が存在せず、繁殖方法も寄生、分裂に近い為周囲にはそれを止める事が出来る者は居なかった。

そして八雲藍の式である橙は、今は人里に新しく住み着いた竜について調べて貰っていた為、この場にも気付けるものは居なかったのだ。

「とりあえずスキマの周辺に罾と結界を作ってキュリアの出入りを極力を押さえるわよ。」

力を取り込ませ過ぎたら何が起こるか分からないわ。」

「はい、分かりました。」

現在キュリアを減らすために攻撃性の罾を仕掛けています、効果はどのくらい出るか未知数ですが結果も同時進行で設置していきます。」

そして背後に足音が響く。

小さな子供が歩いているような足音だ。

「そう……………あら？橙かしら？いつの間に帰って……………え？」

「あれ？橙が帰るのはまだ先のはずですが……………へ？」

そこに居たのは全身が黒い鱗と甲殻に覆われ、腕のような形状をした翼に燐粉が流れるように移動する翼膜、そしてその頭部には目が存在せず盲目で、代わりに側頭部に収納される形で触覚が仕舞われていた。

そのモンスターは……………

「っ!? 境符『四重結界』!!」

「シャアアア!」

「紫様!?! このモンスターは一体……………」

「ゴア・マガラ……………なんで……………なんでこいつがここにいるのよおおおおお
おおお?!」

「ゴア・マガラというと紫様が向こうの世界で散々追いかけて回されたというあのゴア・マ
ガラですか？」

「ええ……………しかもよりによってマヨヒガに来ちゃったからもう帰せないわよ……………」

他の場所ならまだやりようはあだったけどここじゃ私の力が充満し過ぎててもう幻想判定になっちゃったわよ……………」

「シヤアア!?!シヤア!シヤアア!!」

ゴア・マガラはいきなり自分の周囲が突然壁のような物に囲まれて閉じ込められた事に困惑している。

触覚で感知してもスキマがひとつもない事に驚きを隠せないようだ。

「とりあえずこの子の境界弄って燐粉の毒性消さないと……………幻想郷滅ぶわね……………」

この子を始末しても良いのだけれどさすがに生まれたての赤子を殺すような精神性はしてないわ……………」

そしてゴア・マガラの狂竜ウイルスの境界を弄り、免疫の破壊と生殖細胞としての機能を完全に無くしたゴア・マガラは最終的に八雲紫に懐いてしまった為、紫が仕方なく面倒を見ることとなったのだった。

が八雲紫の胃に星形の穴が空くのはその翌日の話だったのだ。

傀異化妖怪とディアソルテ

く人里く『入口前』

カンカンカンカン……………

鐘の音が鳴り響く。

これは人里の全ての門の付近に設置された矢倉から、妖怪からの襲撃の合図だ。

そしてこの音に気付いた人里の者達は一斉に避難を開始する。

そして慧音と、寺子屋に埋まっていたディアソルテも襲撃を受けている場所へと移動する。

「状況は？」

「慧音先生、今回の襲撃は3体の妖怪ですがいずれもこの間と同じく赤くなっています。」

「今度は傀異化した妖怪が3体か……………たった一体でも苦戦するのに厄介な……………」

「キュオオオオオ!!!」

そしてディアソルテは地面から飛び出して尻尾を叩きつけながら威嚇している。

しかし妖怪達は怯まない。

「ディアソルテ、そいつらに纏わりついてる赤い蝶のような生物であるキュリアに気を付けてくれ、纏わりつかれればお前もあいつらのようになってしまいかねない。」

「キュオオオオ………」

それを聞いたディアソルテはどうもどう迎撃しようか迷っているようだ。

下手に突進するだけではこちらにキュリアが纏わりつくというのが分かっているの
だろう。

そして今回襲撃を仕掛けてきたのは人狼型の妖怪が3体のようだ。

「ディアソルテ、地面に角を突き刺して岩を投げたりとかは出来るか？」

「キュオオオオ（頷く）」

そしてディアソルテは地面に自身の角を突き刺して岩盤ごと持ち上げる。

いわゆるラージジャンなどが使う岩盤投げと同じ容量だ。

そしてその岩を投げて尻尾を叩きつけることによって碎きながら岩を加速させて妖怪達に投げつける。

「アオオオオオオオン!!」

「「キヤイン!?!」」

一体は遠吠えをして避けるが残り二体は当たって怯む、しかしその程度であり、ダ

メージはそこまで無いようだ。

そして三体の体に複数の傀異核が形成される。

「硬い………どうやら岩では傷がつかないレベルで硬くなっているようだな………そうすると今回変異してるのは骨か皮か？」

「キュオオ………ツ！キュオオオオオオオオオオオオ！！」

そしてディアソルテもそのダメージの低さに考え込んでいた様子だったが、なにかを思い付いたのか咆哮をしてから地面に完全に潜り始めた。

そして地面を音を立てながら掘り進む。

そして地面から角だけを飛び出させて人狼の妖怪の傀異核に正確に突き刺した。

これにより人狼の頭部に発生した傀異核を破壊し、それによる爆発で人狼の一体に致命傷を与えた。

「キュオオオオオオオオオオオ！！」

そして咆哮を上げながら地面の中へと戻る。

「そうか！地面に潜りながらなら纏わりつかれる心配はない！ディアソルテ！その調子でのこり一体も頼む！私はもう一体を相手取る！」

そして私は国符『三種の神器』を発動して剣を取り出した。

「はあ！」

そして私は弾幕で牽制しながら切り付ける。

そして人狼はその爪で受け止めるがそのまま爪を破壊して腕の傀異核で受け止めた
がその衝撃によって破裂する。

その爆発の衝撃波により慧音は後方へ吹き飛ぶが無傷で済んでいた。

「わおおおおおん!!」

そして人狼は咆哮をして失った腕を弾幕で作り返して攻撃を仕掛けてきた。

「くっ!!」

そしてその攻撃をなんとか避けようと体を捻るが軽やかする。

これにより切血やられになり、慧音の自己回復能力が低下するが、慧音は気にせず畳
み掛ける。

これは紅魔館から情報を貰い、この状態の時に相手に傷を付けると今度はこちらの傷
が治癒するらしい。

どうやら精気のやりとりをするのはこちらも同じということらしい。

そして人狼の赤い発光がさらに激しくなる。いい加減仕留めないと不味そうだ。

だがディアソルテが相手をしている人狼も先程の攻撃を見たのもあり、地面からの刺
突を避け続けていた。

そこで私は一つ思い付いた。

丁度今は月夜であり、満月の夜程力を制御出来ないが”角”を生やす程度なら可能だ。

そして……

「ディアソルテ！地面から全身を飛び出させてやつを巻き込め！」

「キュオオオオオオオオオオ!!!」

ディアソルテは地面から飛び出してその頭部を使って人狼を地面ごとこちらへ吹き飛ばす。

そして私はもう一体へ剣での刺突をするが、避けられる。

しかし本命はこちらではない。

「ぬおおおおお!!!」

私はその勢いのまま角を生やした頭部による突進、ディアソルテ直伝の突撃を食らわせてもう一体の人狼の元へと吹き飛ばす。

「キャン!?」

これにより二体の人狼は空中でぶつかり合い、その衝撃でいくつかの傀異核が破壊される。

「ディアソルテ！やるぞ！」

「キュオオオオオオオオオオ!!!」

そしてディアソルテが突進し、私はスペルカードを取り出して弾幕を頭部に集中する。

これにより頭部の角がディアソルテ並みに巨大な物になり、突進をする。

「角符『角竜のあぎと』!!!」

そしてお互いの角が背中合わせに激突した二体の人狼の落下地点へと同時に激突する。

これにより人狼は3本の巨大な角に挟まれてその体の一部を挽き肉にする。

だがまだ息はあり、弾幕による反撃をしてくるがまだ攻撃は終わっていないのだ。

「キュオオオオオオオオオオ!!!」

「やるぞー!」

ディアソルテは地面に潜り、私は空を飛ぶ。

そして私は角を地面へと向けて突撃する。

「キュオオオオオオオオオ!!!」

そして地面からもディアソルテが飛び出し、その翼と角、さらに慧音の2本の角が竜のあぎとのように重なるうとしていた。

「はああああああああ!!!」

「キュオオオオオオオオオ!!!」

これにより竜のあぎとが閉じられ、人狼達は噛み砕かれて死亡した。前から練習したが上手くいってよかった……。

そしてそれを見た村人は……

『村を襲った妖怪を倒してくれたのはありがたいですが……先生の頭突きがさらに怖いです。』

後にそう語ったという。

月光を纏う竜

く迷いの竹林く

この日、迷いの竹林では珍しく霧が発生しており、私は満月の夜にのみ見つけることが出来る薬草を採取するために竹林に向いていたのだが案の定視界がかなり悪く、薬草の採取は今回は諦めるべきかと考えていた。

しかしこれは定期的に採取出来るとはいえ満月の月光によってその色を変えてようやく見つけられる代物の為、一度タイミングを逃してしまうとそれが採取出来るのはかなり先になってしまうのだ。

「困ったわね……あれは元々そんなに備蓄がない上に栽培が難しい薬草だから定期的に見つけて起きたかったのだけれど……。」

この薬草は特殊な性質を持っており、基本的には色んな植物に擬態していて固定された姿形を持っていないのだ。

そしてその擬態は完璧であり、プロでも見分けることが出来ないときされていて、唯一分かっているのがこの薬草が満月の月光を浴びることで金色に色を変化させるという

性質だけだ。

ゆえに幻想となりこの幻想郷に自生しているのだが、人によつてはこの薬草が突然変異でしか生まれない物という説を立てており、栽培に一度も成功した例が無いことや栽培しても、その擬態元になっている植物しか生えない事からこの説が生まれた。

そして私はそんな薬草をこの霧の中探していたのだが、あるとてつもなく大きな気配を近くに感じる。

微かな足音も聞こえなくも無いのだがかなり消されている。

そう、まるで”姿だけが消えているように”。

そして竹林の影に入ったところでその正体が明かされる。

それは月白色に輝く体毛と透き通った刃のような鋭い翼を持ち、猫のような頭部をしており、腹部は橙色の巨大な竜だった。

そして最も特徴的なのは、月光を浴びた部分が見えなくなっているのだ。

恐らく光の屈折を利用したものだだろうと永琳は結論を付ける。

「まるであの薬草と真逆ね……………」

そして竜は、私の目の前で座り込んで私を見つめる。

まるでその瞳は私に何かを見出だしているような、そんな瞳だったのだ。

「貴方は何かを感じ取っているのね……………恐らく私に染み付いた月の気配といった所か

しらっ？」

月光を利用して姿を消す、そんな生態を持つのなら恐らく月が何らかの力を持っていて、ることにも気付いているだろう。

そしてそんな竜が私に感じ取るもの、それは恐らく私が飲んだ蓬莱の薬ではなく月に住んでいた私に染み付いている月その物の気配なのだろう。

「そうね、私も探し物があるから一緒に探しながら話さないかしら？」

「……………（コクリ）」

そして竜は背中を向けてゆっくりと移動し始めた。

「貴方は恐らくこの世界に迷い込んだ口でしょうね。」

「貴方はこの辺りに見覚えが無くて戸惑っていたのではないかしら？」

「……………ッ！」

竜は驚いたような表情をし、目を大きく開いていた。

「どうやら当たっていたみたいね。」

「そうね、自己紹介といきましょうか。」

「私の名前は八意永琳、元々月に住んでいた者よ。」

「……………（カキカキ）」

すると竜は地面を爪で引っ搔いて文字を書き始めた。

驚いた、随分と知能が発達してるのね。

そしてそこにかかれた文字は………

「これは竜世界の文字ね………」

ナル ガ ク ル ガ………ナルガクルガ、貴方はそう呼ばれていたのね。」

私達は深く繋がりをもった竜の住む世界の事を竜世界と呼ぶことにしており、私はその文字について紅魔館の本を借りて学んでいた。

ただまだモンスターの凶鑑等は読めておらず、ナルガクルガがどのような種族なのか私は知らなかったりする。

そして竜はやはり月の光を浴びる度にその部位が見えなくなっていた。

恐らく意図的な物ではなく、この体毛その物が特殊なのだらう。

そして目的の薬草を発見して採取する。

その合間にナルガクルガはケルビと呼ばれる青い鹿のような小型モンスターを狩って捕食していた。

どうやら肉食らしい。

そして仕留められたモンスターを見てみるとトゲが刺さっており、そこから毒液と思われる液体が滴っていた。

どこにそんなものを隠していたのか気になると、ナルガクルガは自身の尻尾に大量の

トゲを発生させてから収納していた。

どうやら尻尾に射出可能な毒のトゲを大量に隠し持っていたようだ。

これは不意打ちを受けていたら私は一撃で戦闘不能になっていた可能性あると考え
ていた。

あのケルビというモンスター¹の傷から血が溢れ続けていた。

恐らく出血性の高い致死性の毒と私は見ており、いくら体が再生する蓬萊人でもあの
巨体から繰り返し出される毒トゲを展開した尻尾による叩きつけを貰ったら恐らく再生ス
ピードを上回り、しばらく私は再起不能にさせられるだろう。

これは一度戻って調べる必要があるそうね。……………

そして私達は薬草を持って永遠亭に戻ったのだった。

なおウサギ達をみていて涎を軽く垂らしていた為、その辺りはしっかりと話し合わな
いとうちのウサギ達が全部食べられかねなかった……………。

まったくゾンオウガと完全に同じじゃない……………。

まあ肉食だから仕方ないのでしょうけどね。

料理将軍

く冥界く『白玉楼』

「ギユイイイイ!!」

シヨウグンギザミの鳴き声が響く。

ジャキンツッ! シュインツ!

鎌が展開され、高速で振るわれることにより空気を切り裂き、その切り裂いた空気によつてかまいたちが発生していた。

これによりシヨウグンギザミが切り裂くものはさらに細かく刻まれていた。

そしてシヨウグンギザミは他の獲物を引つ張り出してそれを骨と肉に斬り分ける。

しかし斬っていると肉の脂により切れ味が落ちてしまうため、己の鎌同士で磨いたりもしていた。

これによつて切り分けられた肉を受け取った妖夢は……………。

「助かります！あと半分ですので頑張ってください！

私はこれを全て料理しますので……………」

死んだ目で料理を作り続けていた。

「ギユイイイイイイイイイイイイイイイイ!!?!?」

シヨウグンギザミはあまりの作業に軽く悲鳴を上げていた。

しかしそれも当然だろう、何故なら……………」

「なんで幽々子様は以前リモセトスを召し上がってから食欲が減らないでそのまま増えた状態になつてゐるんですかあ!!?

以前の5倍ぐらい食欲増えてるじゃないですかあ!!?

死にますよ!?!私は半分死んでますけど死にますよ!?!」

そう、あのリモセトス地獄を乗り切った後はもうこれつきりだと思つていたのだが、

幽々子の食欲は戻らずに朝昼晩の量が異常過ぎるレベルで増えていたのだ。

しかしそのあまりの量に流石の妖夢もパンクしており、シヨウグングザミに稽古と庭の手入れが終わった後に料理を手伝って貰っていた。

シヨウグングザミはその巨体故に細かい料理には向いてはいないのだが、その鎌の繊細さには目を見張る物があり、どんなに小さいものでも正確に切り裂いていた。

そして解体もお手の物であり、妖夢は主に食用モンスターの解体と、食材の切り分けを頼んでいた。

流石に量が量なので、一人で切つて料理しては時間がかかりすぎるので切り分けと料理係で分担することになっていたのだった。

しかしあまりにも量が量なものもあり、妖夢もシヨウグングザミも悲鳴をあげていたのだった。

切つても切つてもキリがなく、いくら料理して捌いても終わる気配がしない地獄……それを毎日三回行っていたのだ。

そしてシヨウグングザミはその幽々子のあまりの食欲から、彼女の事をイビルジョーの亜種か何かと認識していた。

あながち間違いでは無かったのである。

そして料理を終わらせた二人は……………

「……………（ピクピクッ）」

「……………（ブクブクブク）」

妖夢は痙攣を起こしながら半霊とは違うモノが口から出ており、シヨウグンギザミは泡を吹きながらヤドが軽くズレていた。

これが毎日三回起こる為、シヨウグンギザミは無駄に鍛えられていたのであった。かまいたちも敵を切り裂く為ではなく、料理を速く終わらせるために習得したのだった。

そしてしばらくして復活した二人は庭の手入れを行っていた。

そして妖夢が話しかける。

「いつも手伝って貰ってすみません…………でもあの量を一人で捌くのは流石に無理があつたので…………。」

「グユイイイ…………」

妖夢は心なしかげっそりしている。

そしてショウグンギザミもその鳴き声に元気がないのがわかる。

そしてそしてズレたヤドを直し、鎌を仕舞って自分の触角を手入れしていたショウグンギザミは空いた片方の鎌で庭の木を剪定して手入れをする。

ショウグンギザミは結局白玉楼に住み着き、妖夢の手伝い兼修行相手として仕事をしていたのだ。

お陰で妖夢の剣術から学んだ事を自分の鎌で再現する等、どんどん強くなっている。そして妖夢は圧倒的に足りていなかった実践経験を多く積むことが出来ており、その剣術に磨きをかけていた。

今はショウグンギザミの抜刀をなんとかモノに出来ないか試行錯誤しているらしい。

「それにしても貴方の剪定はとても自然な感じがします。元々湿地で住んでいたと聞きました。その時に自分の好きな形に木を剪定したりしていたんですか？」

「ギユイ？ギユイイイイ……」

シウウグングンギザミは元々湿地に住んでおり、そこからどんどん火山地帯まで生息域を伸ばしていたのだが、余計な邪魔が入るのを防ぐために木等を切り裂いて傷を付けていたのだ。

だが彼は木を切り裂いた時、自分の好きな形に気が纏まっていたのに気が付き、他の木を同じようにしてみようと興味を持つて剪定をしていたことがあった。

火山にてデインバルドを己の力で倒して鎧裂きとなつた頃にはもう生息地を火山内部に変更していた為、ここしばらく剪定をしていなかったのだが、幻想入りによって湿地や火山では見られない美しい木々を見て、趣味が再発していたのだった。

とはいえシウウグングンギザミが妖夢にそれを伝える手段は持ち合わせておらず、地面に絵を描いてなんとか伝えようとしていた。

「これは……縄張りを主張する時に木を切り裂いていたんでしようか？うーん、私も地底の覚妖怪のように貴方とコミュニケーション取れば良いんですがねえ。」
いつもながら会話は難航していたのであった。

「妖夢♪次はリモセトスが食べたいわ♪」

「勘弁してください!?!」

「ギユイギユイイイイイイイイイイイイイ
!?!?!」

幻想の力

く紅魔館く『中庭』

満月の夜、紅魔館の中庭に怪しく光る深紅の龍がたたずんでいた。

その佇まいは吸血鬼とも呼ぶべき佇まいであり、その周囲には吸血鬼が眷属を従えるのと同じように、体色と同じ深紅に発光し、翼を持ったヒルのような生き物『キュリア』が力を主に捧げるように龍の首や腕へと止まり、力を注ぐ。

そしてその龍である爵銀龍メル・ゼナは、受け取った力を馴染ませるように体を震わせる。

そしてその龍の周囲の者達は考え込んでいた。

「あの運命が見えてからメル・ゼナには私とフランの血を与え続けているけれどなかなか『く程度の能力』や吸血鬼の性質、そして妖力が産み出される様子は無いわね………」
館の主であるレミリアは呟く、幻想の力がなかなか宿ることの無い現状に。

「仕方ないと思うわよ、本来妖力はかなり長い年月取り込み続けなければ力を取り込む

事は出来てもそれを生成出来るようになるのだし。」

そしてその力に馴染もうとするメル・ゼナはその力と己の翼を広げ初め、龍の力で段階的に段階として展開を始める。

そしてメル・ゼナの翼は虹色の光を放ち、その腕や首はさらに深紅の輝きを増した。

「ツ!?ようやくね、とはいえ目覚めた力を完全にモノにするにはもう少しかかるはずよ、それまでじっくりと力を馴染ませなさい。」

そしてレミリアの隣にいる妹のフランドールは楽しそうに言う。

「ねえねえお姉さまー!メル・ゼナも私達みたいになるの〜?」

さらにパチュリーがカリスマ(モドキ)をかりちゆまに変えるべく追撃をする。

「貴女達みたいにといかもうすでに貴女達より吸血鬼らしいと思うけれど?」

そしてカリスマ(モドキ)はかりちゆまに変化して……………。

「うっさいうっさいうっさい!!うっ☆さくやああ!」

そしてかりちゆまは心の底で認めている為か否定せず、自身の従者に助けを求める。

しかし……………。

「ゴシヤ!ギガゴザクウ!」

従者である咲夜はそのあまりのかりちゆまにやられてしまい、妙な武器のような断末

魔を上げながら口と鼻から大量の血を吐く。

「どうやら今回は忠誠心が口と鼻から出たようだ。」

「ちよつと咲夜ー？大丈夫？」

そして心配そうにかりちゆまの妹であるフランドールはその顔を覗き込むがそれはもはやトドメだった。

「ゴフツ!!我が生涯に一片の悔いはありません……………ガクツ」

「咲夜!!咲夜ああああ?!?!」

フランドールは常人では首が千切れる勢いで首を振らせて起こそうとするが咲夜は幸せそうに眠っていた。

「あーあ、もうめちやくちやね？」

「いえ、めちやくちやにした原因はパチュリー様に……………イエナンデモアリマセン。」

そしたらメル・ゼナは軽くジト目を向けるが意味がないと理解している為かすぐに溜め息をつけてキュリアを咲夜が大量に吐き出した吐血後に向かわせて掃除兼吸血させる。

咲夜はカリスマ（モドキ）がかりちゆまになる度に大量に吐血するか鼻血を出していた為、もはやメル・ゼナは慣れていたのであった。

幻想と化した断裂群島

くマヨヒガく

「キュ……………キュウ……………」

マヨヒガを住みかとする八雲 紫、今日も今日とて深淵の悪魔の侵入を防いでいた。

そしてその紫の頭の上には式神となったゴア・マガラが乗っかっていた。

そして唸っているのは紫のやっている侵入者対策にゴア・マガラの狂竜ウイルスを敵にのみ有効にさせて免疫を大幅に下げて弱体化を狙っていた。

もちろん狂竜化させないように調整はしているが弱らせる為に全力で強化しているものだ。

しかし相手は古龍なものもあり、ゴア・マガラ、それも生まれたての個体の狂竜ウイルスではあまり効果は出ていなかったたのである。

そして文献によれば超大型古龍であるダレン・モーランですら狂竜化には抗えなかつ

た記録が残っており、成体になった際のウイルスの強さが未知数な為早めに成長して欲しい所だが、それまで深淵の悪魔が待つてくれるとは思えなかった。

「これ以上に向こうの世界の侵入を防ぎすぎているとボロがいい加減出そうね……………土地を一部幻想入りさせて向こうの世界の繋がりを大きくして結界を強くするしかないか……………」

元々繋がりが弱く、遠すぎる世界のスキマを無理矢理塞ごうとしていたこともあり深淵の悪魔との力の均衡は大幅に悪魔側に軍配が上がっていた。

だが土地を一部幻想入りさせることで繋がりを強くすれば世界同士が近付くという危険こそあるがその繋がりを利用することでこちらの結界に適応させやすくして悪魔が侵入しにくくすることが出来るのだ。

だが幻想郷の環境が大きく崩れてしまう危険もあるためあまり取りたくない手段でもあったのだが仕方ないと割りきっていた。

そして最終的にモンスターがかなり幻想郷に入ってきてるのもあり、それを一ヶ所に集めやすくするために幻想入りすることに決めたのだ。

そしてその幻想入り予定の場所も検討を付けており、キュリアの影響が一切無く、狩

られ過ぎて土地の再生の為主力禁止区域となつて人も竜人もいない群島、リオレウス豪火種やリオレイア灼熱種、ジンオウガ不死種の故郷ともいえる断裂群島そのものを幻想郷に招くつもりだ。

範囲そのものがとてつもなく広いが巨大なモンスターがどんどん幻想郷に来ている影響で軽く手狭になり始めていたので拡張しておきたいという所でもあったのだ。

それに一部調査に来たハンター達によつて対巨龍兵器も設置されており、それがまるごと回収されずに残っているので限界が来たら悪魔をこの地に出させて決戦を仕掛けるつもりでもあった。

「藍ー！」

「はい！お呼びでしょうか？」

「今からちよつと無理やるからしばらくこつちお願い、私はこいつと戦つても影響が少なく、有利になる場所を幻想郷に招くわ。」

ただとてつもなく広い土地をこちらに招くから回復までかなりかかるわ。

それまで私は回復に集中するから任せたわよ……………」

「ツ!?わかりました。それまでなんとか耐えて見せますー！」

「お願い……………」それと無茶言うようで悪いのだけれど向こうの世界の対巨龍兵器も入ってくるからそれを見つけて出して河童に量産を頼んで頂戴。」

「じゃあいくわよ!!」

そして紫は巨大な霊力、魔力、妖力、神力によって作られた結界陣を展開し、自分で拡張出来る所を拡張する。

これにより幻想郷の範囲が大きく広がり、広がった土地を埋めるために土地を招く準備が整う。

そして全力の妖力を使って幻想入りさせる土地を設定し、結果を適応させる。

「忘れられた幻想の地を今ここに!!」

そして幻想郷はこの日、大きな地響きに見舞われた……………。

バタリと倒れる音が響く、それが自分の主人が力を使い果たしたことにより倒れたという事実気が付くまで時間はかからなかった。

「紫様……………。ゴア・マガラ……………紫様を寝室までお連れして寝かせてやってくれ。」

「キュ……………」

そして妖力を使い果たして子供サイズまで小さくなった主を背負い、ゴア・マガラは

寝室まで移動する。

藍は今は深淵の悪魔の侵入を防いでいる為に動くことは許されない。

「紫様、貴女から頂いた通信用のスキマを使わせて頂きます。」

そして藍はそのスキマを博霊神社に繋いだ。

「霊夢、聞こえているか？」

『藍！紫のやつ結界に何かしたでしょ!?あの地揺れはなによ!?まさか土地を幻想郷に招いたというの!』

そしてスキマから聞こえてくる彼女の声には怒りと焦りが感じられる

「霊夢、落ち着いて聞いてくれ。」

『これが落ち着いて居られるものですか!なに?異変でも起こすつもり?』

「霊夢!!……………頼む、話を聞いてくれ。」

そして藍の必死な様子に霊夢は違和感を覚えて落ち着いた。

『ツ!?!……………ちゃんと説明するのでしょうね。』

「ああ、だが時間がないから手短になる。」

まずこの幻想郷の結界を無理矢理破つて侵入を試みている者がいる。」

『なっ?!?!この結界を破るだなんてそんな……………』

あり得ない、そう言おうとした霊夢だが次の言葉に絶句する。

「いや、すでに限界が近くなっている。」

今回の土地の幻想入りも時間稼ぎに近い、それと最近異変を起こしているメル・ゼナの配下ではないキュリアもこいつが原因だ。」

『なによ……………それ……………もう殆ど破られかけているの!?!』

「霊夢!よく聞いてくれ、今回入る土地にはこいつを迎撃するための兵器も入ってきている!それを見つけ出して河童に量産を頼んでくれ!私はこいつを押さえなければならぬ!……………」

『……………紫は?』

「……………今は回復の為に寝込んでおられる、恐らく破られるまで間に合わないだろう。」

『そう……………』

ザザツザ……………

ノイズが入り始める。

スキマに込められた力が限界を迎えたようだ。

「後を……………頼んだ……………」

そしてスキマが消滅する。

私はこのまま限界まで時間を稼がねば……………

静か過ぎる幻想の大地

〈断裂群島〉『マラクジャ島』

今私は紫の式神である藍の必死の頼みにより新しく幻想入りを果たした断裂群島という場所に来ていた。

そして驚くことに海まで一緒に幻想入りをしており、今まで海という存在が身近に無かった幻想郷にとっては大きな変化とも言えた。

そしてこの断裂群島は海の上にある無数の群島が集まって出来ており、その断裂群島から大きく複数の群島にエリアが別れており、そこからさらにそれぞれの島という形で区分けされていた。

あいつが新しく式神にしたっていうゴア・マガラ？そいつが持ってきた地図を見る限りここはマラクジャ群島というエリアの一つであるマラクジャ島という場所になる……正直この群島の幻想入りで幻想郷は2倍くらいの大きさになったのではないだろうかと思うくらい広い。

『藍に頼まれて来たのは良いんだけど……いくらなんでも静か過ぎるわね。』

完全に生物の気配が無いわけではない、むしろ希にアプトノスとかの草食の竜が見かけてはいた。

だけど大型の肉食モンスターが驚くほど居ないのだ。

八雲紫の話を書く限りでは大型の肉食モンスターは向こうの世界では吐いて捨てる程居ると聞く、その為私が全力で索敵して一体も居ないというのは少し妙な話だ。

向こうの世界の肉食モンスターは例え子供でも凄まじい殺気や気配を出している。

恐らく生態系が特殊だからこそ子供でも生き残れるようになっていたのだろうがいくらなんでも敵意を感じないというのは明らかに妙だった。

そして私は誰かがキャンプをしていたと見られるテントの跡地を見かける。

私の勘を信じるならこの場所について何かわかりそうな物が置いてあるはず。

そして私は朽ちかけているテントに入り、中を物色する。

そして竜の爪によって作られたと見られる冠と誰かの手記を見つけた。

そして冠の近くには古びた石板が置いてあり、何を書いているかは読めないがこの冠と同じ形に彫られた絵があつた為、この冠に関する石板だとわかる。

だが私は向こうの世界の文字を読める程向こうの世界の知識は持っていない。

こうなるならあの紫モヤシでも連れてくるべきだったかも知れないわね……………
そして私は急に後ろから現れた気配に気付いて振り向く。

「魔理沙……………何のよう?」

「それはこつちのセリフだけ霊夢! お前の事だから異変の元凶探しにどいつもこいつもボコボコにしながら勘に従って進んでる癖に今回はやけに慎重じゃないか! いつもの勢いはどうしたんだぜ?」

「はあ、余計なお世話よ! だいたい今回の元凶は分かりきってるし私は今回はそれへの対策を進めるために頼まれ事をしてるだけなんだから。」

「ふーん、霊夢が頼まれ事を引き受けるなんて明日は槍でも降るのか? つと霊夢、その手に持つてる石板はなんなのぜ?」

「つたく、うるっさいわよ。」

んでこの石板? 私にもよく分からないわ。

多分この冠に関わる事だとは思うけれど文字が読めないのだもの。ただ……………この島に関するの何かあるはずよ。」

そして私は勝手に来た魔理沙に対して通訳を頼む。

パチュリーのところによく集まっているのを見かけているので通訳くらいはこなせて貰わないと困る。

「こいつは……名前『竜爪の銀円環』っていう王冠らしいな、どうもこの島に昔栄えていた古代の文明の遺産とか秘宝の一つみたいだな。見た限りこの島の文化が軽くある程度で手掛かりらしい手掛かりは無さそうだな。」

「そうなるよこの手記か……。」

そして魔理沙は難しい顔をして言う。

「なあ霊夢、一度引き返して紅魔館にこの手記とかを持って行かないか？」

正直私じゃこの石板の解読でギリギリだから日常的な物の解読はちよつと厳しそう。パチュリーの知識とメル・ゼナにも手を貸して貰った方がいいんじゃないか？」

そして私は確かにこのまま解読に時間をかけすぎても埒が明かれないのは理解出来ていた。

「……………そうね、悔しいけどこれは私だけじゃ手掛かり無しで探し物をする事になりそうだな。」

そして私はちよつと悔しいけど私一人では時間が足りないという勘があつたので、渋々その提案を飲むことにした。

そして私はキャンプに置いてあつた不思議な石の腕輪も一緒に持って魔理沙と一緒に引き返した。

何故だろうか、この石にはなにかモンスター達との強い繋がりを感ずる。

一方その頃の地底では、地響きによる被害の確認と、落石等によつて壊れた住宅の再建が行われていた。

そしてその再建とは別口に崩落した天井や壁の調査をしていた（といつかやらされていた）勇儀とハチミツに釣られたヌシ・アオアシラは調べていた途中、壁が大きく崩れ去っており、大穴が空いているのに気が付いた。

そしてよく見れば崩れた岩には微かに妖力が感じられ、隠蔽されていたと思われる痕跡が残されていた。

そして下は奈落の如く深く続いた大穴だったが、上は地上まで続いておりそこを抜けると……………

「いったいどこなんだい？ここは……………砂漠つたつかけか？こんな地形幻想郷に無いはずなんだがねえ。」

そして下に戻ってみるとちやんと地底に戻れている為、現代等に繋がっている訳でも無いことを確認した二人は一度地霊殿に向かうのだった。

静か過ぎる島の真実

〔紅魔館〕 『図書館』

断裂群島から戻ってきた霊夢と魔理沙は、一度紅魔館の図書館を訪れ、そこで手に入れた手記を解読して貰うためにパチュリーに協力をして貰っていた。

そしてパチュリーは解読が終わった後紅魔館の全員に対しても説明しておきたいと言った為、今は美鈴やメル・ゼナ含めた全員が集まっていた。

なおメル・ゼナは魔法を使ってぬいぐるみのようなサイズになり、フランドールに抱えられていた。

「まず最初に言っておくけどこれは手記というよりメッセージと言った所ね、これにはなぜあの断裂群島と呼ばれる場所から大型のモンスターが殆ど居なくなっただのかが書かれていたわ。」

「やっぱり本当なら大型のモンスターが大量にいる場所だったのね……」

「ええ、まずあの断裂群島という場所は元々海流が激しすぎて調査が進まなかった海域

に存在した群島らしいわ。

そしてそこには昔滅びた文明の遺産が大量に残っていて文化的な価値も多かったよ
うね。」

「それが行けるようになったから調査に来た者達がいたということ？」

「ええ、最初は探検家達による調査隊くらいしか居なかつたらしいのだけど情報が旧大陸と呼ばれる人が多く住む大陸に流れた影響でどんどんその秘宝や文化的な遺産を狙った者達が訪れていたようね。」

違法なトレジャーハンターとかも多数来ていたのもあつて一時期無法地帯になりかけていたみたいだけどそこはしっかり規制がされていたみたいね。」

そしてパチュリーの言葉に魔理沙が何か引つ掛かった

「違法なトレジャーハンター？探検家達も秘宝とかを持って帰っていたんだよな？なに
が違法だったんだ？」

「簡単よ、探検家達は歴史的な財産としてその秘宝を保存するために持ち帰っていたけ
れどトレジャーハンターはその秘宝を盗んだり遺跡を荒らしたりしてその遺産を勝手に
売り払おうとしていたのよ。」

そしてパチュリーは続けて言う。

「どうやら人同士の対立も結構あつたみたいね、秘宝の取り合いとかも結構頻繁に起き

てみたいだし何より人が多くなって大型のモンスターによる被害も出ていたから討伐依頼も多かつたらしいわ。

それに何よりも特殊種と呼ばれるモンスター達はこの群島の固有種と言っていい特別なモンスターばかりだったみたいだから見かけたらハンターが何人も群がって狩られたみたいね。

ただ最大のミスとしてこの狩猟が何度も行われていた期間はまだ龍歴院や古龍観測所などのモンスターの個体数を監視して種の保存の為に狩猟の制限をかける機関がまだ設置出来て居なかったのよ。

その影響でどのくらいの個体数があるか全く把握出来ていない状態で被害を出している特殊種の狩猟、報告されていない個体の密猟が行われてしまったようね。」

そして霊夢がここで疑問を出す。

「だけどそれだけで簡単に絶滅するものなの？あそこの生き物の少なさはハッキリ言うて異常だったわよ？」

「そこなんだけどね、討伐自体は被害を出していた個体のみ絞っていたみたいでハンター達も絶滅させては行けないと分かっているから問題無かったのだけれど密猟が最大の原因で特殊種が完全に絶滅まで追い込まれたみたいね。」

ただこの絶滅が不味かったようね。

「たまたまこの島に来ていたライダーという存在がその存在に気が付いたみたいなのだけれどこの群島にはとある古龍が眠っていたらしいのよ。」

「まっつてパチエ、ライダーとは一体なんなのかしら？」

「そうね、私も情報が少なくて完全に把握してる訳では無いのだけれどハンターとは真逆の存在ね、ハンターが狩りによって弱肉強食の世界でのモンスターとの共存をする存在とするならライダーはモンスターを育み、共に生きる事で共存する存在と言った所ね。」

「乗り手という風に表される事も多く、モンスターの背に乗って共に狩りをしたりもするようね。」

「そしてその古龍はライダーによってその存在が伝承に残されていまままで一体しか確認されていなかった古龍なのだけれど二体目がいたみたいね。」

「その古龍の名はアルトゥーラ、破滅の翼の伝承に残るかなり大きな力を持った古龍ね。」

「ただその個体は伝承に残る個体程力を持ってなかったようで凶光化という力は持っていないなかったみたいだけれどアルトゥーラは生まれる時に大量のモンスターを食らうようね。」

「ライダー曰く特殊種や古龍がアルトゥーラの目覚めをpushさえていたと見られていて

目覚めたアルトウーラは島の大型モンスターを密かに大量に食らっていたみたいね。

それに気付かなかったハンター達はそのまま狩猟を続けて最後には大型モンスターの殆どが食らい尽くされてしまったようね。」

「ね、生まれる時に大量に食らうっておかしくない？」

「そこなのだけれどどうやらアルトウーラの幼体は大蛇のように複数の頭を持っていてその複数の頭部にある口でモンスターを大量に食らってエネルギーを貯めて羽化するみたいね。」

そしてライダーは限界まで力を使つて戦つてなんとか致命傷を与えてタマゴの状態にまで弱らせる事が出来たみたいだけどその被害は甚大で最終的に人々は断裂群島の環境復活させるために撤退して言ったみたいね……それからかなりの年月が立つて忘れられたという所ね。

そしてこれはこの手の最後にあるメッセージよ

『このメッセージを読む者よ、願わくば貴方がモンスターとの絆を結ぶ者であることを願う。』

この群島に眠るアルトウーラをどうか滅ぼさないでやってほしい、あのモンスターは

ただ生まれようとしていただけなのだ。

私は殺す事は出来なかった……………

絆石に導かれてそれを手にした者よ、アルトウーラとどうか絆を結んでくれ、一度羽化したアルトウーラは甦る際にまた大量に食らうことはない、今は体を修復してるだけだ。

どうか心優しき者がこの絆を結んでくれることを強く願う。』
以上よ。」

そして皆は霊夢が持ってきていた石と霊夢本人を交互に見つめるのだった。

「なっ!? なによ!? なんなのよ!?!」

破滅の翼と絆を結ぶ石

く紅魔館く『図書館』

霊夢以外の全員、魔理沙、パチュリー、レミリア、フランドール、咲夜、小悪魔、中国（ちよつとつ!?!）、メル・ゼナは私の持ってきた水晶の嵌め込まれた石と私を交互に見る。

なんなのよ!?!いや分からなくはないけどなんなのよ!?!

「霊夢が……………絆?！」

「なによ!?!なんか文句あるわけ!?!」

そしてパチュリーは……………

「貴方の場合結ぶのは絆じゃなくて上下関係じゃないかしら? 下僕と主人的な。」

「喧嘩売ってるのなら買うわよ?！」

そして咲夜は微妙そうな顔をして言う。

「その……………頑張ってください。」

「何をよ!? ああもう! 分かってるわよ! 要はそいつと相棒的な関係か何かになればいいって訳でしょ!? やってやるわよ! 紫の式神の依頼含めて一緒にやってやるわよ!」

そしてレミリアはその言葉に一つの疑問を感じて問う。

「ちよつとまった。スキマ妖怪の式神からの依頼って言ったわね今。

何を頼まれているの?」

「ああん? あいつから頼まれてるのは向こうの対巨龍兵器が一緒に入ってきてるだろうからそれを見つけ出して河童に量産頼んでこいって依頼よ。」

そしてパチュリーは心当たりがあるように言う。

「……………対巨龍兵器ね……………恐らくそれはバリスタ、大砲、撃龍槍、巨龍砲の計4種の兵器を指すと思うわ。

どれも超大型の古龍、巨龍と分類されるモンスター達を討伐または撃退する為に作られた装置ね。

バリスタは槍のように大きな矢を放ちダメージを負わせる兵器で大砲は説明するまでも無いわね。

巨龍砲は龍属性のエネルギーを動力にして稼働する巨大な大砲で巨大な龍に対して絶大な威力を発揮するみたいね。

撃龍槍は原理としては近い者があるわ。龍属性を出力にして螺旋状の槍を射出して

対象に突き刺して抉り、モンスターに致命傷を与える事が可能な兵器ね。」

「撃退？ 確実に倒せないの？」

「ここまでの兵器を用意してもそう簡単にやられないのが巨龍なのよ。とりあえず今最優先で量産を狙いたいのは大砲とバリスタね、これは安定供給が狙えるわ。」

「威力が高そうな他二つはどうするのよ。」

「製造コストがいくらなんでも高過ぎて現実的じゃないわ。やるとしても巨龍砲が一つ、撃龍槍が三つが限界でしょうね。」

「そう、パチュリー、あの群島の地図かなんか無いかしら？」

そしてパチュリーは手記を取り出し、その中のくページを見せる。

そこにあつたのはあの群島の全体地図であつた。

そして私は目を瞑り、勘を便りにアルトウーラの位置を指差す。

そしてそこは……………

「ここは……………タブラデイン島ね、この周辺で地図に乗つてない場所を一度探しましょう。」

アルトウーラは必ず地下から出てくるわ。限界まで弱らせてタマゴの状態まで戻っているなら恐らくその地下にいるはずよ。」

「分かったわ。」

そしてパチュリーは一度手を叩いて話を切り替えようとした。

「さて、とりあえずざっとした説明はしたから次に重要になってくる絆を結ぶ石、霊夢が持ってきた絆石とアルトウーラについて話すわね。」

「あ、忘れてた。」

そしてパチュリーは溜め息をついてジト目になって言う。

「はあ、貴女ねえ、絆石の使い方やアルトウーラがどのような生態をしているのかも分からない状態で行くつもりだったとか言わないでしょうね……………」

「……………（全力で顔をそらす。）」

「はあ、とりあえず今日はもう探索に向いている時間帯じゃないわよ。」

さて、話の続きをすることにしましょうか。

まず絆石からね。」

「そうそれ、なんなんだぜ？ 私にはそこまで力は感じられないなんの変哲もない水晶が嵌まった石にしか見えねえんだぜ？」

「絆石が真に力を発揮するにはモンスター力の力を借りる必要があるわ。」

まずモンスターとの絆を結ぶのは結構簡単よ。

タマゴから目の前で孵化させて育てる、ただこれだけよ。

その分お互いの信頼関係がちゃんとしてないと言うこと聞いてくれなかったりもす

るから気を付けなさい。」

「そういわれても孵化なんてやったこと無いからどうすればいいか分からないわよ?」

「そつちは私の方で儀式魔術使つて何とかするから気にしなくていいわ。細かい説明は長くなるし貴女も一度じゃ理解しきれそうにないから今は省くけど次はアルトウーラね。」

このアルトウーラというモンスターはハコロ島というライダーの隠れ住んでいた島に封じられていた存在その物が禁忌とされかねない古龍よ。

そしてこのアルトウーラには破滅の翼という伝承が残されていて、その伝承にはこう記されているわ。

『天を舞う光よ 天空の使者よ

紅蓮の炎で滅びの定めを焼き尽くせ

茜の空が蒼く染まる前に』

そして壁画の模写が描かれた本のその壁画部分を見せるパチュリー。

そして美鈴があることに気付く。

「あれ?これってもしかしてリオレウスでしたっけ? 妹紅さんが呼び出したモンスターの雄の方じゃないですか?」

翼がなんか黒いですけど。」

「正解よ。この伝承での天空の使者はリオレウスを指すのだけれど実は当時この伝承は正しく伝わって居なかったようで下半分がかけている状態なのよ。」

これで隠すとほら、このリオレウスが大地を焼き尽くしているようにも見えるでしょ？

だから一時期破滅の翼っていうのはこのリオレウスだと勘違いされていたのよ。」

そう説明しながら壁画の模写にある下半分、幼体のアルトウーラとされる多頭の蛇の部分隠す。

「霊夢、心に刻んで置きなさい。貴女が仲間にする必要のある龍はそんな伝承を残す程のバケモノなのよ。」

そしてこれを放置した場合自然に孵化したアルトウーラによる異変が重なって幻想郷に甚大な被害が生まれるわ。

兵器探索はメル・ゼナのキュリアに任せて貴女はこつちを最優先で探しなさい。」

「……………ええ」

そして霊夢は思わず息を飲むのだった。

奈落の底に眠る龍のタマゴ

く断裂群島く『タブラデイン島』

私はアルトゥーラという龍を見つける為に勘でここにいるとわかったタブラデイン島の砂漠に来ていた。

しかし元々広大な島が複数固まった群島であり、移動するだけでも時間がかかる上に辺り一面砂漠による砂しかない為に探すのは困難を極めていた。

何処を見渡しても砂砂砂砂砂、とにかく砂しかない。

そして飛び続けていると地形が何度も変わっているような痕を見つける。

「これは……………何か強大な力の痕跡もあるわね……………だけ……………似てるけど違う？」

私は勘でこの場に残っている力の痕跡がアルトゥーラの物ではない別の龍の物だと把握する。

そうなるここにはもう一体古龍が、それも地形を変える程の力を持った古龍がいた

のでしょね。

そしてしばらく探索していたその時だった。

『こつちだ………』

「ツ!?誰!？」

急に後ろから声がする。

だが命の気配は感じなかった、そうなると答えの幅はそこまで広くはない。

『こつちだ………』

それは赤い鱗や甲殻、金属を使って作られた鎧に身を包み、右腕には私が持っているのと同じ形の絆石を付けた人物がいた。

しかしその体は発光して軽く透けており、体の至るところから光の粒子が漏れ出ており、天へと上っていた。

「亡霊………いえ、これは残留思念ね。

そつちに行けばいいのね。」

私の勘がこの残留思念に付いていかなければならないと告げている。

恐らくこいつに付いていった先にアルトウーラがいるのだろう。

『こつちだ……………』

そして残留思念に導かれるまま歩くこと一時間、私は地下に通じる大穴を発見する。空から見たときは分からなかった……………なにか結界のようなもので隠されていたのだろうか？

そして大穴を覗くとその先は光すら見えない奈落となっており、パチュリーの推測が正しければここからは蛇の頭を出して捕食行動を起こしていたと見られる。

ただ……………その大穴に入った時なのだが……………

「おや？ 霊夢じゃないか、なにやってるんだい？」

「何って……………それはこちらの台詞よ、勇儀」

そう、大穴から出てきたのはハチミツの壺を片手に抱えた食べるヌシ・アオアシラを背負って飛ぶ勇儀だったのだ。

「アタシ達かい？アタシ達は地底で新しく出来たというか隠蔽されていた横穴を見つけ、調査に駆り出されてるのさ。」

なにせ発見したのがアタシ達だからなにか見つければアタシ達の物にした方が後腐れなくなるだろうってさ。

そういう霊夢はどうしたんだい？

どうも地上から見つけたみたいだがやっぱりこの上も幻想郷で合ってるのかい？」

「そうね、新しく幻想郷になったが正解よ。」

紫がどうやらこの地をとんでもないモンスターごと呼び寄せたみたい。

私はそのモンスターの協力を得るために残留思念に導かれてこうして来てるって訳。」

「へえー、アタシ達も付いていっても構わないかい？」

「ええ、大丈夫よ。」

ただ目標を発見したら一度退却して紅魔館に戻る必要があるから地底側の案内を頼めるかしら？」

地上からもう一度探すとすると流石にキツいわ。」

「ああ、構わないよ。なんなら次来るときもアタシに声をかけな、連れてってやるよ。」
「助かるわ。」

さて、降りるわよ……………」

そして話が終わるとしばらく姿を消していた残留思念が再び現れて導く。

そして気が付いたのだが絆石が左右に展開されるような形で広がっており、その中に
嵌め込まれた水晶が地下を進むごととにどんどん光を強くしていく。

「霊夢、なんだいそれは？」

「グオオオオオオ……………」

そしてその絆石を初めて見る二人はそんな疑問を投げ掛ける。

そして又シ・アオアシラはこの光を見てハチミツを食べていた手を止めて何かに共鳴
をしていた。

「これは絆石って言うらしいわ。この先にいるやつとの協力を得るために必要な物らしい
わ。」

「へえ……………この先にいるやつってのはこのヤバい気配を垂れ流してるやつかい？」

「ええ、恐らくそうね。」

「こいつは大事になりそうだね……………」

そして私達は地底に繋がる横穴を通りすぎ、さらに深く降りていく。

幸い絆石が強く光輝いている為に光源は必要無いくらいに明るく、そして降りていくうちに底の方から蒼白い光が見えてきた。

そして最深部にたどり着くと……………

「なっ!? こいつは……………タマゴかい!? タマゴの状態であそこまでの気配をだしていたっ
てのかい!」

「(; 旦) () ガクガクブルブル」

「これは……………分かりきつてはいたけど想定以上ね。」

その空間は岩で囲まれ、水晶が放つ光によって蒼白く染まっており、その中心部には
強大な蒼白いタマゴがあった。

そして残留思念は到着した後……………ゆっくりとタマゴの方に向かっていき、その隣で
力尽きたと見られる骸骨の元へとたどり着き……………段々姿を消していく。

『守人よ……………心優しき者よ、私の願いを頼む……………アルトウーラに……………世界を見せ
てやってくれ……………』

そして残留思念は消滅した。

残留思念と託された龍

「断裂群島」『大穴最深部』

私はあの後一度地底側の入口から紅魔館に戻ることにし、私が探し出すのをまって待機していた紅魔組と魔理沙を連れて勇儀の元に行き、地底側から大穴へ向かうことにした。

そして最深部にて全員が揃った所で絆石が展開され、強く輝き残留思念をよりはつきりと写し出す。

「これが残留思念……………」

「霊夢、確かあの残留思念の見た目ははつきりと特徴を捉えることは出来なかったのよね？」

「ええ、明らかになにか様子がおかしいわ。」

そしてはつきりとした形で現れた残留思念は優しそうな目をした白銀の兜を被った白髪の老人だった。

そして老人は話しかける。

『初めまして……というべきかな。』

先に自己紹介といこうか、私の名はレド。

私はライダーと呼ばれる存在であり、モンスターを育み、絆を結び、共に生きる者だ。』
そしてその名を耳にしたパチュリーは驚きを見せて眩く。

「レド……まさかその名をここで聞くことになるとはね……」

そして何か知ってそうなパチュリーに霊夢は問いかける。

「あんたはあいつのこと知ってるの？」

「ええ、ライダーのことを調べていくうちに知ったことなのだけどレドというのは竜人族のライダーや人間のライダー関係なく話に出る程の人物で伝説のライダーの一人よ……」

『私はそこまで偉くは無いつもりだよ、ましてや伝説なんて柄じゃないさ。』

「やつぱりこちらとの会話も可能な程はつきりとした自我が残っているのね。」

『私はこの現象がなんなのか良く分かっていない部分も多いのだが君は分かってそうだね。』

「ええ、でも時間が無いんじゃないかしら？」

『やはりか……ならばこちらとしても手短かに話そうか。』

「とりあえず聞きたいんだけどやつぱり地上の島でこの手記と絆石を置いたのはあんた

なの？」

『ああ、私だ。』

それは私が絆原石からたまたま崩れ落ちて手に入れた石を絆石として加工した物だ。

私の絆石は友人に託してしまっていてね。

孫にでも無事に渡ってくれるといいんだが………。』

「貴方はどうしてここに？」

『………私が死ぬ数週間程前の話になる。』

私は目覚めかけていたアルトゥーラが産み出した大穴に巻き込まれた友人の身代わりになって落ちてしまっていてね、オトモンのレウスを置いて先に死んでしまうと思っていたのだがたまたま生き残ることが出来たのだ。

そしてアルトゥーラの幼体を見つけてそれを絆石で何とかして鎮めてアルトゥーラが地面を掘り進んだ穴を探索しているときにこの二体目の彼に出会ったんだ。

そして彼は先に目覚めかけていたアルトゥーラと違って既にほぼ成体になりかけていてね、

どうやらこの島の古龍や特殊種によって羽化を妨害されていたらしい。

そして私はアルトゥーラの真実をこの地下と伝承の破滅の翼から知り、アルトゥーラの目的は成体となり外に出ることにあると知った私はこの子達を倒してしまうのは違

うと思ったんだ。

だが困ったことに既に生まれてしまっているモンスターとは絆を結ぶのはつきり
いって不可能といっても良いだろう。

しかしこのアルトゥーラはほぼ目覚めていて、後は捕食をして脱皮を待つだけの状態
になっていた。

このまま出せば地上の生態系の一角が完全に滅びるだろう。

だが私には産まれただけでハンターから狙われて討伐されるなどあまりにも可哀想
で出来なかった………そこで私は一部の古龍は死んでもどこか別の地でよみがえる
という話をとある竜人から聞いたことがあった。

そしてこの地にて新しく仲間になったオトモンと共に彼を限界近くまで弱らせてタ
マゴの状態に戻すことに成功したんだ。

だがその時について私も致命傷を負ってしまっていてね、あの手記と絆石を残してア
ルトゥーラと最後まで共にいることにしたのだよ。』

そしてレドはつらそうに言う。

「あの戦いでの被害はあまりにも大きすぎた。まさか幼体が複数の頭部を持っていたと
は………お陰で列島のモンスター達は殆ど絶滅してしまった。

私にもっとライダーとしての力があれば………レウスが共にいてくれればどれだけ

良かったことか……。」

そしてレドの体が少しずつ崩れていく。

『そして君が……私の絆石を引き継いだ者だね。』

孫に良く似ている……名前を聞かせて貰ってもいいかな?』

「……………霊夢よ、博霊霊夢。」

この幻想郷の博霊の巫女よ。」

『そうか霊夢か……旅で寄ったカムラの里やユクモ村にいる人々に似た名前だ。』

霊夢……君はか彼らモンスターの事をどう考えている?』

「別に?妖怪とそこまで大差は無いわよ。」

それにこいつらも基本的には動物と同じで自然の一部なのでしょう?。」

なら私達は共存するだけよ。」

すると満足そうな顔をしてレドは言う。

『そうか……自然の一部であり共存をするか……いい考え方だ。』

ただひとつ覚えて置いて欲しい、我々ライダーにとってモンスターは自然の一部であり共存する、育む生き物でもあるが何よりも……ライダーにとってオトモンは家族だ。

これから産まれる家族を……どうか愛してやってくれ。』

そしてレドはとても優しそうな笑みを浮かべて霊夢の絆石を装着した手をタマゴに
触れさせる……………」。

『どうか……………この子を頼んだよ。』

レウス……………今……………君の元に行くよ……………」。

そしてレドは完全に崩れさり、タマゴが光を強く発する。

「ツ!?儀式無しに産まれさせる事が出来るなんて……………」

そしてタマゴは崩れ落ち、そこから三対の美しくも禍々しい翼を持った龍が生まれる
……………」。

そして龍は涙を浮かべていた。

『レド……………」』

動き出す冥淵龍

く断裂群島く 『大穴最深部』

『レド……………』

生まれた龍は悲しそうに思念を飛ばす。

まるで長く付き添った友を亡くしたかのように。

「思念を飛ばした……………まさかレドの残留思念を理解して自分で使えるようにしたというの……………」

パチュリーはその声に対して驚く、復活という形とはいえタマゴから孵化したばかりの者がそれを容易く行ったという事実に対して。

『レド……………君はいつの日か僕に話してくれていた』彼 の元へと行ったんだね……………』

龍は天を仰ぎ亡き友との思い出を思い浮かべる。

そして龍は霊夢の持つ絆石へと視線を向けた。

『その絆石……………レドが持っていた物だね……………』

君がレドが言っていた僕といずれ絆を結ぶ者?』

「え、ええ。」

私の名前は霊夢、博霊霊夢よ。

この幻想郷の博霊神社で巫女をしてる者よ。」

『幻想郷……………? 博霊神社……………?』

それは……………なに?』

レドはその話をしてくれなかった。』

「ああ、してくれなかったというよりは知らなかったのでしょうね。」

『知らなかった? レド、世界中の場所を旅して見たって言ってた。』

「ここはあのレドって人がいた世界じゃないのよ。」

『レドが……………いた世界じゃない?』

世界は……………一つじゃないの?』

「ええ、普通なら世界を渡るのは不可能だから本来は一つと考えていいわよ。」

私達の世界を管理するやつが貴方のいるこの群島をこの世界に組み込んだのよ。」

まああいつがこの場所を引き込んだ目的がまだ達成出来ないのだけだね。」

そして大穴からキュリアがやってきてパチュリの腕に止まった。

その後パチュリーはキュリアに対してなにかの魔法を使っている。

『あの紅いのは……なに?』

「キュリアっていう生き物よ。」

『キュリア……知ってる。』

レドが話してくれたことがある。

あれがキュリアなんだ……ちっちゃい』

そしてパチュリーは魔法を使いながら何度も頷いている。

『あの紫の人の手から出ている丸いの……なに?』

「あれは魔法よ。」

多分貴方の元いた世界に無かったものだと思うわよ?」

そして可愛らしくアルトウーラは首を傾げる。

『魔法?』

「うーん、私は専門じゃないから詳しく説明するのは難しいわね。

後であいつから聞いてみる?」

『うん。』

そしてパチュリーは魔法を使い終えたようでもキュリアは帰っていく。

「皆、朗報よ。」

キュリアが目的の兵器を見つけたわ。

しかも4種類共一塊になってたわ。

対巨龍迎撃用の設備が建設途中で放棄されてたわ。」

「分かったわ。

アルトウーラ、貴方も外に出てみないかしら？」

『外に？ いいの？』

「ええ、貴方は無差別に他の生き物とかを殺したりする必要はもう無いのでしょう？」

『うん、もう成体として復活したから栄養は要らないよ。あとは地脈の力だけで生きれる。』

「そう………：食費が要らないのは良いわね（ボソツ）」

霊夢は軽くゲスい笑みを浮かべるが気付いた者は居なかった。

「さて、一緒に外に行きましょうか。」

そして霊夢達は大穴から脱出して外に向かったのだった。

くマヨヒガく

「ぐうううううう……………こいつ?!いきなり……………力がっ!」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そこではスキマを閉じようと自分のすべての力を込めて抵抗する八雲藍と、それをサポートする式となっているゴア・マガラ、さらに無理矢理入口をこじ開けようとしている深淵の悪魔、冥淵龍ガイアデルムの姿があった。

以前は爪くらいしかこの幻想郷に無理矢理入れられなかったが、今はそれをさらにこじ開けて頭部が入る程に広がってしまったている。

「不味い……………このままでは……………まだ兵器の量産も出来ていないと言うのに……………」

そしてガイアデルムには本来紅色の結晶が体に付着しているのだがそれは紫色に染まり、膨大な妖気を発していた。

「まさか……………幻想郷に送り込んだキュリアから……………妖気を吸収して半妖怪化するとは……………完全な妖怪よりも厄介な……………」

………
結界が破られるまであと5日

龍を撃退する為の兵器

『断裂群島』『巨龍迎撃施設建設地点』

大穴から飛んで地上に出た私達はキュリアの記憶を読み取ったパチュリーの案内で目的の兵器が眠る迎撃施設に来ていた。

ただまだ施設というには未完成で、所々足場や土台等が見え隠れしていた。そして問題の兵器なのだが……………

「デカっ!？」

あまりにもそれは大きすぎたのだった。

巨龍砲に至ってはメル・ゼナ並の大きさとなつている。

そして厄介な事に固定されている為、回収するにはそれを外さなければならぬ。

「ねえ……………これは持ち帰るより河童をここに呼ぶ方が良くない？」

「同感ね、これを持ち帰るのは現実的ではないわ。」

精々持ち帰れてバリスタと大砲くらいかしら。

撃龍槍に至ってはこの設備と一体化してるから話にならないわね。」

『ねえ、これはなに？』

「ん？この大砲のこと？」

『うん。』

「これは巨龍砲っていうとてつもなく巨大龍を撃退する為の武器らしいわよ。

動力が龍属性なんだっけ？」

「ええ、龍属性を動力とする事で古龍に対して効果的なダメージを与えられるわ。

ただチャージにも時間がかかる上必要なエネルギーが多すぎて一発勝負になる兵器ね。」

そしてアルトウーラは他の兵器にも興味を示していく。

『この丸いのはー？』

「これは撃龍槍、この辺のどつかにレバーがあるはずだけどそれを押せばこの丸いの中に入って巨大な槍が回転しながら出てくるらしいわ。

かなりの勢いらしいから多分あんたでも貫ええ貫かれるんじゃない？」

『ふええええ!!』

なんだろう………可愛いわねこいつ………。

すると兵器回収をしていた魔理沙がこちらに大声をかける。

「霊夢ー！とりあえずバリスタと大砲持っていくぜー？」

お前も手伝えよー？あとアルトウーラにも手伝って貰ってくれー！」

「はあ………分かったわよー！」

ってことであんたも手伝って貰える？」

『はい、これを持っていけばいいの？』

「ええ、それをお願い。」

そしてアルトウーラはそれぞれの足に大砲を2つとバリスタを2つ持ってその3対の翼で飛んでいる。

さて、私も持つていくとしますかn………つておつも!?

く妖怪の山く『玄武の沢』

この日、連絡があつたとはいえ大混乱に陥っていた。

何せ博霊の巫女達が異変解決の為に河童に協力を頼みに来るといふ連絡があつたは

良いものの来ていた人物が霊夢だけでなく、魔理沙や紅魔館の全員に加えて三対の美しくも禍々しい翼を持った巨大な龍が全員何か大きな大砲等を持ってきてこの山に入ってきたのだ。

一部の天狗達は

『博霊の巫女が紅魔館と手を組んで襲撃を仕掛けに来たのか!?』

とか

『もしやあのバカラスがまた何かやらかしたのか!?』

といった風は大慌てになっていた。

そしてマスゴミである射命丸は強制的に事情を聞きに行かされていた。

「あやややややっ!? 皆さんどうされたので!？」

「つかその蒼い龍はなんですか!? つかその大砲とかなんなんですか!？」

「落ち着きなさいよ、そんな一辺に全部聞かれても答えられないわよ。」

「とりあえずこの荷物重いから一旦河童のところに持つてくわよ?」

「あやっ!? これは失礼、とりあえず移動しながらで良いので事情を聞かせて貰えませんか?」

「さすがに山の皆が大混乱しているので。」

そして霊夢達とマスゴミ+猿二匹は河童達の住みかに移動しながらなぜこんな状況

になっているのかを話していた。

道中ビシユテンゴが自分の武器でもあり、主食としているデカデカ柿をアルトゥーラに投げて食べさせていたが、それを食べて『あま〜い』と頬を膨らませて食べるアルトゥーラに割と皆が癒されていた。

そして河童の住みかに付いた後、私達は大砲とバリスタ、それに加えて大砲の玉の入った箱をおろして河童を呼ぶ。

「はーい！ ってなんだいなんだい!?! その面白そうな物は!?!」

そして大勢の河童と共に代表としてにとりがやってくる。

河童は早速この二つの兵器を見て興味を示す、大砲はごく稀に幻想郷に入っては来ることがどれも実用性のない程風化していたり破損が酷い物ばかりだったが今回はまだ現役、そしてバリスタに至っては見たこともない為に河童のテンションはかなり高くなっていた。

「とりあえずあんたらにこの辺をちゃんと使えるようにするのと量産、それと後で案内するけど持ってこれなかった巨大な兵器をこっちで使えるようにして欲しいのよ。」

「その巨大な兵器つてのも気になるんだが何をやる気なんだい? どこかしらの勢力を軽く滅ぼせそうだぞ?」

「八雲の式曰く今回の元凶はこのくらいしてモンスター全員駆り出してようやく倒せる

相手らしいわ。」

「そいつは……………それだけ本気ってことかい……………分かった。」

報酬は弾んで貰いたい所だが急ぐとしよう。

皆！かなり大きな仕事が入ってきたぞ！

依頼元は八雲の式らしいから今回はかなりヤバい案件みたいだがこんな面白そうなもん弄れるんだ！全員気合いいれるぞ！」

「『オオオオオオオオオオオオ！！！！』」

そして地下に全部持つていって凄まじい音が聞こえてきた……………ホントに大丈夫なんでしょうね……………

そしてアルトゥーラはデカデカ柿をむしゃむしゃと食べてその様子を見ていたのだった。

動き出す者達

〔紅魔館〕 『図書館』

河童の所に用事を済ませた私達は一度紅魔館に戻って兵器についての調べ物をする
ことにした。

どうにも紫達の警戒具合が腑に落ちない、何か嫌な予感がするのよね。

そして紅魔館に戻った時、留守番していたメル・ゼナの他に一匹、黒い子竜がいた。

そしてそれはよく見てみればたしか紫が新しく式にしたゴア・マガラと呼ばれる竜で
あり、その首にはメッセージの術式が組まれた札をぶら下げていた。

「霊夢、そいつは？」

「紫のこの新しい式よ、どうも伝言を伝えに来たみたいね。」

大方手が離せないと言った所かしら？」

そして私は札の術式を起動する。

すると札から紫の式である藍の姿が現れた。

『霊夢、もしくは紅魔館でもいい。』

私には時間があまり残されていないから手短かに伝えたい。

まず理解して欲しいのは今この幻想郷の結界を無理矢理突破して侵入しようとする者がいる。

そいつは今この異変を引き起こしている元凶でもある。

そしてそいつへの対応策としてあの断裂群島を幻想郷に招いた紫様は力の使いすぎで今は休眠状態に入ってしまったている、決戦には間に合わないだろう。

そして今、私は現在進行形で元凶である深淵の悪魔、『冥淵龍ガイアデルム』を押さえているが既に限界に近い。

おそらくあと5日が限度だ、それを過ぎれば私の力も尽きて奴はこの幻想郷に入ってくるだろう。

5日だ！5日までにやつこの情報を調べて幻想郷にいるモンスター達、そして大妖怪達のを力を借りて集めてくれ、決戦の場所は断裂群島だ！

力の限界が来たら私は断裂群島に奴を落とす！
だが詳しい場所までは私でも指定しきれない。

今はお前達が頼りなんだ！

幻想郷を……頼む！』

そして藍のメッセージは終わりこの事態を重く見た私達は藍の頼みに従う事にした。だが相手の情報が何も無い為に一度紅魔館の図書館で調べることにしたのだ。

「深淵の悪魔……どうも伝承にのみ語り継がれる存在のようね。」

でも調べた限り『猛き炎』と呼ばれたハンターによって一度討伐されているわね。

おそらく元々公表されておらず秘密裏に討伐されたモンスターだから幻想郷に入る条件を中途半端に満たしていたのでしようね。

そして結界のスキマを見つけてそれを引き裂こうとすると言った所かしら？

姿としては翼腕が完全に退化して翼を持たない巨大な腕となっていてそれに元々の前足、さらに後ろ足はヒレ状に退化してかろうじて指と巨大な爪を残しているみたいね。

尻尾は長く先端は三本の鉤爪状になっていて全身に紅い結晶を付着させてるみたいだわ。

それにこの討伐報告書によればキュリア達の本来の宿主であり、メル・ゼナとはライバル関係にあつて地上には出てこれなかったようね。

討伐した理由もメル・ゼナを討伐してしまった事によつてガイアデルムを押さえることが出来るモンスターが居なくなつてキュリアがガイアデルムに力を捧げる為に暴走、数多のモンスターの命を吸い付くしてガイアデルムの元に帰り、ガイアデルムが地上に

出てこようとした所を討伐したとあるわね。

それにキュリアを直接捕食して力を吸収してるみたいだわ、その際に口で周囲の物ごとと吸引するみたいだけれど結晶を破壊して地面に転がして置けばそれも吸引して爆発を起こすとあるわ。

でも結晶を完全に破壊した後は結晶が纏わりついてた部分から炎のようなエネルギーが揺らめいてさらに力を増すみたいね。

大きさは……………ナルハタタヒメ達よりも大きいみたいね。

その巨体でぶつかるだけで驚異になると思うわ。」

「……………ねえ、キュリアが吸血したモンスターの力をキュリアごと吸収するのよね。」

「ええ、それがどうかしたかしら？」

「なら……………今妖怪を傀異化させたキュリアがあいつに喰われたらどうなるの？」

「それは……………ッ!?妖怪の力を吸収してさらに力を増す！」

今私達がメル・ゼナに試していることと同じ事が起きるわ！」

「……………古龍の中でもかなりの驚異、それが幻想郷の妖怪の力を手にいれるとなると何が起きるか分からないわ。

恐らく私が見た運命にある百鬼夜行……………あれは奴の力で大量の妖怪が傀異化して襲いかかるといった所かしらね。

パチュリー！契約モンスターを後で増やしておいて！キュリアに取り付かれないように物理結界も準備して！」

「分かったわレミイ。」

「霊夢は妖怪やモンスターの協力を取ってきて、この際冥界も地獄も地底も天界も全部巻き込みましょう、なりふり構ってはいられないわ。」

「ええ、やってみるわ。」

「ただどこまで協力を取り付けられるかは分からないからあまり期待はしないで頂戴。」

「それで十分よ、今は少しでも戦力がいるわ。」

小悪魔！」

「は、はいいいいいい!?!」

「妖怪の山に言って兵器の量産を急がせるように言って、それとあのマスゴミにこの事を新聞で出すように言って頂戴。」

「か、かしこまりましたあ!?!」

この時………かりちゆまは一時的にカリスマを得ていた。

しかし内心は………。

『ふっ、決まったわね。』

これぞカリスマある姿と言うもの！

もうかりちゆまなんて言わせない！』

結局そんな変わっていなかっただった。

決戦の準備

く地底く

ガイアデルムという古龍との対決を決め、その準備に時間を費やしてから2日がたった。

とりあえず天界の連中に関しては自分達のみだけで十分だと抜かすアホが多かった。一度私とアルトウーラでズタボロにしておいた。

冷静な判断を下していたお守り役みたいな奴もいたがそいつらは使えてる奴らが基本アホな為に戦わざるを得なくなっていたので半殺しにしておいた、一人衣玖が混ざってたからなんかやけに強かったけど。

とりあえず天界の連中には私一人すら全員でかかっても倒せないようでは勝ち目はないと伝えてあるので協力を取り付けるのは割と楽に終わった。

しかし桃の帽子をつけた『比那名居 天子』というバカがアルトウーラに対して喧嘩を売っていたが………あっさりボロ雑巾にされていた。

とはいえアルトウーラの攻撃を数発直撃しても耐えるその頑丈さはさすが天人と言った所なのだろうか。

まあ能力持ちだったけどアルトウーラのドラゴンバレットって名前のプレス貫つて追撃を数発入れられてあっさり行動不能にされてたわね……………能力封じってホントにずるいと思うわ。

ただアルトウーラからすればバレット系統の5属性のプレスは私達という通常弾幕に近いらしい、大技も各種属性で複数あるらしいので一発試しに見てみることにした。

だが……………

力の把握もしたかったからやって貰ったが軽く後悔した。

翼にエネルギーを貯めて自分の頭上に巨体なエネルギー玉を生成して飛ばす技が多いらしく、その翼から放たれた灼熱の火球『フィアムトウーノ』の威力はすさまじかった……………。

私の弾幕の威力ではどれも火力不足によりこの火球を相殺する事が出来ず、結局奥の手の夢想天生を使つてなんとか避けることが出来たが死ぬかとおもった……………。

まあそんなわけで他にも妖怪の山は交渉はあっさり終わって協力を取り付けることが出来て地底は元々協力的だったのであっさり協力を取り付けられた。

そして今度は最近地底の自宅にラージャンと共によくいる萃香の協力を得るために

あいつの自宅に向かっていた。

「萃香く？？いるく？？」

「ウホツ？」

そしてドアを叩いて萃香を呼んだら萃k……………ラージャンが家の扉を開けて出てきた。

萃香の自宅は体の大きさなど関係なく入りやすくなるようになっており、ラージャンはすっかり萃香の家の住人となっていた。

そしてラージャンに案内されてリビングに案内された。

ラージャンはどうやらお茶をいれてくることになっていたようで、台所へとラージャンは向かっていくのだった。

そして別の部屋からだらしない格好で片手に酒を持ってもう片方の手で腹を掻いてるおっさんのような萃香だった。

「なんだい？霊夢じゃないかい、今日はどうしたのさ。」

「あー、あんたに手伝って貰いたいことがあるからそれを頼むために来たのだけれど……………さすがに私もそれは女としてどうかと思うわよ？」

「固い事言わないでくれよー。」

そして私の目のお茶が置かれる。

「ありがとう、って割と美味しいわねこれ。

あんたいつの間にそいつに家事とかを覚えさせ……………ッ?」

私はお礼を言つてそのお茶を口にして以外と美味しかった事に驚く、そしてラージャンの方を向いていつこんなこと覚えさせたのか聞こうとした……………したのだけれど思わず嘔き出しそうになつてしまい無理矢理飲んでいたお茶を飲み込んで喉に詰まらせかけていた。

むしろよく嘔き出さずに居られたわね……………危なかつたわ。

そして私は萃香を問ひ詰める。

「ゴホツ!?ゴツホゴホツ!?なんで……………なんでこいつがピンク色のフリフリのエプロンしてるのよ!?

お陰でお茶が気管に入つて軽く詰まったじゃない!?

なんなの!?!全力で何笑わせに来てるのよ!?

「アツハハハハハハハハハハ!!!!いやあー、さどりの趣味で選べたエプロンがナイス過ぎるねえ。

狙いどおりお茶を飲んだタイミングで笑いを起こさせたよ。」

「コホツゴホツ!?ふざけんじゃないわよ!?!」

似合わないにも程があるでしょうが!?

むしろ一週回って逆に可愛く見えてきたわよコンチクショウ!?

「はー、笑った笑った。」

とりあえず用件はさとりから聞いているよ。

私としてもこの幻想郷を荒らされるのは面白くないし同胞も一人被害に会っているから協力は惜しまないよ。

んで? 状況としてはどうなんだい?」

「はあ、とりあえず妖怪の山、地底、天界の三つに協力は取り付けたわ。」

人里はさすがに自衛して貰うしかないから選択肢には入れられないし幽香に関して
は太陽の畑がほぼ確実に無事で済まないのを聞かせてあるから割と楽に交渉出来たわ。

メデイスンとチルノとかについてはとりあえず人里側に回って貰ったわ。

さすがに慧音だけだと不安もあるから。」

「さすがだね、例の兵器についてはどうだい?」

「そっちについてはまず時間も資材も足りないから撃龍槍っていうのが修理して再利用、移動できるようにして準備してあるわ。」

巨龍砲も同じ理由で移動可能にして修理してあるわ。

バリスタと大砲はそれぞれ10個が限界ね。」

時間が兎に角足りないわ。」

「そうか………勝てるのかい？」

「勝てる勝てないじゃなくて勝つしかないのよ。」

絶対に負けるわけにはいかないのよ、博霊の巫女としても、幻想郷の人間としてもね。

集うモンスター達

『断裂群島』『巨龍迎撃用要塞跡地』

断裂群島で発見された対巨龍迎撃用要塞、ここでは河童達の手によって移動が可能となった巨龍砲と立て付け式はなく発射式となつて移動可能にした撃龍槍の姿があつた。

とはいえ重量が重量な為移動にはパワードスーツ装備の河童数人がかりで運ぶ必要があり、なかなか苦労していた。

今は要塞の残つた部分を解体してその構造を解析、対巨龍を想定した場合どれ程頑丈な要塞が必要なのかを調べていた。

「こいつは凄まじいね……………要塞の壁全てに最近幻想郷に入つて来たマカライト鉱石にドラグライト鉱石が混ぜ込まれている。

それも一定の品質を保つてる辺り向こうの世界の技術力は相当な物らしいね、割合について申し分ない……………硬さとそれを破壊させない為の柔軟性を両立している。

だが………ここまでしないと突破されるってことは巨龍というのはどれだけの存在だというんだい………この強度だと我々河童やあの文ですら傷をつけるのが難しいぞ。」

竜世界の鉱石はかなり特殊で、マカライト鉱石ですらモンスターが食べ、自分の体に取り込む場合が多々ある。

これによつて鉱石を食べるモンスターの体はハンターの全力の攻撃すら弾き返す屈強な肉体を得る事が出来るのだがこれは分かりやすく言えば鉄を消化して自分の体に取り込むのと同じ事であり、普通の生物ではあり得ない。

だがそれを平然と行われる竜世界ではそれを取り込み、重さと頑丈さを増した竜や龍の巨体による体当たりだけでも圧倒的なまでの驚異となっており、その硬く重い体を受け止めるには圧倒的な強度が必要となる。

その為に必然的に同じ鉱石をより頑丈になる割合で配合した壁が必要になる。にとり達はその技術力に軽く恐怖を覚えていた。

そして迎撃用の機動要塞へと進化させていた河童達は胡瓜と工具を両手に作業を続けていたのであった。

そしてさらに2日が経った。

ガイアデルムが侵入してくるまであと1日、さすがに限界が来ているのか断裂群島の砂漠地帯にガイアデルムが無理矢理抉じ開けようとしているスキマが発生しており、その位置を確認した霊夢達はそこに迎撃用の設備を用意していた。

そしてモンスター達もそこに集結しており、設備を設置する手伝いをしていた。

これにより設備は着々と出来上がっており、機動要塞となった対巨龍迎撃用要塞は対巨龍決戦用の要塞となっていた。

そして建設班に対してにとりは声をかける。

「おーい！建設班！そっちはどうだい？」

「にとり！こっちの兵器防御用の防御壁はなんとか準備出来たよー、ただほぼ使い捨ての防御になるから相手からの大技を防げるのは一回と考えるといてくれ！」

「了解した、兵器班は大丈夫かいー？」

「こちらは大丈夫です！城壁移動型の大砲とバリスタを6門ずつ、さらに固定式で4門ずつ、それと固定式の速射砲4門を設置してあります。」

パチュリー様によって速射砲の設計図を頂いたお陰でなんとかここまで作れました。」

パチュリーはこの期間の間にカムラの里の兵器の設計図を見つけ出し、それを河童に渡すことで戦力の増加を狙っていた。

しかし時間があまりにも無いため大砲とバリスタの作成を止めて全員を速射砲作成に回してなんとか4門までは作成出来た。

これらの迎撃兵器は河童砲術隊によって扱われるらしい。

そして撃龍槍と巨龍砲は要塞の外に設置されており、河童狙撃手が河童観測隊によるサポートを受けて発射し、砦の外から攻撃をする予定となっている。

しかし不発だったり防がれてしまうと不味いため一旦ガイアデルムを弱らせてから発射する手筈となっていた。

「よし、魔理沙！そっちの固定式大型八卦炉の方はどうだい？」

「どうだもなにも私だけじゃ発射まで魔力が足りねえよ！」

「そういう風に設計してただろうが！」

「ああ、済まない！聞き方を間違えた。

ちゃんと可動出来そうかい？」

「ああ、そっちは大丈夫だ。」

「ただ私以外のパチュリーやアリスと一緒に魔力込めなきゃいけないからそれをやったときどうなるかはぶっつけ本番になるから分からないぞ?」

「河童は度胸! 何でもやってみるものさ!」

「私は人間だっつもの!」

魔理沙のマスタースパークを参考に巨龍に対して有効なダメージを与えるにはどうすべきかを考えた結果、魔法使い複数の魔力を一度の攻撃に使ってみたらどうだろうという意見が出ており、有効と判断された為に河童とパチュリーが共同で作った超大型八卦炉は一度使ったら壊れる仕組みとなっていた。

理由としては八卦炉自体が3人の魔力を増幅する際に純粹に耐えられないのである。

これも使い捨てる兵器となっていたが威力は一番期待されていた。

そして霊夢はアルトウーラに乗り、その膨大な霊力をアルトウーラに注ぎ込む。

「大丈夫?」

『うん……………なんとか……………だけどそろそろ貯めておきたいかも。』

「分かったわ……………行くわよ……………」

『「インジェステイオーネ!!」』

霊夢とアルトウーラは霊力と全属性の力を注ぎ込み、ガイアデルムが出現した際にいきなり大技を叩き込もうとしていた。

しかしチャージに時間がかかるともあと一回が限度という結論が出ており、ガイアデルムがどれだけの耐久性を持っているかが鍵となっていた。

さらにイブシマキヒコとナルハタタヒメは周囲を回って暴風による結界を発生させてキュリアが出てくるのを押さえていた。

ただすでに幻想郷にかなりの量のキュリアが入り込んでおり、どうなるかがまだ分からないため、これ以上の悪化を防ぐという意味での結界だった。

決戦まであと1日………百竜は百鬼に勝てるのか………

そして隠れ潜む傀異化の前兆は妖怪の山や地底の野良妖怪にあり、それらは全員この断裂群島にすでに誘導されていたのであった。

「全員！吹き飛ばされないようにどこかに捕まりなさい！」

「ぐぬううううう!!」

「ああああああああ!!私の胡瓜イイイイイイイイイイイイ!!」

「嘘でしょ……あれを防いで無傷ですって!」

龍は咆哮と共に煙を吹き飛ばし、周囲に居る者達すらもその咆哮によって吹き荒れる暴風になんとか耐える……しかし近ければその風に全身を打たれ致命傷を負いかねない威力の咆哮だった。

そして肝心のガイアデルムは全身の紫色の結晶が多少剥がれた程度で、本体は無傷となっていた。

しかしどうやらあの妖気は紫色の結晶から生成しているようだ。

だが厄介な事にこの結晶が残っている限りあの威力でさえ防ぐ程の分厚い妖気の壁に防がれて攻撃が本体に届かない。

「あの結晶を剥がさないと撃龍槍も巨龍砲も効果は無いわ！」

全員！妖気を貫きやすい近接攻撃を仕掛けるわよ！弾幕を遠距離から撃つてたら壁に邪魔されて結晶を壊せないわ！」

「正気か!!」

「あんた達も前に出なさい！多分その八卦炉の攻撃も今は効果が薄いわ!!」

「分かったぜ！」

魔理沙はその言葉に頷く、あの圧倒的な強度の妖気の壁を見て納得したのだろう。覚悟を決めた表情をしている。

「私だとあれに近付くのは厳しいわ！契約召喚で力の強い大型のモンスターを呼ぶ準備をするから時間を稼いで頂戴!!」

「ちよつとパチュリー！それだと機動出来ても魔力的に威力が下がるわよ！」

「いいえ、おそらくあれは魔力、霊力、妖力全てに耐性を持つてるわ。」

妖気での壁のみであそこまで防ぐのは普通なら無理よ、例え全属性の力を持ったルーチエを強度だけで防げてても霊力が混ざってて防がれるのはおかしいわ。

そうなると多分こっちはほぼ効かない。」

そしてパチュリーの推測はほぼ当たっており、ガイアデルムはその体色を大きく変えるほど膨大な力によって変質しており、キュリアから得た力によりその甲殻と鱗にはとてつもない耐性が備わってしまっていた。

この耐性と壁を貫通するには、一度零距离で叩き込まないと貫けないのだった。

「はあ、仕方ないか……………ヤツカダキ！」

「キシヤアアア！」

アリスはどこからともなく金属の棒で出来た骨格なような者を取り出し、ツケヒバキ

が数匹で入ってくる、

そして骨格の至るところにある返しのような鉤針にヤツカダキは糸を焚き付けて肉をつける。

さらにその上から鎧を装備させて糸でさらに固定、強化をしていき、やがてそれは巨大な上海の形を取る

「ゴっつあんDEATH」

「妃蜘蛛式戦闘用ゴリアテ人形よ!」

そしてアリスは全ての指から魔力系を出してゴリアテ人形に接続、そして基本的な操作を行い、ヤツカダキが内部のツケヒバキに糸を使って指示を出し、それをサポートする。

だが周囲を索敵していたリーダー隊の河童が非常事態を告げる。

「ツ?!?!皆さん!撃龍槍班と巨龍砲班の狙撃手達の方にキュリアの反応多数確認!傀異化した妖怪の群れです!」

「なっ?!まさかさっきの咆哮で!?!」

「分かりません、しかしいきなり多数の反応が出現しました。その数およそ100!!さらに反応が増えてます!」

「にとり!」

「分かつてるよ！『対巨龍用決戦機動要塞キューカツパー』!!!外部迎撃モードで機動！大砲隊1番から4番を外壁の外に移動させて迎撃に回して！」

バリスタ隊は外壁から狙撃してサポート！

モンスター達も一部こつちに回してくれ！

「私とエスピナスが向かうわ、そつちのニートと焼き鳥もこつちに來なさい！」

「誰が焼き鳥（ニート）よ!?!」

「見事なくらいパワー型ばかりこつちに來たわね………マスゴミ！あいつがキュリア吸い始めたら柿やらその爆発する松ぼっくり投げつけまくりなさい！」

「ちよつ!?!私の扱い酷いですよ!?!」

「アルトウーラはもう一度インジエステイオーネで力を貯めて頂戴、後は全員突撃するわよ!?!」

「「おお!!!」」

そして幻想の百竜と深淵の百鬼が今ここでぶつかる。

勝つのは果たしてどちらか………

断裂群島のヌシと邪毒の角

「断裂群島」『大型兵器設置地点』!!!

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ」」」」

!!!!

一斉に傀異化したと思われる数多の妖怪や妖獣が群れを作り、侵攻してくる。

そして幾百もの鬼が夜に動き出し、行動する。

まさにそれは百鬼夜行と言うべきものだった。

そして相対するのは……………。

「あのスキマには感謝しないとね、ここを用意してくれなければ私の畑も巻き込まれていた所よ。」

「ただでさえニートでなにもしないんだから足引つ張るんじゃないわよ？輝夜？」

「はっ！焼き鳥にだけは言われたくないわよ！あいつらの晩酌にされんじゃないわよ？」

「なにを!？」

「なによ!？」

「……………グオウ。」

「ワオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

「zzzzzzZZZZ……………」

割とカオスな面々であった。

そして傀異化した妖怪の弾幕により戦闘開始の狼煙が上げられる。

そしてそれは呑気に寝ているエスピナスに全部直撃し、煩わしそうに首を振っている。

だが幽香はあえて放置する。

「ちよっ!?!守らなくていいのか!?!」

「いえ、よく見なさい焼き鳥。」

「ああ!?!なんだこのクソニートが……………ってあれ?無傷か?」

そう、煩わしそうにしてはいるがエスピナスの体には傷ひとつついてすらおらず、エスピナスは痒そうにしている。

そして余りにも不愉快だったのかエスピナスは目を覚まして咆哮する。

そしてそれに妹紅と輝夜がパートナーを連れて突撃する。

リオレウス豪火種はその全身の豪火によって近付く妖怪を悉く灰にしていき、ただ尻尾で風払い、噛みつくだけで爆炎が吹き荒れる。

リオレイア灼熱種は頭部、胴、尻尾の三位全てが炎上し、ただ陸を走るだけでその後には爆発が起こり、噛みつけば周囲を巻き込む灼熱の爆発、風払えば灼熱の刃となつて敵を切り裂いていた。

そしてそんな二匹の炎を受けとる妹紅は再生速度を上回る勢いで炎上しながら灼熱豪火の竜の弾幕を放つ。

ジンオウガ不死種は超帯電状態となっており、これによって数多の緑色の雷を発生させ、周囲の命を吸っていく。

輝夜はそのジンオウガから幽明虫を受け取り、その命の力を使って自身へと強力過ぎる再生能力を付与しながら接近戦へと持ち込む。

能力によって加速した輝夜による全力の拳は輝夜の腕が耐えられずに碎ける程の反動で一撃で妖怪を絶命させていく。

しかし反動により碎けた腕はその再生能力によって瞬時に回復し、次の攻撃を行う。しかしこの程度で全てがやられるほど百鬼夜行も弱くはなかった。

「っ!?妹紅、避けなさい!」

「なにをつがあああああああああ?!?!?!」

妹紅は突然飛んできた泥によって炎を大部分消火されてしまった。

そしてその泥には酸が含まれており、触れた部分が爛れてしまったのだった。

そして投げつけた先には仙人を思わせる立派なひげを持ち、なにかをつかむに適した形状の手のような形の先端を持つ尻尾

傀異化しかけている泥翁オロミドロの姿がある。

しかし完全に変異仕切ってはいないため、他の妖怪とは違って傀異化に抗おうとしていた。

「輝夜!」

「任せて!ハアツ!」

そしてその様子を見た目で輝夜は動けなくなっている妹紅を泥から脱出させるのを止めて、オロミドロに取り付いているキュリアを全て退け、傀異化を解除させる。

しかし傀異核を複数破壊されたオロミドロはぐったりとしており、輝夜の幽明虫によつて傷を回復させていた。

どうやら幻想郷に複数のスキマが開き、傀異化しかけているモンスターが何体か巻き込まれているようだ。

果たしてこれがどのような影響を及ぼすのか………

他のモンスター達は決戦場の地面に深く爪を食い込ませる等をしてなんとかその衝撃に耐えており、霊夢達はモンスターにしがみつくと事だなんとか衝撃を防いでいた。

そしてガイアデルムが自身の右側の翼脚を振り上げ、その巨大な爪に付着している結晶に力を込める。

それによりさらに巨大で全てを切り裂くかのような妖力による鉤爪が形成される。

「っ!?全員!あいつの横に移動するのよ!正面は危なすぎるわ!!」

霊夢はその勘によってガイアデルムが最も苦手とする戦闘スタイルを作り、左右から挟み込むように分散する。

こうなるとガイアデルムはどちらかに狙いを定めるしかなく、片側を攻撃しようとしてる間にもう片方から攻撃を受けるしかなくなるのだ。

だがそれは通常個体ならばである。

ガイアデルムは自身の真下にその翼脚を叩きつけ、爆発を引き起こし四方に巨大な亀裂を入れてそこから妖力による弾幕を大量に発生させた。

「まずい!モンスター達はこの弾幕を避けきれない!」

夢符『二重結界』!!」

霊夢は自分のスペルを発生させてモンスター達にとっての死角となる真下からの攻撃をなんとかカバーする。

しかし横からの弾幕は防げないはずなのに何故か被弾する様子がなかった………そしてよくみてみると。

「ごっつあんDEATH!!!」

妃蜘蛛式ゴリアテが大量の蜘蛛糸が中に舞っており、それによつて横からの弾幕を防いでいた。

そしてゴリアテ人形は全力の突っ張りの反撃により右の翼脚の結晶を破壊することに成功する。

とはいえ完全な粉碎までは出来ぬ模様で日々を入れるのが限界だった。

「背中借りるぞー！アオアシラ!!!」

「グオオオオオオオオ!!!」

そしてヌシ・アオアシラが勇儀を背中に乗せることで勇儀から身体強化のサポートを受けて全力の『シヤケハントクロー』を放ち、とどめに正拳突きによる強力な一撃で左側の翼脚の結晶を粉碎する。

しかしその限界以上の力を引き出した代償は大きく、ヌシ・アオアシラの爪が欠けてしまう。

「ちっ、こうなると拳で戦うしかないね、まあ、もともと切り裂ける程あの鱗と甲殻は柔

「らくくは無さそうだったから仕方ないか。」

「グオウ……………」

そしてヌシ・アオアシラは修行によつて獲得したステゴロでの戦闘で結晶を殴り続ける。

しかし強化した『シヤケハントクロー』によつて大きな亀裂を入れての正拳突きによる一撃でようやく粉碎出来るほどの強度の為思うように破壊が進まない。

ガイアデルムは煩わしそうにし、体を回転させて尻尾による風払いを行う。

その動きに全員があわせて回避し、永琳を背中に乗せたナルガクルガ希少種とその後ろにラージャン二頭が続く。

そしてナルガクルガ希少種はガイアデルムの尻尾から背中に乗り移り、尻尾のトゲを発生させる。

「ナルガクルガ！尻尾のトゲを下半分だけにして上のトゲだけ引つ込められる？」

「ギャオウ!？」

「割と無茶なのは分かっている、でもお願い！」

「ギャオウ!!」

そして尻尾のトゲを上半分だけ引つ込めて永琳はそれを確認してから萃香とナルガクルガ希少種に合図を送る。

「ナルガクルガ！飛び上がったって叩きつけて！

萃香！巨大化お願い！！」

「そういうことか！！

鬼神『ミツシンググパープルパワー』!!!

ラージャン！！」

「ウホオオオオアオオオオオオ！！！！」

これによつて巨大化したナルガクルガ希少種による尻尾が背中にある巨大な妖結晶へと叩きつけられる、しかし巨大な分かなり強力な妖力の障壁があり、それに防がれたがさらにそれに合わせてラージャンが飛鳥文化アタックもといローリングアタックをその尻尾に仕掛ける。

これにより二重での衝撃が加わり、妖力による障壁を貫き背中にある巨大な妖結晶に大きくヒビが入る。

「嘘だろ!? これでも碎けないのかい!？」

「いいえ! まだよ! ガランゴルム!」

「グオオオオオオオオ!!!」

ガランゴルムは咆哮し、すでに溶岩を纏った拳で地面を殴って爆発させ、大きく跳躍する。

少なくともあの結晶を剥がさない限り兵器による攻撃は効果がない。」

とはいえ属性の力を含めて全てを弾かれているため物理的な力で破壊するかゼロ距離から内側に力を送って攻撃するくらいしか出来ないため、幻想郷の住人との相性が凄まじく悪かった。

「キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

イブシマキヒコとナルハタタヒメが咆哮し、その巨大な腕をもう片方の巨大妖結晶同時に叩きつける。

とはいえ巨大な妖結晶の圧倒的妖気によって自然生成される妖気の障壁を突破するには威力が足りない。

そこでイブシマキヒコは己に備わる龍の力、龍属性を全力で叩き込む。

これにより異能を封じる龍の力が妖気の障壁を徐々に消し去り、結晶本体へと叩きつけられる。

龍属性という力は基本古龍全てに対して共通の弱点であり、自分で龍属性を操るイブシマキヒコやアルトウーラですらそれは例外ではない。

そして数多の妖怪の力を吸い上げて半妖怪となったガイアデルムにはかなり効く。

人里に迫る百鬼夜行

く人里く『慧音邸』

霊夢達がガイアデルムとの戦闘を開始していた頃。

人里を守護し、教鞭（催眠術と頭突き）を取る半獣、『上白澤慧音』、その慧音が寺子屋としても利用している自宅に人里の警備責任者、重鎮、⑨を背中に乗せるプケプケ亜種、青電主ライゼクスを抱えているリグル、エスピナスの毒を大量に入れたビンとその毒用の抗毒液を抱えたメデイスン、庭から一本角を出しているディアソルテによる襲撃対策の会議が行われていた。

いつもは寺子屋で使う黒板で大雑把に人里の位置を書き、傀異化した妖怪達をどう対処するかの話をしていた。

「慧音殿、今回は今までのように人里を隠すというのは無しなのですか？」

「ああ、今回はそうもいかない。

人里を隠している間は私が動けないのもあるんだが今回の異変により傀異化という

現象に飲み込まれた妖怪、妖獣等は完全に理性を失い、破壊衝動と本能のみに身を任せ
ている。

破壊衝動についてはキュリアに無理矢理寄生されて肉体への負担からくる苦痛による物のようで、理性を失う事により本能で嗅覚や聴覚に頼ってくる。

私が隠せるのは歴史から一時的に無かったことにする事で視覚では分からなくしているからだ。

とはいえ人里自体はその場所に存在している為に一度発見されると完全に効力が切れてしまう。

特に犬や狼型などの嗅覚に特に優れた妖怪とかならずぐにバレてしまうだろうからな。」

「しかし一時的とはいえ時間は稼げますしその方が良いのではないですか？

それにディアソルテ殿は地面を潜れますから空を飛ぶ貴女方と同じように道を無視できます。駆けつけるのは容易だと思われませんが。」

「私が警戒してるのはそちらではないんだ。

恐らくだが今回発生するであろう襲撃は今までのように2〜3体を相手にするのは訳が違うんだ。

下手したら100近い妖怪が襲ってきてもおかしくないらしい。」

「なっ!? たった1体ですら脅威だと言うのに100ですか!? 何ですかその馬鹿げた数は!?」

「ああ、私も何度冗談であればと思ったが霊夢の勘によつて教えて貰った事だ。

恐らく確実に戦うことになるだろう。」

「博霊の巫女殿の勘ですか……そうなるかほぼ確定でしょうな……。」

「問題はその群がどのタイミングでこちらに現れるかになりますな。」

なにやら話し合っている間に外が急に騒がしくなり始めていた。

そして慧音邸の入口がドンドンと叩かれ、慧音を呼ぶ声がする、かなり慌てている様子だ。

「慧音先生!! 慧音先生!! 大変です!!!」

「君は確か警戒担当の!つと言うことは来たのか!?」

「はい! 東門付近に多数接近、数は少なくとも100はいるかと思われます。」

「西門にも十数体接近中です、こちらは命連寺の皆様が担当してくれるそうです。」

「北門には2〜3体接近しております。」

「南門は8体程接近しています。」

「そうか、報告助かる。」

とりあえず私は東門で奴らを倒してくる、だがさすがに私だけではさすがに敵しすぎる。

チルノ!!」

「ほえ?」

「君にもそのプケプケとやらで人里を守ってほしい。」

子供達とかにとつてのヒーローのヒーローになってやってくれ。」

「ーっ!!わかった!アタイがひーろー?になってやる!!」

「メデイスンはその毒で南門に近づく敵を動けなくしてやってくれ。」

「ふん!しよーがないわね!」

「ありがとうな、メデイスン。」

「えへへく……………ハッ!?ベベベ、別に嬉しくもなんとも無いんだから!!」

「リグル、君は……………」

慧音は言いづらそうにしていた。

リグルは他の者達に比べてまだ力がかなり弱く、今回の戦いに付いてこれるかかなりの不安を残していた。

だが彼女は覚悟を決めた表情で答える。

人里の戦い

く人里く『東門』

突風によって吹き飛ばされたチルノが戻ってきた所でこちらからも大量の傀異化した妖怪の群が確認出来る程群は近付いており、そしてその進路が全てこちらに向いているのもわかる。

しかしなぜ人里を狙うんだ？

暴れるだけなら同士討ちになるはず………何かの意思を感じる。

「あ、氷も言い感じに溶けてきてる。」

チルノはプケプケの攻撃に水が必要になるため巨大な氷を大きめの容器に居れておき、それが溶けるように上に熱した鉄板と焚き火を設置していた。

まあこの鉄板と焚き火はチルノではなく大妖精の提案なのだがこれでプケプケは容器に顔をつつ込み、尻尾から水を噴射して敵を風払えるらしい。

そしてディアソルテは今敵の下の地面を掘り進めており、即席の落とし穴を作ってい

る。

最終的に中央でディアソルテが支え、敵がその辺りまで進んだらディアソルテが飛び出して周囲の地面が崩れて落ちる予定になっていた。とりあえず注意したいのはこちらでも傀異化しないようにする必要があるので、こちらも取り付かれてしまえば洒落にならない事態になってしまう。

それだけはなんとか防ぐ必要がある。

「プケプケ、水飲んで尻尾膨らませといて！」

「グケエエエエ!!」

そしてプケプケは顔面を叩きつけて水を飲んでる。

毎度思うのだが何故顔面を叩きつけるのだろうか？

何かの習性があるのだろうか？

そしてプケプケはその細い尻尾をパンパンに膨れ上がらせ、口の中にある頬袋いっぱい水を貯めている。

やはり見た目が……………。

「ブクブクブクブク……」

メデイスンがエスピナスから貰った毒液により、南門は死屍累々となっており、基本的に解毒が不可能な激毒、さらに敵を麻痺させる神経毒によって傀儡化した妖怪全てが痺れ、さらに口から泡を吹いて倒れていた。

さらに取り付いているキュリアも毒にやられており、妖怪達からポロポロと剥がれ落ちていく。

だがどうやらキュリアが全て剥がれたとしてもキュリアの毒を全身に注入された傀儡化した妖怪は元に戻ることは無いようで、今も暴れだそうともがいているのがわかる。

しかし………エスピナス迪異種の毒はその程度で破られる程優しくはなかったのである。

「ふんっ！ 慧音先生の所を襲おうとするからそうなるのよ！

………先生、頭撫でてくれるかなあ………」

普段はツンツンしているメデイスンだが根っこは甘えん坊なようだ。

く人里く 『北門』

「キュウウウウウウウウウウ!!!」

青白い光の剣が周囲を飛び回る。

「ガッ!? ガガガガガ……………」

ライゼクスは美鈴で遊んでいる内に麻痺のやり方を覚えたのかその蒼の雷を受けた
傀異妖怪は全員が体を痺れさせ、動けなくなっていた。

そしてライゼクスは尻尾を地面に突き刺して妖怪達を引き寄せて一ヶ所に集めると
その翼で何かを伝えようと必死にジェスチャーをしている。

「ふえ? 縦に積み上げて欲しいの?」

「キュー!」

「……………急に暴れない?」

「キュキュ(首を振る)」

「うー、わかったよ。」

「よしよしよー!」

VS 幻想を喰らうガイアデルム 第二形態 その1

〈断裂群島〉『対巨龍迎撃用決戦機動要塞キューカップ内部』

ガイアデルムは全ての結晶を破壊した後、結晶によって隠れていたエラ状の部位から膨大な魔力と妖力を放出する。

魔力を隠していたのか妖結晶が蓋をしていたのかわからないがさつきまでの状態はかなり手加減されていたらしい。

当たるかどうかはともかくとして一撃でも貰えば致命傷になりかねない威力だったというのにそれがさらに強化された訳だ。

モンスター達も当たればかなり危ないだろう。

ガイアデルムは周囲を吹き飛ばした後、自身を全身へと多重の魔法結界を構築する。

こんな時にパチユリーがいて欲しいが今は召喚を行っており、まだ余裕のある状況はなさそうだ。

「全員気を付けなさい！あの魔法結界がなにを防ぐのかわからない上に発動したら何が

だがガイアデルムはあれ程の威力の反撃を行っておきながら感じ取れる魔力と妖力の消耗具合としては殆ど減っていないかった。

「アリス！」

「ええ、あれは恐らく吸収反射型の結界よ。

一度あの多重の結界魔法で攻撃のエネルギーを吸収、それに一部弾かれてたのを見る限り吸収のキャパシティを超える威力の者は弾いているようね。

そして二段階目に術者の魔力と妖力を起動に使って弾いたほんの少しの力を補充してカウンターとして放っているみたい。

結界の構造を見る限り面の攻撃は基本的に全部さつきと同じオチになるわよ!!」

「つまり欲しいのは貫通力、ということとは私の出番というわけね。

いくわよ！神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

レミリアは力に余力を残して使っているのは確実にダメージが入らないのを理解していた為、全力の力と妖力を込めて投げる。

「ギャツ!!」

その全てを貫かんとする槍はガイアデルムに凄まじい勢いで迫り、想定していた威力と速度を大きく上回る一撃にガイアデルムは軽く驚いていた。

ガイアデルムは急いで結界を展開するがあまりにも速度が速く、6枚の多重結界を展

開するのが限界だった。

魔法結界を重ねるように展開してはいるがその全てを貫く槍はその結界を悉く貫き、最後の一枚に突き刺さり、ヒビを入れる。

だがそこまですしか貫くことは出来ず、槍は消滅していく。

「ちい、あと少しだったか………：万全の態勢で結界を張られたら私のグングニルじゃ貫くのは不可能ね。」

展開して防御していた結界を全て破壊した為に幸い反撃は来なかったが、今まで以上の警戒具合をガイアデルムは見せる。

「嘘だろ!? レミリアの槍でも完全に貫けないのかよ!？」

「いえ、一部貫けたということはまだ防御を貫けなくはないということよ。」

「とはいえそれ以上の貫通力をどうやれば出せるか………。」

私達が悩んでいる間にもガイアデルムの攻撃は続く。

数多の属性による弾幕でモンスター達は耐えるが弱点のものわも混ざっている為時々顔をしかめていたのだった。

だがここでパチュリーの魔法が完成する。

「呼び出すわよ!！」

そしてパチュリーの目の前にメル・ゼナの物と同じ形状の魔法陣が形成され、それが二つに分裂して二体のモンスターが出現する。

「へっ!!?絆石が!?!」

だがそれと同時に絆石が展開されて強く光輝き、その二頭の情報に霊夢に流れ込んだ。

その二頭は全身に鱗以外にもド派手な色をした羽毛に包まれており、その翼の先端には石のような物があった。

最大の特徴はその頭部にある嘴で、ラツパのような形状となっている。

その二頭の名は……………

『彩鳥クルペッコ』、『紅彩鳥クルペッコ亜種』……………

ただどなによこれ……………あの二頭に備わる力が私が今まで見てきたガイアデルム以外のモンスター達とは別格に強い。」

クルペッコは本来力の強いモンスターとは言えず、古龍と比べればかなり弱い部類に入る。

だがクルペッコからはまるでリオレウスやリオレイアを思わせる灼熱太陽のような気配が漂っており、亜種からは太陽、月、嵐等さまざまな力を感じており、そのなかには穏やかな自然のような暖かさが混じっていた。

この二頭が絆石と深く共鳴している理由とは何か……
ガイアデルムとの戦いはさらに激しさを増していた。

VS 幻想を喰らうガイアデルム 第二形態 その2

〈断裂群島〉『対巨龍迎撃用決戦機動要塞キューカツパー内部』

パチュリーによって呼び出された二体、クルペッコとその亜種個体は通常個体とは違い、とてつもない力を秘めており、絆石と強く共鳴していた。

パチュリーが行った契約召喚は条件付きで指示を聞かせる事が出来る術式であり、今回設定した条件はガイアデルムとの戦闘に限りこちらの味方として行動するという条件だった。

「霊夢・絆石が反応してるならその二頭はライダーに関係してるはずよ！上手く協力して頂戴！」

「ええ、わかったわ！お願い貴方達、あのデカブツを倒すのを手伝って頂戴!!」

二頭はそのデカブツ、半妖と化した冥淵龍ガイアデルムを見てこれが敵だとすぐに理解していた。

すると亜種個体のクルペッコは大きく息を吸い込み喉を風船のように膨らませ、嘴の

効果としては自身の火属性の力を大きく増幅し、肉体強度を上げる技である。

クルペッコは亜種のように全員へのサポートは全て捨てているが攻撃にかなり特化した遺伝子を複数継承していた。

これによりかなりの強化を受けたクルペッコが飛び上がり、ガイアデルムへと向かっていく。

クルペッコ亜種は周囲の霊夢達や吹き飛ばされたガランゴルムが大きくダメージを受けているのを見つけ、自分の翼の先端についている『電気石』と呼ばれる部位をガチガチと二回撃ち鳴らし、優しく歌うように咆哮した。

「リアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ツ!? 傷が塞がってる!?! それに疲労も一緒に消えるなんて!?!」

「ウホッ!?!」

「これは………恐らく癒しの声ね、かなりサポートに特化した遺伝子を複数持っているのね。」

「遺伝子? どういう事?」

そこで疑問に思った霊夢はパチュリーに聞く。

「さっきからこの二頭がやってるのは本来ならクルペッコ達がやる事が出来ない行動であり、他のモンスターの使う技を使っているのだけけどライダーだけは伝承の儀と呼

「ええ、別名『金火竜』もしくは黄金の月とも称されるモンスターであり、下手な古龍を圧倒する程の力を持つているわ。」

これを扱えるということは金火竜リオレイアの遺伝子を手に入れる、つまりリオレイア希少種を倒してその巢からタマゴを持ち去っていると言うことよ。

恐らくこの様子だと番の『銀火竜』の遺伝子も持つてるでしょうね。」

パチュリーへの推測は当たっており、クルペッコは『リオレウス希少種』の遺伝子である『キングジャッジメント』と呼ばれる技と『リオレイア希少種』の遺伝子である『クインジャッジメント』と呼ばれる技をメインで継承しており、その他クルペッコが秘めている火属性の力を大きく増幅する遺伝子も持つていた為に凄まじい威力の攻撃を可能としていた。

だが結界を全て貫く程の威力が出た理由はブレイブフレアにあり、ブレイブフレアに一度だけ攻撃の威力を倍に跳ね上げる事が可能だったのだ。

亜種による猛撃の咆哮によって増幅された攻撃力とブレイブフレアによってさらに引き上げられた力により結界を根こそぎ破壊する威力となっていた。

「これは……………いけるわ！クルペッコ！その調子で結界の破壊をお願い!!」

全員！クルペッコが結界を破壊してる間に畳み掛けるわよ!!」

「「おう（ええ）!!」」

かなり劣勢だった状況が現れた二匹により大きく優勢になった。

だが霊夢はまだ油断出来ない上に何か恐ろしい物が残っているという勘がある為に警戒を最大にしており、それを使われる前に勝負を決めようとしていた。

果たしてガイアデルムとの戦いはどうなるのか………

まだまだ決戦は終わらない。

人里の戦い 命蓮寺 side

人里『西門付近』

「ギユアアアアアアアア!!!」

「くっ?! 姐さん!! こいつら怯みもしませんよ!」

「ええ、どうやらこの紅い蛭みたいな生き物が原因で正気を失っているみたいですね。

南無三!!」

「ぐぎやああああああああ?!?」

人里の西門では十数匹にもおよぶ傀異化した妖怪の群れに襲われており、今は命蓮寺の面々がそれをなんとか押さえていた。

だがキュリアに寄生され、傀異化した妖怪はその毒によって苦しみ続けているために痛みにより怯むような事はない、常に痛みを感じているのが原因で麻痺しているのだ。

怯ませるには傀異化によって発生する傀異核を破壊する事により発生する爆発等で

致命的なダメージを発生させるくらいの痛みでないと怯まないのだ。

「くっ!!」撃が重すぎます!?

この種類の妖怪は本来こんな筋力はしていなかったはず!?

傀異化した妖怪は全身が変異する為に身体能力が大幅に上がる傾向がある。

だが妖怪は肉体を持つ者と持たぬ者と別れてはいるがキュリアは何故か肉体を持たない者にも取り付き、傀異化を発生させる。

白蓮が今戦っている妖怪も肉体を本来持たない亡霊タイプの妖怪だったが、弾幕よりも肉弾戦の方が強くなっていった程である。

幻想郷にキュリアが大量に流れ込む際に人里に広く認知されたのが原因なのか宿主が半妖怪となったのが原因かは不明だが妖気を直接吸い取り、寄生する事を可能にしていたのだった。

「くっ!!? 雲山!?!」

「くっ!!?」

そしてキュリアは雲山に寄生しようと妖気を吸うために噛みつきこうとしているが雲のように体の密度を薄くされて苦戦しているようだった、しかし雲山に異なる妖気が混ざりはじめており、危ないのも確かだった。

「まずっ!!? UFO全部落とされた!?!動きも早くなってるわよ!?!」

さらにぬえの呼び出すUFOも飛行タイプの妖怪により全て撃墜されており、ただでさえ移動の素早い飛行タイプの妖怪がさらに素早さを増しているのが良くわかる。

「聖っ!!」

「っ!?!」

そして白蓮の背後から不意打ちのごとく傀異化した妖怪が襲いかかる。

「白蓮さん！伏せて!!」

急に地面の方から声が響き、白蓮はその指示に従って伏せた。

「キユイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!」

地面から名刀のごとき輝きを持った鎌が現れ、一度に複数の傀異化妖怪を切り裂いた。

その後鎌の生えた地面から一匹のヤドカリのような巨大な生き物が現れる

「ふう、なんとか間に合いましたか」

ヤドカリの背負うヤド、斬竜ディノバルドの口から妖夢が現れる。

「どこに入ってるんですか!?!」

「つかなんで地面から!?!」

「仕方ないじゃないですか……………シヨウグンギザミさんは空を飛べないんです

……………」

その顔には終わった後どうやって帰ろうかという悩みが見えた。

冥界への入口は遥か空高くに存在し、飛べなければ基本的に向かうことが出来ない、その為持ち上げようにも重すぎるショウグンギザミを冥界に連れて帰るのは妖夢にはかなり難しい問題だったりするのだ。

さらに言えばショウグンギザミは地面を移動するよりも地中を移動した方が速かったりする。

その為妖夢は不意打ちも可能な地中移動で向かうことにしたのだ。

四方向にある入口のうち、二方向は気配も少なく壊滅仕掛けている上に一番気配の多い所は化物が何体も感じられた為に逃げ、最終的にここにたどり着いたらしい。

「あの……………なら終わった後この子を持ち帰るの手伝いしましょうか?」

「……………ありがとうございます……………いやほんとに……………」

妖夢は割と切実だった。

「と、とりあえず今はここを守り抜きますよ!!」

「ええ、いざ南無三!!」

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

ガイアデルムは咆哮により周囲の全てを吹き飛ばし、クルペッコ二頭もその咆哮で動けなくなっていた。

さらにガイアデルムは翼脚の関節付近にあるエラ状の部位から妖力、魔力、龍の力によつて生成される翼を作り出す。

「あれは……………翼!？」

ガイアデルムは立ち上がり、その巨体に比べて遥かに小さなその翼を生やした翼脚を羽ばたかせる。

翼はどんどん大きさを増していき、それは大きな翼膜となる。

その翼はついに両手両足すらも退化したガイアデルムを空へと持ち上げた。

「飛んだ!? つて不味い!? この場所から逃げられてしまっわ。」

「にとり!!」

「あいよ! 河童狙撃班!! 巨龍砲用意!!」

『巨龍砲用意!! 龍属性エンジン駆動開始!!』

龍属性エネルギー充填120%、いつでも撃て(暴発)ます!』

「ちよつとにとり!? 猛烈に嫌な予感がするんだけど!？」

「いやー、あらかじめ龍属性エネルギーを限界まで入れてたからねえ、エンジン駆動した

撃龍槍設置地点からズドンッ!!という何かが発射される音が響く。

さらに空からは……………巨大なきゅうりが降ってきた。

「ちよつと!!撃龍槍はどうしたのよ!」

霊夢はにとりの首を絞めて前後に振り回す。

「ぐえ!!ちよつ!!ギブギブ!!」

上から落ちて来た超巨大きゅうりは空中で二つに割れ、中からは大量の小型撃龍槍がジエツト噴射でガイアデルムへと向かっていき、突き刺さった瞬間大爆発を引き起こした。

煙から龍属性の雷も出ている為に龍属性エネルギーはちゃんと使っているようだ。

「さ、3番!!発射!!」

『ザザ……………ザーザーザザ……………ザ—————』

「うん、逝ったね。」

「これ向こう側に指示届いてるんでしょうね?」

「たぶ……………ぐえ!!ギブギブギブツ!!」

にとりはヘッドロックをかけられた。

だがこの時ガイアデルムの様子がおかしい事に気付いた。

あまりにも静かなのだ。

VS幻想を喰らうガイアデルム 第三形態

「断裂群島」『対巨龍迎撃用決戦機動要塞キューカップ』

ガイアデルムはさらにキュリアを喰らい、その傷を瞬時に回復させる。

妖力、魔力と来て次に靈力を吸収し、自分の力へと変えたガイアデルムはさらに姿を変える。

全身の甲殻の色はさらに深く、引き込まれそうな黒となり、逆に腹部等の甲殻には覆われておらず、鱗によって包まれている部位は穢れを持たず、全てを吸い込むような純白の鱗となる。

角は龍の力が集中し、黒の中に紅い輝きを加えられている。

爪には膨大な魔力によって紫色の怪しい輝きを放っていた。

翼脚のエラ状担っている部位から放出されるエネルギーによって形成された翼膜は白と黒、紫と紅黒い輝きが混じりあいつつも色が混じり、重なることの無い混沌とした輝きを秘めていた。

見る。

しかし龍はこの翼では地の底から抜け出せないことを悟り、己の翼を引き裂いてしま
う。

風を受け、大空を舞うこの偉大なる翼は狭き地の底では邪魔でしかない。

龍は堕ちて翼を腕へと変える。

天へと目指すその脚はやがて千切去り、地を這いずるヒレとなる。

堕ちた龍は給仕から贅を受け取り、己の力として蓄えて地の底から抜け出し、再び空
を飛ぶことをいつも夢見る。

しかし一度龍が地の底から抜け出すと人は龍を悪魔と称し龍を再び封じる万人とな
る龍がいた。

給仕は主を変え、悪魔となった龍は再び地の底へと落とされてしまったのだ。

『消えては結び、帰るべきは何処へ……………』

だが悪魔となった龍は幻想の地にてその翼を再び羽ばたかせる夢を叶えた。

しかし幻想を喰らい、己を取り戻さんとする龍はまだ喰らい足りない。

これにより霊夢を捉えていた球はすり抜け、地面へと激突して消滅するが、当たった側の地面も大きく消滅していた。

魔理沙は持ち前のスピードでなんとか引き剥がし、パチュリーへと向かっていた球にぶつけて相殺する。

アリスとヤツカダキは、ツケヒバキ達を退避させてゴリアテ人形に自信の気配や魔力などを偽装したデコイを張り付ける。

「ゴっつあんでええええええええええええす!!!」

これにより霊力球がゴリアテ人形へと狙いを変えた為に被害は無かった。

ラージャン二頭はお互いの力を限界まで強化した一撃でこれを殴り飛ばし、残った最後の一発を相殺した。

古の姿を足り戻したガイアデルムはその絶大な力で幻想を喰い破ろうとする。

龍の帰るべき場所は何処へ……………

VS 幻想を喰らうガイアデルム 第三形態 その2

『断裂群島』『上空』

かなりきついわねこれ……………

私達はガイアデルムがついに飛んでしまったのもあり、空中戦を強いられてしまい、飛ぶことの出来ないモンスターがもはやダメージすら与えられなくなっていた。

「さすがに地上のモンスターが何かしら投げついたりしてダメージを与えることは……………出来なそうね。」

確かにモンスターが瓦礫等を投げつけた程度だとガイアデルムが発する妖力、魔力、霊力によって生成される防御結界を貫くことは出来ない。

「仕方ないわ、飛行可能なモンスターと私達で戦闘するしかないわ。」

それと……………レミイ、フラン、いい加減使うしかないんじゃないかしら?」

「……………そうね、メル・ゼナの消耗が激しすぎるから確実に勝負を決めたい時に使いた

かったのだけれど……………そうも言ってられ無いわね、覚悟決めるわよフラン！
メル・ゼナ！！

「……………キユオオオオオオオ！！」

フランとレミリアは己の命を賭ける覚悟を決めており、その場で二人寄り添った。

メル・ゼナはその二人の覚悟に答えるように咆哮を放ち、フランとレミリアの肩にその牙をたてて噛みつく。

「うぐっ!? あああああああ!!」

「まだ……………よ……………ぐっ……………限界……………ギリギリ……………まで……………あああああ
あああ!!」

二人は吸血の際に突き刺さった牙によるそのあまりの痛みと、メルゼナの牙から流れるキュリアの毒によってかなりの苦痛を味わっており、悲鳴を上げる。

「ちよつと!!」

霊夢はその二人の様子を見て思わず止めようとするが……………。

「邪魔を……………するな!!!」

「っ!!」

「これは……………私達の……………覚悟なのよ……………この吸血と……………共に……………メル・ゼナ

は……………私達が少しずつ与えていた……………ぐっ……………私達吸血鬼の血と……………それに含まれた妖力に……………完全に適合して……………私達と同じ吸血鬼となる……………」

「っ!!メル・ゼナを妖怪にするつもり!？」

「ええ……………これは……………この子も了承しているわ……………」

「正気なの!?!そんなことしたらあんた達は!」

「ええ……………大幅に力を失うわね……………でもそれがどうしたと言うのよ!それも言ってもらえない状況でしょうが!!」

「?!?がああああああ!?!」

「お姉様!メル・ゼナアアアアアア!!」

二人の悲鳴と共にメル・ゼナは吸血を終えて二人を放し、美鈴と咲夜が受けとる。

「お嬢様……………妹様……………よく……………頑張られましたね……………」

「言つとくけど……………私達はこの程度では死なないわよ。」

吸血鬼の再生能力……………舐めんじやないわよ。」

メル・ゼナは全身を丸め、翼によって体を覆い隠し、卵のような状態になる。

卵は空に浮きながら石のように色を灰色に変えて気配を失っていく。

しばらくたった後に卵はヒビが入り、底からガイアデルムの物を大きく上回る絶大な

妖気と共に黒い霧をヒビから噴出させる。

霧はやがて形を作り出し、黒き眷属となって卵の周囲を飛び回る。

「黒い……………キュリア？」

卵はやがて霧を全て出し切って地面へと落ちた。

黒い眷属達はやがて一つに集まって行き、一つの龍の姿を形作る。

その甲殻は黒く染まりつつも深紅の鱗と紅く発光する毛を持っており、その翼は七色の輝きを持って全員を照らしていた。

だがそこから照らされた光は決して聖なるものではなく、むしろ絶望を与える妖しい光であり、その妖気はレミリアとフランドールの妖気を足しても足りない程絶大な物となっていた。

「ふふふ……………私達の……………ほぼ全ての妖力と……………メル・ゼナ自身が妖怪となった時に……………元々大妖怪クラスの膨大な妖力を持って生まれるはずだったのね。

それらが全て合わさった結果……………大妖怪3人分の力を一度に持った究極の吸血鬼となったわけね……………」

「ちよつとまって、確かに量はガイアデルムよりも多いけどそれじゃ殆ど状況が……………」
「バカね……………別々の存在が持つのではなくて……………一つの存在が持つことが重要なのよ……………」

「さあ、刮目しなさい!!究極の吸血鬼!ガイアデルムのライバルでありこの地の新たな守護者の力を!!」

メル・ゼナ二頭はその虹色のフランドールを彷彿とさせる翼から大量の弾幕を発射する。

その一撃一撃がガイアデルムの発する力によって自動的に生成される結界を『破壊』し全ての分身がまるで『未来予知』でもしてるようにガイアデルムによる反撃を全て回避するか完璧にカウンターを合わせている。

「やはり二人の能力を若干引き継いでいるわね……………そういえばレミイ、フランの能力はガイアデルムには効かないのかしら？」

「ええ……………ぐつ、あの子曰く『目が硬すぎる上に大きくて握りつぶせない』だそうよ。」
「メル・ゼナはおそらくフランから引き継いだ能力を肉体の破壊までやれる程強く引き継いではないと思うわよ。」

「……………でしようね。」

「完全に引き継ぐのだとしたらあんたらを完全に消滅するまで吸血する必要があるわよ。」

とはいえ弱体化した能力でもガイアデルムの結界を壊すくらいは造作もない上に使える力がフランよりも弱いから握りつぶしたりとかも必要ない。

レミリアの運命を見る力も能力が弱まって精々が数秒先を見る程度になつてるのでしようけど代わりにあんたと違って常に発動しながら動ける程制約が無くなつてるわ。

VS 幻想を喰らうガイアデルム 第三形態 その4

〈断裂群島〉『上空』

メル・ゼナが妖怪となり、幻想の存在となった事でガイアデルムとの戦いを大きく有利に導いた。

だがガイアデルムは例え肉体を貫かれてもその傷を簡単に修復してしまうため致命傷をなかなか与えられずにいた。

「なんて回復速度してるのよ………体を貫いてもダメ………レーヴァテインで顔を切り裂いたのに致命傷にすらならない。」

「おそらく多くの妖怪から力を得た影響でしょうね、再生能力が高い妖怪は数多くいるもの。」

ガイアデルムは能力こそ得ては居ないがキュリアによって吸収させていた妖怪の殆どが再生能力が高いのもあり、その力が積もりに積もって瞬時に肉体を再生させていた。

その際に己の力を少し使うようだがどう見ても戦闘に支障が出る程ではなかった。

「だけど一番怖いのは人の肉体を得ることね、恐らくあの力の量だとまともな肉体にはならないでしょうけど人の形にまで肉体を締められたら洒落にならなくなるわよ……………」

そもそも今霊夢達がガイアデルムとまともに戦えている最大の理由が肉体が大きすぎてガイアデルムが攻撃を避けることが出来ないという点にある。

だからこそガイアデルムは防御にかなりの力を割いているのだがそれが人の形となつた場合下手したら攻撃がまともに当たらず、防御に回していた力を一気に反撃に回される危険性がある。

「……………幻想郷に來た妖怪の大半が何故人を模倣するのか……………ね」

そもそもの問題として妖怪とは人の恐怖から生まれ、人が理解できなかつた現象を己では抗うことの出来ない怪物としてその姿を捉えたのが始まりとなる。

それは獣を模していたり、己よりも圧倒的に大きな怪物という場合が多く、人の恐怖より産まれた妖怪はさらに恐怖を得ようと人を襲う者が大半となつた。

だがやがて人の恐怖はそれを消すために自分達を守ってくれる者、己を見守ってくれる超常の存在、『神』を想像し、それを崇めるようになった。

人の信じる力によつて生まれ、その存在を維持する事が出来る神は自身が力を振るうことは出来ずとも、人に恐怖を退ける力を与えることが出来た。

これにより人の恐怖より産まれた妖怪は人の恐怖を退ける力により退治される。やがてそれは霊力として人に根付いたのだ。

人よりも大きな妖怪は人の攻撃を避けることがほぼ出来ない。的が小さいから戦える人間に当てるのも困難となった。

妖怪は逆に人に対して脅威を覚えたのだ。

だが自分の体では大きく不利となってしまう。

ならどうするか。

妖怪はやがて人から隠れる為、もしくは人を摸倣するために人の形となるようになったのだ。

本体を圧縮し、人の形へと変じさせて化ける。

元々化けタヌキと呼ばれる妖怪の技だが、それを常に行ううちに完全な人としての形を得て幻想郷へと誘われたのだ。

大きな捕食者は小さな強者には勝てない。妖怪は人の恐怖を欲するが逆に人の恐怖を知っているのだ。

「だけどあそこまでの巨体で力もあるんじゃないや人ではどうにもならないわよ？」

「だいだらぼっちなんか良い例じゃない。」

「そうとも言えないわ。」

ねえ霊夢、あの世界のモンスターの手物……読んだことはない？」

「無いわね……魔理沙が見せてきた事はあるけど字が読めないもの。」

「絵を見たことはあるのね……」

「ええ……でもそれが……ちよつと待ちなさい。」

「あの絵がなんだってんだ？」

「魔理沙も魔法使い、研究者の端くれなら気付きなさいよ。」

「霊夢は分かっただみたいね。」

「あんな人が敵うはずの無い絶対強者が闊歩する世界……じゃあなんであのガイアデルムの構造すら詳しくすぎる程に書かれてたの……あんな細かい体内に関する情報なんて一度殺してもしないと……まさか!!」

「気付いたようね、あの世界のモンスターは全て人によって狩られた事がある種ばかりなのよ。」

「それが例え超巨大な古龍であっても。」

「なっ!?ちよつとまで、あそこは確か魔力とか霊力とか一切無い世界なんだろう!」

「ええ……だからこそおかしいのよ。」

体は小さくなったがその力は全く変わらない。

VS 幻想を喰らうガイアデルム 最終形態

く断裂群島く『上空』

「ギャガガガガガガガガガッ!!!」

深淵の悪魔は元の姿を取り戻し、幻想へと対抗するため己を討つた人としての形を取る。

マフラーのように背中に伸びる腕からは混沌とした力による翼が生成されており、羽ばたく度に龍風圧が発生している。

そのとてつもなく巨大な肉体を人間サイズにまで圧縮した影響によってガイアデルムの能力はさらに上昇していた。

あの巨体を支える程の力を持つ腕や翼脚の力を一対の腕に圧縮したとなるとその筋力は鬼を遥かに越えた物となり、様々所を支えねばならず力を割いていた分を全て攻撃

に使えるとなるとかなりの脅威だ。

第三形態では、一番の武器であった翼脚を飛行に用いていたのもあり、物理的な攻撃がしにくかったが、今回は余計な筋力は全て腕に集中させて飛行用の翼腕への筋力は最低限となっている。

肉体が小さい分攻撃を当てるのが難しくなってしまったが、逆に相手も当てにくくなり、隙がお互いに生まれやすくなる。

ガイアデルムは片手で今の形態での全身よりも長い大太刀を引き抜いて構える。

ハンター達はその重さ故に両手で構えるのだがガイアデルムからすればこの程度であれば重いのうちに入らないようだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

次の瞬間、ガイアデルムが全力の一撃をメル・ゼナへと叩き込む

「きゅおっ!」

その一撃を己の尻尾を持って防ぐメル・ゼナ立ったが、メル・ゼナの尻尾から生成された禁忌『レーヴアテイン』が破壊されていた。

そう、メル・ゼナの龍属性エネルギーの塊をただ力任せによる一撃で破壊したのだ。

「ガギャツ?」

だがガイアデルムうまく思うように動けなかったのか首を傾げていた。

それもその筈だ。ガイアデルムがやつているのはその翼脚のサポート程度として使っていた腕を翼脚と同じように扱い、さらに運動性を増した肉体をいきなり扱おうとしているのだ、思ったように動けるわけがない。

だがガイアデルムは己を一度殺した人間の動きをよく覚えていた。

あの人間とは思えない動き、脆弱な肉体なのにあんな生物離れした動きが出来るのがどうしても疑問だったのだが、ガイアデルムは逆に疑問を増やしたのだった。

メル・ゼナは肉体に慣れていない今がチャンスと思い、4体に分身して畳み掛ける。

4体の龍と絶大な力を持った龍の化身が周囲を黒い暴風で吹き飛ばしながらお互いに死力を尽くして激戦を繰り広げる。

龍風圧がお互いから発生しており、霊夢達はこの中で戦闘しようとするれば纏めて吹き飛ばされるのがオチと理解しており、自慢の弾幕も下手すればメル・ゼナの邪魔となってしまうために撃てなくなっていた。

さらに威力の弱い通常弾幕は狙いこそ付けやすいが龍風圧によって全て弾かれる。

「どうするのよ？ 私達の霊力とかとメル・ゼナに吸わせる？」

「止めときなさい。」

今のメル・ゼナは純粋にレミイ達の力のみを吸収し続けてあの子達の血を直接吸収し

たことで吸血鬼としての面が強くなってるわ。

ガイアデルムは半妖となっていたからこんな馬鹿げた吸収を可能としたけど完全な妖怪となったメル・ゼナにそんな事すればキャパシティが足りなくなるわ。」

これは推測になるけど力に耐えきれなくなるわね。」

ガイアデルムは半分が龍として、生物としての性質を持つている為、吸収した力を新しく生成する器官や溜め込む器官を産み出して力に耐えることが出来た。

霊力を吸収した辺りから完全な幻想生物となり、肉体による呪縛から半分解放されており、固定された姿を取る必要が無くなったのだ。

メル・ゼナは吸血鬼に近い生体を持っていた事もあり、吸血鬼の力との親和性が特に強く、少量ずつその力を取り込むことにより徐々にその力を受け入れる事に特化した肉体の器へと進化させており、龍としての力のほぼ全てを角に集約させて残りの肉体へと完全に吸血鬼の力を侵食させていた。

だからこそ肉体は他の魔力や霊力といった異物を拒む完全な妖怪としての肉体へと変貌し、孵化する際に肉体全てを黒いキュリアへと変化させたように肉体としての器をほぼ捨て去っていた。

こうなってしまうと現実世界での顕現はほぼ不可能となり、非常識を常識に、空想の物を現実にする幻想郷の結界に引っ掛かってしまうのだ。

完全な人の形を得ることが出来ればその限りではないのだがメル・ゼナは龍の力を全て角に集約させた事もあり、龍としての象徴とも言える角を消すことは出来ない。

メル・ゼナもガイアデルムも全てを捨て去る覚悟で己の肉体を捨て、戦っているのだ。長きに渡りガイアデルムの天敵としてその地上への進出を防いだメル・ゼナ、メル・ゼナを唯一の敵として長きに渡って地上を目指して上り続けたガイアデルム。

二頭の龍は完全な決着を付けるために死力を尽くす。

メル・ゼナは己の大切な物を守る為、ガイアデルムは己から奪われた物を奪い返し、再び頂点へと君臨し大空を羽ばたく為。

分かり合えるはずなのにそれが出来ない。

龍の世界は弱肉強食、勝者にこそ自由がある。

VS 幻想を喰らうガイアデルム 最終形態 その2

「断裂群島」『上空』

「ギャガガガガガガガガガガガッ!!!」

狂ったような、それでいて嘲笑うかのような不快な笑い声が響き、音を置き去りにするかの如き速さでガイアデルムは接近する。

肉体が小さくなり飛行の際にかかる空気抵抗が大幅に減ったのもあり、ガイアデルムはとてつもない速度での飛行を可能としていた。

すれ違う度にメル・ゼナは切り裂かれるが、切られた肉体はキュリアとなった後に元に戻っているため一度も直撃していないようだ。

さらに尻尾で迎撃して刃を弾いたりもしているためガイアデルムの拙い太刀筋ではあまり傷を付けられそうに無かった。

だがガイアデルムは段々己を殺した者の動きを思い出しているのか両手で構え始め、どんどん動きが変化していく。

メル・ゼナは巨体を生かして翼を目眩ましに大量の弾幕を浴びせながら反撃をしたり

メル・ゼナもハンターという化物の脅威は知っていた。何よりも恐ろしいのがその小回りの良さだ。

ハンターは基本的にモンスターの攻撃を避けるか防ぐ、カウンターを合わせるなどして攻撃しており、モンスター側の攻撃が直撃するなんてのはたまにしかない。

確かにハンターを殺せるモンスターは多数存在する。

だがハンターを殺せばさらに強いハンターが送られてやがてモンスターは殺される。

何も被害を出さないようならモンスターは放置されるが人を襲うモンスター等は皆狩猟対象となるのだ。

そして真に恐ろしいのはハンターの中でも英雄とされるハンター、『我が団』のハンター、『導きの青い星』、『猛き炎』、何人もいるがこれらはミラボレアなどの禁忌とされるモンスターすら狩猟対象にするようなキチガイである。

彼らを前にしたモンスターは逃げることは出来ない、ただ狩られるのみなのだ。

だからこそハンターは狩人とされるのだ。

狩猟を生業とすし、獲物を確実に狩る絶対強者。

もはや人間を止めた化物達である。

だがハンターにモンスターの圧倒的な身体能力が加わればどうだろう。

斬り飛ばされた尻尾の痛みによりメル・ゼナは一度落ちる。

だが空中ですぐに立て直し、地面に叩きつけられるのは回避した。

やがて斬り飛ばされた尻尾が黒いキュリアとなって切断面に張り付き、新たな尻尾として再生する。

追撃するために突撃してきたガイアデルムを龍の力を集中させた弾幕によつて突き放し、一度メル・ゼナは距離を取った。

お互いに龍の力を弱点とし、龍の力を操るのにも長けている為に能力を封印されかねない量の龍雷を受けてもそれを大気中へと流して能力封印はなんとか防いでいた。

だが弱点である以上肉体への負担は計り知れない。

ガイアデルムは殆ど影響がないように見えてはいるが実際は骨が数本折れており、妖力、魔力、霊力によつて無理矢理固定して再生をしながら戦っているのだ。

メル・ゼナはいくら再生するとは言え精神への負担が大きい。

肉体としての器を大半捨て去ったメル・ゼナに取つて精神への消耗は致命傷に等しい。

その精神こそがメル・ゼナの本体とも言えるからだ。

龍は己の弱さを悟られぬように力を示す。

相手に負けるわけにはいかないのだ。

賢者の目覚め（吐血）

「マヨヒガ」『寢室』

意識がまだ朦朧とする中、私はまどろみから目を覚ます。

断裂群島を幻想郷に無理矢理ねじ込むのにはかなり大きな代償が必要になり、生命活動に最低限必要な力のみを残して眠りに就いていた。

目を完全に開いた瞬間映ったのはかなりボロボロになってしまった自分の寢室であつた。

「ッ!!」

思わず私は飛び起きる。

マヨヒガがここまでボロボロになると言うことはこの地を時間の経過による劣化などから防ぎ、物理的な干渉を弾く保存結界が破壊されたか、それを制御することが出来る者が居なくなつた、もしくは制御出来る状態では無くなつたということである。

この結界は紫が眠りに就いていた間は藍に任せていた。
つまりは……………。

「藍・藍——無事なら返事をしなさい！」

声を上げて藍を呼ぶが、紫の声が響くだけで藍の声は帰ってこない。

「スキマは……………駄目ね、まだ使える程回復出来てない。」

紫はいつものようにスキマを開きそれを用いて藍を探そうとするが目覚めたばかりなのもあり、スキマを使える程妖力に余裕等無かった。

その為全身が軋むがその苦痛を耐えてマヨヒガを歩きながら藍を探そうとするのだった。

ボキボキグキゴキベキイ!?

「ほ……………骨が……………」

長い間眠り続けていた代償は割と洒落にならなかつた。

紫はあまり使いたくはなかつたが杖を使って体を支え、まるで老人のような動きでマヨヒガを歩く。

「どこもかしこもボロボロになっているわね……………何かの余波なのでしょうね。」

少なくともガイアデルムは幻想郷に入ってきているでしょうけど今はどうなっているか……………」

「キューー!! キューー!!」

後ろから聞き覚えのある鳴き声が聞こえる……だが同時に嫌な予感がした。

紫は振り返ろうとするが杖で支えているこの体では素早く動くことが出来ず、突撃してきたナニカによって背骨を強打する。

「ぎゃあああああああああああああああああ!!?!?!?!」

「きゅ?」

元凶となつた鳴き声の主、生まれたてのゴア・マガラは首を傾げるのみだった。

結局ゴア・マガラにヤゴコロ製の湿布を持つてきてもらい、背中に貼つて貰つた紫は

「ゴア・マガラを頭に乘せて歩く。」

『にしても相変わらず変なマスコットが描かれてるわね……』

そこには永琳の帽子をかぶつた変なマスコットが描かれていた。

本人曰くヤゴコロ先生らしい。

『どうでもいいわね、そんな事より藍を探さないと。』

「ゴア・マガラ、藍の場所を知らないかしら?」

「きゅ! きゅきゅ!!! (ペシペシ)」

ギシギシ

ゴア・マガラが何かを伝えたいのは分かるのだがその翼脚で今頭をペシペシされると背骨が辛いからやめて欲しい紫だったが、まだ赤子のようなゴア・マガラを叱る気にはなれなかった。

ゴア・マガラの案内によりマヨヒガの藍の部屋に力を使い果たした藍が居るのを見つけた。

「藍……………全身に酷い裂傷……………治ってきてはいるけど一度あの永琳に診察して貰わないと不味いわね……………とはいえ傷は塞がっているみたいだから自力での再生も悪くはないけど再生までどれだけかかるか……………一度起こさないと。」

そして紫はおもむろに藍のタンスの下着が入った引き出しを取り外し、その奥に隠してある藍も知らない秘密の棚から藍のお仕置き用のグッズを取り出す。

ちよくちよく蠟燭やいばらの鞭等も見えたが気のせいだと思いたかった。

紫は取り出したグッズから何故か内側から膨れ上がった缶詰を取り出す。

ゴア・マガラは触角によつて中身が空いていなくてもそのとてつもない臭気を内に秘めたその缶詰から逃げる為に外に出ていくのだった。

「あら……………簡単には気が付かれたわね。」

部屋に投げ入れた後に結界で隔離してしばらく放置する。
しばらくした後には藍の部屋から悲鳴が響く

「とりあえず藍の無事も確認出来たわね。

それにスキマを開く程度には力を回復したわね……………」

これによって現状の把握が出来るが一体どうなっているか検討も付かない。

「胃薬ヨシッ！いざ……………グフツ（ダラダラダラダラ）」

紫は思わず吐血していた。

いくらなんでも想定外過ぎたからだ。

「ガイアデルムが妖力以外に魔力と霊力を持つているのはまだ理解出来なくはないけど完全に妖怪になって幻想郷に受け入れられてる状態じゃない……………どうも様子から会話は難しそうだけれど。

!?
だけドメル・ゼナまで妖怪……………それも吸血鬼になるとか聞いてないんですけど

あいつら何してくれてんのよ!?

とはいえまだ戦闘が続いてる上にお互いの再生能力が高過ぎて勝負が付かないみた

いね……それにガイアデルムのあの動き………」

紫はハンターの動きを真似て攻撃するガイアデルムを見てひとつの悪戯のような仕返しを思い付いた。

「てゐ!!」

懐からスタンガンを起動して取り出しスキマに勢いよく突っ込む。

『ギャガガガガガガガガガガガッ?!?!?』

ガイアデルムの肉質は確かに龍属性が一番の弱点だが、雷も結構致命的な弱点でもあった。

更に状態異常の耐性もあまり強くなく、完全に不意を突いた上にゼロ距離なので邪魔も入らない。

そしてハンターが一番の天敵は………」

大型モンスターなどではなく小型モンスターによる妨害なのである。

「はえ？うん、まだ三番は使っていないよ？」

「何時でも発射出来る準備しなさい。」

にとりは了承するが最大の障害もあり、不安も口にする。

「わ、わかった。でもあの黒い風をどうにかしないと厳しいよ？」

「そつちは大丈夫、もう少ししたら収まるわ。」

「いつもの勘かい？まあ、いいけど。」

伝令!!!

にとりが大声を出して伝令を召集する。

そこには全身をきゆうりで覆ったきゆうりアーマーの河童が現れた。

「きゆうりっ!!」

「撃竜槍ここに持ってきて！」

「きゆうり!!」

「さて、ナルハタタヒメは何時でも落雷を落とせるようにしといて頂戴。」

「キユオオオオオオ!!!」

霊夢は次々と全員へと指示を出して作戦を練っていく。

魔理沙達魔法使い部隊は巨大八卦炉の準備を、ツケヒバキとヤツカダキは何時でも糸

を吐き出す準備。

だがメル・ゼナがガイアデルムの居合に直撃し、墜落してしまう。
「メル・ゼナ!!」

ガイアデルムは止めを刺すためにメル・ゼナの元へと向かい……………。
「てゐ!!」

『ギャガガガガガガガガガガッ?!?!?!?』

凄まじい電気を帯びてその場で麻痺する。

『つてあのスキマは!!』

「紫っ!?!」

「霊夢!!今よ!」

「っ!!『夢想封印』!!」

『『ルーチェ』!!!』

『『ダブルスパーク』!!』

「撃瓜槍三番!うてえ!!」

「『超大型八卦炉!魔力充填完了!発動!!』」

『『パゼストバイワイバーン!!』』

全てを調停する裁きの霊力弾が、全ての属性を内包した破滅の塊が、ドSの加虐性が存分に乘った二つのビームが、とてつもなく巨大なきゆうりが、三人の魔法使いの魔力

ほぼ全てを内包した魔力砲が、己を炎の竜へと変えて自分の身を焦がしながら突っ込むもこたんが麻痺して落下しているガイアデルムを更に上から追撃し、とてつもない加速を持って地面に叩きつけられる。

叩きつけられた地面にはヤツカダキとツケヒバキ達による大量の糸が設置されており、これによってガイアデルムは身動きが取れなくなる。

そこへ落雷のエネルギーを喰らい、番と力をあわせて雫が落とされ、投げられた巨大な岩石を砕き、大量の土砂がガイアデルムを潰し、雫による大爆発で大ダメージを受ける。

これにエスピナスの溜め激毒痺炎プレスを叩きつけられ、二頭の燃える竜による爆炎が、生命を吸い尽くす命の雷が……………

ガイアデルムはこれらの攻撃な直撃せざるを得ない状況となり、直撃する。

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ?!?!?!」

ガイアデルムはそのあまりのダメージに悲鳴を上げるが、まだ倒れる気配がない。

ガイアデルムは体の一部を本体の巨体な変化させ、糸からの脱出しようともがいてい

そこへ現れたのは全身に黒いオーラを纏うメル・ゼナの姿だった。

メル・ゼナはそのボロボロの翼を武器に戦う。

「ギャガアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ガイアデルムはその翼脚でつかんだハンマーでメル・ゼナに殴りかかる。

「キュウヴ!? オオオオオオ!!」

メル・ゼナは頭部に直撃して怯む。

だがメル・ゼナもその翼をガイアデルムに叩きつけてボロボロの甲殻を更に破壊していく。

「ギャガつ!? ガアアアアアアアアアアアア!!」

ガイアデルムも負けじとハンマーでメル・ゼナを殴りその頭部に亀裂を入れさせる。

「ギツ!? ギュアアアアア!!」

そこからメル・ゼナの血が流れ出す。メル・ゼナは気にしていないようにその翼の鉤爪でガイアデルムの露出した肉を切り裂く。

「ガアアアアアア!!」

ガイアデルムは肉に鉤爪を突き刺された後に引き裂かれ、その痛みに苦しむ。メル・ゼナとガイアデルムが殴りあっているのだ。

「なんで………避けないのよ。」

「避けるだけの力すら残ってないのか………あるいは意地か。」
「……………恐らくそれは後者でしょうね。」

「ガアアアアアア!!!」

ガイアデルムのハンマーがメル・ゼナの胸部を殴打する。

「ガキヤ!？」

ついにメル・ゼナの頭部から生えていた角もぼつきりと折れてしまった。

だがメル・ゼナも負けじと美鈴の放つ拳ののようにその翼を使って突きを繰り出す。

ガイアデルムとメル・ゼナ、二頭の龍は避けるつもりなど無いと言わんばかりに互いの攻撃をノーガードで受け続ける。

古龍にだって意地はある。

自然現象の化身とも言えるその肉体にはこれと言った天敵がほぼ存在しない。

だからこそ生態系の絶対強者となっており、それを脅かす者は全力をもつて叩き潰す。

だかお互いに避ければ体制を崩し、そのままトドメを刺されかねない程衰弱しており、先に力尽きる者が敗者となるのはわかりきっていた。

メル・ゼナは確かに霊夢達の手を借りれば今の状態のガイアデルムを簡単に倒せるの

アアアアアアアアアア!!!」

ガイアデルムはその千切れかけた翼脚に持ったハンマーを全力で叩きつける。同時なメル・ゼナもその翼膜すらない翼を全力で叩きつけた。

「ギャガ………アアアアア………」

ガイアデルムは仰向けに倒れ、その翼脚で空を掴むような動作を見せる。だが無惨にも翼脚は千切れ落ちてガイアデルムも力尽きた。

そしてメル・ゼナも目の紅い光を失い、その場に倒れたのだった。

決着

「断裂群島」『対巨龍迎撃用決戦機動要塞キューカップ内部』

勝負が付き、二頭の龍による決着が付く、勝敗としてはギリギリメル・ゼナの勝ちと言えるが1vs1であれば確実に負けていただろう。

それほどまでに今回のガイアデルムが吸収した力は大きく、その危険度は禁忌に届きかけていた。

だがメル・ゼナと幻想郷に住む人々、モンスターによつてその脅威はついに倒れたのであった。

「ギャガ……………ガ……………アアアアアア……………」

ガイアデルムは朦朧とする意識の中で満足そうな声を出す。

永琳がメル・ゼナの治療をしている間に霊夢は倒れたガイアデルムの元へと向かつて問いかける。

「ねえ……………あんたはもしかしてもう一度空を飛びたかったの？」

地上をずっと目指していたのもその為？」

「ガイアアア……」

ガイアデルムはその言葉に肯定するように頷く。

幻想郷に無理矢理入ってきたのも自分が目覚めた際に見つけたスキマから青空が見えたことがきっかけだ。

さらにそのスキマが広げられる事に気付き、自分もここを通れば昔見たあの青空の下へまた戻れるのではないかと考えたからだ。

ガイアデルムは八雲紫達による妨害で通れなくなっても諦めず、再び地上へと出るために全力を出していた。

だが力が足りないガイアデルムは足りない力を補うためにキュリアを幻想郷へと飛ばして力を回収したのだ。

これが今回の異変の始まりだ。

ガイアデルムは己に残った僅かな魔力によって文字を生み出してそれを伝える。

魔法使いの魔力を取り込むようになってから同時に魔法使いの知識も流れ込んでいた。

これは魔法書などから得られる魔力も含んでいた為、知識に宿る魔力も含めて吸収していたのだ。

これによりガイアデルムは言語を理解し、魔法を理解して操る事を可能としていた。そう、ガイアデルムが魔法結界等を使えた理由もこれである。

「そう……でも、それならそれを私達に伝えれば良かったじゃない。」

確かに私達も先手を取るために攻撃したけど文字でそうやって伝えられるなら紫達にも伝えられるじゃない。」

ガイアデルムがそうしなかったのはスキマの先にいた人物を敵だと思っていたのもある。

ガイアデルムは地上に出ようとするといつも邪魔をされていた。メル・ゼナによって落とされ、人間によって落とされ、常に妨害されていたのだ。

途中から自分達を守るための行動だと言うのには気付いていた。

魔力から流れ込んだ人間の知識、霊力に込められた人の恐怖、妖力から流れ込むこの世界の仕組み。

だがガイアデルムは途中からメル・ゼナとの決着を優先したのだ。

『ソレハ……ヤツ……モ……オナジハズ……ワタシニモ……イジガアツタ』

ガイアデルムの意識は更に朦朧とする。

そして霊夢はガイアデルムから感じる気配がどんどん消えかけているのに気付く。

「永琳、こいつの治療もやるわよ。」

そう言い、霊夢は己に残った僅かな霊力をガイアデルムへと注ぎ始めた。

「霊夢つたら正気なの？」

「ええ、正気よ。」

「忘れたの？幻想郷は……」

「全てを受け入れる、残酷なまでにね……」

そして背後からここのしばらく聞けてなかった胡散臭い声がする。

「紫……もう大丈夫なの？」

「そんな訳無いでしょう、ずっと寝たきりだったのだから体バキバキよ。」

さつきゴア・マガラにじゃれつかれてぎっくり腰になりかけたわよ……」

「……相変わらず最近のあんたは苦労してるわね。」

「ええ……いやほんとに……」

すると紫はガイアデルムへと妖力を注ぐ。

「私も正直少し悩んだわよ。」

私の役目は幻想郷を守ること、当時はガイアデルムによる混乱で幻想郷が滅ぶと考え

ていたもの。

でも実際はただ青空のある地上に出たかっただけとはね。」

「誰かさんが起こしたアホな勘違いの異変と似てるわよねえ……………」

霊夢はニヤニヤと笑いながら輝夜や永琳を見る。

「な、なによ!?!」

「ああ……………そう言われてしまうと返す言葉もありません。

追手が来ないので追手対策で幻想郷を混乱させる異変起こしましたし。」

「まあ兎に角こじじやバカやって異変起こしても私とかがそれを解決するの。

割としよつちゆう異変起きるんだもの、困ったものよね。」

『ソレニシテハ……………タノシソウナヒヨウジヨウダガ?』

「そう?」

そうかもね、少なくとも退屈はしないわ。

それにね、幻想郷では異変が終わった後は宴を開いて一緒にお酒を飲んだりして忘れるのよ。

そして受け入れる、それは例えあんたでもね。」

『ソウカ……………』

ナア……………マタワタシハ……………コノソラヲ……………トンデイイノカ?』

「ええ、この空は……自由よ。」

『ソウカ……ソウカ……』

ガイアデルムの仮面から血ではなく涙と思われる物が溢れる。

『ワタシハ……ヤットモドレタノダナ……』

ガイアデルムの体へと黒いキュリアが一匹やつてきた。

『オマエトコレイジョウタタカウリユウハナイ……カ』

「ギャガガガガガガガガッ!!!……ギャガガガガ!!」

ガイアデルムは笑う。

ようやく取り戻せたのだと。

龍の宴

（博霊神社）

あの戦いの決着から数日がたった。

実を言うと閻魔達にも今回の勝負を手伝ってもらう予定だったのだが想定外にも程がある事態に遭っていた為に来れなかったそうさ。

その事態というのが……………

『私達が向かおうとしたら突然白髪で紅い瞳の白いドレスを着た少女が現れて魂を3つ復活させてこちらに襲いかかせてきたんです。』

そしてその魂から復活させられたのというのが今すぐそこに並んで閻魔から説教を受けて……………

全身紫色で目が飛び出しており、結構鞭のように伸びる舌を持ち、姿を透明にする力

メレオン？みたいな能力を持っており、体から霧を発生させたり激毒というエスピナスと同じような毒を扱う古龍。

『霞龍オオナズチ』

全身が鋼鉄で出来てるかのような金属質な甲殻、鱗におおわれており、暴風の力を操り天候を嵐に変えたり龍風圧を操る古龍。

『鋼龍クシャルダオラ』

全身が赤色の甲殻や鱗、体毛に覆われており、獅子のような顔に加えて立派なたてがみを持ち、近くにいるだけで熱い程の高熱を帯び、炎や体から出る粉塵を爆発させる力を持つ古龍。

『炎王龍テオ・テスカトル』

この三体によって今閻魔の所の裁判所はズタボロ、とりあえずこいつらをあそこに置いてまた壊されると洒落にならないそうで今はこの神社で説教をしているそうだ。

三匹とも可愛そうにズタボロな上に無理矢理正座のような立ち方をさせられて軽く涙が浮かんでいる。

……………四本足の龍にその姿勢はやっぱり無理があるわよ。

とりあえずガイアデルムの一件の決着としてはガイアデルムは幻想郷に受け入れら

れる事になった。

とはいえ力を付けすぎていた為に力を7割程減らして受け入れる形にしたそうで終わった後ガイアデルムは存在に必要な力が減りすぎて縮んでいた。

顔に關してもかなりげっすりした様子だった為に相当力を封じ込められたのだろう。

だが縮んだとはいえ普通にメル・ゼナと同じくらいの大きさはあるのでめちやくちやデカイ。

それと飛び上がった時にどうやらその様子を近くまで来ていた野次馬の人間にみられていた為に荒ぶる龍の神と恐れられて人里に伝わり、今回の異変は龍神の怒りとして逆に信仰を得てしまっていた。

とりあえず今は博霊神社で身柄を預かっており、アルトウーラと合わせると兎に角デカ過ぎて場所を取る。

パチュリーが人化する魔法を開発中みたいだけどもそもそも完全な幻想となった存在でない人と人にはなれないらしく、アルトウーラは諦めるか幻想になるまで待つしか無いとの事だ。

とはいえ……………

「人里から……までの人数が参拝にやってくるとは思わなかった……………」

「龍神様のお恵みに感謝致します……………」。

「ありがたやーありがたやー。」

「わー！カツコいいよ母ちゃんー！」

「（こらこら、龍神様の前ですよ？）」

「グル……………」

一応幻想郷を作る時に関わった龍神とはなんも関係性無いんだけどなあ……………。

ついでに紫も口から血を流しながら龍神へと相談した所別に問題無いとの事だった。

ただ線引きはちゃんとして欲しいとの事なのでガイアデルムは元々幻想郷の地に幻想郷となる前から眠っていた土地神という事にしてあり、長い年月がたつて完全に忘れ去られ、龍の加護によって生まれる肥沃な土地の恩恵を忘れたが為に荒ぶった。

というのが今回の表向きの結末となった。

そんでアルトウーラに関しては荒ぶった龍の怒りを納めるために使わされた幻想の龍神の使いという扱いになっており、元々神々しい見た目していたのもあつてこの二頭の龍が博霊神社の二大龍神として祀られる事になった。

うちの神様もうどっか行って信仰もそもそも無かつたしまあいいか。

とりあえずお賽銭はかなり入るようになったので生活がかなり安定するようになったのが唯一の救いだつた。

守谷の連中がまた喧嘩を仕掛けてこないかがとりあえず心配だけど今回の異変の宴会はとりあえず断裂群島でやるということに決定していた。

まあ理由としては……………

「向こうの世界のモンスターが多すぎて場所が……………」

と紫も嘆いていたからである。

まあ博霊神社ですらかなり狭いので私達としてもそうするしかないとは思っていた。

ガイアデルムはとりあえず裏山に自分が住み着ける程度の巣穴を掘って生活しており、本人というか本龍曰く

『ズットナラクニイタカラダトオモウケドクライトコノガオチツク』

という事らしい。

今は散歩ついで空を飛び回って神社で休憩してたら参拝客に捕まって拝まれている感じだ。

とりあえずこいつらを宴会で連れていくのは良いけど酒を飲ませて暴れないかが心配なんだよなあ……………

この前勇儀がヌシ・アオアシラに蜂蜜酒を飲ませたらゴロゴロしまくって周囲の物がまとめてその体重で潰れたらしい……………

だけど地底のやつら曰く……………

『かわいいからヨシツ！壊れたもんは後でまた作れば良い』
と言っていた。

……………想像したら確かにかわいいわね。

まあそんなこんなで宴会の準備を進めながら新しい生活を送っていた霊夢だった。

そして夕方頃、説教によって軽く気絶した三頭は終わったと同時にドミノ式で倒れてしばらく動けなかったようだ。

三頭はかなりげっそりしていた。

て暴れてしまったモンスターを含めるとかなりの量がこちらに迷い込んでしまっていた。

ただ勇儀の計らいによりそれらのモンスター達は地底組と建築作業をやるようになっていた。

幽香によつてボコされたモンスター組に関しては元々凶暴なやつもいたのだが人の形をしている幽香によつて恐怖を植え付けられたせいかその凶暴性も鳴りを潜めており、すっかりおとなしくなつていたので簡単に言うことを聞いてくれていた。

特にオサイズチ、ドスフロギイ、ドスバギイの三体に関しては群れの子供も2頭ずつ雄雌そろつて来ていたというのもあり、この子供達の保護と仕事中は面倒を見るという条件で快諾しているのもありかなり積極的に仕事をしている。

オサイズチは尻尾に斧を付けて樹木の伐採、ドスフロギイとドスバギイは運搬を担当し、無茶をして働くバカにはドスバギイが睡眠液をぶっかける手筈となつている。

セルレギオスは全身の刃鱗を剥ぎ取られていたのもあり、まだ回復しきつておらず、空路での運搬を担当していた。

泥んこ組に関しては全身の泥を落として綺麗にした上で作業を手伝つて貰つており、斧で半分くらい亀裂が入ればボルボロスの突進でへし折れるのもあつてボルボロスはい伐採組、オロミドロはその尻尾の長さで扱いを見込み、その尻尾に鬼を乗せて会場の設

置をしている。

ジュラトドスは地面の上でも普通に活動できる為に運搬組になった。

イソネミクニ達人魚組についても水の中で生活する妖怪を宴会に誘うために海の上での宴会会場設置を手伝っていた。

さらにゴシヤハギは手に氷の刃等を作れる能力を買われて建築組で作業をしている。

他にも人里の方を襲っていたモンスターでロアルドロスも来ており、そいつは群れのルドロスと協力して水辺での作業をやっていた。

更にそのスポンジ状のたてがみをかなり綺麗にした上で飲み水をたつぷりと染み込ませ、ちよつとしたウオーターサーバーになっていた。

とはいえ今回の異変の影響もあつて境界がかなり不安定らしく、その後もバゼルギウスが乱入してきて勇儀達にしばかれたりもしていた。

結果としては赤熱化しても問題が少ない海上での作業をするように命じられて澁々手伝っていた。

他にも飯の匂いに釣られてアンジャナフが来ており、そっちはご飯をあげながら仕事をさせて教育した所あつさり手懐けられた。どうやら飢餓寸前だったらしく食事をくれたことに恩を感じているようだ。

まあ無理矢理押さえつけられて喰わされていたが。

さらにラングロトラ、ウルクススも人里の襲撃に加わっていたりしていたが今では人里のマスコットとして受けており、こちらの作業組には組み込めなかった。

バカルテットも途中でさらにトビカガチと何故かベリオロスを舎弟にしていたチルノ達によつて手伝おうとしに来ていたが普通に邪魔だったので追い出されていた。

それ以外にも地霊殿にフルフルがペットとして飼われたりもしていたがこれは皆スルーしていた。

流石に見た目が受け付けなかったらしい。

ちなみにダイミヨウザザミは見た目が縁起良さそうなので置物のように鎮座する席を作られてそこで鎮座していた。

無論食べられそうになったようだが食べようとしたバカはドスバギイによつて強制睡眠させられていた。

モンスター達はすっかり幻想郷に馴染んでいったのである。

まあ殆どが地底の建築作業用になつてはいたが地底も鬼によつて家が壊れるのが日常茶飯事な為に仕事は絶えなかつたらしい。

宴会の準備は着々と進んでおり、スキマ妖怪ごと紫も招待状を各所に送っていた。

メル・ゼナはあの戦いの後まだ回復しきつておらず、肉体を一部だけ戻し、チビキヤラとなって生活しているのもあってフランにずっと抱かれながら生活する羽目になっていた。

キュリアの大半を肉体に戻すことが出来ない程力を使いきってしまったらしい。逆にガイアデルムは信仰を得たのもあり、どんどん回復していると知ったメル・ゼナはちよつと悔しそうな顔をしていたのもあって可愛かったらしい。

さらに地底からガランゴルムやラージャンの協力によつて超巨大な酒樽が持ち込まれようとしており、モンスター達にすら酒を飲ませる気満々の鬼によつて宴会が凄まじい事になるのが確定したのはこの後日の話。

幻想郷最大の宴会まで後少し。

「……………スキマ貸して?」

「……………そういうことね。」

何をしたいのかを悟った紫は騒いでるバカ全員にの後ろに対してスキマを開き、その入口をメル・ゼナの前に設置する。

メル・ゼナはまだ肉体に戻れない黒キュリアを大量にスキマに投入し、バカ全員の背後からキュリアが現れる。

そして……………

「……………ぎゃあああああああああああああああああ
!?!?!?!?!?」

全員がキュリアによってぶっ倒れるまで精気を吸い尽くされて強制的に静かにされていた。

なお一部の友好的な睡眠属性モンスターによってバカ共の一部は眠らされていたそうだ。

精気を吸い尽くしたキュリアが戻ってきたメル・ゼナはそれを肉体に戻し、レミリアが抱き抱えられるサイズを何とか脱出する。

「とはいえまだやっぱり最初見たあの姿よりかなり小さいのは変わらないわね。

それだけ妖怪として得た力が膨大過ぎたのかしら？」

「私からすればただでさえ古龍ってだけで厄介すぎるのに吸血鬼となつてとてつもない再生能力を得て力も凄まじいくらいに増幅されている時点でもう相手にしたくない上に対処方法がまともな思い付かないのだけれど？」

「まあそこはどうしようもないわね、ハッキリ言つてガイアデルムみたいに物量で無理矢理攻めきるくらいしか思い付かないわよ。」

「やっぱりそうよねえ……」

メル・ゼナはガイアデルムとの決戦の光景を思い出していたのか苦い顔をしていた。

「はあ、とりあえず悩んでても仕方ないわね。」

「まあ兎に角これで異変も終わりよ乾杯!!」

「[[[[[[乾杯!!]]]]]]」

メル・ゼナはその前足を器用に使いこなし、赤ワインを入ったグラスを持ち、とても優雅に飲む姿が見受けられた。

さらにその姿を後ろからかりすま帳というノートにメモし、まるで不審者のような雰囲気となつているレミリアを他所に、メル・ゼナの周囲にはフランやこいしなどが群がっており、ちよつと嬉しそうな顔をするメル・ゼナであった。

「ガイアデルム、お酒貰ってきたわよ。」

『ソレガ……………』

ガイアデルムは初めて見る酒に対して興味津々であり、霊夢はモンスター用に作られた器に酒を注ぎ入れる。

「人つてのは酒を飲み交わす時はこうやって器同士を軽く音がなる程度にぶつけ合って乾杯って言うものなのよ。」

『カンパイ?』

「そう、乾杯。」

コツンツ

器同士がぶつかり合い、良い音色が周囲に響き渡る。

『キレイナ……………オトダナ』

「でしょ?」

そして霊夢は静かに酒を口にし一息ついていた所、霊夢とガイアデルムの元につまみを片前足に持ってアルトウーラがやってくる。

『モグモグ……………霊夢ー!ガイアデルムー!こつちにあるおつまみ?って食べ物美味しい

よー!』

「ふふ、楽しそうね……。」

『アア………ッ!?!』

ガイアデルムは初めて口にする酒に驚き、軽くむせていた。

「あはは、初めて飲むなら仕方ないわよ。」

それ、確か薄めてあるけど萃香とか勇儀がいつも飲んでるやつらしいし。」

「グウウウウウ………。」

ガイアデルムはちよつと拗ねておつまみを食べていたがとても楽しそうにしている。

こうして幻想郷に新たな住人が受け入れられたのだった。

エピソード 新たな幻想

幻想郷

人と妖怪、神等の住む土地でありながら古龍や竜が多く住む不思議な土地。

そこでは、主に忘れ去られた物が集まって暮らしており、人の恐怖を糧に己の存在を認知させて生きるという生態を持つ妖怪という生物。

人からの信仰を受け、存在を認知して貰いその見返りとして何らかの加護や奇跡を授けて己の存在を保つという生態を持つ神という生物。

いずれも人による認知が無ければ生きてはいけませんが、外の世界では完全に忘れ去られた存在であり、外に出た瞬間自身を認知するものがほぼいなくなり、自分の存在を維持する事すら出来ない。

幻想郷はそんな妖怪や神達にとつての楽園なのだ。

ならば人間はそんな存在にとつて搾取されるだけなのか？

そんなことはない。

人間には妖怪に襲われたり幻想郷中に何か問題となる『異変』が起きた際にはそれを

「フーン！やれるものならやってみなさいな！」

この新生紅魔館の吸血鬼達による共演を突破出来るものならね！」

一体はレミリア・スカーレット。

紅魔館の主であり、500年というとてもない時を生きる吸血鬼であり、歴代最高の吸血鬼（自称）。

そのかりちゅまは人を引き寄せ、可愛がられる程の魅了をする程である。

能力は『運命を操る程度の能力』遠い未来を予言し、その運命を手繰り寄せる事が出来る。

「わーい！たくさん遊べるよお姉さまー！」

もう一体はフランドール・スカーレット。

レミリア・スカーレットの妹であり、495年を生きる吸血鬼であり、歴代最恐の能力を持って生まれた恐ろしい人物でもある。

その能力故に最近までずっと姉のレミリアにより幽閉されていたが、これは妹を守るという意味もあつた。

その能力とは『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』、文字通り人だろうが物だろうがありとあらゆる物を破壊する事が可能である最強の攻撃能力だ。

だが当然そんな強い能力が何の代償も無しに使えるわけがなく、この能力は人格にま

で影響を及ぼし、フランドールに対して激しい狂気を与えてしまいう上に能力その物も一つずつ選んでしか壊すことが出来ない為に防衛にまで使えない。

今回の異変は幻想郷を覆う紅と黒の霧が発生しており、それが日光を遮ってしまっているという物だ。

続いてしまえば当然作物は育たなくなってしまう。

そして黒い霧の部分から全身黒色で翼を持ったヒルのような生物が群れを成して現れる。

その翼を持ったヒル、キュリアは姿を変えて龍の肉体を形作る。

その虹色の翼はフランドールを思わせ、人を魅了する妖しい輝きを放つ。

その深紅の鱗は血のような色をしており、人々に恐怖を与える。

その頭部は黒き髑髏のごとく周囲にとてつもない威圧感を感じさせ、漆黒の甲殻は全てを吸い込むかのような深い輝きを放っていた。

その龍の名はメル・ゼナ、『爵銀龍』と呼ばれていた通常種の面影は既に無く、名付けるならば『爵血龍』と言った所だろう。

龍でありながら幻想の存在、吸血鬼となった古龍である。

その龍は肉体の枷から解き放たれており、体を眷属である黒いキュリアへと変え、自由により替える事が出来る程である。

こうして異変は過ぎていく。

新たな住人、龍が住まう世界のモンスター達と共に。

幻想の地に龍が降り立ち幻想を加速させる。

この世界はどんな異変が起ころうともいつも通りなのだ。

後日談

後日談その1

断裂群島の泥んこトリオ

断裂群島

それは幻想郷に新たに加わった土地であり、新たな妖怪や、妖精達の住みかとしての目的もあつて取り込まれた新しい土地である。

本来の目的はガイアデルムを倒すためであつたが、表向きの理由が理由な為にここは新しい住みかを用意するためとしておいた。

幻想郷縁起にもその場所の存在は記されており、最近幻想郷に加わった『モンスター』という妖怪とも動物とも違う者達がかつて住みかとしていた土地らしい。

今では、少数のモンスター、特に生息血がどうしても限定されてしまう湿地や沼地に住むモンスター達の住みかとなつていた。

一応今では人里から軽く道が通されているのもあつてたまにこの断裂群島にしかないものを取りに来る人間もたまにいたのだった。

とはいえそんな無防備な人間を妖怪達が狙わないはずもなく、不用意に人里を離れた人間を狙う人食いの妖怪達もでていた。

……が、ここでモンスターの出番が出てくる。

今の幻想郷のバランスとしては、妖怪は人間に強く、人間はモンスターと仲良くし、モンスターは妖怪に強い。

この特殊な三竦みの関係により何故かバランスが保たれていた。

人里の人間はモンスターを護衛としてたまに雇っていた。

しかしむやみやたらに雇われると今度は幻想郷の妖怪が困ってしまうので、幻想郷の管理者はモンスターの護衛を一月に一回と定めていたのだった。

これによりモンスターの護衛は最低限となり、断裂群島へ向かう人間を狙うものも割と最低限となっていたのだ。

とはいえ断裂群島へ向かう人間はやはり後を立たない。

やはりそこにはか無いものが多いのもあり、恋人等に贈るものとして人気になっていく鉱石などもあった。

その為か月に2〜3人は護衛が無くても向かっていたのだ。

もしこれで人里に戻ってきたのならその人物は軽く英雄視される。

危険も持ちながら人気のある、そんな場所となっていたのだ。

妖怪側としては地底の者達が地底から断裂群島の砂漠地帯へと出ることの出来る大穴があるのもあり、久々の日の光を浴びたい妖怪が出てきていたり、居場所が無くなっていたから仕方なく地底に来ていた妖怪等は断裂群島自体に住み着くようになっていたのだった。

く断裂群島く『沼地』

大きな足音を立てて一匹のモンスターがお腹を空かせた状態で歩く。

鼻を鳴らしながら全身についた泥の鎧を少しずつ滴し、己の餌となる植物を物色していた。

この沼地には植物がかなり豊富にあり、栄養価の高い植物から薬効の高い植物、もしくは猛毒を持つ植物まで多彩に自生していた。

泥の鎧を纏う竜のモンスター、『土砂竜ボルボロス』にとってその地は天敵の全く居な

い天国のような場所となっていたのだ。

だが同族も居ないのもあり、あまり縄張りを気にしなくなっていた。

そして沼地には、同じく沼に入る生態を持っている二匹の仲間と仲良く暮らしていたのだ。

一匹は、老人のような髭を持ち、尻尾が泥の塊を掴んだりするのに最適な形となっているモンスターであり、泥の中を自由自在に泳ぐ『泥翁竜オロミドロ』。

このモンスターは本来は気性がかなり荒いのだが、一度こつちに傀異化しかけてる状態でボコされたせい、か、人型の妖怪や人間がすっかり怖くなつてしまい、縄張りを記する余裕を無くしていたのだった。

今となつてはボルボロス達とよく泥の中で昼寝する仲である。

そして最後の一体は『泥魚竜ジュラトドス』、魚のような竜である。

魚のような姿はしているのだが、ヒレが脚状になっており、普通に立つて歩くことが出来たりもする。

とはいえ結局は魚としての性質が強いこともあつて基本は泳いでいた。

この地を泳ぐジュラトドスは、本来の生息地は沼地というよりは湿地になるのだが、実を言うと沼地の沼がそのまま湿地に流れているのもあつて実はこの二つはそのまま繋がっていた。

そのため泥を飲みに来たり体に纏わせたり、昼寝したりするためによく沼地にやってきていた。

そんな仲の良い三匹の沼に関わる竜の姿から、一部では泥んこトリオとも呼ばれるようになっており、絵描きを趣味にする者達がたまに昼寝して三匹が集まっている所を書いたためにやってきていたりもしていた。

ただ………肉食であるジュラトドスやオロミドロがエサと間違えて獣型の妖怪をたまに食べている上にボルボロスも昆虫型をたまに間違えて食べているのもあって三体全員が、今は妖気を発するようになってきていて、これからどうなるのかは誰も予想がついていない。

泥んこトリオは今日も今日とて集まってから昼寝をし、その後に適当にご飯を探して沼地へと戻っていく。

他にも人間や、人形の妖怪を見つけるとたまに付いていつている時もあり、その者達が何をしているのかを観察するという類いの暇潰しもしており、割と馴染んでいる三体の竜なのであった。

後日談その2 アオアシラの1日

↓地底↓『勇儀の自宅』

又シ・アオアシラの1日は早い。

アオアシラは勇儀の自宅に用意して貰った寝床から出てくるとまずは毛繕いを始める。

幻想郷にはあまりノミやダニのような虫はそんなに居ないのだが、元々居たところはずっとやっていた事なのでもうすっかり習慣になっているのだ。

とはいえ部屋の中でやってしまうと抜け毛とかが大量に床に落ちるのでいつも庭で毛繕いを行っている。

毛繕いが終わった後は勇儀から貰っている大きめの鞆におこづかいを入れて買い物に出かける。

勇儀は今日はお酒の飲み過ぎでしばらく起きないので朝ごはんを買いに行くのだ。

地底に唯一ある魚屋、ここは地底の外、つまり地上で仕入れた魚を主に扱っており、海のある断裂群島が地底から繋がっているのもあつて新鮮な魚を仕入れやすくなつていた。

そして魚屋に着くと八つ目の顔を持った妖怪のおじさんが向かえていた。

「おや？アオアシラじゃねえか。」

今日も活きのええ脂の乗つとるサシミウオを仕入れてるだべよ。」

アオアシラは実はこの魚屋の常連であり、断裂群島の幻想入り前は鮭をメインに、幻想入り後は海と一緒に幻想入りしてきたサシミウオを中心に買って自分のご飯にしていた。

特にアオアシラは魚を食べる時はとても幸せそうな顔をして食べるのもあり、可愛いと地底の女性妖怪からかなりの人気となつていた。

「おおそうじゃ、アオアシラ！」

今日もここで食べてくか？もう一匹旨そうな鮭も仕入れててな、お前さんにやるよ。」

「ぐおー！」

又シ・アオアシラは凄く目を輝かせており、店の横に座つて足の上に乗せた魚の入つた袋からサシミウオを取り出してむしゃむしゃと幸せそうな顔をして食べ始める。

やがて魚屋に妖怪が集まつていき、一緒に魚を食べたり子供の妖怪にもふもふさな

がら食事を済ませる。

食べ終わつた後は口回りと手に付いたサシミウオや鮭の脂を舐め取っていく。

この姿も可愛いと評判になっていた。

すると魚屋のおじさんがアオアシラの元へとやってきて話しかける。

「いやあー、助かつたべ。」

お前さんが魚食べてる所が可愛いって評判になつての。

案の定お前さんの噂を聞いてやってきた妖怪がちゃんと客としてこつちの魚を買つ

てくれるもんだべからオラとしても商売繁盛して助かつたべ」

そう言う店から蜂蜜の入つたツボを持ってきてアオアシラへと手渡す。

「ほれ、今日はお前さんのお陰ですぐに売り切れたからお礼に蜂蜜をやるだべ。」

お前さんが蜂蜜が特に好きって聞いたから仕入れといたんだべ。」

するとアオアシラは魚以上に目を輝かせて魚屋のおじさんへと頬擦りして感謝する。

「おお、よしよし。」

そんなに嬉しいだべか？それなら良かっただべよ。」

アオアシラの毛並みを堪能しながら魚屋は嬉しそうにしていた。

そしてアオアシラは手を振って魚屋から離れて行き、勇儀がこの間酒飲んで暴れて壊

してしまった家まで歩いて行き、工事の現場へと向かう。

「おお？アオアシラか、今日も手伝ってくれんのかい？」

アオアシラを向かえてくれたのは鬼の青年で、勇儀が壊した所等はいつてもこの青年を中心とした鬼達によってすぐに直していた。

今回の修繕は柱すらダメになっており、一度解体してから建築しなおす形となっていた。

「ちようどいい、アオアシラ。」

お前さんにはこの家に一度解体するの手伝って貰ってもいいかい？」

「ぐおー！」

そして解体が始まり、鬼達はその力によりスムーズな解体が進んでいく。

アオアシラはその自慢の爪と腕力によってどんどん家解体されて更地へと姿を変えて建築が始まる。

「手伝ってくれてあんがとな！」

こいつは今日の駄賃だ、また今度手伝ってくれよー!!」

相違つて駄賃としていくらかのお金と蜂蜜のツボをまた貰つてアオアシラは勇儀の

家へと帰っていく。

途中地底の子供達の相手をしたり、女性の妖怪に撫でられたりして少し時間がかかってしまっていたが、アオアシラは無事に家に帰ってきた。

すると家からかなりの酒の臭いが漂ってくる。

どうやら勇儀が起きて酒盛りしているようだ。

「ぐおおおお!!」

アオアシラは玄関を開けてその声をあげる。

すると勇儀がこちらに気付いたのか玄関までやってくる。

「おや? アオアシラじゃないか。」

今日の買い物と散歩は終わったのかい?」

「ぐおー!」

「そうかいそうかい。」

それに蜂蜜のツボが二つってことはどこかしらを手伝って来てくれたみたいだね。

地底の皆もお前さんが手伝ってくれると凄くありがたいって誉めてたよ?」

「ぐおお?」

鬼のリーダー格である勇儀の元へは様々な声がかかっており、アオアシラへの感謝も勇儀に伝える人物も結構多かったりするのだ。

そしてアオアシラが可愛らしく首を傾げていると勇儀が何かを思い付いたようだ。「そうだ！今日はさとりとかも来ているんだしまた皆で酒を飲もうじゃないか！」

またその蜂蜜を使った蜂蜜酒を出しといてあげるよ。」

「ぐおおおおお♪」

アオアシラはとても嬉しそうに声をあげる。

アオアシラはすっかり地底の人気者となっていたのだった。

後日談その3 きつねはやっぱり油揚げが大好き

「妖怪の山」『玄武の沢』

今日は藍しやまに許可を貰って妖怪の山の玄武の沢に遊びに来てます！

ヨツミワドウさんとルナガロンさんと一緒に遊んでから川で魚を取って食べてたんですけど食べてると上流の方から泡が流れて来たんです。

「ぐけ？」

「わふ？」

「泡が流れてますね？」

するとヨツミワドウさんが川に入って泡を被っちゃいました。

「ぐけええ……………」

すると上手く動けなくなっちゃったみたいで川の上でゴロゴロしてます。

「ぐけええええ♪」

でも楽しそうなので橙も一緒になって遊んじやいました。

「わふ………わふう!」

しばらくヨツミワドウさんがその泡で泡まみれになって遊んだりルナガロンさんが恐る恐るツンツンして泡を割ったりして遊んでたんですけどあまりにも泡がたくさん流れてきたから気になって滝に向かって進んでいったんです。

そしたら………

「きゅっ!」

「きゅー!きゅー!」

「きゅおおお!!」

体の長くてヒレのある狐さんの親子が泡を出しながら子供の世話をしてたんです。

おっきい親の一匹は全身傷だらけで黒い色をしていて所々が赤くなってました。

勇儀さんの所にいるアオアシラさんに凄く似てました。

もう一匹の親は両目に傷があつて目を開けなくなつてたみたいでしたけどちゃんと見えてるように子供の世話をしてる狐さんでした。

毛とヒレが鮮やかな赤色でとてもかっこいいです。

子供は三匹いて一匹がピンク色の体の狐さんでたくさん泡を出してゴロゴロしてま
す。

二匹目は蒼い色をした狐さんでなんだが泡がビリビリしてるような気がします、それ

に物凄くきれいでした。

最後の一匹は藍色の狐さんで二匹目の狐さんに比べて体が白い子でした、それと泡がなんだか燃えています。

確かパチユリーさんに見せて貰った本にタマミツネっていう狐さんの竜がいるのを見させて貰いました。

だから同じような泡を出す狐さんの竜ならこの子達がタマミツネさんの親子なんでしょうか？

「ぐけっ♪ぐけっ♪ぐけっ♪」

「……………ウウウウウ……………？」

……………きゅお。」

「きゅ？きゅおおお。」

「きゅ？きゅーっ♪」

「きゅん？きゅんきゅーっ♪」

「きゅおおおお♪」

すると泡で遊んでいたヨツミワドウさんに親の両目に傷のあるタマミツネさんが気付きましたです。

ゆつくりと歩いて威嚇するみたいに唸ってましたけど泡で遊んでいるのに気付いて

あまり警戒しなくなりました。

そしたら黒いタマミツネさんに何か声をかけて子供の三匹がこっちに来て一緒に遊びに来ちゃいました。

ルナガロンさんが藍色のタマミツネさんの泡を割ったら爆発して物凄く驚いてたのが面白かったです。

それでしばらく遊んでいたらお腹が空いてきちゃいましたです。

さつきお魚食べてたはずなんですけど……あ、藍さまから遊ぶ子が増えてお腹が空いたら食べなさいって言われて持ってきたおつきいお弁当箱がスキマにあるのを忘れてました！

それで橙がスキマを開いてお弁当箱を出したら皆驚いてたましたけど良い匂いがするからかタマミツネさん達が集まってきました。

お弁当を開けてみたら中身は……すつごくたくさんのいなり寿司と揚げと餅巾着でした。

藍しゃま……しばらく揚げ食べれなかった反動が橙にも来ちゃってますよ……。

するとクンクンと嗅いでたタマミツネさん達がお腹を空かせたのかよだれを垂らしました。

「食べますか?」

「「きゅー!」」

試しに油揚げをあげてみたら凄く喜んで食べてました。

ただ私達と違って咀嚼するための顎じやなくて噛み千切るための顎だからか手で持つてちよつとずつ噛み千切つて食べてました。

親のおっきいタマミツネさんにも油揚げをあげてみたらペロツと一口で平らげちゃいました。

でも凄く美味しそうにしています。

弁当箱の二段目に凄く大きな厚揚げの煮物が入つてて親のタマミツネさんはそれを爪で刺して少しずつ食べてました。

やっぱり狐さんには油揚げが一番みたいです。

藍しやまも油揚げが大好きです。

「きゅつ!?!きゅー!?!きゅー!?!」

子供のタマミツネさんが餅巾着を食べて噛み千切ろうとしたらお餅が伸びてなかなか千切れないので何回も伸ばして食べてたのが凄く可愛かったです。

あ、お稲荷さんが美味しいです!

しばらく皆で遊んでいたら藍しやまととりさんと椀さんが迎えに来てくれました。確か三人は今日はお話をずつとしてたと思つたのですが、しばらく遊んでたくさんの泡が出来ちやつてそれが川下にあるにとりさんの家までたどり着いて気になつて来たみたいです。

子供のタママツネさんが藍しやまにあるたくさんの尻尾を見て目を輝かせてました。親のタママツネさんは泡に触つたものがわかるみたいで尻尾に泡がついてそれが9本あるのがわかると驚いてました。

やつぱり親のタママツネさんは目が見えないみたいです。

橙は藍しやまと一緒に帰ることになりましたけどまた藍しやまに許可を貰つてここに遊びにいらおうと思いました!!

後日談その4 奇しき赫耀と地獄の女神 その1

「人里」『甘味処』

「ん〜!! やつぱこの甘味は最高なのよん♪」

私の名はヘカーティア、地球、月、異界の地獄を司る女神なのよん。

大分前に幻想郷の脇の空いた巫女にやられてからここしばらく幻想郷に住んで満喫してるのよん。

あ、でも仕事をしてない訳じゃないのよん？

ちよくちよくこの世界の地獄に行つてこの世界の閻魔である映姫ちゃんを手伝ったり月や地球の地獄の様子もちゃんと見てるのよん。

あとはこのTシャツをバカにするやつは地獄に落としてやる……………。

ただ……………どうも最近はこの世界に別の異界が混ざりかけてる影響なのかどうも力を持ちすぎた生き物が多いのよねえ。

あ、でもこの間映姫ちゃんが倒して部下にしてる三匹の龍、あれがいれば地獄のパ

ワーバランスは大丈夫そうなのよねえ。

とはいえ映姫ちゃんも勝てたのは死者に対する優位性が映姫ちゃんにあっただけだし多分相手が一度死んでなかったら確実に一体も無理だったでしょうね。

まあ確かに古龍っていつたかしら？

あの子達なんか変な力を身に秘めてるみたいだから気になってこの世界の古龍の力の波動を調べてたらこの間面白い物を見つけたのよん。

「ご主人様、それホントに翼の一部何ですか？」

すると私のかわいい部下である妖精のクラウンピースが私が今持つてるモノについて聞いてきたのよん。

「ええ、香霖堂で見つけて余ったものを貰ってきたのだけれどこれは確かに翼なのよん。ただ形が歪なものもたしかなのよん。

そうね、これが完全な形だと……こんな感じの形になるのかしら？」

私はクラウンピースの疑問に答えるために紙を用意してこの翼の全体像の予想を書く。

「これ、膜が無いですよ？ 私達みたいに飛べるならともかくあつちの世界ってこういう能力とか全部無くて体に備わってる器官を使わないと飛べないですよ？」

「まあ確かにそうなのよん。

翼だって風を受け止めるための翼膜がなければ普通は飛べないのよん。

まああの巨体で飛ぶには風を大きく受けてそれを浮力に出来る程のとんでもない筋力が必要だけれどどうも向こうの世界の生き物は体の構造がかなり圧縮されてるのよねえ。

だから見た目以上にすごい筋肉量してるのよん。

ただまあこの生き物は多分飛び方が違うのよん。」

「飛び方ですか？確かに普通に羽ばたいて飛んだり出来なさそうですけど。」

「まあこればかりは見た方が速いかも知れないのよん。」

あそこは異界じゃなくてれつきとした星だから私はそんなに介入出来ないけど一度繋がりを持つてしまえば呼ぶことなど造作もないのよん。

でも暴れられたら困るから一度人里から離れるとしましょう。」

「はーい！お会計お願いしまーす!!」

私達は甘味処でお会計を済ませて里を出ることにしたのよん。

でも……………クラウンピース……………貴女食ベすぎよ……………少し懐が寂しくなるのよん。

く人里く『博霊神社付近の上空』

「じゃあ呼び出すわよん。」

「はいーご主人様！」

私達は結局何があつても解決出来るように妖怪神社改め龍神社となつた博霊神社の上空で呼び出すことにしたのよん。

まあ私も予想でしか姿がわからないからどんなのが出てくるか楽しみなのよん。

まあそんなわけでこの辺の空間をちよちよいと歪めてこの翼に力を込めると………あれ？おかしいのよん？こっちに呼び寄せてるからそろそろ来るはずなのよん？

「あれ？なかなか来ないですね？」

「あ、クラウンピース！歪みにそんな近づいたら………あつ」

私は流石に危ないからクラウンピースに忠告したのよん。

でも………遅かつたというか相手が速すぎたと言うか。

「へっ？うぐお?!」

「ク………クラウンピースウウウウウウウウウ!?!」

少し………おとなしくしてもらおうよ!!

己の力に飲まれた龍は三つの地獄を司ると出会う。

彗星とも比喩される龍と三つの星を首に下げた女神の行く末は果たして………

後日談その4 奇しき赫耀と地獄の女神 その2

「博麗神社」『上空付近』

しっかし参ったのよん。

いくらなんでも速すぎるのよん。

まああの巨体のお陰で当てるのは難しいことでは無いのだけれどあの天狗よりも速い機動力に加えて空気を切り裂くことで生まれる風圧で移動中のこいつに弾幕を当てようにも途中で弾かれるのよん。

かろうじて大玉ならダメージ入りそうだけれど……あれじゃ当たりにくいよん。
「キュウウウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「よつと、そんな直線的な突進じゃ当たらないのよん。」

いくら相手が速くても直線的にしか飛ばないなら避けるのはそんなに難しくな
よん。

とはいえダメージが入りにくい上にあの赤黒い雷……確か天狗の新聞に載ってた

翼から魔理沙のマスタースパークを遥かに凌駕する威力の極太レーザーが出てきたのよん!?

すると神社の方から霊夢が出てきたのよん。

「ちよつと!?!私の賽銭箱があんたのこの妖精に激突されて粉々になったんだけど!?

それにさっきのビーム、あれ龍属性じゃない。

何が起きてるの?」

「ああ、手出しは無用なのよん。

これは呼び出した私が片付けるべきものなのよん。

それに貴女だとあの子を必要以上に傷付けてしまうのよん。」

「傷付けてはいけない?なによそれ?あいつが自分の意思でやってないってこと?」

にしても霊夢も丸くなったのよん。

今までの霊夢ならサーセンばくげふんげふん、賽銭箱を破壊されたら般若の形相で問答無用で殺しかかかってきていたはずなのだけれど、今は冷静に状況を判断しようとするくらいに余裕があるのよん。

「それに近いと言えるのよん。

彼は生まれ持ったエネルギーが通常の個体より膨大過ぎて全く制御出来ずに暴走してしまってるのよん。

そのせいで苦痛が常に起きていて凶暴になってるのよん。」

「具体的にどのくらいエネルギーが大きいのよ?」

「活性化してれば多分通常の10倍くらいかしら?」

多分さっきのレーザーも元々は攻撃じゃなくて限界を超えたエネルギーの放出をするためのものだと思うのよん。」

「はあ……ただでさえヤバい龍属性エネルギーを通常の10倍ね、確かに制御出来るわけがないわね。」

しっかし……

「キユウウウオオオオオオオオオオオオ!!!」

「あの翼から出てくる6門の龍属性砲を避けながらこの会話してる辺りホントに余裕あるみたいなのよん。」

「あー、まあガイアデルムの4属性魔法の乱れ撃ちよりマシだったもの。」

そこまで難しくはないわよ。

とはいえ龍属性だから私の場合喰らっちゃうと空も飛べなくなるから油断は出来ないのだけどね。

それに避けてるのは貴女もそうじゃない。」

「流石にこの程度の密度の弾幕で当たってやるほど私も弱くは無いつもりなのよん。」

「はあ………んで?このままエネルギー切れるまで耐久するの?」

「実はそういうわけにもいかないのよん。」

「さつき空気を大量に吸い込んでエネルギー活性化させて無理矢理増やしてたのよん。」

「なによそれ………普通に寿命縮める自殺行為じゃない。」

「そうなのよん。」

「だから最低限これを止めさせておきたいのよん。」

「地獄の女神である私としてもこういう死に方は可哀想だと思うのよん。」

「やっぱり生を謳歌して寿命で死んでこそなのよん。」

「んで?どうするのよ?エネルギー切れさせる当てはあるの?」

「まあ正直一つだけ手はあるのよん。」

「私の能りよkあつぶないのよん!」

「話の途中でいきなり突撃してきたのよん!」

「飛行速度だけならホントにマスゴミ以上だからかなり危なかったのよん!」

「ふう、とりあえずは私の能力を使うのよん。」

「あなたの能力って……『三つの身体を持つ程度の能力』だったわよね………それあなた以外にも適応させられるの?」

「まあ普通にやれば無理なのよん。

だから………無理矢理私の力を吸い込ませて私に近い能力を発現させるのよん。」

「はあ!?!」

前例はあるのよん。

メル・ゼナの吸血鬼化による能力の発現。

それが私の能力の場合どう発現するかが問題なのよん。

後日談その4 奇しき赫耀と地獄の女神 その3

「博麗神社」『上空付近』

うーん、しっかしとんでもない速さしてるのよん。

直線的過ぎて読みやすいけれど普通の天狗の何倍の速さしてるのかしら？

そろそろエネルギー的に翼の色が戻ってもおかしくない頃だと思うのだけど……

「っ!?なんか翼の色が変わったわよ!」

「元に戻った!ってことは吸引が来るのよん!!」

私はすぐにバルファルクへと近付いたのよん。!!

「キュウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

周囲から空気を吸収し始めたのよん!今なら!

「こいつも一緒に吸っとくのよん!!」

私はバルファルクの翼の吸引口全てをふさぐように私の能力を付与した神力を注ぎ

込む。

「キュウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

空気を完全にふさいで私の神力のみを吸引するように仕向けたのはいいけど……
なんて吸引速度してるのよん!?

まずい!? そろそろ……私の……神力が!?

「キュウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオ?!?!」

すると胸部に集まっていたエネルギーが爆散し、バルファルクが転倒した。

そして龍属性の変わりに私の神力がバルファルクの体内の大半を満たしていることがわかる。

「さて、吉と出るか凶と出るか………こういう運頼みは貴女に任せたいのだけどね、博麗の巫女さん。」

「私は確かにくじ引きとかもやってなくはないけどだいたい凶よ?」

短い周期で異変起きすぎなのよ………こっちの身にもなって欲しいものね。」

「あー、そういうえば確かに最近では異変が多すぎるのよん。」

ちなみに貴女は最終的にどうなると思うのよん?」

「そうね………例えばの例なんだけどメル・ゼナなんだけどね。」

あいつあの異変の後完全に能力が定着する事で能力がさらに変化したのよ。

最初は『運命を操る程度の能力』と『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』が弱

「どどどどうなってるのよん!? せいせい人格が別れる感じで力が別れると思ってたのよん!？」

さすがに予想外なのよん!？」

「まあそれだけ龍属性が強力過ぎる能力だったって事なのよ。

おそらくこいつに定着する能力は……!？」

「キユウウオオオオオオオオオオオオ!!!」

すると白銀のバルファルクと全員が紅黒く発光したバルファルクの二匹に分裂したのよん!？」

あつでも倒れちゃったのよん。

「まあこうなるわよね。

こいつの能力は『二つの身体を持つ程度の能力』ってとこね、でも片方は神としての肉体、もう一つは龍としての肉体って感じなのでしょよね。

速い話生物として最上位の古龍と肉体という器が完全にただの入れ物程度でしかその価値を持たない神とでは相性悪すぎんのよ。

そうなればこのバルファルク? ってやつが助かるには一つしかないわ。」

「つまり………神としての肉体と龍としての肉体を私の能力の欠片を使って完全に分断するってことなのよん。」

「そういうこと、さすがにあんたみたいに三つにまで分けるのは無理だった見ただけど龍の力の化身と伝承によって生まれる神の力の化身の二つ、これに分かれたって訳ね。」

でも見た感じ肉体は神側が持つてて紅いのは龍の力の化身つて所ね。」

「でも龍の力だけでこんなはつきりと存在を固定出来るものなのかしら?」

すると私のいた辺りに大きな影が出来るのよん。」

『予想だが龍の力は生命が持つ力を圧縮して集まった物だ。』

だからこそ生命が本来持つている生きる力が中心になって龍の力の化身として定着してるんじゃないだろうか?』

「うお!?びっくりしたのよん!」

貴女いつの間にかこんなデツカイ同居人?が出来たのよん!」

「あら?ガイアじゃない。」

『同胞の気配を感じたので来てみたんだがな』

それは前回大異変を起こした元凶であるガイアデルムだった。

すごいちっちゃくなくなって言葉も流暢になってはいるがそれでも普通にデカくて威圧感があるのだった。

『まああれならすぐにも意識を取り戻して活動を再会するだろうて

貴女がここまでやったのなら面倒を見ておいてやってくれないか？」

「……………まあ乗り掛かった船なのよん。」

任せるといいのよん。」

そして私は氣を失つて二匹の龍の元へと行き目が覚めるのを待つ事にしたのよん。

後日談その4 奇しき赫耀と地獄の女神 その4

「冥界」『裁判所』

「よろしいのですか？へカーティア様。」

「もちろんなのよん。」

それにエネルギー体だから正直そのまま置いておくには危なっかしいってのもあるのよん。」

私はバルファルクをなんとか助けた後に2つに別れた身体のうち龍属性のエネルギー体の方を冥界に置いておく事にしたのよん。

私自身も異界、地球、月に三つの身体が存在してるからちようどいいのよん。

それにバルファルクに試して貰ったら龍属性のエネルギー体は自分で召喚する事が出来るみたいなのよん。

仕事終わったら戻す事も出来るみたいだし、なかなか便利なのよん。

「まあ映姫ちゃんもあの古龍トリオに手を焼いてるみたいだしちようど良いと思うわよ

ん。」

「うぐ、よくご存じで……………」

「地獄の女神舐めちゃダメなのよん。

ちやーんと把握してゐるんだから。」

「はあ、取り繕つても仕方ないですしありがたく置かせて頂きます。

これで少しは抑止力として働いてくれれば良いのですが……………」

映姫ちゃんも大変なのよん。

あの襲撃以降テオ・テスカトル、クシャルダオラ、オオナズチを配下にせざるを得なくなつたは良いものの映姫ちゃんの言うこと以外全く聞かないんだもの。

まあ弱肉強食であり、勝者こそが正義であるような世界の生まれだからこそ仕方ない部分もあるとは思うのだけど古龍つて基本的に自分本意だからどうしようもないのよん。

テオ・テスカトルはあのサボリ魔死神とよく一緒に昼寝してるし、

クシャルダオラは比較的大人しく仕事してるけど常に映姫ちゃん以外威嚇してるし、

オオナズチはいつもかくれんぼしてるから仕事しないしでみーんな問題児ばかりなのよん。

まあだからこそこの子達がものすつごく相性の悪いバルファルクの龍属性エネルギー

ギー体を持ってきたのだけれどね、さすがに可哀想だったもの。

幸いバルフアルク……いえ、バルちゃんは凄く大人しくてちゃんと他の子の話も聞いてくれるのよん。

だからあの古龍トリオが何かやらかしたらバルちゃんにお仕置きをして貰おうってなったのよん。

「とりあえず能力の強い亡者等にも対抗しやすくなるのでとても助かりました。

古龍の亡者は私でも勝てないわけでは無いですがかなり苦戦するので。」

「亡者を裁く権限を持つ以上亡者が閻魔を傷付ける事も閻魔の邪魔をする事も本来は敵わないはずなのだけれどねえ、さすが生態系の王者と云ったところなのかしら？」

「少なくともガイアデルムがこちらに亡者として来て暴れたら私は確実に負けていたでしょうね、『浄玻璃の鏡』で異変の一部始終を見させて貰いましたが古龍があそこまで肉体を変異させやすいとは……………」

「というよりは古龍は割と仙人とかに近い感じの雰囲気があるのよん、多分だけど肉体という器が曖昧になってるんじゃないかしら？」

私の管轄じゃないから詳しい事まではわからないのだけれど確か親を必要とせず古龍と龍脈のエネルギーのみで生まれる古龍もいたはずなのよん。」

「それは……………確かに肉体の器を捨てかけてますね、でも肉体がないとやはり現世へと

干渉が出来ない為に肉体の器から完全に離れられないといったところでしょうか？」
「多分あつてるのよん。」

半分が自然界で繁殖し、死した魂を繁殖させた器に呼び戻す、肉体の器の方が多くなつた場合は新たに誕生する。

「こんなところかしら？」

「個体の絶対数が少ないとはいえ脅威なのは変わりませんね。」

記憶の継承も割と中途半端でほぼ別個体といつてもいい気もしますが。」
すると話が退屈だったのかバルちゃんが私の前に頭を持つてきたのよん。

「はいはい、撫でてあげるのよん。」

「あー、やつぱバルちゃんは可愛いのよん。」

「甘え盛りですね……精神的に幼い個体な上に生まれてからずっと苦しんでいたようですからね。」

「ほんと『浄玻璃の鏡』を貸してくれてありがとうなのよん。」

「お陰でこの子のことがよくわかつたのよん。」

「そう、この子は生まれた時から特殊個体で龍属性の暴走でずっと苦しんで生きてたのよん。」

「だからこそ精神的には全く育たずにほぼ幼児のような精神のまま身体だけ大人に成

「キュー？」

「あああああああああ!!もう可愛いは正義なのよおおおおおん!!!」
あとでクラウンピースも一緒に可愛いがってあげたいのよん!!!」

後日談その5 閻魔の1日

（冥界）

閻魔である四季映姫・ヤマザナドウの朝は早い。

起床してからすぐに顔を洗ってから朝食を作る。

その後いつも大事にしている『浄玻璃の鏡』を丁寧に磨き上げる。

『浄玻璃の鏡』は大事な仕事道具でもあるが、自身の行動を反省し、己の閻魔としての自覚を持つという私的な事にも使っていたりする。

仕事道具を私的に使うのはダメなのでは？という疑問を持つ者が居ないわけではないが、そもそも『浄玻璃の鏡』自体が映姫の私物でもあるために実は問題なかったりする。

そして身支度を終えてから自分の職場である裁判所へと向かうのだった。

裁判所へと到着した際に獄卒の一人に声をかけられる。

彼は古龍達の様子を定期的に見ておくよう指示しておいた者の一人だ。

「おはようございます四季様。」

「おはようございます。」

古龍達の様子はどうか？」

すると彼はかなり苦い顔をして言う。

「あー、なんとというか……いつも通りなんですよねえ。」

「やはり彼らは私以外の者の言うことなど聞くはずもありませんか。」

「ええ、本来自分以外の者の言うことなど聞くはずもない種族とかのお方から聞いておりますので仕方ないとは思ってるのですが……流石に業務に少々支障が始めてます。」

「そうですか……それぞれのような様子か報告をお願いしても？」

「構いません。」

テオ・テスカトル殿は……その……なんと申しますか……良くも悪くも猫のようなものの性格をしていらつしやるのですよ。

四季様に言われた事はちゃんとやっていますのですが、終わったらすぐに彼岸に向かって……その……常に小町殿と昼寝を始めております。」

……小町イイイイイイ

「……………一応業務はこなしているのですかね？」

「はい……………最低限ですが。」

「はあ……………いえ、まあ最低限とはいえこなしているならば小町よりはマシでしょう……………ですが業務が終わって時間が余るようなら出来るだけ他の手伝いをして欲しいと伝えていたのですがね。」

あと小町は減給させてもらいます。」

すると彼は呆れた様子で答える。

「伝えておきましょう……………」

それで次はクシャルダオラの事を報告してもらっても？」

「分かりました。」

クシャルダオラ殿なのですが……………やはりまだ我々を警戒してるようでした……………一応業務についてはかなり真面目に取り組んでくださっているのですが、我々が近づく旅に風を纏って威嚇しています。

ただ少々気になることが。」

「気になることですか？…なんでしょうか？」

「どうもクシャルダオラ殿の身体に錆びた金属が軋むような音と共にひび割れが生じているんですよ。」

それが起きる度にクシャルダオラ殿が顔をしかめているようで。」

「……………金属……………確かクシヤルダオラの外殻や鱗は金属質でしたね。

確か生態としてほとんど錆びるのでしたか……………もしかしたら警戒心が強いのは脱皮の時期が近いのかもかもしれません。」

「脱皮ですか？というか古龍って脱皮するんですか？」

「いえ、クシヤルダオラのみが生態が特殊なようですよ。」

その外殻が限界まで錆びると脱皮を行って酸化した外殻を捨てて新しくするようです。すね。」

「つまり顔をしかめていたのは……………」

「ええ、外殻の内側に新しい外殻が形成されてきてそれで痛みを伴っているのでしょう。」

彼への接触は脱皮するまでの間最低限に止めて下さい。

出来るだけストレスを与えるのは避けるべきでしょう。」

「了解しました、皆に通知しておきます。」

出来るだけ彼が安心して脱皮出来る環境を作っておいた方が良さそうですね。

なんなら脱皮の方を優先するように伝えておくとうまうか。

「次にオオナズチの報告をお願いします。」

「はい……………その……………」

彼はかなり青い顔をして報告する。

「正直……オオナズチ殿は殆ど業務を行っていないのですよ……亡者が逃げ出してたりすると捕まえてはくれるのですがそれ以外ですと……ずっと姿を消してしまつて私達に対してちよつとしたイタズラをしているのですよ。」

まあ我々としても小町殿のサボりよりはマシなので大目に見ていますしイタズラの後は少し遊んでやると満足してちよつとだけこちらの仕事も手伝つてくださるので皆も受け入れているようです。」

「とはいえ本来の業務を行つて居ないのは問題ですね。」

少々オオナズチの業務内容の見直しを行う必要がありますね。」

幸いにしてオオナズチは皆の業務を手伝つてくれているようですから正式に私から皆の業務の手伝いをするように伝えておきましょう。」

「ふう、ありがとうございます、皆も喜ぶでしょう。」

同僚も皆オオナズチの事を気に入つてはいるのですけど本来の業務を全く行っていないので心配していたので。」

まあそういう私もその一人なのですが。」

どうやらオオナズチはいろんな同僚に愛されているのですね。」

三体とも結構問題を起こしていたので心配していましたがどうやら私の心配しすぎだったようですね。」

しかしオオナズチのイタズラはたまに怪我人を出しているので度が過ぎるようなら
ヘカーティア様から預けて頂いたバルファルク殿の力をお借りするとしましょう。

はあ……………とりあえず説教はしておきましようか。

後日談その6
ライゼクスの1日

「紅魔館」『図書館』

こんにちわ、リグルです。

ゴキブリではなく蛭の妖怪です。

今日は私の子として育てているライゼクスについてももう少し調べておきたいのもあって紅魔館の図書館にライゼクスと一緒に邪魔させて貰ってます。

「パチユリーさん。

今日をお願いを聞いて貰ってありがとうございます。」

「ええ、別に構わないわよ。

そもそもこの図書館は元々自由に閲覧して良いことにしているもの。

今みたいに許可がないとダメみたいなイメージが出来ちゃったのも結局あの白黒のせいだもの。

まったく、迷惑な話よ。」

「メル・ゼナ、ありがとう。」

「あら？ そういえば貴女メル・ゼナの変化した姿を見るのは初めてだったかしら？」
「そうですね……確か妖怪になって身体がその……キュリア？ っていうのに変化するようになったんですよね？」

「そうよ。」

「ただこの間の鬨いで無理して力を使い続けてたせいで妖力ほぼ全部使いきって今は……」

すると机の下にパチュリーさんは手を伸ばしてライゼクスくらいの大きさで本を抱えて読んでいる一匹の小さな子どもを龍を出して来ました。

「こんな感じで凄くちっちゃくなってるのよ。」

「……………え!? これがああ時のメル・ゼナさんですか!？」

「あれ? でも確か黒いキュリアもメル・ゼナさんなんですよ?」

でも目の前にもちっちゃいメル・ゼナさんが?

あれ?」

「まあ最初は戸惑うわよね。」

結論から言うとうどちらでもメル・ゼナよ、早い話力が減りすぎた結果キュリアからメル・ゼナの肉体に戻せる個体が極端にすくなくなっちゃったのよ。」

するとライゼクスがメル・ゼナさんに近付いていく。

「キュツ……………キュツ……………キュツ……………」

「……………クルルル?」

「キュ〜〜♪(スリスリ)」

「……………グル。」

ぐはあ!?か、可愛いいいいいいいいいいい!!?

ちっちゃくなつて可愛くなつてるメル・ゼナさんに頬擦りしてそれを黙認して好きにさせて上げてるメル・ゼナさんとの組み合わせが可愛すぎるよおおおおお。

「これは……………なかなか破壊力あるわね……………」

子供のモンスターのバートナーを持った者達が全員親バカになるのも分かるわね。」

「でしょ!?!でしょ!?!」

この子の行動一つ一つがどれも猛烈に可愛いんだよね!

特にこの表情見てよ!すごい嬉しそうにしてるよ!」

「元々メル・ゼナに憧れてたみたいだもの、かなり懐いてるのね。」

「そうそう、僕が前にこつちに来た時もメル・ゼナさんをすごい憧れるような眼差しで見てたからよく覚えてるよ。」

「グルルル?」

「キュ? キュ~~~~キュ!」

するとメル・ゼナさんが私に一度顔を向けてちよつと唸りました。

なにかをライゼクスに伝えたのでしょうか?

すると返事をしたら私が僕に近付いてきて…………

「キュ! (バサバサバサ)」

「うわ、急に肩に乗つかつてどうしたの?」

「キュ~~~~♪」

「ぐはあ!」

すると羽ばたいて肩に飛んできたライゼクスが僕にもすごい幸せそうな顔で頬擦りしてきました。

もうたままないよおおおおおおおお。

「ふふ、モンスターはやつぱり感情の表現がとても素直ね。」

いいわ、調べものの方は私の方でやっておいてあげるからライゼクスと遊んできなさい?」

「え? でも……………良いんですか?」

「ええ、それに確かに今の貴女はその子の母親代わりだけど貴女もまだ妖怪としても子

「ふふ♪」

やっぱりライゼクスは尻尾をさして相手を痺れさせて痙攣させるのが楽しいようでした。

パチユリーさん……でも可愛いから許しちやおっと。

後日談その7

白き神のアソビ

その1

〈冥界〉『裁判所』

「古龍達との戦闘で破壊された場所の再建はどうなっていますか?」

「古龍達の協力……………といっても殆どがオオナズチのおかげなのですが……………まあかなり順調に進んでおります。」

「とはいえまだ再建の目処が経っていない施設もそれなりにあるので裁判が可能になるまではそれなりに時間がかかるかと。」

「ですがここの獄卒や死神だけならもつとかかったと思います。」

「皆があの子には感謝していますよ。」

「そのオオナズチも施設を壊した一匹なのですがね……………」

「うぐつ……………とはいえ多分状況的にオオナズチはあの謎の白い少女に逆らえなかつたと見るべきでは?」

「そこは難しい所ですが……………比較的優しい彼を見る限りそう見るのが妥当でしょうね……………あの者は一体……………」

私はオオナズチ達古龍と出会った………というか襲撃を受けた時の事を思い出した。

〈襲撃事件当日〉

あの日はいつも通り裁判を終えて裁判所の後片付けをして強力要請のあった幻想郷で今現在脅威となっている『ガイアデルム』の撃退への準備を進めていた時だった。

「へえ〜」がああの世の裁判所ってやつね………

私は肉体が消滅しても魂だけで存在して冥界に連れてかれる事が無いから初めて見たなあ………。」

白い髪、白い肌、白いワンピース、白い角、何もかもが白い………そしてその白の中に紅く輝く瞳。

そして異様な威圧感を与える少女がこの裁判所に突如として現れました。

「ツ!?!何者です!?!」

入り口から来たとかそういう現れ方ではない。

突如として出現した……いえ、気がついた時にはもうそこに居た？

だがいずれにせよ侵入者であることに変わりはない。

私は仕事の都合上この冥界に来た死者は裁判をする前から全員一度書類で目を通して把握している。

だがこんな少女はこの冥界に死者として来ては居ない。

それに肉体が消滅しても魂だけでその場に存在し続ける……冥界に連れ去られる事すらない……そんなの普通はあり得ない……。

「私？ そうだなあ……別に名乗っても良いんだけど……」

私の名前には言霊が宿ってるしなあ……とりあえず白いし『シロ』とでも読んでくれたまえよ。」

「……………『シロ』ですか……………本名を名乗らない辺り知られたらあまり良い影響は無いと見て良いでしょうね。」

「うんうん、素直な子は好きだよ。」

とはいえその鏡に私は写らないからやっても無駄だと思おうよ？」

気付かれた!?

それに……………本当に『浄玻璃の鏡』に彼女の姿が写らない……………まさか!?

「貴女……………龍世界の住人ですか？」

「へえ……………以外と勘も悪くないじゃん。」

「そうだね、アタリと言っておこうかな。」

私はすぐに向こうの世界の閻魔に値する者と連絡を取ろうとする。

私達の住む冥界は全ての世界に繋がっており、かなり強力な世界の壁を隔てて他の世界の冥界と地続きになっている。

閻魔である私は冥界の神等と同じ階級であるために定期的に私達と同じ冥界の裁判長が集まって会議をすることがある。

だからこそ連絡を取り合うことが可能になっている。

確か龍世界の裁判長は……………

「無駄だよ？あの子には私を裁く権限はないもの。」

それとね……………私はあの子が望みを叶えようとしているのを邪魔してほしく無いんだ……………」

「あの子……………邪魔してほしく無い？」

……………『ガイアデルム』という龍の事ですか？」

「へえ……………こつちの世界でもその名前で呼ばれてるんだ。」

こりや完全に定着しているかなあ。

私達はそもそも自分で名乗るような生き物じゃないから呼び方なんて人間とかが考

えるものだしなあ。

まあいいや、ちょうど良い魂が3つあるし……………」

すると『シロ』という少女は己の指を噛みちぎって懐から取り出した3つの魂へとその血肉を与えました。

すると……………」

「ふふふ、この子達はこの間狩られちゃったばかりだったんだけどちようどいいから連れてきたんだー♪

人間もほんと化物揃いだよねえ……………私達龍を例え単独だとしても簡単に狩ってしまうんだからさー。」

魂へと与えられた血肉が膨れ上がる。

魂は血肉へと受肉して完全な生き物として甦る。

だが……………」

「やせません！

『判決』!!かの者達は『死者』！それを悪戯に甦らせる事は生命の理に反します!!」

するとかの者達は肉体が腐り果てて魂だけの状態で復活する。

しかし中途半端に蘇生されていた為に形を失っていた魂がその形を取り戻していく

……………」

「おや？完全な形に蘇生出来なかったなんて。

これが『程度の能力』ってやつか。

あいつも面倒な力を作るよねえ、まあいいけどね。

この地に集うは三匹の龍。

古の時代より存在し続け生命の頂点、『生きる災害』として恐れられし古龍なり！

『霞龍』 オオナズチ

『鋼龍』 または『風翔龍』 クシヤルダオラ

『炎王龍』 テオ・テスカトル

君にこの子達を退ける力はあるかい？

私がこの世界の冥界を任された君の力を見極めてあげよう！

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「シヤアアアアアアアアアアアアアア」

「キュオオオオオオオオオオオオオオオ」

三匹の災厄が今この地に集う。！！！！！！！！！！

後日談その7

白き神のアソビ

その2

「冥界」『裁判所』

「シャアアアアアアアアアアア!!!」

オオナズチは早速咆哮し、口から大量の霧を吐き出す。

これによつて周囲が霧に包まれて視界がとても悪くなる。

だが私には関係ない。

私は霊的な視覚をもつて彼らの魂を見る。

私は死者を裁く閻魔であり、彼らの魂を見る。

その為に物理的に視覚だけでなく霊的な視覚がなければ彼らを裁くには不十分だからである。

オオナズチはカメレオンのように全身の体の色を変えて周囲の風景に完全に溶け込む。

私からすれば完全にバレバレではあるのですが物理的な視覚で見るとどの方向から見ても輪郭すらわからない程完全に溶け込む事が出来ているために見事といえた。

私は早速オオナズチに牽制の弾幕を放とうとする。

だがそれよりも先にテオ・テスカトルが動き出した！

「グオオオオオオオ!!」

テオ・テスカトルが右前脚を私に向けて振るう。

しかし位置的な関係で私には当たらない距離のはずなのに……………っ!?

テオ・テスカトルが脚を振るった瞬間、赤い粉塵が大量に私のいる場所に向かって撒き散らされる。

粉塵はその場にしばらく残り、私は反撃に弾幕を放って様子を見る。

だがテオ・テスカトルは冷静にそれを避けて、口を『ガチツガチツ』というまるで打石を合わせるような音を立てながら……………ってまさか!?

私は思わずその場から大きく離れる、とてつもなく嫌な予感がしたからだ。

そしてその予感は正しく、テオ・テスカトルが大きく口を開けてガチンツ!とその場で噛んだ瞬間……………

「っ!?!うあああ!?!」

その場に残っていた粉塵が連鎖的に爆発を引き起こす。

私は避けてはいたが爆風の範囲が思ったよりも広く、それによって軽く吹き飛ばされる。

どうやら先程テオ・テスカトルが蒔いた粉塵は可燃性が非常に高い粉塵のようだ。そしてよくみればその粉塵はテオ・テスカトルの全身にもその輝きを見せており、己の炎と粉塵による爆発、この二つを駆使して戦うのがテオ・テスカトルの戦闘スタイルのようだった。

「キユオオオオオオオオオオ!!!」

続いてクシャルダオラが動き出す。

よくみてみれば周囲には強風が吹き荒れており、近付けばただでは済みそうにない。すると大きく息を吸い込み、まるで空気を圧縮したような暴風のブレスを吐き出す。

そのブレスは完全に風のみによって産み出されており、とても目視で確認することが難しい為に避けるのも難しい。

だがこの程度でやられる私ではない!

「審判『十王裁判』!!」

私から全方向へと発射して、テオ・テスカトル、クシャルダオラ、ついでに透明になって後ろから狙っていたオオナズチに向けてレーザーの弾幕もおまけで発射する。

本来スペルカードとは最低限避けることが出来るように作るものだがこれは人間と同じ姿の肉体の者が避けるのを前提としており、とても巨大な体を持つ彼ら古龍は避ける事が出来ない密度の弾幕となる。

「グギャツ……グ……グオオオオオオオオ!!」

「シャツ!!? シャツ!!? シャツ!!? シャツ!!?」

「キユオオオオオオオオオオ!!」

テオ・テスカトルはさすがに避けきれない密度の攻撃を受けてそこまでダメージは無いようなのだがかなりうざったそうにしている。

オオナズチはどうやったたら避けられるのか周囲をアワアワと動いて弾幕に当たりながら動き回っている。

何故だろう………なんか可愛い。

というか………魂が幼いような気がする。

クシャルダオラはその硬い肉体によって弾幕を全て弾いており全く聞いていない。

だが頭部や脚に受けている弾幕に軽く鬱陶しそうにしている。

さすが鋼龍と呼ばれるだけありますね………全く弾幕が聞いていない。

「小町!!」

「お任せを!!」

私は緊急事態となったことによりこの裁判所で警戒をしていた小町を呼びつけて追撃を行わせる。

「いつもサボっているんだからいい加減働きなさい!!」

終わったらどのみちこの間の説教の続きをさせて貰いますが今回の仕事ぶり次第では減刑を考えてあげなくもありません!」

「今はそれどころじゃないと思うんですが!」

とはいえそれなら私としては万々歳ですよ!!

死神『ヒガンルトユール』!!」

小町から大量の段幕を前方にばら蒔き特に厄介な硬い肉体を持つクシヤルダオラへと向けて放つ。

「キユオオオオオオオオオオオオオオオオ!?!?」

「つ?!角です!こいつら角への直撃を一番嫌がってます!」

角………確か向こうの世界の閻魔から聞いてはいましたが、古龍の角は基本的に全ての古龍に共通する力の源であり、そこが破壊された場合古龍はその超常的な力を出しにくくなってしまいうらしいですね………

「とはいえ私達の弾幕だと破壊は難しそうです………

それに彼らは魂だけの存在となっています。

なのでおそろく破壊しても今はないと思います。」

「とはいえ嫌がつているということは生前の行動が染み付いているようです。

ならば積極的に狙って魂の力を削り続けましょう！」

魂の力

彼ら古龍は魂だけとなったとしても自分でタマゴに宿り転生することが出来る特殊な魂をしている。

その力は妖怪や人間の魂とは比べ物にならない程の力を持っており、私達が強制力を持たせるにしてもある程度力を削いでおく必要があるのだ。

この戦いはその力をどれだけ削れるかの戦いになる。

後日談その7

白き神のアソビ

その3

冥界へ 『裁判所』

「へえ………この世界の弾幕とやら………威力こそ低いけど私達龍とはあまり相性良くない感じだなあ………私達はホントに体が大きすぎるからなあ………」

白き少女はその深紅の瞳で三匹の古龍を見つめ呟く。

「仕方ないなあ………我が血族よ………我が血の呼び掛けに答えよ。」

己の魂に混じりし我が欠片に答えよ！

白き少女はその瞳を龍特有の瞳のように縦に開かれ三匹の古龍を見つめる。

ゾクッ！

「グオ!?!」

「キシヤ!?!」

「キユオ!？」

この深紅の龍瞳に見つめられた三匹の古龍は非常に怯えた様子となっており、まるで恐怖によって支配されている様子だった。

「グ…………グオオオオオオオオオオオオ!!」

テオ・テスカトルは己の魂に混ざった己の始祖の欠片に答えるように、その恐怖に支配されるように己の力を引き出し始める。

己の周囲に粉塵が大量に舞い始めて何度も爆発を引き起こす。

「キシヤアアアアアアアアアア!!」

オオナズチ更に霧を吐き出して周囲の視界をかなり悪くして己の毒をさらに凝縮させ始める。

「キユオオオオオオオオオオオオ!!」

クシャルダオラは己の風を操る力を限界まで引き出し、自らを守る第二の鎧でもあり、相手を吹き飛ばす矛ともなる黒き風、龍風圧を纏い始める。

「ツ!!様子が変わった…………それに何かに怯えている…………」

あの少女は…………居ない?」

「…………フフフ…………この世界の者の力…………存分に見せて貰うとしましょうか。」

龍は応える。

己の始祖の期待に応えるために。

己を支配する恐怖を無くすために。

古龍達は死に物狂いで戦い始めるのだった。

「四季様!? こいつらの魂の力が削れる速度が凄まじく速くなってますよ!?

この速度だと下手したら消滅しかねませんよ!?

「そうなる前に私達が拘束します!」

魂を消滅させてなるものですか!」

三匹の古龍は無理に生前の力を全て引き出そうとしているのもあり、かなり無茶をしている様子だ。

この影響もあり、魂の力が凄まじい速度で削られ、すぐに危険域にまですぐに達してしまっている。

だが三匹はまだ力を引き出そうとしている。

「このままでは不味いです。

すぐにでも拘束して引き出した力を魂に戻さねば！

小町!!」

「お任せを!!せええい!!」

小町は己の能力を使い、まずはオオナズチのすぐ後ろへと一瞬のうちに移動してその鎌を用いて魂を刈り取る。

「キシヤ!!」

死神の鎌は魂の殻となっている仮の肉体を完全に無視してそこに包まれていた魂のみを刈り取る。

だがだからといって殻を放置することも出来ない。

魂から力を引き出しすぎているのもあり、魂はこのままでは自然消滅してしまうのだ。

「仮初めの肉体よ!魂へと帰りなさい!」

魂よ!我が審判を受けなさい!」

閻魔である映姫の顕現により、魂によって生成された殻を再び魂としての形に戻し、刈り取られた魂であるオオナズチへと戻していく。

魂を裁き、その魂へと命令を聞かせる権限を持つからこそ出来る芸当である。

だがオオナズチは身を守る鎧が無く、身を守る手段が物理的に擬態するという事しかなかった為に上手く行ったが他の2体はそれも行かない。

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

「ぐうううう!!?四季様!この爆発をどうにかしないととても近付けませんよ!」

テオ・テスカトルは己の纏う豪火によってその身体から出る粉塵を爆発させ続けており、近付こうものならその豪火によって焼かれ、粉塵爆発によって吹き飛ばされてしまう。

四季は向こうの神から聞いたこの三体の古龍の関係性を思い出す。

クシャルダオラ、テオ・テスカトル、オオナズチの三匹は三竦みの関係となっており、お互いがお互いを抑制しあう関係となっているのだ。

これはそれぞれが力を持ちすぎるのを抑制する為とも言われている。

オオナズチの毒はクシャルダオラの暴風を抑制し、クシャルダオラの暴風はテオ・テスカトルの炎を吹き飛ばし、テオ・テスカトルの炎はオオナズチをあぶり出す。

この三匹がお互いを抑制しあうことによりバランスを取っているのだ。

テオ・テスカトルの豪火を吹き飛ばす事が出来るのはクシャルダオラ。

ならば……………

「小町!!クシャルダオラのプレスをテオ・テスカトルにぶつけさせなさい!」

「っ！わかりました！」

小町は能力を使っていきなりクシャルダオラの目の前に現れ、その鎌で軽く斬りつけてクシャルダオラの視線を自分に誘導する。

そしてテオ・テスカトルの方へと移動してクシャルダオラのブレスを誘発させる。

小町は能力を使って瞬時に離脱する。

目標を見失ったブレスはその目標の後ろにいたテオ・テスカトルへと激突してその粉塵と炎を吹き飛ばす。

「今です！」

これにより小町は瞬時に能力を使って無事に近付き、その魂を借りとる。

「オオナズチ！私の力を渡しますのでその毒を貸してください！」

映姫はオオナズチの魂へと指示を出して自分の力を渡してその分の毒を生成させる。

「くっ！あれだけ渡したのにこの量……古龍を押さえるにはこれ程強い毒がないとダメなのですか!？」

小町！

映姫は生成された毒を小町の能力を使って直接クシャルダオラへと食らわせる。

「キユオ!!」

クシャルダオラは毒によって己の角へと力を回しにくくなり、その身に纏う風圧を弱

めてしまう。

しかしそれでもなお強力な風圧を纏うクシャルダオラに小町は必死に近付く。

「くううううう!!このお!!」

その風圧を掻い潜ってなんとかその鎌を使って魂を借りとる。

仮初めの肉体に阻まれていたのなら成功することは無かっただろう。

魂への命令権を持っていなければこの魂達は消滅していただろう。

死神への的確な指示と魂だけの存在への絶対優位性がなければ負けていたのはこちらだっただろう。

爆発によって破壊され、暴風によって吹き飛ばされ、その毒によって裁判所はしばらく機能停止せざるを得なくされていた。

映姫は三匹の魂を縛り、暴れられないようにして今後どうするべきか、そして先程の白い少女について考えるのであった。

後日談その7

白き神のアソビ

その4

「冥界」『裁判所』

パチツパチツパチツ

古龍達を拘束してなんとか事態を終息させた後ゆっくりと拍手をしながら最初に現れた白い少女が近付いてくる。

「いやあ見事見事、いくら魂だけの存在への絶対優位があるとはいえ古龍、生態系の絶対強者を倒してしかも従えてしまうとはね。

いやあー死者への絶対命令権とは恐ろしいものね。

弱っていたとはいえ古龍を隷属させられるのだから。」

「貴女は……貴女は何をやったかわかっているんですか!?

下手したらあの三体の魂が消滅してもおかしくはないのですよ!!」

「ふふっ、確かにその可能性はあったわね。

でも私は貴女を試したかったのもあるし別に消滅しても私の血が完全に消滅するわ

けではないもの。

そうしたら散った欠片を血に集めれば元通り。」

すると少女は私が回収しきれなかったあの三体の魂欠片を簡単に集めきつてあっさり修復してしまった。

彼女は一体……………

「貴女は一体何者なのですか！完全に霧散した魂の欠片を修復するなど魂を扱う我々ですら不可能です。」

それに貴女の血を分けた古龍？

色々と聞きたいことはありますが貴女の目的は一体なんなのですか！」

「私の目的……………ね、そうね。」

貴女はこの試練の勝者だしね。

貴女には知るべき権利があるわ。

まず私の目的から話すべきかしらね。

そうね、まず一番の最重要の目的としてはそうね……………まああの子、今は人間達からガイアデルムと呼ばれているあの子の邪魔をしないで欲しいのよ。

いまあの地を集っている程度の戦力ならまだ私としては問題無いのよ。

彼女達は大人り小なり我らとの関係をもつてある程度の理解もある。

どちらが勝とうともあの子に取って良い結果になるでしょうからね。

でも貴女は我らとの接点も無い上に良くも悪くも公平。

だからこそあの子の戦いに参加出来ないように邪魔をさせて貰ったわ。」

「あくまであの幻想郷を今襲っている巨大龍の為……………ですか。

ならば今貴女がけしかけた三体はどうなのです！消滅しかけるほどの無理をしているのですよ！」

「さっき言ったでしょ。

消滅した所で修復が出来るって。

それにその子達はこの間やりすぎていたからそのお仕置き。

それに貴女なら……………救うでしょ？

「例えば死んでなくても出来るだけ地獄に来ないように説教をする程のお人好しのようだし。」

「……………貴女は誰から私の事を知ったのですか？

それに試練とは一体……………」

「ふふ、そうね……………私達の世界で貴女と同じ立場の子から……………と言った所ね。」

あの方が彼女に情報を渡した？

そうなる彼女は閻魔と同等以上の権限を持っていると言うのか……………。

「次に第二の目的としてはさっき言ったあの子達のお仕置き。

それと貴女の試練の結果次第では預けようと思つてね。」

「どういう事なのです？」

私へ課した試練というのはなんなのですか！」

「そう慌てない慌てない。」

そうね、私の課した試練というのは古龍、生ける災害とも呼ばれるあの子達に対して貴女がどう対応するか、そして打ち勝つ力を見せれるのか。

更に言えば貴女が閻魔として魂に対してどのような思いやりがあるのかを試したかったと言つた所ね。

結果としては合格。

貴女は見事生態系の絶対強者であるあの子達を支配下にして魂の修復をした。

あの子達には貴女の力が入り込んでるからもう私の指示はあまり聞かないでしょうね。

貴女を自分より上の立場と認識してるみたいだし。

それに私は見てみたいのよ。

数多の竜達と共に生き始めたこの世界、その色んな者の結末をね。」

「……………つまりは私が龍との共生を行えるかを見たかった訳ですか。」

「まあ簡単に言えばそうね。

あの子達は力で上回っていないければ相手の言うことなんて聞きやしない。

あの子達に他の生き物との共生をさせようものなら誰かしらはあの子達を従えらる者が必要。

それにこの世界に来たメル・ゼナのように友好的に接せられる個体はほぼ居ないよ。

だけど一方的に従わせるだけならあの子達の為にならない。

だからこそ貴女があの子達の魂をどうするかを見せて貰ったわ。」

「……………はあ、私の所で預かるとなると獄卒達の手伝いをして貰う形になりますがよろしいですね?」

「ええ、存分にこき使ってやって構わないわ。

あの子達に人や妖魔の営みを教えて上げて頂戴。」

もしかしなくても彼女は私より上の立場の存在だ。

その彼女の決定に逆らうのは私の立場上少し難しい。

だが……………

「さしあたってはこの裁判所がしばらく使えなくなることについての補充と貴女がやらしたことに對する説教を行わせて頂きますがよろしいですね?」

ああ答えは聞く気はありませんので悪しからず。」

「やば……あ、あはは、と、とりあえず修繕については私の方で資材とかそつちに渡し
とくからは後はあの子達に手伝わせておいて頂戴！」

私は忙しいからこの辺で失礼させて貰うわね！

あはははは。」

「黒」

「あべし!?!」

私は能力を使って彼女が動けなくなる程の付加をかけて強制的に説教を聞かせる体
制にさせる。

つてか能力を限界までかけてるのにまだ動けるほど余裕があるのですかさうですか

……………

「今日は帰れると思わないでくださいね……………」

「ちよっ!?!」

私は24時間に渡って説教をしましたでしたが途中で逃げられてしまいました。

次会ったら続きをしましょう。

後日談その8 人里に馴染むモンスター達

「人里」『寺子屋』

「「けーねせんせー！一緒に遊ぼー！」」

「はいはい、今行くよ。」

全く、つい最近異変があつたばかりではあるが子供達は元気一杯だな。

そうそう、異変と言えばこの間の異変で人里に襲いに来たウルクススとラングロトラというモンスターなのだが……

「モフモフ」

「わあー、ひんやりしてるー！」

「かわいいー！」

まずウルクススはとりあえず屋根のある巣を作らせてチルノに定期的に溶けにくい氷や雪を持ってきて貰っている。

元々寒冷地に住むモンスターらしく暑すぎるとバテてしまうようだ。

だがウサギのような愛くるしい見た目から人里の者達、特に女性や子供に大人気となり、今ではウルクススを模した小物などが売られる程になっていた。

次にラングロトラなのだが……

「ゴロゴロ」

「だんごむしみたい」

「まてまて」

割と子供達の遊び相手になってくれていた。

ラングロトラはどうやら素早く移動する手段として転がるようなのだが、この子は転がる事その物が好きな所があり、子供達を引かないようにゆっくりと転がりながら遊んでくれている。

ただラングロトラは困ったことに主食が虫らしくどうしたものかと思っていたのだが、何を思ったのか一件の古い家に向かい始めたのだ。

その家は白蟻に悩まされている所であり、ラングロトラはそこに着いたら壁に爪で軽く穴を開けて長い舌を中に入れ始める。

「〜♪」

何故か妙に幸せそうな表情をしており、ラングロトラが舌を引き抜くとその舌には大量の白蟻が引っ付いていた。

そのままラングロトラは咀嚼して白蟻達を飲み込んでまた舌を入れて漁り始める。

これには里の人達も大喜びだった。

人里では基本的に全て木造建築であるというのもあり、白蟻にとっては楽園のような環境となっている。

その為里の人たちにとって白蟻はかなり悩みのたねとなっており、一度巢を作られてしまうと建物の強度に影響してくるので一度建て替えたりする必要が出てしまうのだ。

それに白蟻は家にいるのかどうか判断しにくいのもあって里の者達はかなり悩まされてきたのだが……どうやらこの子は白蟻が住んでいるかどうかを簡単に見抜いて出来るだけ建物に影響がないように一部に爪で穴を開けて舌を入れる事で白蟻を全部食べれているようだ。

もう一方のウルクススなのだが、どうやら草食性の強い雑食らしい。

なので基本的には木の実やキノコが主食のようなのだがそこに少量のタンパク源として魚や肉も与えている。

肉はすぐに食べており、その姿は熊に近いのだが木の実やキノコは一部を残して巢の雪に埋めている。

どうやら非常食として雪や地面の中に埋めて保存する習性があるらしい。

里の者がウサギならニンジンも好きかなと試しに与えてみた所……

「く〜♪（ポリポリポリポリ）」

「どうやら好物のようだった。」

「幸せそうに少しづつ噛って食べていた。」

「やはり見た目通りウサギっぽい所もあるらしい。」

「だがどうやら勇儀殿の所にいるアオアシラの近縁種らしく、熊のような特徴も持っていた。」

「四つ足でも動くようなのだが普通に二本足で立って手で掴んだものを食べたりしている。」

「ちなみに基本的には寝ているようだ。」

「パチュリー殿曰く住む地域が大幅に違うのが原因と思われるっており、冬になれば活発に動くだろうとのことだ。」

「そしてディアソルテなのだが……………」

「(い)っ(い)っ……………」

「(い)っ(い)っしてるー！」

「(い)っ(い)っにみずちよーだーいー！」

「子供達によつて全身を洗浄されていた。」

「基本的にディアソルテは土の中に潜っていたのもあつて土が至る所に付いてしまつ

ている。

その為定期的に洗浄するようになったのだが……………

私がいっつを洗ってやっている所に子供達が来て自分もやりたいと言い始めたのだ。

それで洗浄用の道具を子供達に持たせて洗わせて見ると皆楽しそうに世話をしていたのでこれはこれでアリだと思つて今後は洗う時は子供達に声をかけるようにしている。

「細かい所にも土が入り込んでからしつかり洗ってやつてくれよー?」

「はーい!!」

「zzzzzzzzzzzz」

ディアソルテは洗浄に時間がかかるのをわかっている為か寝ていた。

何だかんだで人里にモンスター達は皆馴染んでいたようだ。

だがたまに妖怪が襲ってくるのは変わらない。

でもその時にはディアソルテ、ウルクスス、ラングロトラが率先して守ってくれていて私の出番は正直少なくなっていた。

だけど昆虫型の妖怪が出た時はラングロトラが積極的に食べに行くのでこのままでラングロトラが妖怪になつてしまうのではないかと軽く心配にはなつていたのだが

……

そもそもメル・ゼナ殿も妖怪になってしまったものの特に生態には問題なかったそうなので大丈夫だろう。

それにパチュリー殿からもこの世界に来たモンスターがちよいちよい妖怪を食べているというのを聞いてから割と心配するだけ無駄なのかもしれないな。

「けーねせんせー！」

「わかったわかった。」

子供達はやっぱり今日も元気一杯だな。

後日談その9 バカルテットwithモンスター

（霧の湖）

今日はチルノ達四人がパートナーとなるとモンスター達をつれて連れて集まっていた。

チルノ、ルーミア、ミステイア、リグルの通称『バカルテット』が更に人数が増えたようなものであり、かなりの大所帯となってきた。

チルノはパートナーとしてプケプケの亜種の背中に乗り、舎弟としてベリオロスを連れている。

ベリオロスを何故舎弟に出来てるかというと実は純粹に相性の問題であった。

まずベリオロスは氷を使う攻撃と肉弾戦を主体としているのだが、まずその得意な氷に関してはチルノに当ててしまうと余計にパワーアップしてしまうのだ。

更に肉弾戦に關してもチルノが飛んでいるのもあり、得意な地上での攻撃が出来ず、飛んで突進等を仕掛けても霊夢や魔理沙に（無謀な）戦いを何度も懲りずに挑んでいるチルノからすれば避けるのは余裕だったのだ。

逆にチルノは当たらない攻撃をする事に定評があるがベリオロスは図体がデカイのでチルノの攻撃でも普通に当たる。

致命的なダメージは出せないもののチルノのように吸収したり無効化は出来ず、耐性があるだけなので少しずつではあるがダメージは蓄積していくのだ。

結果としてベリオロスの体力が無くなって疲れを見せてしまいベリオロスはチルノの軍門に下ったのだった。

次にリグルはもはや母親のような貫禄を持ち合わせてきている気がする。

パートナーというか自分の子供として青電主ライゼクスの幼体を連れてきているのだがずつと抱っこしていたり頭に乘せていたり可愛がっており、かなり親バカになり始めていた。

そしてミスティアなのだが……まさかのガイアデルム戦で召喚されたクルペッコ達と共にいた。

実はクルペッコとそのクルペッコ亜種なのだがどうやら長生きしすぎてライダーの方が先に寿命を迎えていたらしい。

そこで新天地として幻想郷に住み着くことに決めたらしくそこでバカルテットの一人であるミスティアと出会い、歌という共通の趣味によってあっさり意気投合。

結果として二匹は基本的にミスティアと行動を共にするようになっていたのであつ

た。

そして最後の一人であるルーミアなのだが……

その腕には獅子のような鬣に側頭部から前に大きく曲がりながら伸びる角、さらに古龍の多くに見られる骨格である四つ足に翼を持つ身体的な特徴。

全身がとてつもなく禍々しい黒と紫の鱗や体毛、甲殻によつて包まれたモンスター『マキリ・ノワ』の幼体を抱えていた。

二回目の吸血鬼異変からしばらくした後、成体の『マキリ・ノワ』が入り込んできており、とてつもなく焦った様子の子の紫によつてスキマによる不意打ちでルーミア同様の封印を食らつて幼体になるまで力を封印されて紫の能力により『黒の狂気』と呼ばれる災厄の力を完全封印されていたのだった。

そして幼体として幻想郷をさまよつていた所をたまたまルーミアに拾われて面倒を見られていた。

さらにチルノにいつもくっついていいる大妖精にはトピカガチと一緒に付いてきていた。

こつちについては傀異化による被害を受けて大幅に弱っていた所をチルノと大妖精によつて助けて貰つて以来ずっと付いてきていたのだ。

「皆久しぶり〜」

「久しぶり〜」

「久しぶりね〜、やつめうなぎの蒲焼きをお土産に持ってきたわよ〜」

「お腹がすいたのだ〜」

「きゅー（ぐぎゆるるるるる）」

ルーミアとマキリ・ノワはミステイアが持ってきたやつめうなぎの蒲焼きから漂う香ばしい香りによってお腹を空かせており、口からよだれが軽く見えていた。

「ああそうそう、竹林でケルビっていう鹿みたいなやつ取狩れたからそれのお肉も焼いてきたわよ。」

レバーがなんか白かったけど割と美味しいから食べてみて頂戴。」

「わーいいいただきまーす！」

「きゅー!!」

ルーミアは早速がつついており、マキリ・ノワについてもかなり大きな骨付き肉にかぶりついている。

しかし体が幼体まで縮んでいるせいかうまく噛れなくて少しずつ噛み千切って食べていた。

「もきゅもきゅ」

その姿はまるでリスが頬袋にエサを溜め込んで食べているようにも見えなくも無い。

「「ラ~~~~~~~~♪」

ミスティアとクルペッコ達による鳥トリオ……いや鳥才は歌を歌って場を楽しませる。

クルペッコの声真似はかなりのクオリティとなっており、完全にミスティアの歌声を真似することが出来ていた。

「美味しい？ライゼクス？」

「きゅー♪もきゅもきゅ……」

ライゼクスはその口一杯にやつめうなぎの蒲焼きとケルビのこんがり肉やホワイトレバーの焼き鳥風を食べていた。

その様子はマキリ・ノワと同じような光景で思わず頬を緩めてしまう。

「ベリオロス！大食い勝負よ！」

「グオウー！」

ベリオロスはチルノと何だかんだで意気投合しており、ちよくちよく何かしらの勝負や競争をして楽しんでた。

そしてプケプケの亜種はそんなチルノ達をスルーしてマイペースに顔を湖に突っ込んで水を飲んでた。

さらにトビカガチは丸まって寝ており、そこには大妖精が一緒になって眠っており、

とても微笑ましい光景を生み出していた。

バカルテットは更に騒がしくなつてはいるがいつも平和なのであった。

後日談その10 大轟竜の1日

（命蓮寺）

.....zzz.....

.....zzzzzz.....

.....zzzzzzzz.....

zzzzzzzzzzzzzzzzzzzz.....

妖怪と人間との共存を目指す命蓮寺。

そこには第三の共存を目指す象徴として妖怪でもなく、人間でもない、『モンスター』が新しく住み着いていたのだった。

「パイ!? ヒツ!? ヒビヒビ聖さん!」

「いつもその大声を無差別に響かせるのはやめなさいと言っていていますよね?」

「え!? あ……………その……………よ……………用事がまだ残っているので……………ニゲルンダア……………」

響子はなんとか『ギユピツ……………ギユピツ……………』という幻聴の聞こえそうな足音から逃れようとする。

しかし目の前の逃げ道を軽く移動したティガレックスによって塞がれる。

「あ、ティガちゃん!」

「何処へいくんですか?」

「ふ、ふえ!? いや、その、ティガちゃんと一緒に掃除してたので……………続きを……………と……………」

「一人分の掃除道具でですか?」

響事は額に滝のように汗をかき始めている。

「えーつと……………その……………許して下さい!」

すると綺麗なジャンピング土下座を決めて地面に軽くヒビを入れる響子。

なおティガレックスはとぼちりて被害を受けたくないので命蓮寺のちよつと外側

に用意された食事場に移動していた。

ティガレックスは体が大きすぎて命蓮寺の中に入れられないので一緒にご飯を食べられない為にわざわざ外で皆一緒にご飯を食べられるように用意されていたのだった。

「南無三!!」

「ごめんなさあああああああいいいいいい!!」

朝食の時間には皆が食事場に集まり、自分の席で朝食が出来上がるのを待っていた。とはいえティガレックスはあの巨体なので料理はどうするのかと思う人も多くいる。その答えとしては……

「はい、ティガレックスが獲ってきたアプトノスね。」

ティガレックスの前には自分が獲ってきたアプトノスが解体されて肉だけの状態となつて出されていた。

軽く味付けして焼いた肉と生の肉での刺身等が出されていた。

内蔵はしっかり臭みを抜いて火を通しており、骨と革以外を全部出した形となる。

ティガレックスはその巨体ゆえに精進料理を食べるとしてもとてつもない量が必要になってしまいが、用意出来たとしても栄養価がどうしても足りないらしい。

肉は全て焼いてしまおうとこれも栄養不足の原因となるため、ある程度は生で出す必要があるのだ。

そこで自分が獲ってきたアプトノス等の草食モンスターを解体して貰って出して貰い、残った革や骨等は供養するということになったのである。

自然の摂理である弱肉強食、それだけでなく、自らが狩り、食べる生き物への感謝を忘れない。

そのような形でティガレックスは命蓮寺に住まうことになったのだった。

「それではいただきましようか。」

「「「はいー!」」」

「ぐおー!」

ティガレックスは思った以上に命蓮寺での生活を満喫していたのだった。

後日談その11 ツケヒバキ達の脳内スレ

1 : 名無しのツケヒバキ (♂?)
おはよーござーます。

2 : 名無しのツケヒバキ (♀?)
おそよーござーますの間違いじゃw w

3 : 名無しのツケヒバキ (♂?)
よし、白子を捧げろ、かあちゃんの今日のおやつにしてやる。

4 : 名無しのツケヒバキ (♂?)

H A · N A · S E !

待つて待つてマジでやめて!?

母上に捧げないで!?! 比喩的に食われるんじゃないやなくて物理的に白子食い千切られるか

らあ!?

5 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

あんたも私達のように食われて生まれ変わって兵士になるのよ……

6 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

私達は何故か死んでも母上が産んで復活するからなあ。

どうなってんだこれ?

7 : 名無しのツケヒバキ (♂?)

なお性別はランダムな模様。

俺ちゃんは前世♂? だったから変わってないけど。(なお死因はおやつにされた。)

8 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

神は言っている……ここで死ぬ定めだと……

9 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

まあ全員数回死んでるんだけどね……………妖怪に喰われたりされちゃうし。

10：名無しのツケヒバキ（♂?）

それなー、♂?はご飯にされる運命だから確実に死ぬけど♀?は成長ちゃんと出来ればヤツカダキになれるからなあ……………

（なお戦闘力は限りなく低い模様）

11：名無しのツケヒバキ（♀?）

しっかし我らモンハン世界のモンスなのに今は……………

東方Projectの世界にいるんだよなあ……………

12：名無しのツケヒバキ（♂?）

アリスちゃんになら白子捧げてもいいや……………

13：名無しのツケヒバキ（♀?）

おし、誰かそいつ拘束しろ、白子を斬り飛ばして焼いてアリスちゃんと喰ってやる。

14：名無しのツケヒバキ（♂？）

HA・NA・SE

ヤメローシニタクナイシニタクナイ
キヤー!?しずかちゃんのエツチ〜!

15：名無しのツケヒバキ（♂？）

こめん……………いま白子を斬り飛ばそうと触ってるの俺なのよ……………。
てなわけで

やらないか

16：名無しのツケヒバキ（♂？）

ウホツ♂? 良い男……………つてならねえよ!?
ぎやああああああああ!!?

ワシの黄金のボール片方斬り飛ばされたあ!!?

17：名無しのツケヒバキ（♀？）

黄金の? 思いつきり白いんですけど……………。

それに我々の♂?は白子のような味わいっただけであって白子が珍味ってわけじゃないんだが……………

とりあえずアリスちゃんにチャーシューの縛り方して捧げてくるわ。

18 : 名無しのツケヒバキ (♂?)

あつ……………まって母上!?

あつちよつ!?!爪で引つ搔けてうわなにをするヤメロオ!?

アーツ!?!まってまってその大きなお口を息子に向けて!?!

逝つちやうううううううう!?!?

アツ……………

19 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

おおう、母上豪快にかじりついてポリポリ食べてるなあ。

まあでも白子が一番美味しい部位ではあるんよなあ♂?どもは。

20 : 名無しのツケヒバキ (♀?)

オンニヤノコになっちゃった……………

21：名無しのツケヒバキ（♂?）

お？今回は転生速いな。

ちなみに囁られている自分を見ている感想は？

22：名無しのツケヒバキ（♀?）

すごく……美味しそうです。

23：名無しのツケヒバキ（♀?）

まあ実際に美味しいのは事実だからなあ。

24：名無しのツケヒバキ（♀?）

あの……アリス氏が白子捧げられて物理的に喰われてる♂?を見て顔がひきつって
るんですがそれは……

25：名無しのツケヒバキ（♂?）

よーし、焼くか。

肉焼きセット準備完了！

アッ！

26：名無しのツケヒバキ（♀？）

よーし今度は貴様が我らのご飯じゃ！

簀巻きにしてセットしてと。

ぐるぐる

27：名無しのツケヒバキ（♀？）

点火！

デンwデンwデデデデンwデデンwデデデw

デデデンwデデデンwデデデンwデデデンwデデデデデンw

28：名無しのツケヒバキ（♀？）

たくさん上手に焼きましたー！

一匹だけど。

29：名無しのツケヒバキ（♂？）

3rdじゃねえか!?

つかワイの目の前でやらんでくれ………思わずひゅんってしたわ。

30：名無しのツケヒバキ（♂?）

諦メロン。

どのみち♂?は食べられる運命だ。

ワシもはやく♀?に産まれ直して食べたいなあ………

31：名無しのツケヒバキ（♀?）

なんかワシらツケヒバキになってから共食いに抵抗なくなったよなあ。

あ、畏になんか引ッ掛かってる

32：名無しのツケヒバキ（♀?）

ほんそれ、ついでに人に色気を感じなくなったよなあ。

んでなにかかった?

33：名無しのツケヒバキ（♀?）

影狼ちゃんがスカート必死に押さええながら逆さ吊りになつてら。

簀巻きと亀甲縛りどっちにする？

34：名無しのツケヒバキ（♂？）

亀甲はやめて差し上げろwww

35：名無しのツケヒバキ（♂？）

簀巻きで

36：名無しのツケヒバキ（♀？）

簀巻き

37：名無しのツケヒバキ（♂？）

海老反りで吊るそうぜwww

38：名無しのツケヒバキ（♀？）

りよ、簀巻きで海老反りね。

39：名無しのツケヒバキ（♂？）
つらそうだなw

ツケヒバキ達は今日も今日とて食べられながら生き続ける。

後日談その12 アリスから見たツケヒバキ達

『魔法の森』『アリス邸』

今日はツケヒバキとその親であるヤツカダキの観察をしてみようと思う。とりあえず元から分かっている事がある程度先に纏めてみようと思うわ。

まず一つ目はヤツカダキという大型の個体になれるのは雌のみ、つまり女王蜘蛛と呼ばれるような形の個体ということ。

どうやらこの辺の生態としては蟻や蜂に近いところがあり、女王が大量の卵を産み、雌は兵士として、雄はただ交尾する為だけに存在するみたいで雄の個体はそもそも成長させてもツケヒバキのままらしい。

これはパチュリーの所で聞いた話ではあるが実際雄個体に対する扱いはかなり厳しい。

特に交尾を終えた雄の個体についてはそのまま剥がれ落ちて死んでしまうというものもある。

更に割と躊躇無く共食いをする。

と言つても雌同士で共食いをするというわけではなく、そのまま剥がれ落ちた雄の個体を食べたり、交尾前の個体をバリバリ生きたまま食べている所をそれなりに目撃する。

可哀想だと思わなくは無いのだがパチュリーから借りた生態調査書曰くヤツカダキやツケヒバキにとつてかなり貴重なタンパク源のようだ。

ただたまに死んだ雄個体か簀巻きにされた雄個体を私に献上してくるので困惑しているわ。

いやまあ確かに美味しい珍味とは聞いているのだけれどさすがに巨大な蜘蛛を食べるのは抵抗あるわよ……………

それになんか今日は暴れてる雄を縛ってなにかを切り落として私に献上してきたけど……………これ多分精巢よね……………

今までは糸だけ貰つてパチュリーにあげていた

けどいい加減献上されているのだし食べるべきなのかしらね……………

すると目の前に暴れる雄を簀巻きにしたツケヒバキがやってきた。

ちようど献上してきたのかな？と思つたら……………キャンプで肉を回しながら焼く

ような台を作り、下に置いた薪や木の葉に着火していた。

あれ？あの娘って迷いの竹林に住んでたんじやなかったかしら？

するとツケヒバキが罾の設置してある木を登って影狼の上に降りる

「ヒツ!?! ってそこにいるのアリスじやない!?! 見てないで助けなさいよ!?!」

「だから今ツケヒバキが罾を……………ってあらう?」

ツケヒバキが罾を解除する所か簀巻きにして海老反りの姿勢にして拘束し始めた。

「解除する所かひどくなってるんだけどお!」

「ってかこの体制結構辛いからホントにどうかしてちようだい!?!」

うーん、そういわれても……………って珍しいわね?

確かツケヒバキ達は私の言葉とか普通に理解しているように見えていたのだけど

……………影狼をエサと認識しているのか脅威と認識しているのか……………

でもちよくちよく悪ふざけをしているところも見るところのパターンもあるのよ

……………

するとツケヒバキが親のヤツカダキを連れてきた。

「キキイ?」

「ギヤアアアアアアア?!?!なにその妖怪!?!蜘蛛!?!土蜘蛛!?!牛鬼!?! ってか本気で助けて

ちようだいよ!?!つかアリス!?!いつの間にかこんな飼いの始めたのよ!?!」

うーん、仕方ないわね……………

と思つたらヤツカダキが吊るしている部分を切つて腹部の鍵針に引っかけた。

「あら？運んでくれるの？」

「キィ！」

「ありがとう。」

まあ影狼がなんでここにいるのかも知りたいところだったしそのまま連れて行きましようか。」

「待つて!!話す!ちゃんと話すから本気でこれ解いて!!」

「なんか知らないけどツケヒバキ達が貴女を警戒してるっぽいからこのままいくわよ。」

ギャーギャー騒がしい影狼をひっさげて私達はとりあえず家まで向かうのだった。

「んで?なんでこんなとこに来ているのよ?」

「正確には魔理沙に頼ろうと思つて来たのよ……今迷いの竹林に肉食の巨大な化物が何体も住んでて妖怪がかなりの数食べられてるからどうにかして貰いたくて……でもここまで来る間に何体も見かけたしなんなのよもう……幻想郷に何が起きてるのよ?」

「……………貴女新聞とか読まないの?」

「マスゴミのやつ信憑性薄いじゃないの……………」

それにこの間変なのに噛まれてずっと意識が朦朧としてたからなにが起きてたのかわく分らないのよ……」

成る程ね、傀異化していたのね………つてか竹林に住む巨大な化物つて多分………私は今迷いの竹林を住みかにする夫婦の籠を思い浮かべて軽く呆れたのだった。

後日談その13
リオ夫婦の1日

「迷いの竹林」『妹紅の家』

「グウルル……………」

「よー！リオレイア、今日も卵を暖めているのか？」

「グウ…………（コクリツ）」

あの異変の少し後リオレイア灼熱種は卵いくつか私の家の隣に作った巣に産んでいった。

ただ卵を産んだ当時はかなり衰弱しており、一度永琳に出向いて貰って診察してもらった程だ。

結果としては卵を産む時にかなりの量の栄養を持っていかれるらしく、軽く栄養失調気味らしい。

リオレウス豪火種は餌を取りに行く為に迷いの竹林でちよくちよく幻想入りしているファンゴというかなり大きな猪やケルビという青や緑色の毛皮の鹿、それと竹林の外

側でよく笹を食べてるリモセトスなんかを狩っていた。

巢に戻って全てリオレイア灼熱種に渡すと今度は次の獲物を狩るためにまたすぐに飛び立っていく。

おそらくリオレウスもリオレイアの不調の原因に気づいてるのだろうな……………。

本人事態は自分の餌は狩りの途中で食べているらしいので私は割と安心してリオレイアの世話をしていたりする。

ただたまに妖怪を持つてくるときがあるのでそのときはストップしている。

たまに毒があるやつとかいるしな……………。

「しっかしずつと卵を暖めなきゃいけないって考えると大変だよな……………リオレイア？ お前辛いのか？」

「グウラ……………」

リオレイアは首を横に振って翼で愛おしそうに卵を撫でている。

それにパチュリーからもらった生態調査書ってやつを翻訳した物にはリオレイアとリオレウスは卵を産む時期は餌が不足しやすく、どうしてもリオレイアも狩りにいかないと行けない場合が殆どらしく、私はそれを止めて私も獲物を狩って持つていく事できるようにかなっている。

ただ……………リオレウスの負担がデカくなってからそこはもう少しどうにかしてや

りたいところだけだな。

リオレイアが水分補給する時はさすがに出かける必要があるの、その時は私が卵を軽く暖めながら見張りを行う。

割と大変なんだよなあこれ……あいつらって体温めちやくちや高いけど周囲が燃えない程度に炎の温度を調整しなくちやいけないし。

夜になるとリオレイウスが帰ってきてリオレイアと過ごしてから眠りにつくのだがちよくちよく翌日にリオレイウスがげっそりしている時がある。

やはり狩りの負担が大きいのかも知れないな。

逆にリオレイアは疲労を見せてはいるがすごく満足そうにしている。

リオレイアであっても比較的安全に子育て出来るこの環境がとても気に入っているのだろう。

それと番といえばこの迷いの竹林では一応風神龍イブシマキヒコと雷神龍ナルハタタヒメもいる。

あいつらも今は卵を抱えているらしく、雷神龍の腹部にその卵があるらしい。

それと古龍というのは自分の活動エネルギーを地脈や龍脈といった所から補給しているらしく、食事は精々ケルビー一匹やファンゴ一匹で事足りるらしい。と言っても生命維持には殆ど必要ではなく、身体の成長や卵の生成に必要というだけらしい。

「あいつらのいる周辺は環境がちよつと変化しすぎているのでリオレウスとリオレイアには出来るだけ近付かないように言い聞かせていた。

「あら、妹紅じゃない。」

「今日もリオレイアの世話で忙しそうね。」

「あ？輝夜か……お前さんもジンオウガの散歩か？」

「ワン！」

「おお、お前さんは今日も元気がいいな。」

「一応狩りもあるけどね、と言ってもジンオウガの場合共生しているこの虫が生命維持の要になってるからこの虫の餌とジンオウガが個人的に食べたいやつ、それと私達のご飯の肉の確保って所ね。」

「なるほどな……あ、タケノコ持っててくか？」

「あら？良いのかしら？」

「別に構わないよ、採ってくだけならすぐだしな。」

「ありがとう、今日のご飯は良い感じになりそうね。」

私と輝夜はお互いモンスターの世話をするようになってから停戦するようになった。

元々お互いの暇潰しの面もあったが殺りあつたらお互い半日は殺し合いを続けて世話どころの話じゃ無くなるからだ。

しかも輝夜のやつジンオウガの力で不死身さがめっちゃ増してやがるから以前に比べて殺しきるまでにめちゃくちゃ時間がかかっちゃうようになったしな。

まあでもちよいちよい殺し合いではなく弾幕勝負はやってるからその辺はいつも通りだな。

「ワオオオオオオオオオオオン!!!」

「グウララ……………」

それとジンオウガはリオレイアが卵を産んでからちよくちよくこつちに遊びに来るようになっていて自分の操る生命エネルギーを卵やリオレイアに分けてくれているようだ。

永琳の見立てではジンオウガの影響もあって卵の孵化は相当早くなるらしい。

そして輝夜が帰って少ししたくらいの時なのだが…………。

「早く生まれて欲しいもんだな……………」

「グウルルラ……………グオツ!」

「どうした!? リオレイア……………って卵が!」

そう言ってるそばから卵の一つに罅が入り始めた。

私達は見守るしかない。

この卵の殻は中にいる赤子が自分で破らないとダメらしい。

「頑張れよ……頑張れよ……」

すると更に罅が入ってついに卵が破られたんだが……

「ピーッ!?ピーッ!?ピーッ!?!」

産まれたヒナは……頭に殻を被ってしまったっており、目の前が見えず必死に取ろうとしているが身体が引つ掛かって取れないようだ。

とりあえず私が抱えてリオレイアが殻を取ってあげている。

どうやらリオレイアっぽい特徴の緑色の子供が産まれたようだ。

これからどんどん生まれていくであろう子供達に私達は胸を踊らせるのだった。

後日談その14

二頭のラージャン

く地底く『萃香の家』

ぐおおおおお………

ぐがああああ………

ボリボリ………

巨大なイビキを立てながら腹を掻いて寝ている音が響く……

普通は音の大きさが大きいことから人や鬼等ではなくモンスターが寝ている時のイ

ビキだと思うだろう………。

しかしその音を実際に出していたのは………

ぐおおおおお………

ぐがああああ………

ぐおおおおお………

ぐがああああ………

ボリボリ……………

横に延びる巨大な角が特徴の力強い存在、ラージャン……………

に見えなくもない『伊吹 萃香』であった。

そしてイビキを出して腹を掻きながら寝相が悪く、片手には酒。

その姿はもはや休日のオッサンにしか見えないのであった。

カンカンカンカン！

「んあ？」

フライパンとお玉を叩くことによって甲高い金属音が鳴り響きその煩さから萃香は思わず目を覚ます。

今の萃香には同居人……………というか同居するモンスターがおり、そのモンスターは先端がふさふさとした尻尾を揺らしながら片手には大きめの中華鍋、もう片方にはお玉を手に持ち黒い体毛と可愛らしいフリフリのフリルが付いているピンク色のハートエプロンに身を包んだ萃香より大きな角が特徴のモンスター……………

ラージャン（家事の姿）であった。

「ぐおおおおー」

「んんんううう………おはようラージャン………ぐびっ」

萃香はここ最近はずつとラージャンによつて起こして貰っていた。

いつもならこの自宅にはあまり帰らないのだが新しく同居人としてラージャンが来てからと言うものちよくちよく自宅の方で眠るようになっていたのだ。

しかし萃香の眠る＝泥酔な為にいつもラージャンが起こしにいかないと昼頃まで眠っているのだ。

そして萃香は寝起きに一杯酒を飲む。

鬼というのは確かに酒好きだが、四六時中ずつと飲んでいるのは萃香と勇儀くらいだったのだ。

とはいえ勇儀はちゃんと迷惑を「たまに」しかかけない飲み方をしているので良いのだが、萃香は基本的に24時間酔っぱらっているのがデフォルトなので基本的に迷惑を「頻繁に」かけていた。

とはいえ家事をするようになったラージャンはもはやいつもの事と割りきっており、最近になって目覚めた趣味の料理に力を注ぐのであった。

ラージャンは味覚としては一応人間に近い感覚を持っており、萃香から飯として木の実や生の肉とか出はなく料理を出された時はどうやって食べるのか分からず軽く戸

感ったのだがいぎ食べてみると今まで食べてきたどんな物よりも複雑な味に軽く感動していたりしたのだ。

それからと言うものラージャンはたまに紅魔館に通つて美鈴に気功を教えて貰うついでに咲夜に料理を教わつていた。

ちなみに今日の朝御飯はラージャンが地底の市場で仕入れた”サシミウオの塩焼き”。

ワカメに豆腐、ネギの入ったオーソドックスな”味噌汁”。

土鍋でラージャンが炊いた”玄米”。

ラージャンが自分で作った特製の”ぬか漬け”。

最後に”冷奴”。

というかなり健康的なメニューとなつていた。

「おおお……今日も美味そうじゃないか！

ほら、ラージャンも座つて食べようじゃないか。」

萃香はテーブルの前に座つて日本酒を取り出す。

ラージャンは自分で緑茶を入れてきていた。

「いただきますーすー！」

「ぐおおおおおー！」

ラージャンはモンスターなので言葉こそ話せないがちゃんと合掌をしてから食べており、すっかり日本文化に馴染んでいたのだった。

「あ、ラージャン〜今日は勇儀が遊びに来るからどうせ宴会になるだろうしおつまみ作つていて〜」

「ぐおう……………」

ラージャンはまたか……………という表情になっているが、割と毎日の事なのもあつて割と慣れていたのであった。

「んんんううう♪美味〜♪」

サシミウオっていったっけか？お前の所の世界の食材ってホントにただ齧るだけとか軽く焼いたりしたただけでめちやくちや美味しいのが多いよなあ。」

「ぐおうぐおう。」

そう、龍世界の食材はかなり奇妙な食材も多いのだがそのどれもが日本の高級食材に全く負けないほどのとてつもないポテンシャルを持っているのだ。

ハンターにこんがり肉やこんがり魚といったただ焼いただけの物が好まれる理由もこの圧倒的な旨みにより調味料の類いが殆どいらなからというのがある。

ちなみにサシミウオなのだが地底の池に普通に生息するようになっていた。

これも異変の影響が強く、植物や鉱石、魚等が龍世界の物が多く入ってくるように

なっていたのだ。

ちなみにラージャンが好きなのは唐揚げだったりするので冷蔵庫にはつまみ用以外にも自分で食べるように下味として調味液に浸けている鶏もも肉がいくつかあったりするのが………。だいたい毎日の宴会で全部無くなつてはその日の夜にラージャン新しく漬けて込んでいたのだった。

「ごちそーさまー、今日も美味かったよ♪あ、皿洗いお願いね〜」
「……………ぐお。」

もはや萃香の家の家政婦となっていたラージャンだったが、もはやこの生活にかなり慣れてしまっていたのだった。

後日談その15 ゴア・マガラは遊びたい

〜マヨヒガ〜

「紫しやまゝ藍しやまゝタママミツネさん達と遊んでくるです〜!」

「ちええええええん! 気を付けて行くんだよ!」

「グフツ………いつてらっしやい、橙。」

「きゅ〜!」

橙はタママミツネの親子と一度遊んでから毎日のように妖怪の山へと遊びに行つてくるようになっていた。

お弁当には藍特性のいなり寿司をたっぷり詰めており、これもタママミツネ達と食べるつもりらしい。

「しかし橙もすっかりモンスター達と遊ぶのが日課になってきましたね。」

「あれもあれで私の胃痛の原因の一つなのだけれど?」

「結界を新しくしたのはずなのにどんどん入ってくる度抜けて来ましたからね。」

「何故あそこまで大量に入り込んでいるのか……………」

「いったい何が原因なのか……………」

あの異変以降、ガイアデルムにも手伝って貰い、今までより数倍の強度を誇る結界の構築に成功していた。

ただ異変の後でも幻想入りするモンスターはどんどん増えており、紫達は原因を掴めないでいた。

ただガイアデルムは何か予想がついているらしいのだが『我らが祖には逆らえぬ』としか教えてくれてないので今はその祖とされる存在を調べている最中だった。

「きゅー！」

するとゴア・マガラが紫の膝の上に乗って丸くなる。

「ああ、ごめんなさいね。」

貴方には退屈だったかしらね。」

「きゅー……………」

ゴア・マガラは紫に撫でられながら答える。

異変からそれなりの月日が立っているのもあつてゴア・マガラもそれなりに大きくなつてはいたのだが、まだ生後一年もしていないためにまだまだ遊んだり甘えたりしたらしい。

とはいえ式となつて最低限の知識を与えられているので紫達がどれだけ忙しいのか等は理解していたりする。

だからこそなかなか遊んで貰えないゴア・マガラは少し寂しく思っていた。

「うーん、現状解決が見えないものをずっと考えるよりはこの子に構つてあげる方が良いかしらね。」

「確かにそうかもしれないですね。」

それにしてもこの子は自棄に紫様に懐いていますね。

私も遊んであげたりはしていますけど紫様がいらつしやるとそつちにすぐに向かつてしまいます。」

「ちなみにこの子はここを撫でて貰うのが好きみたいよ？」

「うりうりうりく。」

「きゅ〜♪」

紫はゴア・マガラの触覚がある付近を優しく撫でる。

ゴア・マガラは身をよじりながら翼脚で紫の手をつかんで体を擦り付ける。

「私が遊んであげる時は基本的に尻尾の中に埋まってきましたね。」

「橙も私の尻尾が特に好きなようですしやっぱり何かしら魅力的に見えるものなのですかね？」

「そうね、私は自重してたけどやっぱりその尻尾はかなりもふってみたいわね。ただでさえ柔らかかそうな狐の尻尾が9本もあるんですもの。」

一度で良いから中に埋もれてみたい気持ちは分かるわ。」

「きゅーきゅー♪」

「うひゃあ!?」……ゴア・マガラか?いきなり尻尾に飛びかからないでくれ。

驚いてしまったじゃないか。」

ゴア・マガラは目の前でゆらゆらと揺れる9本の尻尾に我慢しきれずに突撃する。

驚いた藍がその衝撃で尻尾を閉じるような形で固まり、ゴア・マガラが完全に尻尾に埋もれて隠れてしまう。

だがゴア・マガラはもともと尻尾のなかを動いて気持ち良さそうにしていた。

「360°。どの方向にも尻尾って……寝たら気持ち良さそうね。」

「実際たまに尻尾の中で寝てるときはそれなりにありますよ?」

ただ燐粉が大量に尻尾に絡まるのでその後尻尾がキラキラしますけど。」

「ふふ、それだけ私達の事を家族として認識してるってことじゃないかしら?」

式にしたせいか本来習性のない行動が多く見受けられるからこの子だけが特別なかもれないわね。

ゴア・マガラという種族は本来親と言える者はいない上に生まれた時から一人で生き

「あ、やっぱりそうなのね。」

まあこつちからじゃ見れないからあんまり実感無いのだけどね。」

「きゅきゅー！」

するとゴア・マガラが紫の頭をペチペチと叩いてボールの置いてある方向に翼脚を向ける。

「はいはい、これで遊んでほしいのね。」

「私も人の事を言えませんが子供には甘くなってしまうますよね。」

「そうね。」

「きゅーー！」

八雲一家では橙と一緒にゴア・マガラが溺愛されていたのだった。

後日談その16

風雷神の夫婦生活

く迷いの竹林く

古龍

それはただそこに存在するだけで災害を引き起こす程のエネルギーを持った存在である。

ただ番となる個体と出会う為に移動し、その副次的な災害で百竜夜行を引き起こし、ついにはボロボロにされて逃げるしかなかった『イブシマキヒコ』

番を待っていただけなのにとぼつちりで攻撃されて地下深くに落とされた『ナルハタタヒメ』

対となる二頭の古龍はついに出会い、ハンターがそれに気付いて討伐に向くタイミングで二頭は召喚によりある世界に飛ばされたのだった。

嫁にしばかれているタイミングで……………

く迷いの竹林く『永遠亭』

その頃永琳はモンスター達のカルテを整理していた。

「さて、時期的にそろそろあの風雷神夫妻の健康診断かしらね。」

永琳はモンスターの生態の中でも古龍は生物としてかなり歪な側面を持っている為にカルテを取りながら軽く調べたりしていた。

結果として古龍には呼吸がそこまで必要ではなく、食事による栄養摂取は殆どいらないという事だ。

しかしヤマクライ等の超大型古龍はその口で山の一角ごと生物を喰らい、エネルギーを摂取している。

しかしこれは体内で共生しているバクテリアにエネルギーを摂取させ、自分はそのバクテリアからエネルギーを貰うという共生によって生まれる行動らしい。

この通り古龍というのは分かっている行動がかなり多かったりする。

最近だとナルハタタヒメやイブシマキヒコが食事をするようになり始めたので何が原因なのか少し調べたりしていた。

「とりあえず今日の診察で何か分かるかしらね？」

永琳は診察に向かうために弟子のうどんげに仕事を（無理矢理）押し付けて留守番をナルガクルガ希少種に任せて禁足地へと向かうのだった。

禁足地へとたどり着いた永琳は周囲を吹き荒れる暴風が以前に訪れた時に比べてかなり弱くなっており、逆に雷鳴がとてつもない強さで轟き、磁場が強く乱れている事に気付いていた。

「あの二頭になにかあったのかしら？」

この異常気象の原因は風神龍イブシマキヒコと雷神龍ナルハタタヒメがただそこに存在するだけで引き起こす物であり、二頭の体調によってその強さが若干異なるらしいのだが今日は特におかしい。

そして禁足地の奥にて二頭の番を見つけたのだが……………

雄の個体であるイブシマキヒコがカラツカラに枯れた状態で白目を剥いて死にかけており、軽くピクピクツと痙攣をしている。

ギリギリ生きてはいると分かるのだが誰がどうみても死にかけていた。

逆に雌の個体だとナルハタタヒメはなんだが艶々しており、機嫌がよさそうに周囲を

飛んでおり、永琳は声をかけるために一緒に飛び始める。

そしてナルハタタヒメの近くまで飛んで気付いたのだが、ナルハタタヒメの腹部の雷電袋に違和感があることに気づいた。

腹部に小さい球体が複数透けて見えているのに気付कि、イブシマキヒコに何があつたのかを察したのだった。

「ああ……………この時期が繁殖期だから二匹とも食事をするようになったのね……………」

イブシマキヒコもなんとというか……………お疲れ様。」

「……………(ピクピクツ)」

「キュオオオオオオオオオオ」

「とりあえず卵を無事産めたようね、腹部の雷電袋に産むのは外的から守る為って所かしら?。」

それに殆ど食事を取らない古龍が食事を取るのは繁殖期になるから子供を身体を作るためのたんぱく質等が必要になるのだろう。

これにより子供の血肉を生成して自身の古龍としてのエネルギーを注ぐことでおそらく古龍というのは産まれるて見ている。

「とりあえず比較的精力がつく食べ物の後で貴方達に送っておくわね。」

「ギュオツ!? (ガクガクブルブル)」

「キユオオオオオオオオオオオ♪」

イブシマキヒコは恐怖によって身体を震えさせており、軽く絶望した表情をしている。

ナルハタタヒメは獲物を見る目でイブシマキヒコを見つめながら喜ぶ。

「ごめんなさいね……………私……………こういうのを見ると余計なことしたくなっちゃうの

……………まあ貴方達の健康も考えたものを送るから安心なさい。」

翌日、さらにげっそりしたイブシマキヒコが発見されたらしい。

後日談その17 マスゴミの天狗コンビ

く妖怪の山く『文の自宅』

「うーむ、異変が終わってからと言うもの……なかなか特ダネが無いですね。」

ガイアデルムの記事は凄い評判出まくってたんですけどねえ……………」

「ウキツ！ムシヤムシヤ……………」

マスゴミこと射命丸 文の自宅には今は二匹の同居人……というかモンスターがいる。

嘴のある猿のような頭部をしており尻尾の先は何かを掴めるように手のような形状になっている。

腕には翼もあるので滑空も可能だ。

その天狗のような出で立ちから天狗獣ビシユテングと呼ばれている。

なお、ビシユテングの好物は基本的にデカデカ柿と呼ばれる巨大な柿であり、一緒に住んでいる文もちよいちよいち一緒に食べていた。

「ここは靈夢さんの所に住んでいるガイアデルムの盗撮でもしてネタを確保するべきか……今でもガイアデルムの記事は信仰の關係でそこそこ評判が良いんですよえ。」

「ウキキツ」

「あ、ありがとうございます、この柿割と美味しいんですよ……ガガツ!」

マスゴミは天狗獸ビシュテングとその亜種によって渡された柿を口にして麻痺する。

「ガ……ガガ……」

「ウーキツキツキツキツ!」

「ウキヤーツキヤツキヤツキヤツ!」

ビシュテング達は文を指差して大笑いしている。

文が口にした柿はデカデカ柿よりちよつと黄色っぽくなっているため見た目では分かりにくいのが別の柿で、ビリビリ柿と呼ばれる果汁に麻痺毒を大量に含んだ柿である。

この柿は例え大型モンスターですら直にいくと麻痺してしまいかねない代物であり、実を思い切り砕く事によって果汁が霧散して麻痺毒の霧を生み出すものだったりする。「なんつうもんをををを……」

マスゴミは呂律すらまともに回らない程に麻痺するが少しすると回復する。

「ウキツ!ウキヤキヤ!ウキヤ!」

するとビシュテング亜種は頭を指差して首を振って外を尻尾で指している。

「え？頭ですつと考えても仕方ないから外に出て動けつて事ですか？」

「ウキッ！」

ビシュテンゴ亜種は首を縦に振る。

なお後ろでは原種の方のビシュテンゴが柿を食べていた。

「はあ………貴殿方に元氣付けられるとは思いませんでしたよ。」

まあそれはそれとしてさつきとんでもないもん喰わせてくれたお礼をしましょうか。」

「ウキッ!?」

「ウキヤ!?!」

文は何処からともなく小さな柿を取り出す。

これは龍世界には存在せず地球側の世界に存在する方の柿である。

そしてこっちの柿は大きく分けて二種類ある。

普通に食べても甘い甘柿と………とてつもない渋みを持つ渋柿だ。

渋柿は干せば甘い干し柿になるがなにもしてない状態で食べると悶絶する程に渋いのだ。

そして文は個人が食べる分で渋柿をちよくちよく取ってきており、今取り出したのはまだ干してない渋柿である。

せて新しい柿を作るのにしばらくの間ハマってしまっていたのであった。

とはいえ自分の仕事もあるのでネタ集めの取材という名目のストーキングや盗撮等は欠かさず行い、霊夢によって制裁を定期的に受けるマスゴミと天狗獣達だった……。

後日談その18

棘の竜と人形の少女

く無名の丘く『鈴蘭畑』

「……………zzzzZZZZZZ……………zzzzZZZZZZ……………zzzzZZZZZZ

無名の丘

妖怪の山とは正反対の方向にある低い山にある草原であり、春過ぎになると鈴蘭の花が咲き誇る。

博麗大結界ができる以前、まだ名付け前の名無しの幼子を鈴蘭の毒気で安楽死させて間引きに来ていた場所であり、その鈴蘭畑には一体の竜と一匹の人形の少女がいた。

「ぴーさん！ぴーさん！起きてえ!!」

「むにゃむにゃ……………zzzzZZZZZZ」

「むー！！おー！！きーてー！！」飯の時間だよー！！

捨てられた人形が鈴蘭の毒を取り込んで動くようになった人形の少女、メデイスン。

メランコリーは最近鈴蘭畑と一緒に住み着くようになった竜、棘竜エスピナス迪異種と呼ばれる劇毒の竜だ。

メデイスンはエスピナスと一緒に住み着くようになってからはエスピナスのことをぴーさんと呼んでおり、エスピナスもメデイスンとは家族のように接していた。

だがメデイスンにはエスピナスにちよつとだけ不満が少しだけあった。

それは……………

「起きてよおおおおおおお!!」

「ぐお……………zzzzzzzzzz」

「なんで寝るの!?!今一瞬起きたでしょ!?!寝ないでええええええええええ!?!」

とてつもなく寝坊助なのだ。

エスピナスという竜は種族的な特徴として兎に角寝るのが好きな種族であり、ここまですぐに寝るのにも理由がある。

エスピナスという竜はその圧倒的なまでの堅さを誇る強靱な甲殻と麻痺毒と神経毒の二種類の毒により天敵らしい天敵がハンターくらいしか居ないので自然界に住むエスピナスはどんな環境でも安心して昼寝出来てしまうのだ。

エスピナス自体も寝るのが好きな個体も多く、食事の時や喉が乾いた時くらいでしか基本的に起きないのだ。

「ぐあああああああはふ……………クルルル……………」

「もおー！やつと起きた〜!!」

「お弁当沢山貰ったから一緒に食べよ!」

エスピナスは基本的に適当な時間に起きて妖怪の山方面で虫系の妖怪を探して食べている事が多くあまりメデイスンと一緒に食事をする事はそんなに無かったのだが、今日はメデイスンがたまたま毒を提供しに行った永遠亭で永琳がエスピナスがどのような食事をするか正確に調べてみたいということで一緒に食事出来るように大量の弁当を作って渡してくれたのだ。

ただし運ばされたのは全部うどんげであるが。

「はい、ピーさんあ〜んして!」

「ぐおああああむぐむぐむぐ……………」

エスピナスは昆虫中心の肉食なのだがこの世界には主食として食べられそうなのが妖怪くらいしか無いために最近では山菜や木の実など食べられそうな物はだいたい食べるようになっていた。

「美味しい?」

「ぐお」

エスピナスはお礼とばかりにメデイスンにすり寄る、その際に身体のとゲがメデイスンに刺さらないように気を付けてはいるのでメデイスン自体に傷がつくことはない。

「ありがとーはむ……………むぐむぐ……………んんん、確かに美味しいねこれ！もつと一緒に食べようー！」

「ぐお」

エスピナスは物を掴んで食べるといった事を出来る身体の構造をしていない為基本的にはメデイスンが口に放り込む形にはなるのだがエスピナス自身は喜んで食べており、最終的に食べ終わると鈴蘭畑の周りをぐるぐると回るようにゆっくりと歩き始める。

「どうしたのびーさん？」

「ぐおおおお！」

エスピナスは鈴蘭の花を尻尾と頭で囲んで守るように丸くなる。

「鈴蘭畑を守るってこと？」

「ぐお」

「何か来ているの？」

「ぐおおお！」

エスピナスは食事を終えた後に何か奇妙な気配を感じており、友人であり家族でもあるメデイスンが大事に育てている鈴蘭畑を守る為に警戒をしていた。

本来エスピナスは単独で行動するモンスターなのだがこのエスピナスはメデイスンとずっと住んでいた影響でメデイスンと同じ場所に住む仲間と認識するようになっていたのだ。

だがエスピナス自身は寝てるところを起こしに来るのは少しだけ困ってはいたがそんななにしては居なかつたりする。

すると上空にマスゴミの姿が見える。

「ぐへへへ………モンスターにお弁当をあげる少女ですかあ………これはなかなか面白い記事が書けそうですよお………ぐへへへ………ぐへへへ………」

「あ、射命丸だ、またなんか変なことしてる。」

「グオアアアアア!!」

するとエスピナスの全身の血管が浮き出始めて全身に赤い線が浮かび始める。

「あ、やば!!見つかつた!!」

「グオア!!グオア!!グオア!!」

「ぎやあああ!!毒痺火炎ブレスはらめええええええ!!つてあつぶねえ!!あつ!!」

エスピナスの三連毒痺火炎ブレスの三発目に直撃してしまい麻痺によって地面へと

落下する。

「あべし!?が……ががが……がが……」

「グオアアアアア!!」

エスピナスはトドメとばかりに地面に己の角を突き立てて大地を削りながらマスゴミへと超高速で突進する。

「あつちよつまっ!?その方向は!?その方向はダメですよ!?あ、あ、あ、ンアーアーツ!!」

激突するタイミングで振り上げられた頭部の角はマスゴミの尻にピツタリ突き刺さってから妖怪の山方面へととんでもない速さで吹き飛ばす。

「じゃーねー!!」

メデイスンは大きく手を振りながらその様子を平然と見ていたのだった。

後日談その19

地底のモンスター建築組

「地底」『建築現場』

地底の建築はいつも騒がしい。

基本的に建築を担当するのは鬼であり、殆ど力業で作るの上に設計図等作らず勘で適当に作るのだが鬼は基本的にノリと勢いと酒で作るために作業中に酔っぱらう鬼も結構いたりする。

「くあwせdrftgyふじこlp……………」

中にはこのように発狂するような酔い方をする鬼もいる。

「おーい!?!こつちのやつは流石に限界だから対処頼む!!」

「任せろ。」

「班長! 毎度すいません! 頼みます!」

悪酔いが酷いようであれば建築班の班長によって抱えられてトイレに連れていかれ、ある程度沈静化していた。

更にその脚力は丸太をまるごと数本引きずって動けるくらいには力強く、今ではドスフロギイ専用の荷車も用意されていて、たまにドスバギイ、オサイズチの子供達も混ざってフロギイ達が荷台に乗ってドスフロギイに引いてもらっている様子も見受けられる。

なお建築を手伝っている間子供達はと言うと……………

「キュー！キューー！」

「キヤーギヤー！」

「ギューオーギューー！」

「まあ可愛いじゃないか。」

「アタシも子供をこさえたらこんな感じになるのかねえ。」

「今晚は精が付く料理にするかねえ。」

「賛成！良いわね！」

「鱗でちよつとさらつとしてるけどいい肌触りねえ……………こつちは毛がふさふさして気持ちいいわあ。」

建築班の女将衆に全力で可愛がられており、楽しそうにじやれている。

特にイズチはそのふさふさとした毛でかなり人気が上がっていた。

そして男衆の既婚組だが……………

連載休止のお知らせ&次の作品宣伝

すみません、そろそろもう一つの小説の方も打ち切りに近い形になりますけど完結させる予定なので次の三作品目の準備に取りかかりたいので一旦しばらく休載します。

ある程度要望が多そうならまた後日談を土日投稿をするつもりです。

スライムの方も要望が多そうなら続編を書くつもりなのである程度コメントで伝えて貰えると助かります。

ちなみに次の作品はいくつか案があります。

1：完全なオリジナル異世界転移物（ただし主人公はドラクエ世界の住人で職業が旅芸人、遊び人、スーパースター）

2：ポケモン世界でドラクエモンスターで戦う。

3：ポケモン世界でモンハンのモンスターで戦う（ただしレジェアールでやってる人がすでにいるんでだいぶ違う形になるかと。）

この三択で決めようかと思えます。

コメント等でどれがいいとか伝えてくださればこちらとしてもしっかり考えさせてもらいます。

マグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロ
ロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロマグロ
ロ
殴